

吸血少年ドラクル蓮

真夜中

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

叔父を探しに海鳴市に来た少年のそこから始まる物語。

目次

無印篇

第1話

第2話

第3話

第4話

第5話

第6話

第7話

第8話

第9話

第10話

第11話

第12話

第13話

第14話

第15話

第16話

第17話

第18話

第19話

第20話

第21話

第22話

忘却篇

1

10

19

28

37

46

55

64

74

83

92

102

111

120

129

138

147

156

164

173

183

193

第36話	第35話	第34話	第33話	第32話	第31話	第30話	A's篇	第29話	第28話	第27話	第26話	25話	第24話	第23話
319	310	301	292	283	275	266		257	247	238	229	220	211	202

無印篇

第1話

雲一つない青空……。

この天気のように俺の心は晴れやかにならなかった。

俺の背後には遠縁に当たる月村すずかとその友人であろう金髪の少女が縄で縛られた体勢でいるのだから。

めんどろな事になったと思わずにはいられないこの状況に溜め息が漏れそうになる。

そもそも身内が原因なので余計に溜め息を吐きたくなる……本当
に困った身内だ。

何処か離れた場所で結果の報告のみを待っているのが簡単に想像
出来る。

「……溜め息を吐くのもこの状況を切り抜けてからかな」

俺は目の前にいる困った身内である叔父の手先たちを見据えるの
だった。



「ここかな……叔父らしき人物の目撃情報があったのは」

海鳴市……ここは同じ夜の一族である月村家が住んでいる土地で
ある。

夜の一族……分かりやすく言えば吸血鬼の一族である。そして、そ
の一族は総じて異能持ちが多い。

「……はあ、ちゃんと俺に出来るだろうか」

叔父は夜の一族の中でも純血の吸血鬼であり、人を家畜としか見て
いない傲慢な人物である。しかも噂で耳にしたことだが学生時代に
は魔眼を駆使して女性徒を洗脳していた等の黒い噂があるので見つ
け出すことは出来てもちゃんと話が出来るのか不安なのだ。

いやいや……不安になってどうする！ 叔父を見つけてちゃんと

した職に着くように説得するだけじゃないか。そう不安になることもないはずだ。……多分。

さて、早速叔父の足取りを追わなくては。

俺は不安に揺れる心を奮い立たせながら海鳴市へと入って行った。

「そんな簡単に見つかる分けないですよー」

海鳴市に入ってから嗅覚を頼りに叔父の臭いを探して市内を歩き回ったが……叔父の臭いがまったくしなかった。

ガセネタを掴まされたかと思っってしまったが、叔父にまつわる情報があつたのは現状ここだけなのでしばらくここを中心に探すしかない。

「……月村家の方々に協力してもらおうべきかな？」

そんなことを思ってしまうが……駄目だと即座にその考えを捨てる。確かに協力してもらえれば叔父を見つけるのは容易だろうが月村家の現当主が人間と付き合っているらしいので叔父が迷惑をかける可能性がある。少なくとも暴言を吐いて不快な気分させてしまっただろう。

公園のベンチに座り、空を見上げる。

「……空が青いな」

うくん……やっぱりここは挨拶だけでもしておいた方がいいかな？ 叔父が迷惑をかける可能性があるんだし、さすがに身内だからそれぐらいはしておいた方がいいかも。

あんま美しい顔はされないうけどそれはしょうがないよね。叔父の評判が悪いのは事実なんだし……。

座っていたベンチから立ち上がると俺は月村家の屋敷へ向かって歩き出した。



「……………こはやっぱりお土産か何かを用意していた方がよいのだろうか？」

月村家の屋敷に向かう途中でそんなことを考えてしまい足を止める。

突然、「叔父が迷惑をかける可能性があります」とその身内が挨拶に來ても困るだけだろうし……。そのお詫びも含めて前もって何かを渡しておくべきか……？

それだとそれで何か微妙な気がするが……。

叔父が迷惑をかけたならそれに対するお詫びは後日にして、今は叔父が迷惑をかけるかもしれないと言うことを伝えに行くべきか。

でも、手ぶらで來訪するわけにもいかなないので何処かのお店でお菓子の類いを買って行こうと思う。

初めて來る土地なので嗅覚を頼りに美味しそうな匂いのするお店を探すことにする。もしくは途中で近所の人に美味しいお菓子を売っているお店は何処にあるのか訪ねるのも一つの手だ。

そうと決まればと、美味しそうな匂いを探して市内を歩いているとピンとこれだ！ と確信できる甘く美味しそうな匂いを見つけた。

「……………これならお土産として買っていくのに十分だ」

ちようど小腹も空いてきたし味見がてらに何か食べていこう。

そう思いながらお店のドアを開けた。

カランカランとベルの音が鳴る。

「いつらしゃいませ。お一人様ですか？」

「はい」

「ではこちらの席どうぞ」

そう言っただ案内されたのはカウンター席である。

そして、カウンターのの中には薄くではあるが血の臭いの残り香を感じさせる男性がいた。

血の臭いの残り香に思わずゴクリと唾を飲み込んでしまう。

幸いなことにメニュー表を見ながらだったため不自然には思われないだろう。早く注文して小腹を満たしてお土産を買っていこう。

「注文いいですか？」

「はい……どうぞ」

「えーと……ブルーベリータルトとカフェオレのセットで、後は持ち帰り用にシュークリームを六つお願いします」

「かしこまりました。ブルーベリータルトとカフェオレのセットが一つとお持ち帰り用にシュークリームが六つですね」

「はい、そうです」

注文を終えるとメニュー表をメニューが置いてあった場所にしまい頼んだものが来るのを待つ。

待つている間に月村家に行ったあとの行動について考える。

泊まる場所は野宿で問題ないとして……やっぱり叔父の搜索かな。

それ以外にないしそれが終わったら俺は……。

「お待たせしました。ブルーベリータルトとカフェオレでございます。ごゆっくりどうぞ」

「いただきます」

頼んでいたのが来たので思考を打ち切ってブルーベリータルトを口に運ぶ。

「ん、美味しい……」

ブルーベリーの味がしつかりしてるし、タルトの生地もサクサクとしている。

ブルーベリーが好物なのでちゃんとブルーベリーの味がするので俺は満足だ！ このお店は当たりだ。

パクパクと食べていくとすぐにブルーベリータルトは無くなってしまった。

それからカフェオレを飲んで、口元をティッシュで拭う。

「ご馳走さまでした」

「お粗末様です。どうでしたか？」

「美味しかったです。また、食べに来たいと思いました」

「それはよかったです」

俺の言葉にカウンターのの中にいた男性が嬉しそうに頷いた。この人が作ったのかな？

「ところで君はどうしてこんな時間にここにいるんだい？ 君くらい

の子は今学校に行っている時間だろ？」

「遠縁に当たる方の家に行く途中なんです。それで何かお土産でも買っていこうと思って……それで美味しそうな匂いのしたこのお店に来たんです」

「そうだったのか。一人でかい？」

厄介払いの意味も含めてるから一人なんだけどね。この事は言えないからこれに関しては適当に誤魔化すしかないか。

「はい。そうです」

「そうか……車には気をつけるんだよ」

「はい、大丈夫です」

それからこのお店の店長にこの辺りの地理について教えてもらった。

それとブルーベリータルトの美味しかったお店の名前は翠屋と言うらしい。



ピンポーン！

月村家の屋敷の門の脇にあるインターホンを押す。

「はい。どちら様でしょうか？」

「突然の来訪で申し訳ないのですが……氷村蓮ひむらねと言います」

「……ッ！」

氷村と言う言葉を見た途端、インターホンの向こう側で息を飲む音が聞こえた。

……もしかして、叔父はすでに何かやらかしてしまったのだろうか？ そんなことないよね……？ なんだらう激しく不安になつてきた。

「……それでどう言ったご用件でしょうか？」

「実はお話しておいた方がいいことがあります……」

「お話ですか……確認をとって参りますので少々お待ちいただけますか？」

「はい。大丈夫です」

「では、少々お待ちを」

ガチャツと音がして通話が切れる。

最悪インターホン越しにでも叔父について知らせることが出来ればいいので気楽に待とう。

でも、氷村つて名前はやっぱり敬遠されがちみたいだ。特に叔父のことを知っている人からすれば……。

叔父が悪い意味で有名なのは今に始まったことではないがその事突きつけられるたびにどうしようもない気持ちになる。

「はあ……」

溜め息が漏れた。

「お待たせしました。どうぞ門の中へ」

インターホンから聞こえてきたのと同時に屋敷の門が開かれる。

さて、行きますか。

俺は陰鬱な気分になりそうになりながらも開かれた門の内側に入り屋敷の玄関に向かって歩くのだった。



「初めましてね……私が月村の現当主の月村忍よ」

「はい、存じております。氷村蓮と言います」

屋敷の中へと通された俺は月村家のメイドの一人に屋敷の談話室に案内されて、そこで待っていた月村家の当主である月村忍さんと挨拶をした。

「それで、今日はどのような用件で？」

忍さんが座っているソファアの対面に座るように促され、俺がソファアに座ると早速今回の来訪の理由を訊かれた。

元々誤魔化すつもりもなかったので言葉はすんなりと出た。

「実は叔父である氷村遊がここ海鳴市にいるらしいのでもしかしたら叔父が迷惑をかけるかもしれないのでその事を知らせておこうと思っただいで」

「……ッ!? そう……あの人が……」

あく、やっぱり叔父は嫌われてるんだな。その事がよく分かる反応だ。

「……それで、キミはどうしてここに? それを知らせるだけなら他の誰かでもかまわないはずよね? 見た感じすずかと同じような歳みたいだし」

やっぱり訊かれたか。特に隠すようなことじゃないし言ってもいいか……。

「叔父にちゃんと働くように伝えるためと厄介払いです。叔父をいつまでも金食い虫のままでもいいさせるわけにもいかないとのことでした」「そ、そうなの……」

コメントに困るよね……無職の叔父に働けと言いに使いが送られるんだから。

忍さんが苦笑いしてるし……。

俺もいたたまれない気持ちになってきた。

「はい……あとこれよかったですらどうぞ」

俺は持つてきたシュークリームを差し出す。

「ありがとう……あら? これって翠屋のじゃない!」

翠屋を知ってるならそこのお店に行ったことがあるんだ……なら味の方も知ってるはずだ。

「ええ、ここに来る前に立ち寄ったので買ってきました」

「そうなの。こここのシュークリームは美味しくて」

よかった。食べやすいと思って選んだシュークリームでよかった。

「それはよかった。では、失礼しますね」

「あら? もう行っちゃうの? すずかには会わなくていいの?」

すずかつて確か忍さんの妹だったかな。今の時間だとまだ学校だろうし。それに……、

「問題ないです。むしろ叔父が問題を起こす前に見つける方が重要なので」

あの叔父のことだ。真つ当な方法でお金を手にしようとは思わなはずだ。口座を止められてすでに半月。行動を起こす可能性が高

い。

俺は体を大鷲の姿に変化させると窓から外に飛び立った。



それなりに大きな木の枝に止まると体を大鷲の姿から元の人型に戻す。

「さてと、どうやって叔父を見つけるか……」

叔父の臭いを探しながら考える。

叔父の手の者なら叔父と接触しているはずなので僅かではあるが臭いがついていないはずだ。

「ん？ この臭いは……見つけた！」

ほんの僅かであるが叔父の臭いを感じた。その臭いが強くなる方へと走っていく。

そして、その臭いの元に辿り着くとちょうど黒塗りの車が発車したところだった。

見つけた手がかりを逃すものか！ 周囲に人目が無いのを確かめると再び体を大鷲の姿に変化させて発車した車を追いかけた。

その車は人通りの少ない道を選びながら市外にある山の方へと走っている。このままあとをつけて行けば奴らの拠点に着くだろう。

やがて車は山の中にある廃屋の前で止まった。

その廃屋の中が見える位置にある木の枝に止まり様子を見る。

「ずいぶんと楽な仕事だったな」

「ああ」

二人組の男が二人の少女を逃げられないように縄で縛った状態で運んできた。しかも、声を出せないように猿轡を噛ませた状態だ。

「んうーっ！」

縛られている少女の一人である金髪の少女が何か言っているが猿轡を噛まされているので何を言っているのか分からない。

もう一人の少女は………あれ？ 紫色の髪………って忍さんの妹じゃないのかな？ 早速やらかしてくれたよ叔父さんは……。

迷惑をかけるかもしれないって伝えに言ったそばからこれだよ……。

しかも様子がおかしい。あの男たちに何か吹き込まれたかな？
叔父さんの手駒みたいだからその可能性も十分にある。

はあ……叔父さんも余計な手間ばかり増やさないでよ。

とりあえず、あの二人を助けに行かないと……。

第2話

さて、助けに入るに当たって先程まで中の様子を覗いていた場所から侵入したのはいいんだけど……どうしよう。

チラッと後ろを見ると忍さんの妹であるはずかとその友人がいる。前には彼女たちを誘拐した叔父の手の者が二人。

「おい……ガキどうやってここに来た？」

誘拐犯の人が低い声でそう問いかけてきた。その声には下手な誤魔化しが出来ると思うなよと言う意味も含まれていた。

「追ってきました。あなたたちに用があったので」

別に隠すことではないので素直に答える。

「……それは俺たちが何者か分かって言ってるよな？ ガキ」

「はい。分かっています。誘拐犯ですよね……雇われの」

俺がそう言った瞬間、誘拐犯二人の纏っている空気が変わった。

「……テメエは……ただのガキじゃねえな。そこにいる化物以上に気味が悪い」

化物ね……。この言葉は後ろにいるすずかに向けて言ったのだろう。金髪の少女は「んうーっ！ んうーっ！」と何か抗議の声を上げているが猿轡を噛まされているせいで何が言いたいのかわからない。

「彼女……月村すずかを化物と呼んだので確定しました。臭いだけじゃ若干不安だったんです。あなたたちに彼女を誘拐するように言ったのは氷村遊で間違いないですね」

「なっ!？」

ビンゴ!! さっき言った通り臭いだけじゃ若干不安だったんだ。いくら嗅覚に自信があっても偶々近くを通ったから臭いがついていたってパターンがあるから確実性を求めてこの誘拐犯と話してよかった。

背後にいる二人から驚いた気配を感じる。やっぱり誘拐犯の黒幕の名前を知っていたら驚かれるか……。

「何でその名前を知っている!」

「知っているも何も……それは俺が彼の身内の一人だからですよ」
「なんだと!？」

そりゃあ驚くよね。誘拐してくるように指示を出した人物の身内がいるんだから。

「それで叔父が何処にいるのか教えてもらえませんか？」

「だ、誰が教えるか！ お前も捕まってもらうぞガキ」

分かったことだけど教えてもらえないか。叔父のことだし人間でしかない彼らは捨て駒も同然なんだろう。二人しかいないのがその証拠だ。本気であれば本家から持ち出した戦闘用自動人形を使っているはずだ。

「いえ、捕まるのはあなたたちです。俺の目を見てください」

俺は魔眼を発動させて誘拐犯二人の目を見る。

「……………」

「……………」

ドサドサツ!! と誘拐犯二人は廃屋の床に倒れる。

その事に安堵の溜め息が漏れる。

「ふう……………」

よかった。魔眼対策されてなくて。いくら人間よりも圧倒的に体が強くても俺はまだ子どもだから人間の大人を相手にするには力不足。それに……異能の力だと無力化は出来ても下手した使った反動で血に対する急激な渴きを催してしまうので、魔眼だけで済んで本当によかった。

「ああ、ちよつとごめんね。猿轡を外して縄をほどくから動かないでね」

俺は後ろに振り向きざまにそう彼女たちに言ってから猿轡と縄をほどく。

「あ、ありがとう」

「……………」

彼女たちを縛っていた縄と猿轡を部屋の角にポイする。

「どういたしまして。それと叔父が迷惑をかけてごめんなさい」

俺は彼女たちに向かって謝罪の言葉と同時に頭を下げる。

「あなたが悪いんじゃないんだから謝らなくていいわよ」

「うん。私も同じ意見かな」

そう言われてもね……身内が起こした事だからその身内である俺が謝罪をしておかないと。

「……とりあえず、詳しい説明をした方がいいと思うんだけどこの場所でするのもなんだし、後でもいいかな？ 二人は学校帰りでしょ。今頃忍さんたちが慌てるかもしれないから今は無事なことを先に知らせた方がいいと思うんだ」

「……そうよね。でも、後でちゃんと説明してくれるのよね？」

金髪の少女がそう訪ねてくるのに頷く。

「もちろんだよ……ね」

俺は視線をチラリとすずかに向けながらそう返事をする。

「うん……そうだよ」

すずかは力なくそう俺の返事に続いた。

「なら、いいわ」

ちゃんと説明されると聞いて満足気に頷く金髪少女。

「それじゃ、簡単に自己紹介でもしようか……氷村蓮つて言います。蓮つて呼んでください」

「私はアリサ・バニングスよ。アリサでいいわ」

「お姉ちゃんのことを知ってるなら知ってると思うけど私は月村すずかです。よろしくね蓮君」

こうして簡単な自己紹介を終えたあと俺は魔眼で誘拐犯二人を洗脳して月村の屋敷に戻って行った。



月村の屋敷まで俺たちを車に乗せてきた後、二人の誘拐犯にかけた洗脳を解いて再び魔眼で眠らせて忍さんにその身柄を渡した。

「早速、やらかしたようですね」

「いいわよ。蓮君のお陰ですずかもアリサちゃんも無事だったんだし」

現在は当事者三人と忍さんで屋敷の中の談話室でお茶をしている。
「本当よ……まったく誘拐なんて酷い目にあつたわ！」

本当にごめんなさい！ 叔父が迷惑をおかけしました。後日、アリサの両親にも謝罪の言葉を届けに行かないと。

叔父もこんな多方面に迷惑をかける行為をやらないでくださいよ……。

「……ごめん」

「って蓮のことじゃないからそう落ち込まないで」

「そうだよ、蓮君は何も悪くないんだから」

「……ありがとう」

アリサとすずか。二人が優しくくてよかった。人によってはその身内だからってだけで暴言を言われたり排斥されたりするから不安だったんだ。

「忍さん今回の件で一族のことをアリサに説明する必要がありますか？
でアリサの両親にも来ていただいた方がいいと思いますか？」

今回の件ですずかが人間ではないのをアリサに知られているのでその両親にも一族の掟を適応するか月村家当主である忍さんに訪ねる。

「そうね……でも、誘拐されたことについての説明だけでいいわ。実行犯も捕まっていることだし」

「そうですか……なら、この場ですね」

神妙な顔つきでお互いに頷き合う俺と忍さん。

「ねえ、アリサちゃん」

「はい」

真剣な様子の子の忍さんにアリサの表情も真剣なものとなるそして……俺たち夜の一族についての説明が始まった。

「ここにいる私やすずか、蓮君は夜の一族と呼ばれる吸血鬼の一族なの。一族の者は皆、身体能力が高く、多くの者が異能の力を持ってる。そして、その事を知っているのは将来の伴侶か生涯に渡ってその事を秘匿出来ると誓える者のみなの。それ以外の人に知られたらその人の私たちに関する記憶を消さなくちゃならないの。だから、選んで」

選択を迫られたアリサのことをさすが不安げに見つめる。
人は異端を嫌う傾向にあるからさすがは不安になっているの
だろう。

「誓うわ！　さすがの正体は何であろうと私はさすがの友達だもの」

「アリサちゃん……いいの？　私……人間じゃないんだよ」

「このバカちん！」

「アタツ」

アリサがさすがの頭に手刀を落とす。

「今言ったばかりじゃない！　私はさすがの正体であろうと友達
だって」

「うん……」

自信満々にはつきりと言い切るアリサに頷きながら嬉しそうに笑
みを浮かべるわずか。

うんうん……俺が誘拐犯二人を普通に魔眼で眠らせたり、洗脳し
たのに接する態度を変えなかっただけはある。

いい友達じゃないか。本当……羨ましくなる。



その後、迎えが来たアリサはそのまま月村家から自宅へ帰って行っ
た。

「それじゃ、俺も失礼しますね」

俺もそろそろおいとましようと思いい立ち上がる。

「蓮君は何処か宿泊するところはあるの？」

「いえ、無いです。これから探します。最悪野宿でも問題ないですし
寝るときは大驚の姿になって木の枝の上で寝ればいいし。」

「だったら家に泊まっていきなさい」

「……へ？」

「何か変なこと言ったかしら？」

「どうしたの？　蓮君が固まってるけど」

アリサのお見送りに行っていたさすがが戻ってきた。

「実はね蓮君……まだ、宿泊先を決めてないそうなのだから家に泊まっつていきなさいって言ったら固まっつちやったのよ」

「そうなの？」

「別にすずかだつて構わないでしょ。元々部屋だつて結構余つてるんだし」

「広いですもんね……月村家の屋敷は。」

「うん。私は構わないけど……」

「そう言いながらチラツと俺の方に視線を向けるすずか。ああ、泊まっつていけと言うことですね。」

「……えっと、しばらくお世話になります」

「俺はペコリとお辞儀をした。」

「それに……月村家に滞在しているのだから月村家に叔父が直接手を出して来た場合にすぐに対処できるはずだ。」

「それで……何処の部屋に泊まるんですか？」

「そう訪ねると忍さんはニヤリと楽しそうな笑みを浮かべた。」

「すずかの部屋でもいいのよ」

「お、お姉ちゃん!」

「すずかが忍さんの言葉に顔を赤くしながら抗議する。だがそれを何処吹く風のごとく飄々と流す忍さん。」

「いいじゃないの子ども同士なんだし」

「そ、それとこれは話が別だよ！　れ、蓮君も一人部屋の方がいいよね！」

「まあ、一人部屋でも馬小屋でも構いませんが……何処を使うのかはお任せします。泊めていただく身ですので」

「泊めてもらう身なので何処の部屋をあてがわれようが文句を言うつもりはない。元々、野宿を想定していたのだからなおさらだ。」

「ほらほら、お任せですって」

「ニヤニヤとしながらすずかを弄って遊ぶ忍さん。すずかも忍さんがすずかの反応を見て遊んでることに気がつけばいいのに気がつかないから遊ばれるのだ。」

「それからしばらく忍さんはすずかを弄って遊んでいた。」

「もう！ お姉ちゃんたら」

「すずかは未だにご機嫌斜めの様子だ。」

忍さんのすずか弄りは忍さんに恋人から電話が掛かってきたから中断されて、その時に俺が泊まる部屋については適当に選んでくれと言われたのだ。

恋人からの電話だと聞いたときの忍さんは本当に嬉しそうだった。その恋人とはかなり良い関係なのだろう。

「そんなにプリプリと怒ってるストレス溜まるよ。だからさ、すずかの通ってる学校について教えてよ」

俺は苦笑しながらそう言う。

「……いいけど。つまらないかもしれないよ?」

「そんなことないから平気だよ」

「だって……学校に通ってないから学校がどうなのか今一分からないから。」

「なら、いいけど」

「そうそう」

俺にとつては未知の事だから気になるのだ。

「私に通っているのは私立聖祥大付属小学校って言うの。それで、同じクラスにはアリサちゃんともう一人の私の友達のなのはちゃんって子がいるの。そのなのはちゃんのお兄さんがお姉ちゃんの恋人なんだけどね」

「へえ、じゃあその、なのはって子は将来すずかの親戚候補なんだね」

「お姉ちゃんがその人と結婚したらそうなるね」

夜の一族については知ってるだろうから分かっているとと思うけど大変だろうな。

「学校は楽しい?」

「勉強はそうでもないけど友達と会えたりするのは楽しいかな。それ

に図書室もあるから」

「図書室か……すずかは読書が好きなの？」

「うん、そうだよ。他には機械を弄るのもかな」

すずかは中々の趣味をお持ちのようだ。

それからしばらく、その場で立ち話を続けて俺が泊まる部屋を決めるのが遅くなったのは言うまでもない。



夜……つまり、夕食の時間帯である。

食堂にある大きなテーブルの上にはサラダにパン、ポタージュ等が次々と乗せられていく。

それらの作業をやるのは二人のメイドのノエルさんとファリンさんである。昼間に訪ねてきたときに案内してくれたのがノエルさんであることをさつき知った。

「……手慣れてる」

その手並みは素早く正確であり素人には出来ない芸当であると理解させられる。これも一種の職人技なのだろう。

「あんまり感心しないでください。ファリンが調子に乗ってポカをやらかしますので」

「酷い！ 私そんなにドジじゃありません！」

そんな会話をしながらも二人の手だけはちゃんと動いている。

「あつ！」

間抜けな声と共に何故かナイフが飛んできた。

俺は体を霧に変えてやり過ぎすとナイフが飛んできた方向を見る。叔父の手の者の襲撃かと思って見たら……その方向にはファリンさんがいた。

ああ……これがポカなのか……ものすごいデンジヤラスだな今度からファリンさんには近づかないでおこう。

「ああつ！ ごめんなさい！ 大丈夫ですか？ 怪我してませんか？」

「大丈夫です。ちゃんと避けましたので」

慌てて詰め寄ってくるフアリンさんに怪我なんてしてませんよとアピールする。

「本当にすみません。この子がドジなばかりに」

「いえいえ、怪我もしてないですし」

ただ……今度からこういうのがないといいなと思ったのは本当の事だ。

第3話

ちよつとしたハプニング？　にも見舞われたがさすがと忍さんが食堂に来る頃には夕食の準備が終わって後は全員で食べるだけとなった。

「あ、血をもらってもいいですか？　出来ればO型の血でお願いします」

「いいけど……何でO型なの？」

「……クセが無いので好みなんです」

特殊な血液型以外の全部の血液型に輸血出来るのが関係しているのか分からないがO型の血はまったくクセが無いのだ。

「変わった好みね」

「半吸血鬼なもので」

半吸血鬼だからなのか血の味や臭いに敏感なのだ。それも血の僅かな残り香にも反応するほどに……。

「蓮君って半吸血鬼だったの!?!」

「そうだよ。俺のお父さんが純血の吸血鬼でお母さんが少しだけ吸血鬼の血を流してる人間だから」

今はいないけどね……。この事を言つて食事の雰囲気悪くするのもなんだから話を変えよう。

「すぐかは血を飲まないの?」

「あんまり飲まないかな……。でも、定期的に飲んでるから健康には問題ないよ」

「それならいいよ。最低限飲んでいればある程度の健康は保てるしね」

夜の一族は定期的に血を飲まないと徐々に衰弱していく上に寿命が短くなり、体の成長にすら影響を及ぼす。

俺の場合は半吸血鬼であるが故に血に飢えると人間が血の詰まった餌に見えてしまうので血の定期的な摂取は欠かせない。ただでさえ異能を使うと血が欲しくなるのだから。

それに……血も人によって味が違う。健康な人であればあるほど

美味しい。なので、飲むとしたら健康な人の血が一番なのだ。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

血を用意してくれたノエルさんにお礼を言う。

「それじゃ、いただきましょうか」

忍さんのその言葉に続いてこの場にいる全員が「いただきます」と言って食事を始めた。

大人数とは言わないが他の人と一緒に食事をするのはいつ以来だろうか……。

料理が美味しいのもあるが普段一人で食べている料理がひどく味気無いものを感じた。

「どうしたの？ 食べないの？」

「ん？ ああ、ごめん。ちよつとボーとしてた」

俺の返事にそうと特に気にした様子もなくすずかは食事に戻る。

そうだよね……考えるのは後でいいよね。今は食べるのに集中しよう。考え事に夢中になって食事をおろそかにするよりも満足するまで食べた方がいいよね。せつかく俺の分も作ってくれたんだし。

夕食は美味しかった……。そして、一人で食べているよりも美味しいのを久しぶりに実感した。



夕食が終わったので泊まる部屋に戻ってきた。

部屋の中あるものは自由に使っていていいと言われているが、部屋の中にあるものは本にラジオ、空の洋服ダンスに照明、机である。

本は小説から図鑑まで幅広くある。ただ、気にしないようにしていたが改めて思う。ここは猫屋敷なのか？ と。

屋敷のいたるところから猫の臭いがするし、鳴き声も聞こえる。

遭遇してないのは多分……警戒されてるからだろう。元々、動物には好かれにくいからなあ。

その事実になんか悲しくなる。人であろうがなかろうが嫌われるの

は悲しい。

窓の側に移動して空を見上げる。そこには星空と少し欠けた月が夜空に輝いていた。

「…………お父さん…………俺は…………」

脳裏を過るお父さんが死んだ日の事。俺が厄介払いの意味も含めて海鳴市に送られる理由になった事件の事を…………。

「知られたくないなあ…………」

知られたらきつと…………嫌われる。嫌だ、それは…………せつかく仲良くなれそうな人たちのな…………。

人だろうが人外だろうが異端は疎まれ嫌われる。

「はあ…………」

溜め息が漏れる。この事を考えるのも思い出すのも止めよう。心が重くなる。それよりも、明日の事を考えよう。

明日は今日行ってない場所に行こう。市内すべてを回ったわけじゃないし、もしかしたら叔父の拠点が市内にあるかもしれない。

それと叔父の手の者が見つかる可能性もある。

きつと叔父のことだから今頃誘拐が失敗したので何か新しい手段を考えているだろう。

そんなことを考えるよりも真面目に職に就いて欲しいのだが…………。ただでさえ、不老長寿である夜の一族は社会的に一定以上の立場にならないと暮らしていけないのに、叔父ときたら働かずに金ばかりを消費していく。

将来的には夜の一族は人の社会の中では暮らせなくなる可能性もあるのに何をやってるんだか。

なるべく早く叔父を見つけないと…………。

でも、そしたら彼女たちともお別れか…………その事だけが心に引っかかる。

会ってそんなに時間は経ってないけど、俺にとって初めて仲良くなれそうな人たちだからもう少しここにいたいと思ってしまう。



翌日。

「おはようございます」

「おはよう」

食堂に来たらすでに忍さんがいた。でも、すずかの姿が見当たらない。まだ、起きていないのだろうか？

椅子に座ると忍さんが話しかけてきた。

「蓮君、今日はどう過ごす予定？」

「とりあえず、市内を回って叔父の手がかり探しですね」

叔父を探すのが目的なのだからこれ以外にない。

「そっか……」

「何か？」

「ううん……こつちの話だから気にしないで」

「はあ……」

何を考えているのだろうか？ 忍さんのことだから……余計に何を考えているのか分からない。

叔父についてなのか、俺なのか、すずかのことなのか、恋人のことなのか見当もつかない。一番可能性がありそうなのは叔父についてだが……何か違うような気がする。

結局、分からないままだ。人が何を考えているのかその内を考えるだけ無駄か。

「あ、おはよう、お姉ちゃん、蓮君」

すずかが学校の制服を着て食堂にやって来た。そう言えば学校は土日以外は毎日あるんだっけ……。

「おはよう、すずか」

「おはようございます。すずか」

朝の挨拶をするとすずかは椅子に座った。

「すずか、学校って何時ぐらいあるの？」

「六時間目までであるから大体三時過ぎまでかな」

三時過ぎか……昨日誘拐が失敗して今日また誘拐は無いだろうから大丈夫かな？

「そっか……」

「どうかしたの？」

「ううん。昨日の今日で誘拐なんて起こらないよねと思って」

「そう言うはずが表情を若干ひきつらせた。」

「……どうだろう」

「そこに忍さんが話に割って入ってきた。」

「大丈夫よ、今日は迎えにノエルを寄越すから」

「そっか……なら、安心だね」

「昨日の仕事ぶりから見てもノエルさんって出来る人だし。少なくともフアリンさんよりも安心出来る。」

「ドジする人よりもそっなくこなす人だ。」

「……アリスちゃんはどうかだろうか？」

「アリスか……どうなんだろう？ 普通に登校してそうなイメージしかわかない。」

「執事の鮫島さんが迎えに来るんじゃない？ 昨日の誘拐があったから」

「執事か……どんな人なんだろうか？ アリスの執事だから若い人を雇ったのかな？ それだと新人になっちゃおうし……。」

「どんな人なのかは会わないと分からないか。」



朝食を食べ終わった後、俺は街に出た。

「すずかや忍さんたちよりも早く家を出たので街を歩いている人のほとんどがそれぞれの会社に向かう人たちや学校に向かうたちでいっぱいである。」

「こども人が多いと臭いが消えるし、香水などの匂いが混ざりあつて臭い。」

「一時的に嗅覚の感度を抑える必要がある。とりあえず、この時間帯は地理の把握に勤めよう。」

「叔父の手がかりを得られたときに最短ルートで移動出来るように」

するため。

通行する人の邪魔にならないように人の流れに任せて移動する。

「……やっぱり臭いがキツイ」

嗅覚の感度を抑えてはいるがそれでも臭うものは臭う。

彼らはよく平気だと思わずにはいられない。これも慣れなのだろうか？ だったらそんなのに慣れたくはない嗅覚がバカになってしまいいそうだ。

俺は途中でその流れから抜け出すと近くにある雑木林の中へ向かった。

「スーっ……ハーっ……スーっ……ハーっ」

数回深呼吸をして綺麗で新鮮な空気を吸い込む。

「はあく……生き返る。うん、香水は苦手だ」

決して嫌いではない苦手だ。吸血鬼がニンニクの匂いを嫌うのも単に嗅覚がいいからである。なので、ニンニクの匂いを気にしない吸血鬼もいる。

しばらくと言っても人の通行が少し少なくなるまでこの場所で休憩していこう。

近くにある大きな木の枝に向かってジャンプする。

「よっ……と」

ジャンプして掴んだ木の枝を起点に遠心力をつけてさらに上の方に上がる。

「ここであっか」

座るのに最適な大きさの枝の上にこれたのでそこに腰を下ろす。

「おお！ 中々にいい眺めだ！」

偶然とは言え眺めのいい場所を見つけたのでテンションが上がる。

そのまましばらく眺めていると金髪と紫がかった髪と栗毛色の髪の毛をした少女の一团を見つけた。

「あれは……すずかとアリサと後は誰？」

金髪はアリサで紫はすずか……栗毛色は？ 昨日すずかが言っていた友達なのはと言う少女か？

バス停の前で止まって話してるからバスで通学するのか。バスと

か生まれてこのかた乗ったことなかったな……。電車には乗ったことあるけど。

今度機会があったら乗ってみようか。

「まあ、何はともあれアリサとすずかはいつも通りなのかな？」

昨日の誘拐の事が尾を引いてるようには見えないから大丈夫かな？

叔父も彼女たちを見習つ欲しいな……。いい方にだけど。

今度は叔父の企みを事前に防げればいいけど……。

出来るか不安だ。昨日の誘拐の件だって偶然に叔父の臭いがしたから行けたんだし、今度また似たような事が起きたときに駆けつけられるか分かったものじゃない。

本当に魔法でもあればいいのに……。そうすれば叔父なんてすぐに見つかるだろうし。

はあ……。魔法なんてあるはずないのにね。すでに俺の使ってる異能自体が魔法のようなものなのにね。

溜め息を一回短く吐くと俺は木の上から飛び降りた。

音を立てないように着地をするとパツパとズボンの表面を払う。

それから俺は海の方へと歩き出した。昨日、海の方へは行っていないのを思い出したからだ。それに、この時間帯なら海に人はほとんどいないはずだ。

それに海を生で見るのは数年ぶりなので若干ワクワクしているのは否定出来ない。微妙に頬が緩んでいるのを自覚した。



ザザアーン!! と音と共に打ち寄せる波。遠くまで青く染まる景色。

これぞまさしく海だ!

いい天気でもよかった。天気が悪いと海の色も悪くなるから。お陰で綺麗な海が見えた。

海独特の磯の香りが漂ってくる。

にらんだ通り海水浴客はいない。まあ、季節的にいないのは分かっていたが……それでも海岸を独り占めにしていると思うとなんとも言えない気持ちになる。達成感のような珍しいものを手に入れたときのような気分だ。

悪い気分ではない。夏場はここに人が集まることを考えると閑散とした光景は寂しく感じる。

ゴミも落ちてないし、もし野宿をするならこの付近になっていただろうと思う。

野宿するにしても汚い場所は嫌なのだ。廃ビルとかは埃っぽくて……。それに、不審者とか来そうだし。

野宿してたら自分もその不審者の仲間入りしてたんだろうけど……。その代わりに現在は居候中だけだね。

「……叔父さんは海には来ないか」

叔父さんのことだし海よりも街のお店かな。お酒を置いてあるようなお店に限るだろうけどね。

なんの関係もないけど確か光も粒子の波なんだよね。この波みたくに寄せては返すことはなく寄せるだけの一方的な……。

「そろそろ街の人通りも少なくなるだろうし街の方に戻るかな」

海はまた見に来ればいいしね。幸いなこと海鳴市は海に近いからすぐに来れる。

そう言えば、さすがに通ってる学校の方ってまだ行ってなかったからそっち方面へ行こうかな。

それに、もしかしたら叔父が何かしらの罫とか張ってるかもしれないし……。

そんなことはないと思うけど、叔父の手の者がさすがのことを監視してる可能性はある。

いないならいないで構わない。それそれで安心出来るし。いたら叔父が何処にいるのか訊く！ 魔眼から何から使える手をすべて使って話させる。

それじゃ……私立聖祥大付属小学校に行きますか。

俺は海の方に背を向けると学校の方に向かって歩き出した。

とりあえず、バス通りを歩いていけばいいよね？

第4話

バス通りを歩いて正解だった。

特に迷うことなく学校の近く待て来ることが出来た。もし、迷ったら大鷲の姿に変身して空から近くに行こうと思っていたから。

やっぱりあれだ……変に近道とかを行こうとしなければ迷うことはないんだ……きつと。

叔父の臭いもしないから叔父の手の者はこの付近にはいないのだろう。叔父は諦めて海鳴市から離れたのだろうか？

でも、叔父は変に諦めが悪いと聞いているので決めつけることは出来ない。

学校の中も調べるべきか迷う。でも、学校に部外者は入ってはいけないらしいので何かしらの動物に変身すべきなのかとも考えたが動物だと保健所の人を呼ばれてしまう上に捕まえようと追いかけることも考えられるので却下だ。

うくん……どうしよう。

すずかに協力を頼むか……いや、止めておこう。元々、氷村家の問題だし、すでに叔父が迷惑をかけているのでこれ以上迷惑をかけたくない。それに、俺も居候しているし……。

仕方がないかなこれは。諦めよう。叔父の臭いがしないから多分、この学園にいる人は誰も叔父と関わりがないのだろう。

ただ、学校に入る外部の人物だけには注意しておかないと。叔父も洗脳の魔眼は使えるから外部の人間を洗脳して学校内の情報を手に入れることは容易いはずだ。

そこだけには注意しておかないといけないだろう。

今さらなのだが叔父はどうやって生活しているのだろうか？

ずっと前にお父さんから聞いたヒモと呼ばれる生活なのだろうか……。

絶対にヒモにはなるなと言われたが……その言葉を言うときのお父さんの様子はまるで実際にその経験があるように感じさせた。

お父さんは若い？ 頃と言うかそのときのことをあまり話したが

らなかつたからやっぱり……ヒモだつたのだろうか？

ヒモか……叔父はそう呼ばれる生活をしているのか？ それ以前にヒモとは一体……。

お父さんはヒモについて詳しくは教えてくれなかつた。ただ、金魚の糞のような惨めな存在とだけ言っていた。

忍さんはヒモについて何か知っているだろうか？ 今度と言うか家に帰って来たら忍さんに訊いてみようと思う。

きつと忍さんなら知っているはずだヒモがどんな意味を持っているのか。

とりあえず、学校の周りをうろちよろしてると怪しまれちゃうからここから離れよう。

家の方には今はノエルさんとファリンさんしかいないはずだから家に戻るのは忍さんが帰ってくるであろう夕方ぐらいかな。

変に遅く帰っても心配されるかもしれないし。でも、本当に心配してくれるなら嬉しいな。

今はもう誰も心配してくれないから……。

最悪……殺されてもいいから送り出されたんだろうな……。氷村の家で俺のことを心配してる人なんて一人もない。

皆が皆、俺のことを恐れている。

俺のお父さんが死んだ日からずっと……俺は氷村の家で化物として認識されている。お父さんのような竜公ドラクルではなく悪魔公ドラケルとして

……。

はあ……少し歩いて気分を変えよう。



陰鬱な気分を晴らすためにトボトボと適当に道を歩く。

「はあ〜」

それでも気分は晴れずに溜め息が漏れる。

考えなければいいことなのに考えるからこうなる。分かっているも勝手にそうなってしまうのだ。

人は考える生き物だと言うのがこのときばかりはそれが煩わしい。心にどんよりとした暗雲が立ち込める。

その暗雲を払うかのように頭を左右に振るがまったく意味をなさない。

ああ……なんかダルい。こんなんじやいけないのにダルい。本当にどうしよう……。

俺は周囲に人目がないのを確かめると姿を大鷲に変えて空へ飛び立った。

「……ふうく、少し飛んでよう。その方が歩いてるよりも気分が晴れそうだ」

翼を大きくはためかせて高度を上げる。

海鳴市が一望出来る高度まで上がるとその場を旋回飛行する。下を見ると人の姿が蟻のように小さく見える。まるで自分が大きくなったみたいだ。

本当はそんなことないのにね。そう感じてしまうのが不思議だ。お父さんなら何て言うだろうか？

………分かんないや。でも、もし一緒に飛べたら楽しかっただろうな。

そんなあり得たかもしれない夢のようなことを考えてしまう辺りだいが参っているのかもしれない。

「ははっ……少しくらいなら叔父の搜索を止めてもバチは当たらないよね？」

乾いた笑い声を上げると俺は山の方へと飛んでいった。

そこなら人目もないし……少し落ち込んででも誰にも気なされな
いから。



山奥の鬱蒼と木々が生えている場所に降り立つ。

思い出されるのは「お前に役目をやろう……一族の者へのメッセンジャーとしてのな」と言われて氷村の家から叔父への使者として送り

出されたときのこと。

そのときに俺が家からいなくなることに對しての安堵の声がい出される。

「……好きで化物なんて言われてるわけじゃないのにな」

誰だつて好きで化物なんて言われてるわけじゃない。でも、様々な異能を持つ夜の一族の者の中でも俺だけは違う。一族全体を見ても確実に化物と呼ばれる力を持っている。

本当……本物の化物になれた方が楽なんだろうな……。

誰からも恐れられ、そして命を狙われるような化物に……。

でも、なれないんだよね。その方が楽だと分かっているのに。お父さん……俺は……。

「……俺のことを受け入れてくれる人っているのかな？」

いたら嬉しいな。例え嘘でもいいから。



「……もう、夕暮れか」

気がついたら日が暮れそうになっていた。

どうやら、寝ていたらしい。体のあちこちに葉っぱが付着している。

その葉っぱを払い落とす。それから自分の顔を両手で掴んでグニと動かす。

「暗い表情をしてたら何かあったのか気にさせちゃうからなるべく明るくしておかないと」

無理矢理表情を動かして笑顔を作ってみるが……若干ひきつったものとなつてしまった。

叔父の搜索が中々うまくいかなかつと言うことにしておこう。嘘はついてないし……。

体を大鷲の姿に変えて空へ飛び上がると俺は家に向かって飛んでいく。

そう言えば……ヒモについて訊かないと思いなから居候先の月

村の屋敷に向かつて少し急いで翼をはためかせた。



「ただいま戻りました」

屋敷の扉の前に着くと体を元の状態に戻して扉を開けて屋敷の中に入る。

「お帰りなさい。どうだった？」

玄関には忍さんがいたなにやら機嫌がいい。良いことでもあったのだろう。

「いいえ。これと言って特には」

「そう……とりあえず、手を洗ってきなさい」

「そうですね」

汚れたまま家具に触ると家具が汚れてしまおうし雑菌が繁殖してしまふ。

「じゃあ、手を洗ってきますね」

「ええ」

忍さんと別れ洗面所で手を洗う。

あ……ヒモについて訊いてなかった。次会ったら訊けばいいか。同じ家の中にいるんだからそこら辺ですれ違うだろうし。

そういえば……すずかはヒモと言う言葉の意味を知っているのだろうか？ もし、知っているならすずかに訊いた方が早いかな。

なんか忍さんは誤魔化したりしそうだし。すずかなら知っていたら素直に教えてくれるはずだ。

色々な本を読んでもみたいだしきつと俺よりは物知りだ。俺も何か本を読もうかな……。後で部屋にあった本を読んでみようつと。

洗面所から出て一旦部屋に戻る。ヒモについては夕食を食べるときに訊けばいいのでとりあえず、本を読もうと思う。

どんな本が置いてあるのかな？ 楽しみだ。

足取り軽やかに俺は部屋に戻っていった。

「なんなんだろう……これは？」

部屋にあった本棚を調べてみるときわどい姿の女性が写った写真集が幾つも見つかった。

………すずかはこの姿を見ているのか？ てつきり小説だと思っていたのだが……。

それよりもこんな本も世の中には出回っていたのかと感心する。本屋を見ていたときにこんな本は置いてなかったし。多分、特別な本か何かなんだろう。

後で訊いてみるか……。

きわどい姿の女性の写真集は一旦脇に置いておき、小説の類いを探す。

ミステリーからアドベンチャーさらには体験談を載せたものまで見つかった。

色々種類があるみたいだ。

沢山あるから迷う。どれが面白いか。帯を見ると映画化決定！

とかドラマ化決定！ とか書いてあるから映画化やドラマ化する作品は多くの人に楽しまれてるのが分かる。

それらを読んだ方がいいかな？ でも、それらは当たると分かっているクジのようなものだし……ううくん、迷うなあ……。

首をひねりながらどれを読むか考える。

なら、ここは十万部突破のベストセラーとなっている本にしよう。これなら映画化やドラマ化した作品に負けず劣らずの作品のはずだ。

合わなかつたら合わなかつたで別のに変えればいい。

わくわくした気持ちで本を開くと目に飛び込んできたのは……別の本のタイトルだった。

アレエ？ 何で表紙と中身が違うわけ？ 誰かのイタズラか？

仕方がないから他のを読もう。だって『墮ちる学園く狂気の薔薇』なんていかにも怪しいタイトルだし。

これも脇に置いて、映画化した方の本を手取る。今度はちゃんと中身が表紙と一緒に確認する。

……よし！ これは大丈夫だ。
早速読もう。

………重い。いきなり話が重かった……。主人公の寿命が残り1ヶ月って……。

ちよつと……もう少し明るく軽い感じの話にしよう。

ドラマ化した方の本を手取る。

今度こそと思いい表紙と中身が一緒に確認してから本を読む。

………よかった。これなら読めそうだ。

探偵もので軽いノリで話が進んでいくのであんまり本を読んでいなかっただけでもスラスラ読める。

読んでて分かることだがさすがに読書が好きな理由が分かった気がする。楽しんで読める作品との出会いは楽しいし、新たな発見がある。それに、作品ごとに一つ一つの世界がある。

ベストセラーや映画化、ドラマ化する作品はそれだけ多くの人を魅了した作品なのだろう。改めてそれらの作品を生み出した作者の皆さんに尊敬の念を覚えた。

そして今日、俺の好きなことに読書が含まれるようになった。



夕飯の時間になり、食堂に全員が集まったので早速訊くことにした。

「ねえ、すずか訊きたいことがあるんだけど」

「何かな？」

「ヒモって何？」

その瞬間、「ぶっ!!」と噴き出す音が三つ聞こえた。

「紐？ それって紙を縛るときに使うような紐じゃなくて？」

「それじゃなくて……一つの生活手段らしいんだけど」

「うーん……なんだろう？ ごめん、私には分からないかな」

「ううん。知ってたら教えて欲しかっただけだから気にしないで」
そつか……すずかは知らないか。じゃあ、忍さんに訊こう。

「忍さん……ヒモって何？」

すると忍さんは助けを求めるようにノエルさんとフアリンさんに視線を向けた。

それほど説明しにくいものなのだろうか？

「えくとね、蓮君は誰から聞いたのかな？ その言葉は」

「お父さんから。お前は絶対にヒモにはなるなよって……」

「そ、そう、お父さんからね」

ひきつった顔をしてるが何か不味かったのだろうか？ 不安になったのですずかの方に視線を向けるが特にすずかの様子は変わっていない。

俺は心配し過ぎなのだろうか？

「……実は叔父を探してるときに思ったわけで……どうやって叔父は生活をしているのか考えたときに浮かんだのがヒモって生活だったの」

「……ぶっ!! あの氷村がヒモって……くっ……」

何がツボに入ったのか分からないが急に笑いだす忍さん。ノエルさんとフアリンさんも同様だ。

何か面白いことを言っただろうか？ そう思いすずかを見るがすずかも何で忍さんたちが笑っていたのか分かっていないらしく疑問符を頭に浮かべていた。

「くく……ごめんなさいね。あまりにもおかしくってあの氷村がねえ……ヒモだなんて……」

そんなに面白かったのか？

「ああ、ヒモって言うのはね働いてる女性に養ってもらってる人のことを言うのよ」

……そうだったのか。お父さん……昔はヒモだったのかな？
何か残念だな……。

叔父さんは働いてないだろうからヒモが一番有力なのかな……。
きつと叔父さんは何にも不思議に思わず当たり前だと思ってるんだ

ろうな……俺に貢ぐのは当たり前前だとか。

後、本のことも訊くかな。

「忍さん……この本はなんなの？」

本を取り出して見せるとピシッと本を凝視して固まる忍さん。ノエルさんとフアリンさんの視線が忍さんに突き刺さる。

「こ、これは何処にあったのかしら？」

「部屋の本棚にありました。これってなんですか？」

「いいですか、蓮君。その本はまだあなたには早いですからね」

ノエルさんにたしなめられるようにそう言われた。

まだ早い？ 本にもゲームと同じように年齢制限があるのか……。

初めて知った。これでまた一つ新しいことを知ったな。

「分かりましたか」

「はい」

「いい子です」

ノエルさんに頭を撫でられる。

撫でられるのはお父さんが死んでから初めてだ。嬉恥ずかしい感覚に頬が緩む。

「……」

その姿をニヤニヤと忍さんに見られていたが頬が緩むのは止められなかった。

そして、その日の晩。

俺は部屋から幾つもの流れ星が流れるのを目撃した。

第5話

流れ星が流れたので三回、知られないようにとお願いした。

叶うかは分からないけど願掛けしておかないと不安になる。手のひらを返すように冷たくされるのは嫌だから。

きつと、すずかや忍さん、ノエルさんにファリンさんは俺の過去を知っても手のひらを返すように冷たくはしないと思うが……それでも不安に思うのは止められない。

なので、祈るのだ。どうか知られませんかようにと。

「……明日はどうしようか」

叔父を探すのは当たり前のことなのだがそれ以外にも何かすべきだと思う。家事の手伝いとかか？

でも、料理は出来ないから掃除かな手伝えるとしたら。邪魔になったらどうしようかと思うが……ううん、やる前からマイナス方向に考えていたら何も出来ない。

よい方に考えよう。そこで思い出す。夕食時に頭を撫でられたときのことを。

また……撫でてもらえるかな？

とらぬ狸の皮算用って言葉があるけど考えるくらいいいよね。撫でられた箇所に触れる。

「ふふ……」

今はきつと自分でも分かるくらい笑っている。

誰かに褒められると自分がいてもいいように思えるから不思議だ。

氷村の家じゃ俺は……。

ここは氷村の家じゃない。なら、それでいいじゃないか。

うん。それでいい。ここは氷村の家じゃない、月村の家だから。

それだけで心が軽くなる。氷村家あそこに俺の居場所はないのだから。

きつと、俺を引き取ってくれる奇特な人物が現れたら俺はすぐに引き取られることになるだろう。

相手がどんな怪しい人物でもだ。

だから、せめてここに居られる間だけでもいいから化物のように扱

われたくはないと思う。



翌日。

朝食を食べた後、忍さんとすずかはそれぞれ学校に行った。

今日を玄関まで二人を見送った。いつてらしゃいと言うのは何だが新鮮だった。言うことも言われることもなかったから余計にそう感じたのだと思う。

「今日は探しに行かないんですか？」

玄関で立ち止まっていたら洗濯物を持ったノエルさんに話しかけられた。

「後で行きます。あと、その……」

「？ 何ですか？」

「……お手伝いしたいんですけどいいですか？ 邪魔なら止めますけど」

不安げにノエルさんを見るとノエルさんはクスリと笑った。

「いいですよ。ただし、ちゃんと私の言うことは聞いてくださいね」

「はいー」

「ふふ……じゃあ、行きましょうか」

「はい、頑張ります」

俺は洗濯物を持って先に進むノエルさんの後を付いていくのだった。

庭出るとノエルさんが洗濯物の入った籠を地面に下ろす。それから洗濯物を干すために物干し竿を持ってた。

洗濯物を干す準備を終えるとノエルさんが言った。

「干すのは私がやりますので蓮君は洗濯物を私に渡してくださいね」

「はい、分かりました」

物干し竿に背が届かないのでこの配置は当然だと思う。

ノエルさんに言われた通り洗濯物を渡していく。渡す際には洗濯物を干しやすいように解してから渡すように心がける。

例え小さな手間でもそれを少なくするのもお手伝いの一環であると思う。

少しでも早く終わらせることに貢献できたらそれは立派なお手伝いだったと言えると思うからだ。

優しくしてくれる人……氷村家にはいなかったけど月村家つきむらには俺に優しくしてくれた人がいる。

それだけで十分嬉しい。本当は撫でてもらいたくてやっていることだけど……優しくしてくれた人の役にたったならそれでいいと思っただ。

きつと、これでよいのだ。そうだよね……お父さん。

見返りなんて求めちゃ駄目だよね？



お手伝いが終わるとお茶を飲んで少ししてから街に出た。

この時間帯はやはり皆、学校に行っているのだろう。視線が集まっているのが分かる。

こうも視線が集まっているから叔父に警戒されているのだろうか？ 叔父は俺がいることを知らないと思うが……。

万が一にも知っていたとして叔父は逃げるだろうか？ そこは分からない。

それとは関係無いが……何やら変な臭いがする。

昨日までは感じなかった臭いだ。これはなんなのだろうか？ 初めて感じる臭いで、しかも不快な臭いだ。

街のいたるところから漂ってくるこの臭いに不快感が募る。街のいたるところから臭うからこの臭いの主はあちこち移動しているのだろう。

忍さんたちにこの事は教えておいた方がいいだろう。もしかしたら、彼女たちに危害を加えるかもしれない。もしそうなったら大変だ。

俺のように戦いに向いた異能があるのらばまだ大丈夫だと思うが

……そうでないと危ないだろう。

特にこの臭いの主が安全か危険か分からないのだからなおさらだ。すずかの学校が終わる時間帯になったら学校から無事に家まで帰ってこれるように影から見守るべきだろうか？

安全を考えるならそうした方がよさそうではあるが……この臭いの主を探しだして安全か確かめるのも重要であると思う。

うくん……叔父の件もあるからこの臭いの主を探すことだけに注視するわけにもいかない。

ここは……忍さんたちに話して各々で注意してもらうしかないか。何かあればテレビでニュースとして流れるだろうからニュースを確認しないといけないな。

厄介事じゃないのを祈るよ。厄介事であればその混乱に乗じて叔父が何かする可能性もあるしね。

忍さんたちに危害を加える存在ならば……。

ザワツと異能が発動する気配がする。

ッ！ 落ち着け……まだ、そうと決まったわけじゃない。だから、落ち着け。

ふう……危うく、俺が問題を起こすところだった。

まだ、殺気立つのは早い。少なくともこの臭いの主を確かめてからだ。

もし、危険な存在なら排除する。例え……彼女たちに嫌われるかもしれないなくても。

俺に優しくしてくれた人たちが傷つくのは見たくないから。

ならば、今することはこの臭いの主を探すことで、叔父のことは後回しだ！

俺はこの不快な臭いの主の正体を探るべく行動を開始した。



行動を開始して数時間。

さすがにお腹が減ってきた。お昼を抜いてまで搜索したツケが

回ってきた。

後悔はないがさすがにお腹が減ったので何処かでお昼にしようと思う。

臭いの濃い場所を探してそこに向かうがすでに移動した後と言うパターンのため足取りがまったく掴めない。

その行動パターンもマチマチで何が目的かハッキリとせずに少しずつ出はあるが苛立ちが募る。

一貫性がない行動から獣か何かの類いだと推測するが……このよ
うな行動を取る獣についての知識が乏しいため正体が分からない。

結局、分からないままか……。その結果に溜め息が漏れる。

どんな姿をしているかすら分からないのが気味悪い。足跡すらないのが何よりの証拠だ。

空でも飛んでいるのかと思ったが空であると街中の人たちが気がついては
ずなので、街中の人たちが特に反応を示していない以上、飛んでいるとい
うことはないかと判断する。

だとするとどうやって移動しているのか気になるがそうなる
と木から木への移動になるが臭いの濃い場所は周囲に木のない場所もあ
ったので謎が深まった。

それ故に正体は直接見ないと分からないと判断する。

この街で何が起きているのだろうか？ 原因は昨日の流れ星か？

俺に思い当たるのはそれぐらいしかない。

でも、それだったらクレーターとか出来ては
ずだし……ううん……謎だ。

とりあえず、遅くなったがお昼を食べに行くことにしよう。

それから、すずかの学校が終わる時間になっ
たらすずかに気がつかれないように影から安全を確保すべきだ
な。

何者かは分からないが危険かもしれない何
かの襲撃を警戒すべきだ。

すずかが無事に家に戻るのを見届けたら俺
も搜索を再開しよう。

それがいいな。うん、そうしよう。そうと
決まれば手早くお昼を食

べて学園の近くまで行かないと。

「……スーパーで売ってるお弁当でいいかな。お昼は」

ズボンから財布を取り出して中身を確認する。

お金の方もまだまだ余裕はあるから大丈夫。居候になっている分、減り具合も緩やかだし新しくお金を下ろす必要はないかな。

財布をしまおうと俺はスーパーに向かって歩き始めた。



スーパーでお弁当を買った後、学校の近くまで行き、そこでお弁当を食べた。

食べ終わったお弁当の空は近くの公園にあるゴミ箱に捨てた。

それから、学校が終わるのをひたすら待つ。

怪しまれないように隠密行動を心がけていると言っても大驚の姿で電線の上から見ているだけなので幼稚園児くらいの子たちに指を指されてる。

人の姿だったら駄目でしょって注意されてあるだろうが……今は大驚なのでそれは無理な話だろう。

小さな鳥でもいいのだが、そうすると他の大きな鳥や猫に襲われるので……襲われることのない大驚の姿が多样されることになったのだ。

「……終わったのかな？」

学校から制服を着た子たちがぞろぞろと出始めてきた。

そのまま、ずずかが出てくるのを待つ。

しばらくすると栗毛色のツインテール少女を中心にした一団が出てきた。

なのはだと思わしき少女の左右を固めるのはアリサとずずかだ。てつきりノエルさんが迎えに行くのかと思っていたがそうではなかったようだ。ノエルさんやファリンさんも忙しいようだからしょうがないか。

それとも、道中の安全はすでに確保されているのだろうか？ だと

すれば俺がこうやってすずかを見守っている行為に意味はない。

切り上げて謎の臭いの主を探すべきだろう。

そう思い切り上げようとしたとき。

——助けて。

と頭に直接響くように声が聞こえてきた。

誰だ！　と思いいその声の主を探すが見当たらない。

空耳かとも思ったがどうやら違うらしい。なのはという少女が突然雑木林の方に走り出したのだ。

多分、彼女は俺と違ってハッキリと何処から声が聞こえたのか分かったのだろう。感受性が強いのだろうか？

アリサやすずかには聞こえてないみたいだし、俺ももう聞こえない。

どうやら色々確認することがあるらしい。

俺はすずかたちの近くに飛んでいく。

そこには傷ついたイタチ？　を抱えるなのはの姿があった。

あのイタチ？　がさっきの声の主か……。見た感じ危険そうには見えない。

「わ、驚!?　なのは！　そのイタチが狙われてるわよ！」

アリサに見つかった。それ以前にそのイタチ？　を食べる気は無
いんだけど……。

「ふ、ふええ!!　そ、そうなの!?!」

「そうよ！　だって驚って猛禽類だもの！　きっと、弱ったイタチを
食べに来たのよ！」

「あ、アリサちゃん、落ち着いて下手に騒ぐと刺激しちゃうよ」
すずかがアリサを落ち着かせようとする。

ここになのはがいなければ……大驚の姿から人型に戻れるのに
……。

「そ、そうよね……刺激して襲われたらたまったもんじゃないわね」

「そうだよ」

「それよりも……この子を病院に連れてかないと！」

なのはがイタチ？　を両手に抱えながらそう言う。

このイタチ？ が運ばれる病院までついて行った方がいいだろうか？ 万が一にも危険な存在だった場合のことを考えるとついて行ってそのイタチ？ を監視するべきだ。

俺はすずかたちにイタチ？ を襲わないように監視されながらもイタチ？ を監視することにした。

見た目猛禽類なのでイタチ？ を食べに来たのだと勘違いされるのはもうしょうがないと諦める。

何も知らなければ俺もそう思うだろうし……。

でも、居心地悪いな……アリサに思いつきり睨まれてるし、なのはイタチ？ を懐に隠すし、すずかはジーと俺のことを見てるし……すごく居心地が悪いです。

「お嬢様、この鮫島ただいま参りました」

執事服を着た初老の男性が現れた。穏やかな雰囲気を放ってるし、鮫島って言っていたからこの人がアリサの執事をやっているのだろう。

この人なら任せても大丈夫だと思えるような雰囲気がある。

「鮫島、動物病院までお願い」

「はい、ただいま。お嬢様方も車にどうぞ」

すずかたちが鮫島さんが乗ってきた車に乗車する。

車の扉が閉まるとすずかたちを乗せた車が動き出した。

俺もあとを追わなくちゃ。翼をはためかせて俺はすずかたちが乗っている車のあとを追いかけるのだった。



動物病院に着くと俺は窓の外から中の様子を伺う。

そのときにアリサに見つかり、「げっ！ 追ってきたわ……」と言われた。

ちよつと泣きたくなった。勘違いでイタチ？ を捕食しに来たと思われているのだから仕方がないと思うが……心に來るものがある。

そのときにすずかが「大丈夫だよ、アリサちゃん。さすがに建物の

中には入って来ないないよ」と微笑しながら言っていたがアリサは「分からないわよ……だってここまで追ってきたんだからそれなりに頭がいいはずよ。きつと私たちがいなくなつた後を狙っているんだわ！」と邪推していた。

本格的に泣きたくなつた。……何かボロクソ言われてるし……。

これ以上何か言われると本格的に涙腺が、決壊しそうだからこの場から離れよう。

もう、イタチ？ が何処にいるのかも分かつたから後で様子を見にこよう。そうすればもしかしたら、このイタチ？ がボロを出す瞬間に立ち会えるかもしれなし。

とりあえずは昼間から探している変な臭いの主を探そう。このイタチ？ のことは後回しだ。

居場所さえ分かつていればいつでも様子を監視することが出来る。

俺は動物病院から離れて昼間から探している変な臭いの主の搜索を再開した。

また、アリサに何か言われてるだろうなと思いつつながら。

第6話

結局、夕暮れ時まで搜索したが影も形も見つけることは出来なかった。

ただ、一つだけ分かったのは狂暴であることだけだ。

森の中の一角で木々に生々しい爪痕や破壊痕が残っていた。

この生物が街に出て暴れると大変なことになることはすぐに分かったので忍さんたちに注意を呼びかけておこう。

少なくとも何も知らないよりは安全だろう。搜索は一旦切り上げて夜にまた搜索に出ようと思う。これは叔父よりも危険だと判断したからだ。

すでに叔父の件で迷惑をかけてしまったのだそのお詫びとまでは言わないがせめて身近な安全確保には貢献したい。

何よりもよくしてもらったのだからそれぐらいはしたい。それ以外に俺が出来ることは無いから。

とりあえず、家に戻ろう。夕食時に注意だけしてその後はまた搜索に出よう。

それに……血の補給もしないと段々と人が血の詰まった餌に見える始めて来ちやつてる。

健康そうな人を見るとどうも美味しそうという感想が喉から出そうになってる。我慢だ……我慢しないと家に戻ったら部屋に夕食の時間まで引きこもらないと……。

忍さんたちの血が……飲みたくなりそうだ。

それだけは何としても避けないと……露見しちゃう……露見したら……俺は……。



急いで屋敷まで戻ると俺は窓から部屋の中に入り、部屋の扉の鍵を閉める。

「ふう……これで少しは安心かな」

鏡に映った自分の瞳は紅く爛々と妖しい輝きを放っている。

無意識の内に魔眼まで発動しているようだ。

俺は慌てて無意識の内に発動していた魔眼を抑える。

再び鏡を見ると普段通りの紅い瞳に戻っていた。

これで大丈夫だと思う。魔眼が発動していた分が無くなったから少しだけ吸血衝動が落ち着いてきた。

多分、吸血衝動が出たのは魔眼と変身を長時間併用していたからだ
と推測される。

普段はまったく併用して異能の力を使わないから予想より多くの
エネルギーを消費したのだろう。

危なかった……気がつかなかつたらそれこそ本当に忍さんたちに
迷惑をかけていた。

そうならなかつたことに対して安堵の息が漏れる。

よかつた……本当によかつた。

その事に涙が出そうになる。化物だと悪魔公だとバレなくて済ん
だことに対して……。

ああ……醜いなあ……本当に……一人になりたくないからって必
死に隠そうとする自分が。

「ハハハ……」

乾いた笑い声が出る。

「大丈夫……俺は大丈夫……」

そう自分に言い聞かせる。そうしないと不安になる。誰も知らな
いから。

俺の本来の力を……変身能力などではない本当の力のことを……。

氷村の家で悪魔公ドラクエルと言われ俺が忌み嫌われる本当の所以の力を
……。

きつと、いつか知られるであろうことだけど……知らないで欲しい
な。

切実にそう思う。知られたらきつと……それに関連することすべ
てを知られることになるから……。

そうならきつとまた一人だ……。

嫌だなあ……一人は……寂しいから。

氷村の家で生活が思い出される。忌み嫌われ陰口を叩かれ……ありもしない噂が広まっていく。

否定しても誰も信じてくれない……。

………寝よう。寝れば忘れられるし何も聞こえない。安息を得られる。

ベットに横たわり布団を被り目を閉じる。

どうか……目が覚めたときは少しでも優しくありますように……。



パチリと目が覚める。

今は何時だろうか？ 時計を見ると九時を過ぎていた。

思ったよりも寝ていたようだ。

部屋の扉の鍵を開けて廊下に出ると夕食と血の入ったパックが置いてあった。

そして、その側には張り紙が貼っており、その内容は……。

『眠っているようでしたので夕食はここに置いておきますね。食べ終わったらこの場所に置いておいてください。後で回収しに参りますので』

ここに夕食を置いていってくれたのはノエルさんかファリンさんだろう。後でお礼を言いに行かないといけない。

俺は置いてある夕食部屋の中に運び入れるとテーブルに置いていく。

ノエルさんやファリンさんのように素早く並べることは出来なかった。

夕食に口を付けると料理は覚めていたが暖かかった……そう心が暖かかったのだ。

誰もこんな風にしてくれなかったから……嬉しく感じる。

ありがとう……直接言いに行くが今は心の中だけで言うておく。

やっぱりここは居心地がいい……。この居心地のよさを壊したく

ないなあ……。

今は食べよう。それからイタチ？ の監視と謎の臭いの主の搜索を再開しないと。

そして、夕食を食べ終わると元あった場所に食器を置いていく。

「ご馳走さまでした」

誰にも聞こえていないだろうけど言っておく。

部屋に戻ると扉の鍵を閉めて窓を開ける。

「……行ってきます」

体を蝙蝠に変えると俺は窓から外に飛び出して行った。



「……………何があったんだ？」

街に近づくにつれてサイレンの音が聞こえてきた。

本当に何があったのだろうか？ 不思議に思いつつも近づいていくと半壊した動物病院の姿があった。

「……は？」

予想だにしなかった光景に間抜けな声が出てしまった。

そこから、アスファルトが大きく捲られたり傷をつけられたブロック壁が見えた。

その方向に進んでいくとあの臭いを感じた。

それに混じって他にも幾つかの臭いも混ざっている。

そして、破壊痕は途中でぱったりと消えてしまっていた。

同時にあの臭いが消えて二つの臭い飲みがこの場所から移動したのが分かった。あの臭いの主はどうなったのか分からないが……二つの臭いは移動していることからあの臭いの主を撃退か何かしたのだろう。

危険だ……この二人がもし、すずかたちに牙を剥くような存在だったら……。

俺はこの場から離れた二つの臭いを追って飛んでいく。

危険する存在であったなら……俺は……。

姿を蝙蝠から大鷲の姿に変えて移動速度を上げる。

そして、臭いの先は……翠屋に続いていた。再び姿を蝙蝠に変える
と二階の窓の傍に近づいて明かりの点っている部屋を覗く。

そこにはなのはとイタチ？ の姿があった……。

あの一人と一匹が犯人か。

なのははずすかの友達だったはずならずかたちに危険が及ぶこ
とは無いか……ただ、あのイタチ？ だけは別だ。

明らかに人の言葉を喋っている。

魔法が何やら話している……怪しい……あのイタチ？ は怪しい。

叔父の搜索を中断してでも、調べる必要があるかもしれない。あの
イタチ？ は何だ？

改めて思う。あれはイタチ？ に化けた異能力者なんじゃないか
と……。

危険……あのイタチ？ のことを調べないと。叔父はしばらくは
動かない可能性があるから目先の危険かもしれない存在の監視に入
る。

危険ね……俺が一番危険人物かもしれないのに……何て皮肉だろ
うか。

それでも、やらなくてはならない。

今日みたいなことにならないように気をつけてだが……。あの状
態にならないようにしないと……。

あの状態の姿を見られたら確実に……バレる。

それが一番恐ろしい。俺にとっては少なくともどのような異形よ
りも恐ろしいことだ。

とりあえず、今は戻ろう。

そして、明日に備えるべきだ。幸いなことに居場所は判明したの
だ。今はこれだけでも十分。

踵を返して俺は家に戻っていった。



翌朝。

ノエルさん、ファリンさんに昨日のお礼を言って、忍さんとすずかを見送り、ノエルさんのお手伝いをしてから家を出た。

大驚の姿で翠屋の二階付近に近づいてなのはの部屋を覗くがイタチ？ がない。

「何！……まさか、昨日……俺がここにいたのがバレて隠れたのか？」
もし、そうだったら……いや、まだそうと決まったわけじゃない。
ともかくイタチ？ を探さないと！

俺は慌てて飛び上がった。

イタチ？ がいる可能性がある場所は……やはり、なのはの傍か？
安全のために寄生先の人物と一緒に行動する可能性も考えられる。
もし、そうならずかやアリサが人質に取られたことになる……。
俺の早とちりの可能性もあるから落ち着くべきだ。

いざとなったら……燃やせばいい。突然、火の手が上がれば慌てるはずだ。

その隙にすずかたちを救出すればいい。

いざというときの救出プランを考えながら学校に向かって飛行する。

「……見えてきた」

学校が見えてきた。校庭には生徒の姿が無いことから今は休み時間では無いことがわかる。同時に体育の授業でも無いということだ。すずかたちが授業をやっている教室を飛びながら探す。

当然、授業を受けている生徒たちに見つかり授業の妨げになってしまう。

それは若干心苦しいが……すずかたちの安全のために目をつむる。
そして、アリサの姿を見つけた。さらになのはの姿もだ……すずかはと……おお、いた！

ちゃんと黒板に書かれたことを写している。

教室が覗ける場所に止まる。教室の窓から中の臭いが流れてくる。
その中に……。

「……見つけた」

あのイタチ？ の臭いを見つけた。

臭いの濃さから考えるに教室の中にいるのだろう。

厄介なことだ。これでは迂闊なことは出来ない。

これもすべてあのイタチ？ の計算の上での行動なら……決めつけるのは早計か。

これから判断すればいい。危険か危険じゃないかを。

ただ、教室内から好奇の視線に晒されるのは勘弁願いたい。

特に昨日この姿を見ているアリサの反応が顕著だ。ただの鳥じゃないって感じの表情になっている。

まあ、怪しまれたのだからしょうがない。

このまま、お昼まで待つことにしよう。



お昼になったので屋上へ向かう。

そこなら生徒が上がってこないだろうと思って来たのだが……。

「それにしてもそれって本当にフェレットであってるの？」

イタチ？ に懐疑的な視線を向けつつお弁当を食べるアリサ。

「キュ、キュー」

何故か鳴き声を上げるイタチ？ まるで自分がフェレットですと返事をしているようだ。

俺は屋上で休んでいたのだがさすがにちがいが来てしまったので給水タンクの上から驚ではなく鳩の姿になってイタチ？ いやフェレット擬きの観察を行っている。

「た、多分、突然変異種なの」

苦し紛れの説明ともとれるなのはの説明をジト目でフェレット擬きを見ているアリサが「ふくん」と、とつと吐きなさいと言うような返事を返す。

「すずかは割れ閑せずと言うように少しずつお弁当を摘まんでいる。

「それにしてもよく見つけたわね」

「そうだよ。昨日は大変みたいだったし」

「そ、そうなの。偶々ユーノくんを見つけたの」

フレット擬きの名前はユーノ……。

これから対象をユーノと呼ぶ。偽名の可能性も考えられるが現在からユーノと呼称する。

彼だか彼女だか分からないがユーノの目的はなんなのだろうか？

まずはそれを探らなければ。

フレット擬きの姿をして人の目を欺き何を狙っているんだ？

なのはの家族を狙っているのか……それとも、すずかたちを狙っているのか……。

どちらにせよ……昨日の件と無関係ではあるまい。もしくは昨日の感じたあの臭いの主が擬態した姿なのか？ その可能性も否定出来ない。

だか、臭いは三つあったからその可能性は限りなく低い。

謎ばつかしある……。こういうのはミステリー小説だけで十分だ。

一度……強襲して反応を見ておきたいところだがアリサやすずかがいるため出来ない。なのはは昨日ユーノと話していたことからユーノ側なのだろう。

とりあえずは現状維持にとどまる他ないか……。

ユーノの行動を逃さないようにその動き一つ一つを観察するのだった。



観察結果……怪しいところはあるが危険かは分からない。何か特別な力を持っているようだがそれが何かは不明。

使う兆候もなく静かに過ごしていることから現在は暴れるつもりは無いようだ。

観察は以後も継続する。

安心出来る要素が一つもない。もしかしたら俺が見逃してるだけの可能性もあるが……。なのはの様子を見るにユーノ自身は危険で

は無さそうだ。

時折アリサからの視線から逃げるがそれはしようがないと思う。穴が空きそうなほど見つめられたら誰だってそうするだろう。

ユーノは教室で問題を起こすことはなかった。これによりユーノはフェレット擬きであるが、知能は最低でも人間と同等であることが判明した。

俺たち夜の一族と似たような一族の出身である可能性が浮上。だが、そのような一族の情報が無いためこれの可能性は限りなく低い。ただ、ユーノの反応から見るに彼又は彼女は人間とそう変わらない生活を送っていたことが推測される。

動きにやけに人間じみたものがあるのでその可能性は高い。

忍さんに報告する必要がある。忍さんの恋人の妹と言うことは将来の忍さんの妹となる予定のなのには関わることなのだ。報告しないと言う選択肢は無い。

より、詳細な情報を集めなくては昨日のこともあるので確実性の高い情報にしたい。

現在、確実なのは……ユーノが人間と同程度の知能を有しており、その生活様式は人間と変わらない可能性があることぐらいだ。

一番大事な安全な存在であるかの証明が出来ていない。

やはり、詳細な情報を集めるためには学校が終わってからの必要がある。学園内にいたのでは探れることが少ない。

調査は学校が終わってからが本番となるだろう。

第7話

キーンコーンカーンコーン!!

学校のチャイムが鳴り、教室から鞆を背負った生徒たちが教室から出始めた。

なのは、アリサ、すずかも例外ではない。

帰り道はこれと言った問題が無いようである。あつた場合は困るがユーノがいるので警戒していたのだ。

途中でなのはがアリサとすずかと別れた。

ここからが調査の本番であろう。

二人と別れるとなのはが何かを探し始めた。

やはり何かがあるようだ。

危険なものでなければよいのだが……もし、それで怪我でもされたら忍さんが悲しむと思う。なんと言っても将来の妹ですずかの友達なのだから。

何かを探しているなのはの後をつけていく。

危険なことではなければよし危険なことならばそれを助けなければならぬ。

それが忍さんたちに向けて俺が出来る数少ないことだから。

それにこれも原因はユーノであることは間違いない。

ユーノは何をやってしまったのだと推測する。そこでなのは手を借りなければならぬ事態になったのだろう。

そうなるとうますますユーノの正体が気になる。彼又は彼女は何者なのだろうか。

やがて、なのはは導かれるように神社の境内に上がっていた。

そして、そこには……巨大な犬がおり、その傍には人が倒れている。

何が起こっているんだ……? 夢のような現実にこれが本当に現実なのか疑ってしまいそうになる。こうなつた原因は何だ?

その原因が分からないことには対処のしようがない。ただ一つ確かなのはユーノは何かを知っているということだ。

巨大な犬がなのはに向かって飛びかかるのが見えた。

慌てて俺はなのはに近づくが間に合わない！ 最悪の光景が脳裏を過る。だが、そうはならなかった。

なのはの前に淡いピンク色の膜が発生したのだ。

それはなのはに飛びかかってきた犬を弾き飛ばした。

それから、さらに信じられない光景が俺の目に飛び込んできた。

なのはが赤い宝石のような球体を手に持ち掲げるとピンク色の光に包まれたのだ。その光の奔流が無くなるとそこには微妙に変わった学園の制服を身に纏ったなのはの姿があった。

そして、何処から取り出したのか分からない大きな杖を持っていた。ますます謎の展開が起こっている。

今、両手が翼でなかったらきつと俺は両手で目をゴシゴシと擦って何度も瞬きしながらなのはのまばたくを見ているに違いない！

こんなバカらしいことも事実である故に忍さんに報告すべきだろう。

いや……いつそのことユーノをこの場で拉致して忍さんの前に連れていくべきかもしれない。

なのはには今日中に送り届けると説明すれば大丈夫だと思う。

……多分。

そんなことを考えている間に巨大な犬がピンク色の球体にボコボコにされていた。

なのは強っ!? てか、あの球体はなんなの！ 宙に浮いてるとか

……これじゃ、ますますユーノを拉致する必要があるが出てきた。

これもユーノが原因のはず……アレ？ これってユーノを拉致して情報を吐かせれば全部解決するんじゃないや……。

よし、拉致しよう！

とりあえず、なのはは大丈夫そうなので事の成り行きを見守る。

ボコボコにされた巨大な犬に杖の先の部分をなのはが向ける。

そして、その杖から光線が出て巨大な犬に命中すると巨大な犬から青い宝石が飛び出してきた。

その飛び出した宝石はなのはの持っている常の先端の方にある赤い宝玉の中に吸い込まれていった。犬はと言うと小さくなっている。

巨大化していた原因も分かった。これは完全にユーノを拉致する必要がある。俺は元の制服に戻った隙を狙ってユーノに襲いかかった。

「ゆ、ユーノくん!?!」

「キユ、キユー!」

あつと今に俺は上空に上がるとユーノに話しかける。

「おかしな真似したら……爆散させるよ」

「……………」

「……これからある人にあつてもらおうから。その人に危害を加えようとしても爆散させるからね。それから、今日中なのはの元に返すことは約束しよう。分かったら返事」

「は、はい!」

やつぱり、喋れんじゃん。

俺はユーノを掴んだまま家に向かって飛んでいった。



家に着くと俺は人の姿に戻る。

「え……………」

ユーノから驚きの声が漏れたがそれを無視して家の中に入る。

「あ、ノエルさん。忍さんは帰ってきてますか?」

「忍さまですか? ええ、それなら少し前に帰ってきましたが…………」

「分かりました」

俺はモップを持っているノエルさんに頭を下げてから忍さんを探して家の中を移動し始めた。

リビングとかにはいなかったので忍さんの自室の扉をノックする。

「はい、誰?」

「蓮です。ちよつといいですか?」

「蓮君、どうしたの」

扉を開けて忍さんが出てくる。

俺は忍さんの前にユーノを差し出す。

「忍さん……昨日、動物病院を破壊した犯人を知っている承認を連れてきました」

「……えと、このフレットがそうなの？」

「そうです。ほら、ユーノ……分かってるでしょ」

俺はユーノに向けて低い声で言った。

「ど、どうも……ユーノ・スクライアです」

ピタリと固まる忍さん。その数秒後再び再起動した。

「……フレットが喋った!？」

それはここに来てから始めて聞いた忍さんの本当に驚いたような声だった。



それから、ユーノと一緒に忍さんの自室に通されてユーノから魔法の存在を聞いた。

「……本当に魔法が存在するなんてね。それに次元世界だなんて……ファンタジーって本当にあったのね」

「いや、彼も魔法を使ってたんじゃ……」

そう言いながらユーノが俺のことを見る。

「俺のは魔法じゃなくて異能なんだけど」

「……異能……世界が違うから呼び方も違うのか？」

何やらぶつぶつと言い出したユーノ。何か琴線に触れることがあったのか？

「それよりもジュエルシールドだっけ……海鳴市に落ちてきたのは」

「は、はい。そうです。それを回収するために僕が来たんですけど……」

「返り討ちにあったと」

「……情けない話ですがそうです」

だから、なのはがあの巨大な犬と戦っていたのか……。

「ジュエルシールドは願いを歪んだ状態で叶えるものって認識でいいんだよね？」

「うん、間違っではないかな」

間違えてないならその認識でいいだろう。

いつ爆発してもおかしくない爆弾みたいなものが町中に散らばってるだなんて……何て物騒なんだ。

もしだけど……もし、叔父が偶然にでもジュエルシードの存在を知ってそれを悪用しようとしたら……かなり不味いことになるんじゃない……。

「忍さん……どうしたらいいと思います？」

忍さんに判断を仰ぐ。なのはが爆弾ならなぬジュエルシードを回収していることはもう周知の事実——俺と忍さんの間だけではないが——なのでこれは俺も手伝った方がいいのだろうか？

でも、俺自身が発動させてしまった場合は確実に酷いことになるのが分かる。

この胸の内に燻る思いに反応してジュエルシードが発動するかもしれない。なので、俺はあまりジュエル・シードには近づかない方がいいかもしれない。

「……少し考えさせて」

すぐには判断を下せないようだ。

「はい。じゃあ、ユーノ送るよ」

忍さんの部屋をあとにすると俺は大鷲の姿になり、ユーノを背に乗せて飛ぶ。

「……とりあえず、俺も探しては見るけど結果は気にしないでね。あくまで片手間です探すようなものだから」

「うん。分かった。暴走したジュエルシードを封印出来るのはなのほだけだから……見つけたらなのはか僕に渡して欲しい」

「それぐらい分かっているよ。そのジュエルシードを発動させて忍さんたちに迷惑はかけたくないからね」

俺がジュエルシードを暴走させたら絶対にろくなことにならない。それは俺が一番よく分かっていることだ。

「それと……忍さんたちのことは内密にね」

「うん……分かったよ。僕もなのはを混乱させたくないしね」

もし、渋っていたら魔眼を使って洗脳していたところだ。よかった、本人の意思で黙ってくれて。

二十一個中二個は封印したらしいから残りは十九個……すずかたちには危害がなければ万々歳なんだけど。それは難しいのかな。

他にもジュエルシードを封印出来る人がいればいいんだけど……望み薄だし。

ジュエルシードの回収にはユーノしか来てないそうだからでも、ユーノ自身も来ないと言う選択肢があったわけで、とりあえずユーノが来てくれたお陰で被害が少なくなつたのかな。

少なくとも昨日今日のジュエルシード関連においてはそうだろう。

叔父さん……せめてジュエルシードの件が片付くまで出ないで欲しいな。



ユーノをなののはのところに送り届けると俺はジュエルシードの捜索を始めた。

見つけても手を出すつもりはない……誰がいつ爆発するかも分からない爆弾を自分から触りに行くだろうか。

目的は場所だけ把握して、その場所をユーノに伝えるだけだ。

こういうのは専門家に任せただろうし、素人が下手して状況を悪化させてはいけない。

忍さんが答えられなかった理由もそこだと思う。あくまで予想でしかないから外れてる可能性もあるけど。

それにしても、厄介な事になったと思う。

いつ爆発するか分からない爆弾が何処にあるか分からない状態で街中に散らばっているのだから。

知らない方がいいこともあるって言葉を本当に体験することになるとは思わなかった。

好奇心は猫をも殺すとはまさしくこの事だ。

「……時すでに遅しだけど」

すでに知ってしまったのだからしようがないと諦めるしかない。
すずかたちには安心して日常を過ごして欲しいので本当に危なく
なるまでは知らないで欲しいと思う。

この事を教えるか教えないかの判断は忍さんに任せているのだから俺がどう思ったところでそれだけの意味しかない。

だんだんと日が沈んできたしそろそろ帰ろう。

夜になると探すのが大変だし、日が出ている時間よりも見つけにくい。

それに……予想外の事が結構起こったから疲れた。
なのはの変身とか魔法とか……で。



「ただいま戻りました」

「あ、蓮君お帰り」

玄関の中に入るとパソコンを持ったすずかに遭遇した。

「そのパソコンは？」

「ん、これは壊れちゃったやつだから、お姉ちゃんにお願いして譲ってもらったの」

「壊れてるのに譲ってもらったの？」

「うん。私、機械を弄るのが好きだから」

ああ、なるほど。要するに分解するのね。機械を弄るのが好きでも壊れたのを分解するぐらい好きだったとは思ってもよらなかった。

「そうなんだ……見ていつてもいい？」

「いいけど……つまんないかもしれないよ？」

「平気。自分で分解すること何て無いから気になった」

「そうなんだ……」

「うん」

実際に中がどうなっているのかを見たことがないので気になる。

「そっか……なら、一緒に行こう」

「うん」

俺はさすがのあとについて行った。
どうやらさすがの部屋で分解するらしい。

始めてさすがの部屋に入ったが綺麗に整理整頓されている。

気になった事と言えば俺の使っている部屋と違って本の量が多い
ぐらいだろうか。

あとで借りていいか聞いてみよう。

「蓮君、分解始めるよ」

「ん、分かった」

ドライバーを片手に手際よくパソコンのネジを外していくわずか。
その手際よさに慣れてるなあ……と感心した。

手の動きに迷いが無いことからすでに何回も同じ様な作業を繰り返していることが伺える。

「へえ……中はこうなってたんだ」

外回りの部分がすべて外されると色々ゴチャゴチャしたパソコンの内部が見えた。

「そうだよ。機種によっては位置が違ったりするんだけどね……ほ
ら、形が違うから」

「なるほど……」

確かに形が違えば同じ機能であっても場所を変えないとちゃんと機能しないもんね。

カラフルな線が複雑に絡み合っているように見えながら絡まっていないのがすごい……。

詳しく知っているわけじゃないからこれらの線が持っている役割は分からないけどこれらがパソコンを動かす上で重要なのは俺でも分かった。

ふと視線をさすがの方に向ける。

真剣な表情で手を動かすわずか。その様子を見て思った。

俺はさすがの様に何か真剣に打ち込めるものがあっただろうかと
……。

好きなことはある。でもそれはあくまで好きなことであり、さすがの様に真剣に打ち込めるようなものじゃない。

うん…羨ましくなる。何か真剣に出来ることがあるということに対して。

俺もすずかの様子に真剣に出来ることを見つけられるだろうか……。

「どうしたの？」

じつとすずかの様子を見ていたのに気がつかれた。そんな俺に対して不思議そうにすずかが首を傾げている。

「何でもないよ。ただ……」

「ただ？」

「真剣に打ち込める事があるっていいなって思っただけだから」

「蓮君には無いの？」

俺はすずかの言葉に素直に頷く。

「無い……」

「そつか……いつか見つかるといいね」

「うん。見つかるかな？」

「見つかるよ……世の中には色々な事があるから」

すずかの言う通り世の中には色々な事がある。その中から自分がまだ見つけていないだけかもしれない。

「ありがとう」

「ふふ、どういたしまして」

こんな会話をするのは始めてだ。だからかな……楽しく感じたのは……。

第8話

すずかが粗方パソコンを解体して、それから元の形に戻し終えた頃に話しかける。

「ねえ、すずか」

「何？ 蓮君」

俺は本棚にある本を指差す。

「幾つか本を借りていいってもいい？」

「いいよ。でも、左端にある本は機械系の本だから間違えないでね。蓮君が借りたいのって小説とかでしょ？」

「うん。そうだよ。何かオススメの本ってある？」

すずかは沢山本を読んでいるようだから何がオススメなのだろうか？

「うーん……蓮君はどんな話が好き？ それによって私がオススメ出来るのが変わるんだけど……」

「ミステリーものかな。トリックとかが面白くて」

自分で再現出来るか試したくなるんだよね。

「ミステリーものかあ……だったらこれかな」

そう呟きながらすずかが少し厚めの本を本棚から手に取った。

「これはどうかな？ シリーズものだし」

すずかがはいつと俺に本を渡してくる。それを受け取り表紙を見る。

「シャーロック・ホームズか」

「厚いし読みごたえもあると思うよ」

「確かに読みごたえがありそうだ。ありがとね、すずか」

シリーズものか……楽しみだな。

俺はすずかに礼を言ったあとにすずかの部屋から退出した。

「♪~~~~♪~~~~」

鼻唄混じりに俺は部屋に戻っていった。この光景を見られていたとは知らずに……。

「……………ふう、うん、面白い」

すずかに借りたシャーロック・ホームズの本は面白かった。まだ、途中までしか読んでいないがそれでも続きが早く読みたくなる。

オススメしてもらってよかったと素直に思える。すずかに感謝だ。続きを読もうとしたタイミングで扉がノックされた。

「はい」

「あ、蓮君。夕食の時間ですよ」

この声はファリンさんだ。時計を見ると七時を過ぎていた。

「はい、分かりました」

わざわざ呼びに来てくれたようだ。自分で時間をちゃんと確認しておくべきだった。

部屋の扉を開けると夕食の乗ったカートの前にファリンさんが立っていた。

「呼びに来させたようですよいません」

「いえいえ、いいんですよ。確認を兼ねてましたので」

笑顔で気にしなくてもいいですよとファリンさんが付け足す。

「そうですか」

ホツと胸を撫で下ろす。俺のせいで夕食の時間を遅らせてたらどうしようかと思ってたので安心した。

今度から時間はちゃんと確認しよう。夢中になりすぎて時間を忘れたら迷惑をかけてしまう。

次は気をつけようと心に決めてファリンさんのあとを付いていく。食堂に着くとすでに忍さんとすずかは席に座っていた。ノエルさんは多分、血を取りに行っているのだと思う。

ファリンさんが夕食を運んできていたから。

「ねえねえ、蓮君。今日は上機嫌だった見たいね。鼻歌歌ってたようだし」

忍さんがニヤニヤと含み笑いをしながらそう言ってきた。

「いや……………その……………楽しみだったんで」

まさか、聴かれていたとは……恥ずかしい。その事に頬が火照ってくる。

「ほらほら♪ 赤くなってるわよ」

ここぞとばかりに忍さんができてくる。すずかに助けを求める視線を送るが……。

クスリと笑われるだけだった。

うう……別の意味で居心地が悪い。でも、悪い気はしない。

悪い気がしないのは……悪意が無いからだと思う。

それでも……恥ずかしいので止めて欲しい。

「ああ、蓮君が悶えています！ 始めてみました！」

あれなのか？ ファリンさんも忍さんと同じように俺を弄るのか？

そんなことを思いながらファリンさんを見つめる。

「そ、そんな目で見ないでください!! 何かとてつもない罪悪感が

……」

ファリンさんが急に胸を押さえて苦しみだした。

何！ 何なの!?! 怖いんだけど……。

「ファリン……何をふざけているんですか?」

そこにノエルさんが現れた。

「ふざけてないですよ。ちよつと罪悪感に押し潰されそうになっていただけです」

「はあ? 罪悪感でも何でもいいですけど……ちゃんとやってください。夕食の時間が遅くなります」

やれやれと首を横に振るとノエルさんは夕食を並べ出した。

慌ててファリンさんが夕食の乗ったお皿を並べ出す。

それから、少し遅めの夕食の時間となった。



夕食を食べたあと広間でテレビを見てると一匹の猫が現れた。

「ニア〜」

……気配は感じていたが今日始めて目の前に姿を表した。
慣れてくれたのだろうか？

そう思いながら恐る恐る手を伸ばす。

「ほっ……よかった」

どうやらちゃんと慣れてくれたようだ。

猫の背に触っても特に嫌がっている素振りを見せずにいる。その事に安心して頬が緩む。

そのまま、なで続けているとニャー、ニャーと猫が一匹二匹と増え出した。

多分、最初の猫が切っ掛けなのだろう。

俺がただ、撫でるだけだと分かったのできつと姿を表してくれたのだ。

猫に囲まれ、近くにいる猫に背中を登られたり、頭に乗られたり、体を擦り付けてくる猫を撫でたりとホッコリとした気分になっていると……。

映画が始まった。

タイトルは『エイリアン』というものだった。

見たことも無いし聞いたこともないのでそのままテレビを見ている。

そして、俺は見たことを後悔した。

「……………」

口の中から口がああ!? えっ！ 血に触れると溶けるの!?

何その恐怖設定！

怖いのに目が離せない……。何でだ……。これが怖いもの見たさというものなのか……。

近くにいる猫を抱きながら映画を見続ける。

「……………っ！」

変な肌色の手みたいなの人の顔に張りついて人の中に入っていた……。

自分がそれを体験するところを想像してしまい思わず体が震えてしまった。

エイリアン怖い……エイリアン怖い……。でも、続きが気になる。

「あれ？ ずいぶんと懐かしものを見てますね」

背後から聞こえたきた声に思わずビクツとなる。

恐る恐る振り替えると……ノエルさんがいた。

ノエルさんであつたことにホッと一安心する。

よかつた……知ってる人で本当によかつた。これで知らない人だつたらかなり困つたことになるのだがそれは置いておこう。

テレビに視線を戻すとちようど……人の体突き破つてエイリアンが出てくる瞬間だつた……。

「……………」

俺は無言でノエルさんの背に抱きついた。

「あらあら……………」

困つたような声が聞こえる。

ごめんなさい。しばらくこうさせてください。

そして、ノエルさんに隠れる様にしながらテレビを見る。

夢に出てきそうだ……。……止めようそういうことを考えるのは本当に夢に出てきそうだから。

目を閉じて別のことを考えよう。目を閉じた瞬間に思い出したのは人の顔に張り付く手の形をしたエイリアンだつた。

「……………仕方のない子ですね」

ふと頭を撫でられる感覚がした。

「あれは作り物だから安心してください」

優しく壊れ物の様に繊細に扱われる感覚に戸惑いを覚える。

「……………えっと……………その……………」

「子どもなんですからもう少し甘えてもいいんですよ？」

本当に……本当に甘えてもいいのだろうか？

頭を上の方に動かしてノエルさんを見る。

ノエルさんの表情は今まで誰からも向けられたことのない類いのものだつた。

「何に対して不安を覚えているのか分かりませんが……大丈夫ですよ」

いいのかな？ 本当に……信じてても大丈夫なのだろうか？

「……じゃあ、しばらくこのままでもいいですか？」

出せた声は本当に小さく普段の自分からは想像出来ないほど弱く力のない声だった。

「ええ、いいですよ」

俺はその言葉に頷くとノエルさんに抱きつく手に力を入れた。

これが夢じゃないのを確かめるかのように……。



「ううう……」

お風呂に入りながらさつきまでの事を思い出す。

甘えていいって言われてつい甘えてしまった。

そして、抱きついて安心したのは確かだ。十分よくしてもらっているのにそれ以上を求めてしまった。それじゃ、いけないのに。

バシャリとお湯を顔にかける。

湯船に映る自分の顔を見ながら呟く。

「……本当の事を言っても大丈夫なのかな？」

氷村で、俺が疎まれている理由を……。

それを知ってなお受け入れてくれるのなら嬉しいけど……疎まれたらきつと、俺は……。

言う勇気が持てない。このままぬるま湯の様に居心地のよい場所を失いたくない。

怖いから言わない……。また、一人になるのは嫌だから……。

化物と言われ忌み嫌われるのは辛いから……。それは氷村の家だけで十分だ。ここに来てまで言われたくはない。

だから、知らないで欲しいし、知ろうとしないで欲しい。お願いだから。

愛してとは言わない……。ただ、受け入れて欲しい。

それだけ十分だから……。

ポタポタと滴が湯船に零れ落ちた。

● ● ●

お風呂から上がった後、部屋に戻るが……本の続きを読む気分にも
なれず、ベットの所でゴロゴロとしている。

「にゃ〜」

いつの間にか部屋の中に入り込んでいた猫が鳴き声を上げながら
擦り寄ってきた。

「……いらつしやい」

そう言いながら猫に手を伸ばす。

「どうやって入ってきたの？」

そう猫に問いかける。

にゃ〜と鳴くだけで明確な答えが返ってくるわけじゃないがつい
そう問いかけてしまった。

くすぐったそうに目を細めながら猫がじゃれてくる。

慰めようとしてくれていたのだろうか？ でも、そんなことあるわ
けないかと思いつつ猫の首を撫でる。

ゴロゴロと気持ちよさそうに唸る猫の様子を見ると気持ちが和
らいできた。

ありがとね。

声に出さずに心の中でそう言いながら猫を撫で続ける。

さつきまでの落ち込んでいた気持ちが少しだけ改善された。

これもアニマルセラピーの一種だろうか？

……うん、明日は猫たちと過ごそう。ジュエルシードのことは
一旦脇に置いておいて。

こつちに来てから沈むことの多くなった気持ちを前みたいに落ち
込まなくなるようにするために明日は猫たちと過ごそう。

それぐらいの時間はあるよね？

お父さん……俺にもそれぐらいは許されるよね？

例え、悪魔公ドラケルと忌み嫌われる俺だけでもそれぐらいは許して欲しい
な。

ちゃんと頑張るからさ……。叔父探しも忌み嫌われようとやりと
げて見せるから……。

だから……。明日だけでも休ませて。

● ● ●

翌朝。

懐かしいくも忌々しい夢によって目が覚める。

辺りを漂うは濃厚な血の香り。そして、自分の目の前で事切れるお
父さんの姿と自分を恐れて遠巻きながら見ている氷村の者たち。

本当に嫌な夢を見た。

目を擦ると若干濡れている。

どうやら寝ながら泣いていたらしい。

あのときの事を夢に見るといつもこうだ。幸いなことに朝食まで
時間があるから皆に見られても泣いていた事がバレないくらいまで
には出来るだろう。

休もうと思ったそばからこれだと気が滅入りそうになる。

でも、それを含めて今の自分があることを否定してはならない。

否定するだけなら簡単だから……。

とりあえず、顔を洗っておけば泣いていた事実を誤魔化せると思
う。

目に水が入ったから目が充血していると言えはいいんだし。

嘘でなければ心苦しくない。

だから俺は洗面所に顔を洗いに行くのだった。

● ● ●

顔を洗い終わって部屋に戻る途中で猫とすれ違った。

改めて月村家は猫屋敷なのだ実感した。すれ違った猫の数は数
十匹にもおよぶ。

一日だけでも並大抵の食費じゃ済まないだろう。改めて夜の一族

の稼ぎのすごさが分かる。

基本的に夜の一族に連なる者の大半は社会的に上の立場にいる。これは一族が人の社会で迫害されずに暮らしていけるようにするためだ。

上の方であればある程度の揉み消しが出来るからというのが一番の理由である。

不老長寿である夜の一族は歳をとるにつれて周りとの違いが浮き彫りになる。そのため同じ土地には長い期間滞在することは出来ない。

それに戸籍等の問題がある。

これは一族の中でもごく一部の面子が管理している。管理する面子に選ばれる理由は私情で動くことがなく冷静に物事を見極められる人物に限定される。それ以外にも選考基準はあるらしいがそこまでは知らない。

話は戻るが夜の一族の家は皆、金持ちである。例外なく一族の家であれば金持ちなのだ。

叔父のように口座を止められるというのはほとんど無いので叔父は除外する。

それ以前に職に就いていないのは叔父以外にはほとんどおらず、いたとしても怪我やその人個人の事情である。

重ねて言おう叔父のようなヒモはいない。……ヒモは叔父だけのはずだ。

さらりと叔父をヒモ認定しているが……ヒモの確率が一番高いからであり他意はない。

今日は……叔父のことなどを忘れて休む。

明日からはまた叔父を探すのを再開するが……ジュエルシードも同時に探すつもりだ。

万が一叔父がジュエルシードを手に入れていないとも限らないので……。

不安定な精神を落ち着けて……いずれ来るであろう叔父との邂逅に向けて英気を養う。

それが、今日の俺がやることだ。

第9話

朝食を食べた後は忍さんとすずかのお見送りをしてノエルさんのお手伝いをする。

フアリンさんのお手伝いは色々な意味で危険なのでやっていない。また、ナイフが飛んできたら嫌だからだ。

そして、今は庭に出て昨日、すずかに借りたシャーロック・ホームズの続きを読んでいる。

近くには猫が集まり寝ていたり、じやれてきたりするので本が読みにくい。

それでも避けられているよりはずっとマシなのでそのままにしている。

次第に猫たちがうたた寝を始め出す。それを見ていると俺まで眠くなってくる。猫たちが気持ちよさそうに寝ていると余計に……。

「ふあああ……」

欠伸が出てきた。何か本格的に眠くなってきたので本を閉じて庭にゴロンと横になる。

日当たりがいいと眩しいのでもちろん木陰に移動してからだ。

猫たちも一緒に移動してきたので皆で一緒に寝る。

寝返りで猫たちを潰さないか心配だがそこは猫たちの危機管理能力を信じることにしてそのまま眠りに落ちた。



「……きて……きてください……きてください……起きてください」

「……ん」

ユサユサと体が揺すられる。

それによって目を覚ます。

目を開けると目の前にはノエルさんがいた。

「……起きましたね。お昼ですよ」

「……はーん」

目覚めたばかりで上手く頭が回らないがお昼の時間だということ
は分かった。

なので重い瞼を閉じないように耐えながらすぐ近くに置いていた
本を持って先に行くノエルさんの後を追いかける。

体を動かすと自然に眠気が覚めてきて思考がクリアになっていく。

「それじゃ、手を洗ってきてくださいね」

「はい」

俺は頷いてから手を洗いに洗面所に向かう。途中で部屋により本
をベットのの上に置いておく。

洗面所で手を洗い、眠気を完全に覚ますために顔を洗う。

「……ふう、サツパリした」

タオルで手を拭き、洗面台の下にある戸棚からタオルを取り出して
顔を拭う。

顔を拭いたタオルを洗濯籠の中に入れてから洗面所を後にする。

食堂に着くとお昼がすでに用意されていた。

今日のお昼はサンドイッチらしい。

トマトにレタス、ハムが挟まったものから玉子、ベーコン、ポテト
サラダと幾つかの種類が作ってあった。

飲み物は血ではなく牛乳である。

特に理由はない。お茶か牛乳どちらがいいか聞かれたので牛乳と
答えたのだ。

ノエルさんとファリンさんがテーブルに着くのを待ってから食べ
る。

「いただきます」

野菜は新鮮なものを使用しているようで瑞々しくアクが少なかつ
た。ベーコンもカリカリに焼かれており、野菜との相性がよく、食が
進む。

「そういうえば、蓮君は好き嫌いしませんね」

そんなことをファリンさんに言われた。

「嫌いなものはありますよ。ただ、夕食とかに出てないだけで」

「そうなんですか？」

「はい。キノコ類が嫌いなんです」

特にナメコが駄目だ。あのヌルヌルした感触が嫌なのだ。

ナメコに対する苦手意識からかキノコ類全般が苦手になった。

「好き嫌いはいけませんよ。好き嫌いしていると大きくなれませんからね」

「そういわれても……嫌いなものは嫌いなんです」

「嫌いなのは分かりましたから……でも、少しくらいは食べてくださいいね」

うむを言わせぬような視線でノエルさんに見られる。

その視線に耐えきれずに俺は渋々頷いた。

「はい……分かりました。少しは食べます」

「いい子です」

俺のその言葉に満足げな返事が返ってきた。

お母さんかお姉ちゃんがいたらノエルさんのような感じなのだろうかと思ってしまう。

ファリンさんがお姉ちゃんだったら愉快そうではあるけどドジな姉がいるってことで有名になりそうだ。

だけど、家族ってこんな感じなのかなと思う。

心配してくれて、甘えさせてくれて、色々と見てくれる。

「あつ！ 蓮君が笑ってる！ 何で笑ってるのかな？」

ファリンさんが人懐っこい笑みを浮かべながら俺の頬を人差し指でつついてくる。

「ファリン、止めなさい。蓮君が困ってるわよ」

ノエルさんにたしなめられるとハイイ、と反省の色が無い返事をしながらファリンさんは俺の頬をつつくのを止めた。

俺はつつかれていた部分を手で擦る。

「……何するんですか？」

「いや、つい、イタズラ心が沸いちゃって」

アハハ、とファリンさんが笑う。

でも、怒りとかが沸くわけもなく溜め息を吐くに止まった。

「今度からは止めてくださいいね」

「うーん、善処します」

信じられない善処だ。

それでも、悪い気はしない。何故だろうか？ 分からない。
でも、悪い気がしないのだからそれでいいと思った。



お昼の時間が終わり俺は再び庭に出ている。

今度は本を部屋に置いたままにしているので手ぶらだ。

庭に落ちていた葉っぱの付いた枝を猫じゃらしに見立てて猫たちの前で左右に振る。

ニヤー、ニヤーと葉っぱの付いた枝を前足で弾く姿に何とも言えない幸福感に満たされる。これが癒しか……。

寝転がってやっているので猫たちの愛くるしい動きがよく分かる。

それに、寝転がっている俺の背には猫が数匹座っている。中にはここで寝ているのもいる。ただ、思うことはそこで洩らさないでほしいそれだけだ。

そんな理由でシャワーを使うとか間抜けぽくって嫌だから。

また、欠伸が出てきた。

今日は何だか眠い日だ。

いつの間にかまた、増えている猫たち。本当に何処から来ているのだろうか？

絶対に野良猫も混ざっていると思う。

でも、誰も気にした様子は無いのでそれでいいのだろう……多分。

俺がどうこう言うことじゃないし、癒されるので暴れないのであればいつでもどうぞな感じだ。

それに、周りにはいる猫が暖かいから掛け布団を被らなくても十分暖かい。

それじゃ、おやすみ。

俺は再び眠気に誘われて眠りの世界に落ちていった。

「……………んんんんん」

ムクリと起き上がり背筋を伸ばす。

どれくらい寝ていたのだろうか？ 太陽はまだ沈んでないから一時間から二時間程度だろうか……。

猫たちの数は寝る前とあんまり変わっていない……いや、子猫が増えていた。

でも、特に気にすることじゃないだろう。

沢山の猫がいるんだ子猫が十数匹いてもおかしくはない。いなかったらここにいる猫が全部オスもしくはメスのみということになる。

でも、そうなると毎年のように猫が増えていくことになる。そのうちに数が飽和してしまうんじゃないかと思う。

……そこはきつと忍さんたちが何とかするだろう。何て言っても飼い主なんだし。

……うーん……街に行こうかな。

散歩みたいな感じでブラブラと適当に気の向くままに、特に目的地を決めるわけでもなく、ただ歩くだけの散歩に……。

● ● ●

ノエルさんに散歩に行つてくると伝えてから家を出る。

途中まで猫たちのお見送りがあったのだがお土産か何かを期待されているのだろうか？

そうだったら悪いがお土産を買っていくつもりはない。財布は家に置いてきた。

今の俺は無一文だ。故にお土産などは買えはしない。

ぶらぶらと歩いていると海鳴市全体の地図を見つけた。

「……………へえ、ここからだと図書館が近いんだ」

地図を見ると近くに図書館があることが分かった。ちようどいい

機会だし行ってみようかな。

俺は地図で図書館に行くまでの道のりを確認してから図書館に向かって歩き出した。

図書館に行く途中で迷子になって時間を潰したくないので道のりはきちんと覚えている。

途中で車椅子に乗った少女とすれ違った。見た感じすずかと同年代だろう。

車椅子を動かしながらスーパーのレジ袋を器用に持っていた。

大変そうだなと思いつながら俺はその少女を見送った。下手に関わって厄介事に巻き込まれたくはない。

ただでさえジュエルシードの事と叔父の事が重なっているので手一杯なのだ。

だから、車椅子に乗った少女には悪いがすれ違うだけで無視させてもらった。

余裕があればまた違った結果だったのだろうがそうも言っていない。この考えは所詮もしもの考えであるからだ。

思考を切り替えて図書館について考えながら歩いていると図書館が見えてきた。

イメージしていた図書館よりも大きく立派だった。

館内は広く、多くの利用客がいる。

本も多く、ジャンルによって本の置いてある位置が違うため、ジャンル別に探すことが出来る。便利だ。

館内では静かにしている事がお約束のようなので静かに音を立てないように行動することを心がける。

張り紙にも館内はお静かにと書いてあるので尚更だ。

抜き足差し足で移動しながらどんな本があるのか見ていく。

「あ……これは」

すずかに借りたシャーロック・ホームズの本があった。二十四巻も……。

続編があると聞いていたがここまで多いとは思わなかった。

他にもオススメの本などを見たりと中々に充実した時間を過ごせ

そうだ。

映画化した作品を一冊手に取り空いている椅子に座って読み始める。

本の内容はSFもので吸血鬼が出てくる話だ。

半吸血鬼である俺が吸血鬼が出てくる話を読むというおかしな光景だが気にしないでおう。

この本に出てくる吸血鬼の設定はウイルスによる突然変異体でありそのウイルスが体内に入り込むことで吸血鬼となるというものであった。

なので当然、日の光も銀も弱点ではない。弱点の無い化物ほど怖いものは無いのだろう。

創作ではなく夜の一族の吸血鬼は伝承にあるような弱点は存在していない。

ただ、臭いに敏感なのは否定しない。俺自身がそうだからだ。それにしてもよく出来ている。

こういう設定は何処から生まれて来るのだろうか？ このひらめきこそが作家として大事なのだろう。

そのひらめきから話をどのように展開させて、どのように終わらせるか……そこまで考えてから書いているのではと思う。あらかじめ終わり方を決めておいてから執筆しているのだと。

考えたところで意味など無いだろうがつい考えてしまう。

うん。ヤメヤメ。ただの読者でいよう。今日は休みなんだから。

余計な事を考えずに楽しむことだけを考えよう。



「……中々面白かった」

SFものの吸血鬼が出る本を読み終わり、本をもとあった本棚に戻す。

意外と早く読み終わったので新しく何か読もうと思いい本を探す。短編集にするか長編にするかで迷う。

どちらも面白そうではあるが時間的にどちらか一つしか読めない。また、来ればいいだけの話なのだが明日からは叔父とジュールシードの搜索を再開する予定なので図書館には来れないだろう。

「うーん……」

こうして悩んでいる間にも刻一刻と時間は過ぎていく。つまり、読むための時間がどんどん短くなっていくと言っていることだ。

「……今回は短編集にしよう」

悩んだ末に俺は長編ではなく短編集を選んだ。

理由は長編ものより区切りよく読める短編集の方が時間的にいいと思ったからだ。それに、短編の方が沢山読めるというのも一つの理由である。

ミステリーからファンタジーまで色々と揃っている短編集なので今から読むのが楽しみだ。

今度は戦記ものを読んでみるのもいいかもしれない。色々なジャンルを読んでこそその読書だと思おうし。

まあ、今はこの短編集を読むことにしよう。

どんな話があるのだろうかとかとワクワクしながら俺は本を開いた。



「時間か……」

閉館時間まではまだあるが五時を過ぎたので読んでいた短編集を本棚に戻して図書館をあとにする。

「ん〜と……と、帰ろうか」

図書館から出ると両手を上にあげて伸びをした俺は体をほぐしながら家に向かって歩き出した。

「今日の夜は眠れなさそうだな」

昼間に寝てた上にあんまり動いてないから疲れていないのだ。

いっそのこと深夜になったら叔父を探し始めようかとすら考えてしまう。

さすがに叔父もその時間帯に動かないだろう。周りが寝静まった

時間は静かであり音が意外と響く。

まあ、そのときになつてから考えよう。

寝られるかもしれないし。ジュエルシードは夜探さない予定だしね。

夜だと見にくいから。

家に戻つてシャーロック・ホームズの続きを読むことにしよう。

まだ、半分ぐらいしか読んでなかったし、今日中には全部読めるはずだ。

「……………リフレッシュも出来たし明日からは頑張らないと」

開き直りでも何でもいいから頑張つて叔父を探さないと…………。

叔父に寄生されている人の生活のためにも…………。もし、負債を抱えさせられていたらどうしようという不安もある。

叔父に貢ぐために借金をしていたらと思うと…………今にでも探しに出たくなる。だが、叔父が何処に潜伏しているのか分からないので地道に探すほか無い。

せめて、何処かに手がかりがあればいいんだけど…………それも見当たらない。

叔父探しはすでに難航しているよ。

叔父は今頃何をしているだろうか？

それだけがえらく気にかかる。

第10話

あれから数日が経過したが……ジュエルシードは発動せずにいる。同時に叔父も見つからないまま時が過ぎていく。ジュエルシードに関しては動きがないのはその間は安全であると言うことなので一向に構わないのだが。

すずかの誘拐ミス以降まったく動きを見せない叔父の方がかえって不気味だ。

単なる杞憂でよければいいのだが……。何とも言えない不安が胸の内から込み上げてくる。

今日は休日であり、何でもなのはの父親が監督を勤める少年サッカーチームの試合があるそうだ。

「えっと……何で何の関わりもない俺が？」

「ほら、蓮君男の子だしサッカー好きかなって……」

動くのは好きだけど……サッカーとかやるような友達とかいなかったからルールとかよく分からないんだけど。

その事実苦笑するしかない。

「詳しいルールとか知らないし、関係無い人がいたらかえって迷惑じゃない？」

「そこら辺は大丈夫だと思うよ。なのはちゃんのお父さんは優しいし」

おおらかな人なのかな？

でも、叔父を探さないといけないし……うーん、どうしよう……。サッカーを見ながらでも臭いは探せるし……いいかな。

「どうせ参加するわけじゃないし見るだけなら……」

「なら、決まりだね」

すずかが笑いながら胸元で両手を合わせる。

すずかなりに気を使ってくれたのだろう。

叔父を探す以外では読書するぐらいしかすることの無い俺が退屈だからだろうと。

ありがたいことだ。ここに來てからは普段ならあり得ないことが

多くて戸惑いそうになる。

嬉しいことも戸惑うこともここには色々ある。それだけ氷村の家で俺は忌み嫌われていたのかを実感してしまうが……。

「そう言えば誰が来るの？」

「さすがに誘われはしたが誰が来るかは聞いていない。予想は出来るがあくまで予想なので訊いておいた方がいいだろう。訊いて損することはないし。」

「アリサちゃんとなのはちちゃんだよ」

「やっぱりその二人か。多分それ以外に来る人はサッカーチームの選手たちの父兄さんたちだろう。それ以外には考えられない。」

「そう。忍さんは行かないの？」

「お姉ちゃんは恭也さんとデートだって……恭也さんがなのはちちゃんのお兄さんね」

つまり、

「さすがの将来のお兄さんって事でもあるわけだね」

「そうだね」

クスクスと笑うすずか。

笑っていることからその恭也さんもいい人なのだろう。

いい人との出会いは貴重だ。誰もがみない人ではないのだから。

異端の中の異端は……。

ううん。これは考えることじゃない……どうせどうにもならないことだしさ。

「いつ頃から始まるの？」

「えつと……お昼近くになってからかな。試合が終わってからお昼を食べるみたいだから」

「そうなんだ。でも、動いた後だから相当お腹がすくんじやない？」

「お腹が減る時間に動くんだ確実にお腹が減る。これは確実にだ。」

「そうかも」

「やっぱりそうか。」

「ならお弁当を作ってる人たちは大変だろうね」

「そうだね」

俺の発言にすずかは頷く。すずかもそう思ってたか。それからサッカーに関してすずかが知っていることを教えてもらうことになった。

● ● ●

サッカーの試合をするであろう河川敷にすずかの少し後ろを歩きながら来る。

「あ！ アリサちゃん、なのはちゃん」
すずかがそう言いながら手を振る。

その方向にはアリサとなのは、ユーノがいた。どうやらユーノは連れてこられたようだ。

「ん、来たわね、すずか。それと、蓮も久しぶり」

「おはよう、すずかちゃん！ 一緒に来てる人は？ アリサちゃんは知ってるみたいだけど……」

なのはが俺のことを知っているアリサに視線を向けた。

「久しぶり、アリサ。それと初めまして、すずかの遠縁に当たる氷村蓮です。よろしく」

俺はアリサに久しぶりと返事をしてからなのはに挨拶をする。

「私は高町なのはです。なのはって呼んでね。私も蓮君って呼ぶから」

「分かった」

なのはの言葉に頷く。

ユーノはフェレットのふりをしているのかおとなしくしている。

俺にとっては今さらなのだがまあ、好きなようにさせておく。

「元気だった？」

「それなりにね。アリサは……聞くまでもなさそうだね」

「分かっているじゃない」

自信ありげに答えるアリサ。さすがとしか言い様がない。

「ところでなのはのお父さんが監督をやってるって聞いたんだけど……」

「そうよ。ほら、あそこにいるわよ」

アリサが指差す方には翠屋の店員さんがいた。

あの人だったのか。

「見つけた？」

俺はその言葉に頷く。

「うん。前に会ったことがるからすぐに分かったよ。あの人だったんだ」

「ん？ 蓮君はお父さんと会ったことがあるの？」

「うん。翠屋に入ったときにね」

また、食べに行くって言ったから近いうちに行こうかな。

「そうだったんだ」

「うん。ブルーベリータルトは美味しかった」

あのブルーベリータルトは本当に美味しかった……。また食べた
いと思うほどに。

「あのお店のオススメはシュークリームよ」

「それはお土産に買っていった」

「それは当たり前ね」

当たり前だったのか……。知らなかった。

「もう……。蓮君が本気してるよ」

「すずか……。あのシュークリームは本気していいものよ」

そこまで絶賛するほどなのか。

期待した目でなのはを見るとなのは困ったように笑う。

「あはは、誉めてもらえるのは嬉しいけどさすがに恥ずかしいの」
娘からした恥ずかしいのか……。

「話もいいけど……。そろそろ試合が始まるよ」

すずかがそう言った。

フィールドの方を見るとすでに選手たちがそれぞれのポジション
に着いている。

「本当だ。今日戦うチームって何処のチームなの？」

三人のうち誰かが答えてくれるだろうと思いながら訊いてみた。

「えーと……。確か……」

「隣町のチームよ」

なのはが答えようとしてくれたがアリサが答えてくれた。

先に答えを言われたことでシヨボンとしているなのはをさすが慰めている。

「隣町か……地元ของทีม同士の対戦じゃないんだね」

「本当は地元のチーム同士でやるはずだったんだけど……相手方の監督が今日これないから隣町のチームと対戦することになったのよ」なるほど。そんな理由があったんだ。

「アリサはよく知ってたね」

「すずかたちを待っている間になのはのお父さんに訊いたのよ。今日対戦するチームは何処ですかって」

だから知ってたのね。まあ、それもそうか監督に訊けば分かることだしね。

ピイイイイツ!!

突然、笛の音があった。

「始まったわね」

どうやらさっきの笛の音はサッカーの試合開始の合図だったようだ。



「白熱した試合だったね」

「うん。あれは確かに白熱してた」

サッカーの試合は一進一退の攻防を見せ、どちらかが一方的に進める試合よりも見ていて楽しかった。

どちらが勝ってもおかしくはない試合だったから最後まで飽きることなく見る事が出来た。

サッカーの試合が終わるとそこで解散したのだ。アリサはこれから塾らしい。そして、なのははユーノを連れてジュエルシードを探しに行ったのだと思う。

試合が終わってからサッカー選手の一人を見つめていたことから

その選手がジュエルシードらしきものを持っていたのだろう。多分、彼を追っているのだ。

「いつもあんな感じの試合になるの?」

「ううん。あそこまで白熱したのは始めてみたよ」

なるほど……希に見る試合よりもだったんだ。

それはいいものを見た。

すずかと一緒に家に向かって歩いてしていると突如地面が揺れた。

「っ! 地震!？」

「キャッ! な、何?! 地震!」

その揺れはとても大きくてその場に立っていられないほどだった。地面に四つん這いの体勢になる俺とすずか。

そして、すずかが啞然とした様子で呟いた。

「あれは……何?」

すずかの視線の先には大きな木が生えていた。

……あれがジュエルシードの力……。

「すずか! とりあえず家の方に逃げるよ!」

俺は呆然としているすずかの手を引っ張り走り出す。

この前の巨大化した犬が本当に可愛く見えるくらいだ。

ボコボコと地面が割れて中から巨大な根っこが飛び出してくる。

もうなんでもありか! ジュエルシードに対しての認識を変える必要がある。

「……やるしかないか」

「やるって……無理だよ! あんなに大きいの」

「……いや、だつてさ……周りを囲まれてるし」

そうなのだ。前後左右に木の根があり通れないのだ。

「でも、危ないよ!」

「あんまり……やりたくないけどさ……今、やらなくていつやるのって力だから」

「……蓮、君」

俺は木の根を掴む。そして、異能の力を使う。

俺が触れている場所から木の根がボコボコと内側から膨れ上がり

爆散した。

これは俺が使える異能の一つである分子運動をコントロールする力である。

やろうと思えば手だけで物を温めることすら出来る。人に使えば身体中の水分を蒸発させることすら可能だ。その前に爆発するか死んでしまうが……。

バイロキネシス
発火能力ならまだしもこっちの分子運動をコントロールする力は使いたくなかったんだよね。

触れるだけで相手を殺せるような相手を誰が触りたがるだろうか……。

「……行こう」

口では言うが手は伸ばさない。

この手は触れたもの簡単に壊すことが出来るから……。

「……うん」

コクリと頷くわずか。

嫌われたかな？ でも、しょうがないよね。触れるだけで相手を殺せる力があるんだから。

俺は行く手を遮る木の根を破壊して道を作りながら走る。その後ろをすずかが駆ける。

地面から次々と飛び出してくる木の根が邪魔でしようがない。

「……アリサちゃんは大丈夫かな」

「分からない。だけどアリサが通ってる塾まで木の根が来てないなら無事だと思う」

「……そうだよね」

それだけ言うとすずかは俯く。

今は家まで戻ることが優先だ。アリサの安否確認は家に戻ってからも出来る。

幸いなことに今日は分子運動をコントロールする力以外の異能は使っていないからまだ余裕がある。ある程度の距離まで来たら大型動物に変身してすずかを運ぶ。

その方が早く家に着く。

どれくらい走っただろうか木の根が生えてきていない場所まで来ることが出来た。

「はあ……はあ……すずか」

「はあ……はあ……何、蓮君」

「ちよつとごめんね」

俺は三メートルほどの大きさの狼の姿に変身するとすずかを背に乗せる。

「キヤツ！ え、ええ……蓮君なの?!」

俺はコクリと頷く。

「落ちないように掴まってて」

「う、うん」

すずかがぎゅつと毛を掴んだので全速力で家に向かって駆ける。

夜の一族であるすずかを乗せているからこそ全速力で走っているがこれが夜の一族でなければ全力で走るなんて出来はしない。

背に乗った人が飛ばされてしまうからだ。



「すずかお嬢様!? ご無事で！ 怪我はないですか?」

家の前に着くとノエルさんが駆け寄ってきた。

「うん。……蓮君が守ってくれたから」

「えっと……蓮君であってますか?」

ファリンさんが恐る恐る話しかけてきた。

ちよつと今は息切れしてて答えられないので頷いて、人の姿に戻る。

するとノエルさんが近づいてくる。

「すずかお嬢様を守ってくれてありがとうございます。蓮君は何処も怪我してないですか?」

「……大丈夫です。でも、血が欲しいです……」

渇く……喉が渇く。血を飲ませろと……本能が囁いてくる。

「少しの間我慢できますか」

喋るのも億劫なので頷くだけに止める。

「……大丈夫？」

さすが心配そうに訊いてくる。

それに対して頷くだけで答える。少し無理をした。

身の丈を越える変身をしたツケが回ってきたのだ。自分の質量より大きいものには変身するには膨大なエネルギーを使う。

普段の変身に使うエネルギーを十とするとその倍の二十だ。当然、変身を維持するためのエネルギーの消費量も上がっている。

「お待たせしました。どうぞ」

ノエルさんが持ってきた血の入ったパックを一気に飲み干す。一つだけでは足らずに二つ、三つと飲み干す。

「……ゴク、ゴク……ふう、治まった」

「いや、いい飲みっぷりですね蓮君」

ファリンさんが茶化すように言ってくる。

「吸血衝動を我慢するのって結構辛いんですよ……」

半吸血鬼だから純血の吸血鬼よりも吸血衝動に耐えられるがそれでも辛いものは辛い。

「忍様が恭也様と一緒に急いで戻ってくると仰ってましたので屋敷の中に入って休みましょう」

「そうですね！ お姉ちゃん、私はお茶の用意をしておきますね」

そう言うとファリンさんは家の中に駆けていった。

「さあ、私たちも」

ノエルさんの後に続いて俺とさすがは家の中に入ってしまった。

今回の件でジュエルシードの危険性が浮き彫りになった。忍さんはジュエルシードについてどうするつもりなのだろうか？

それはこのあと分かるかな。急いで戻って来るみたいだし。

第11話

結局、忍さんが家に着いたのは夜になってからだだった。

一緒にいる男の人が恋人の恭也さんなのだろう。監督さんにそっくりだ。

「さすが……怪我はしてないわね？」

ペタペタとすすずかの体を触る忍さん。それに対してくすぐったそうに身をよじるすすずか。

「ちよっ、くすぐりたいよ！ お姉ちゃん。大丈夫、怪我はないよ」

本当にくすぐったそうだ。その証拠にすすずかの顔がにやけてる。

「……そう、よかった。安心したわ」

ホッと息を吐く忍さん。よっほど心配だったのだろう。

空いた窓から風が入ってくる。

「……………この臭いは」

部屋の中に吹き込んで来た風の中に叔父の臭いが混ざっている。

このタイミングで来るとは……。

いや、このタイミングだからこそかな。

周囲が昼間の件で騒がしい時だからこの混乱に乗じてきたのだろう。

「どうしたの蓮君？」

「招かねざる客人が来たんだよ」

俺はそう答えた。

そして、部屋の中にいる全員に聞こえるように言った。

「叔父が来ました」



「一体何の用かしらっ？」

庭で叔父と忍さんが睨み合う。

叔父の傍には五体の自動人形が控えている。どれも叔父が持ち出した奴だ。

「決まってるだろ？ 金だよ金」

「あなたにやる金なんて一円もないわ」

叔父のやっていることが完全に犯罪であることに頭を抱えたい気分になる。

「叔父さん……本家の人たちがちゃんと真面目に働けと言ってます」

「ああっ！ 誰だ……って氷村の化物じゃねえか!? 何でてめえがいやがる！」

化物か……はあ……。

「本家から叔父さんにちゃんと働くように言っただけだよ」

「ふざけるな！ そんなガキの使いのような感じでポンポンとお前よ
うな化物を送られてたまるか！」

そうなるような事態を引き起こしたのは叔父さん自身なので俺の
せいではない。

「……さつきから蓮君のことを化物、化物って連呼してるけど何なの
？ 頭は大丈夫？」

結構辛辣な言葉を叔父に投げかける忍さん。

その言葉にムカついたのか叔父が忍さんを殺気だった目で睨む。

すかさず恭也さんが忍さんをかばうように前に出る。その両手に
は二刀の小太刀が握られていた。

「何だ知らないのか？ そのガキが氷村の家で何て呼ばれているのか
？ いいぜ、教えてやるよ」

やっぱりこう言う展開になったか……。どうせ止められない。調
べればすぐに分かる事だから。

叔父が意気揚々と話し出した。

「あのガキは『同族喰らい』で『親殺し』の化物だよ！ 美味しかった
か？ ええ！ 自分の父親の血はよう？」

そう、それが氷村の家で俺が化物扱いされる理由。

もう、ここには居られない。知られたから……。きつと皆、不安にな
る。だから、俺は出ていかない。

「……本当なの蓮君？」

さすがが小さな声でそう訪ねてくる。

それに対して俺は頷く。

「本当の事だよ。俺は同族すら喰らう化物だよ。幾多の同胞を喰らい自分の父親すら喰らったね」

そうそれが俺なのだ。

周りの視線が俺に集まっている。その視線は侮蔑の視線なのかそうじゃないのかも分からない。

俺は体を霧に変えて叔父の傍にいる自動人形の傍で人型に戻ると自動人形に触れて自動人形の中枢回路を破壊する。

「何をしゃがるこのガキ！」

殴りつけてくる叔父の拳を霧に変化することで回避する。

「叔父さん……さようなら」

俺は叔父が懐にしまいこんでいたスタンガンを取り出してそれで叔父を気絶させた。

スタンガンを地面に投げ捨てる俺は忍さんたちの方を向く。

「お世話になりました。氷村の化物は出ていきますね。叔父は警察につき出してください」

ちやんと笑えていただろうか？ 分からない。

俺は何も言われる前に体を霧に変化させてこの場から去っていった。



遡ること四年。

あの日のことは今でも鮮明に思い出せる。

誘拐され、そこで洗脳されて俺は俺が持つ本来の異能の力を知った。

洗脳された俺は俺を助けに来た人たちの血を飲んで干からびさせた。そして、その人たちが持っていた異能の力を使うようになったのだ。

そう、俺の力は元は一つのみ。血を飲んだ相手の異能を自分のモノにすることであった。

だからこそ半吸血鬼でありながら純血の吸血鬼と同等の変身が出来るのだ。お父さんの血を飲んだから。

同族を喰らい喰らった同族の力を自分のモノにする力。だからこそ悪魔公ドラッセルと呼ばれる。

俺を止めようとした人たちは皆、分子運動をコントロールする力の前になすすべなくやられていった。

俺を洗脳した本人も例外ではない。吸血衝動に支配された俺はその場にいた俺以外の存在の血をすべてを飲んだ。一人の例外もなく。そして、俺が正気を取り戻したのはお父さんの血を飲んだ後だった。

その日から俺は氷村の家での居場所を無くした。

自業自得だろう。洗脳されていたとはいえ父親を助けに来てくれた人たちを殺してしまったのだから。

誰だって危険な存在には近づきたくないだろう。誰だっていつ襲われるかもしれない場所で安心して眠れないのと同じように……。

それでも……一人は嫌だな。愛してとは言わないから……誰か一緒にいることを許して欲しい。

「……役目も終わった」

そう、役目は終わった。

ほんの僅かであったが月村家で過ごした時間は本当に大切な時間だった。

いずれこうなっていたことが早まっただけ。同じ夜の一族なのでから情報を得ようとすれば必ず俺のことにたどり着ける。

それでも……、

「もう少しいたかったな……」

もう二度と訪れないかもしれない時だったから。

同族喰らいの化物じゃなくて氷村蓮として見てくれる人たちと過ごす時間は……。



「……未練がましくも中々ここから離れられないなんて」

一夜経ったが俺は未だに海鳴市にいる。その事実苦笑しか出てこない。

ジュエルシードの一件で交通の一部が未だに麻痺している。

トボトボとジュエルシードが発動したであろう現場の近くを歩く。

入れない場所は仕方がないので迂回して歩く。そうして出た場所は海であった。

そのまま浜辺に座り込んで寄せては返す波を見つめる。

にや〜と間延びした鳴き声が聞こえてきた。その方向に視線を向けると子猫がいた。

「親は一緒じゃないの？」

そう問いかけるも気にした様子はなく子猫が擦り寄ってきた。

今は食べ物を持っていないのであげることは出来ない。

擦り寄ってきた子猫を撫でる。

少なくとも一人ではなくなった。一人と一匹になった。

そのお陰か寂しさが少しだけ紛れた。

「ありがとね」

相変わらずじゃれてくるだけで何も言わない子猫だけど一緒にいてくれる。それだけで十分だ。

「ここにいたんですね……蓮君」

聞き慣れた声で名前を呼ばれた。

その声の方に向くとノエルさんがいた。メイド服以外の服を着ているのは始めてみた。

「もう少ししたらここからいなくなります。だから、俺のことは気にしないでいいですよ」

そう、もう少ししたら俺は海鳴市から出ていくつもりだ。

「……蓮君。前に私が言ったことを覚えてますか？ もう少し甘えてもいいと言ったことを」

覚えてる……ちゃんと覚えてる。

「はい、覚えてます」

「蓮君。蓮君のことはさすがお嬢様以外は知ってたんですよ。氷村の

家でのことも含めて」

「え……う？」

信じられない言葉を聞いた。知っていた……俺のことを？　じゃあ、何で追い出さなかったのだろう？

「すべて知った上で忍様は蓮君を家に置くことにしたんですよ」

「な、何で……知ってたなら何で……」

「噂通りの子に見えなかったからだそうです」

それだけで……それだけの理由で……俺を受け入れてくれたの？

「蓮君……蓮君が望むなら月村家で暮らしてもいいんですよ？　すずかお嬢様は蓮君のことを恐がってはいませんし、むしろ心配してましたよ」

「でも、俺は悪魔公^{ドラッセル}だから……同族の血を飲む化物だからッ！」

そう、認めたくないけど……俺は渇くと人を血の詰まった餌に見ちやう化物。

「仕方のない子ですね」

「え？」

ノエルさんに抱き締められた。

「私たちはちゃんとここで過ごしている蓮君の姿を知ってますよ。だから、怖がらなくていいんです。ここにあなたを苛める人も傷つける人もいませんから」

「迷惑かけるかもしれないのに」

「子ども何ですから気にしなくていいんですよ。駄目な事だったらちゃんと叱りますから」

背中をポンポンと撫でられる。

本当に俺を受け入れてくれるの？　化物と呼ばれて忌み嫌われる俺のことを……。

「大丈夫だから。私たちは蓮君のを受け入れますよ。最初から蓮君のことを知った上で家に置いていたのですから」

本当にそうなのだろうか……どうしても騙してるんじゃないかと疑念が拭いられない。

「……っ、ごめんなさい」

俺は体を霧に変えてこの場から逃げ出した。

受け入れて欲しいと願いながらも実際に受け入れてくれると言われて恐くなった。どうしても疑念が拭いられない。

嬉しかったけど……それを素直に受け入れられない。

だから、逃げ出した。

一人でいたくないと願いながらも一人でいることを自分で選んでしまった。受け入れようとしてくれたのに……。



「……はあ……逃げちゃった」

重苦しい溜め息が漏れる。

ひたすらに走り続けて今は街のとり潰し予定の廃ビルの中で膝の上に顎を乗せてうずくまっている。

嬉しかったけど……恐かった。受け入れられても後から拒絶されるのが恐かった。受け入れられる前に拒絶されたのならまだ耐えられるけど……受け入れられてから拒絶されたら耐えられる自信が無い。人が信じられなくなる。

「……臆病なだけなのかな？」

拒絶されることを恐れて一步前に踏み出せない。

不老長寿で長く生きる夜の一族に孤独はつきものだ。辛くても耐えればいい。

自殺なんて選択肢は無い。そうしたら俺が喰らった同族の人たちに謝ることすら出来ない。死ぬまで生きる……。

死後の世界が本当にあるのなら俺が喰らった同族の人たちに会うために自殺は出来ない。

本当は何度か死のうとしたんだけどね……。でも、死ねなかった。体が防衛反応を起こして死から遠ざけたからだ。

使えるようになった異能が勝手に発動して俺を生かした。

「……血の補給もしなくちゃな」

遅かれ早かれ吸血衝動が現れるはずだ。

あまり異能の力は使えない。血を補給する手段が一般人の人を襲って血を補給するしかないから。

そんなことはしたくないけど……いざとなったらやらないと無差別に襲いそうだから、本当にいざというときのための手段だ。

コツ……コツ……と廃ビルの中に足音が響く。

こんな場所に誰が来たのだろうか？ 普通、廃ビルの中に入る人なんていないはずだ。

足音がだんだんと近づいてくる。

そして足音が止まると廃ビルの中に入ってきた人の声が聞こえてきた。

「ここであつてるの？」

「にゃ〜」

聞こえてきたのはすずかと猫の鳴き声。

「……何で……この場所が」

思わずそんな声が俺の口から漏れ出した。

そのまま固まっていると浜辺に座り込んでいたときにじやれてきた子猫が現れて俺の前にトコトコと歩いてきた。

「本当にいたー！」

子猫の後からすずかが現れる。しかも、口許を片手で押さえて信じられないといった様子でだが……。

おそらく子猫が俺の居場所を突き止めたことに対してだろう。聞こえてきた声からも半信半疑で子猫のことを疑っていたようだから。

本当に俺がここにいいのかと言う意味で……。

「……皆、蓮君のことを心配してたんだよ」

「そうなんだ」

すずかが一歩一歩俺に近づいてくる。俺は逆に一歩一歩後退する。

「そうだよ。あの後、お姉ちゃんに蓮君のことを教えてもらったんだよ」

「……うん。だったら何で……近づいてくるの？」

「そうしないと蓮君がノエルさんの時みたいに逃げそうだからかな。それに何処かに消えそうだから……」

壁に背中がつく。もう、後退出来ない。

「……近づかないでっ！」

「大丈夫だよ」

そう言いながらすすかが俺に手を伸ばしてくる。

「……っ!?!」

それに対して俺は自分の周囲を炎の壁で囲んで拒絶した。

ビクツとすすかの手が炎の壁の前で止まる。だが、すすかは意を決したような表情をすると炎の壁に手を入れてきた。

「熱っ！」

何で……何で手を入れるの？ そんなつもりじゃなかったのに

……!

急いで炎の壁を消してすすかの手を取る。

「どうして！ 何で手を入れたのっ！」

そう叫ばずにはいられなかった。

「……そうしないと蓮君はまた逃げたでしょ？」

「だからって……わざわざ怪我なんかする必要は無かったのに」

火傷を負ったすすかの手を両手で包む。

「そうかもしれないね」

「だったら……」

そつとすすかの手が俺の手に重ねられる。

「でも、私は後悔してないよ。だからさ信じて……」

「……」

「会ってまだ一週間も経ってないから信じてもらえないかもしれないけど……昨日、私を助けてくれたのは蓮君だよ」

「だって……それは……」

「化物じゃないよ。蓮君は化物なんかじゃない……蓮君は蓮君だよ」

……化物じゃなくて俺は俺？ 化物じゃなくて蓮でいいの？

そんな俺の不安を感じとったのかすすかに頭を抱きしめられる。

「大丈夫……大丈夫だから。恐がらないで」

信じてもいいのかな？ 受け入れてくれるって信じても……。

「……信じてもいいの？」

「うん、信じて。蓮君は一人じゃないよ」

一人じゃない……。

「……ありがとう。ありがとう、受け入れてくれて……」

「……うん」

この日……初めて嬉し涙を流した。

第12話

あの後、すずかと子猫と一緒に月村の屋敷まで戻ってきた。

すべてを知った上で一緒にいてくれると改めて言われて泣きそうになった。嬉しかった……すべてを知った上で一緒にいてくれるのが。望んでいたけどありえないと諦めていたことだから。

だから、本当に嬉しかった。

この人たちのためなら死んでもいいくらいに……。

「……痛くない？」

「大丈夫だよ。本当に大丈夫だから気にしないで」

すずかは笑顔でそう言うが……俺はどうも疑ってしまう。本当は痛いのを我慢しているんじゃないかと。

すずかの左手には包帯が巻かれている。

俺が作り出した炎の壁に手を入れて火傷をしたのだからどうしても気になってしまう。

すずかが火傷をした原因を作ったのは俺だから……。

「蓮君もあまり気にしなくていいですよ。これはすずかお嬢様自業自得ですから」

ノエルさんはそう言うが……俺はどうしても気になってしまう。

「でも……元はと言えば俺が……」

「何か……すごくくなつかれてるわね、すずか。何だか蓮君がなつくまでは大変だけどなつくど忠犬のようになる猫みたいよ」

「あはは……確かにそうかも」

猫？ 俺は猫なのだろうか？ これは猫に変身しろと言うことなのか？ なら、期待に応えないと！

俺は猫の姿に変身する。モデルは三毛猫だ。

「……何で猫になってるの？」

「猫になれてことじゃなかったの？」

そうじゃなかったの？

「アハハハハハハ！ 蓮君が変な勘違いしてるわ！」

忍さんが笑い出した。そんなにこの猫の姿はおかしいのだろうか

? 変身に関して自信を失いそうだ。

「……確かに。でも、可愛いよ」

「そうね。可愛い勘違いだわ」

勘違い? 俺は何を勘違いしたんだ?

「……ねえ、肉球を触ってもいい?」

「? いいよ。肉球くらい」

「わあ……ちゃんとプニプニしてる!」

変身するんだからそこら辺もちゃんと再現済みなのだ!

何か手をマッサージされているような感じだ。

壊れ物を扱うかのように丁寧に扱われているので少しばかりくすぐりたい。

「さすがが望むなら家の中ではずっと猫の姿でいるよ?」

「本当!」

「うん。この姿でも本とか読めるし」

爪を立てないようしなくてはならないけどね。それ以外は問題ないし。

「うくん……でも、疲れるんじゃない?」

「疲れはするけど……本来の姿より小さい猫の姿だからあんまり問題はないよ」

「じゃあ……私がお願した時でもいい?」

「勿論!」

俺が断るわけがない! これが忍さんやノエルさん、ファリンさんでも同様だ。

「……本当に忠犬みたいになってますね」

「ええ、宗教とかにはまったら大変なことになってたわね」

「何故でしょう? 猫の姿なのに犬が尻尾をブンブン振っている姿が幻視出来ます」

そんな会話をノエルさんと忍さん、ファリンさんでしていたのを俺は知らない。



「ところで蓮君。実は蓮君に言っておかなきやならないことがあるの」

「何ですか？」

言っておかなきやならないことは一体？

「でも、話す前に人の姿に戻ってくれないかしら」

「はい」

「ああ……」

人の姿に戻った瞬間にすずかから残念そうな声が上がった。

後でまた猫の姿になるから今は我慢して。

「ゴホン……話すわね」

「はい」

「……蓮君は氷村家から……ただで貰いました」

「はい？」

貰いましたか？ 氷村家から？ ……人身売買!? しかもただ！

「ただで売られたんですね……」

「違うわよ！ ええつとね……蓮君のことをすべてを知った上で引き取りたいって言ったなら、どうぞと即答されたのよ」

即答……やつぱり、忌み嫌われてるから当然だよな。

「……お姉ちゃん。もつとオブラート包んだ言い方じゃないと蓮君は意外とメンタルが弱いんだよ！」

すずか……気を使ってくれるのは嬉しいけどメンタルが弱いのは言わないで！ いくら本当のことでも……。

「すずか……すずかの方が蓮君にダメージを与えてるわよ」

「え？ ……ご、ごめんね蓮君」

「ううん……本当の事だからしょうがないよ」

だから、気にしないですずか。

「……えつと、話を続けても？」

「……はい」

「それでね……蓮君は晴れて氷村家のものじゃなくなったんだけど」
「そうですよね。氷村家から売られたんですから……。」

「だから、学校に行ってもらいます」

「はい？ あの、何でその流れに？」

俺が氷村家から月村家にただで貰われた話だったはずでは……。

「いや、だってねえ……義務教育を受けさせないなんて法律が許してくれないのよ」

「お金はどうするんです？」

「ああ、それなら蓮君との手切れ金で貰ったわよ！」

お金を払ってまで俺を遠ざけたかったんだ。

「……氷村はお金を払ってまで俺を遠ざけたかったですね」

……自分でも予想以上に忌み嫌われてる事実には涙が出てきた。

「忍様……すずかお嬢様の言う通りです。もっと言葉に気をつけてください」

ノエルさんに慰められる。

やっぱり……ノエルさんは優しい。ファリンさんはどっちかって言うといつドジるか分からないからちよつと怖い。

「……俺は何て名乗ればいいんですか？ 氷村じゃなかったら……蓮だけですか？」

氷村家からお金を払ってまでして売られたのだからもう氷村を名乗ることは無いだろう。

「月村でもいいわよ？」

忍さんがそう提案してくる。悪い案じゃないけど……元々氷村だったからちよつと抵抗がある。

「……ノエルさん」

「何ですか？」

「……お、お母さんって呼んでいいですか？」

言っちゃった……言っちゃったよ俺！ 恥ずかしいけど言っちゃった。

ドキドキしながらノエルさんの返事を待つ。

「……お、お母さんって……プツ！」

忍さんが口許を片手で押さえて必死に笑いを堪えている。

「……れ、蓮君。何でお母さん何ですか？ お姉さんとかお姉ちゃん

「じゃなくて」

「あ、甘えてもいいって言うてくれたから……その、駄目ですか？」
「やっぱり駄目なのだろうか？ 化物の母は嫌だよね……。」

「せめてお姉ちゃんをお願いします。お母さんはちよつと……。」

お母さんは駄目だったけどお姉ちゃんが出来た。その事に心がパ
アアアと明るくなる。

「お、お姉ちゃん！」

「はい、何ですか？」

「ちゃんと返事が返ってきた。」

「お姉ちゃん！」

ガバツとお姉ちゃんに抱きつくとそのまま頬擦りしだす。

「あらあら……すつごい甘えん坊ですね」

お姉ちゃんが困ったような声でそう言うが嫌がっていないのでそ
のままスリスリする。

「ノエルもすずか並みになつかれてるわね」

「ええ、私もビックリです。てつきりファリンの方がなつかれている
と思っただけなので」

「ファリンさんよりお姉ちゃんの方がいい。だってファリンさんはい
つドジするか分からないから怖い。前みたいにナイフが飛んできた
ら嫌だ」

その点、お姉ちゃんはそんなドジをしないし、甘えてもいいって
言うてくれたから好き。

「ガーン!! 怖いだなんて……そんな……」

「ごめんね、ファリンさん。私もナイフが飛んできたら怖いかな」

「すずかお嬢様まで！」

ヨヨヨと崩れ落ちるファリンさん。そんな真似しても事実が変わ
らない。

「お姉ちゃん」

「何ですか？」

「この前、忍さんの部屋に入ったときに派手な格好をした女の人が鞭
と火の点いた蠟燭を持っている写真を見つけたんだけど……あれっ

「何ですか？」

するとお姉ちゃんが真剣な表情で俺の両肩に手を置いた。

「それは……絶対に真似しちゃいけないことですからね。やってはいけませんよ？ お姉ちゃんとの約束です」

「うん、分かった。絶対にしない！」

「はい、いい子です」

えへへ、頭を撫でられた。

「……忍様、後でお話が……」

「え、ええ……分かったわ」

冷や汗を一筋流す忍さんの姿があった。どうしたんだろうか？

首を傾げているとさすが俺にそつと教えてくれた。

「ノエルさんがお姉ちゃんにお説教きするみたい」

「そうなの？」

「うん、たまにお姉ちゃんわけの分からない本を買ってくるから」

「お金の無駄遣いだからかな？」

無駄遣いはいけないと思う。

「どうなんだろう？ でも、お説教されるくらいだからかなり高額なのかも」

「なるほど」

高額ならちよつとやそつとの無駄遣いじゃ済まないしね。お説教も仕方がないか。

俺は怒られたくないから絶対に無駄遣いはしないぞ！ と心に決めた。どうせなら誉められたいし。

「何か蓮君キャラが変わったね」

「……多分、それは嬉しいことがあったからだよ」

月村家の皆が受け入れてくれたから。さすがが身を呈してまで引き止めてくれたから。

「だから、ありがとう。今こうしていられるのはさすがのお陰だよ」

「ふふ、どういたしまして……後はこの子のだね」

さすがが笑顔で子猫を指差す。俺がいた場所までさすがを導いた子猫を。

「うん、『リリン』のお陰でもあるね」

あの子猫にはさすがの許可を貰って名前を着けた。『リリン』と言う名前を……。

「そう言えば学校はどこになるんだろうね？」

「そうだね。すっかり忘れてたよ」

「私立なのかな？ これとも公立かな？」

「どっちでもいいんじゃないの？ 始まる時間は何処も変わらないだろうし」

「でも、授業の内容は違うみたいだよ」

「そうなの？」

学校に通ったことがないのでよく分からないがさすがは私立と公立では授業の内容が違うと言う。どれほど違うのだろうか？

「えつとね……教材が違うのとか色々あるらしいよ。私もよく分からないけど」

「そうなんだ」

「うん。蓮君は勉強はどうやってたの？」

「夜の一族とは関係ない家庭教師を雇ってその人に教えてもらったよ」

ただ、家庭教師の人はコロコロ変わってたけどね。



夕食はカレーだった。初めてカレーと言うものを食べたがあんなに美味しいものがあるとは思わなかった。でも、とても辛かった。今も若干舌がヒリヒリする。

「それで、夕食を食べる前に言ってた蓮君の学校に関する事なんだけど」

「はい、そんな話もありましたね」

「ここから、他人事じゃないんだからちゃんと聞きなさい」

「はい」

少しだけ苦笑いしながら注意してくる忍さんにちよつとだけ笑い

ながら返事をした。

「まあ、ちゃんと聞いてね。行くのはさすがに通ってる私立聖祥大付属よ。最近は物騒だからなるべく一緒に行動して欲しくてね」

物騒とはジュエルシードのことしかかないな。それ以外には考えられない。叔父は今頃警察署だろうし。

「はあ、それはいいんですけど……俺は氷村の名前を使わない方がいいですよ。お金を払ってまで厄介払いされたんですし」

「……ほら、そこは問題ないわよ。何て言っただってノエルがいるし」「お姉ちゃんが？」

お姉ちゃんとは何が関係しているのだろうか？ 皆目検討もつかない。なので忍さんが話を待たせよう。

「そうよ！ 明日からは氷村蓮じゃなくて蓮・K・エアリヒカイトって名乗ればいいのよ」

「……蓮・K・エアリヒカイト」

お姉ちゃんと同じK・エアリヒカイト……。

「……ずいぶんと嬉しそうね」

「はい！ そりゃあ勿論！」

お姉ちゃんと同じ名前だもん……嬉しいに決まってる。

「それはよかった。ノエルも喜ぶわ」

「それで明日からって私立だから入学テストとか制服とかあるんじゃないですか？」

「そこは魔眼による暗示で一発解決よ！」

ウインクしながら言われてもコメントに困るんですけど……。

そんな俺の様子を見た忍さんが取り繕うように言う。

「勿論、ちゃんとテストとかは受けてもらおうし制服はもう取り寄せてあるから……テストの結果に関わらず入れることにはなってるけど」

「思いつきり裏から手を回しますね」

「だってそうした方が楽なんだし」

「……そのうちに捕まりますよ？ 叔父みたいに」

洗脳とかは犯罪なので止めて欲しい。

「私だって捕まるのは嫌よ。でも、今はジュエルシードのことがある

からあんまり手段を選んでられないのよね。純血種だから私とすずかは再生能力も高いけど戦闘となると話は別なのよ。私もすずかも頭脳系だから他の純血種よりも力も弱いし。だから蓮君にはすずかを守って欲しいのよ」

「言われるまでもないですよ。すずかは恩人ですから……俺の正体を知っても受け入れてくれた」

逃げ出そうとした俺の手を掴み上げてくれた恩人。

お姉ちゃんと同じように俺を見つけてくれた。だから、こそすずかの安全だけは確保する。

誰にも必要とされずに忌み嫌われ続けるだけだと諦めていた俺を救い出してくれたのだからそれぐらいはしないと。

「……ありがとね、蓮君。でも、蓮君も怪我はしないでね」

「はい。お姉ちゃんに心配はかけたくないから極力回避します」

別に戦うことがすべてじゃない。いざとなったら逃げればいいんだしね。

半吸血鬼の身でありながら純血の吸血鬼を生まれ持った異能の力により越えてしまったんだから逃げるだけならなんとかなるだろう。この間の広範囲に無差別に破壊を撒き散らすのはさすがに無理かもだけど……。

第13話

「どうも、皆さん初めまして。今日から一緒のクラスに通うことになりました蓮・K・エーアリヒカイトです。よろしくお願いします」

氷村蓮改め蓮・K・エーアリヒカイトです。

現在クラスで挨拶をしています。

転校生と言う扱いでクラスに来ました。その筋書きはすべて忍さんが手掛けています。なので俺はその筋書き通り動くだけです。上手くこなして見せる。それが忍さんの苦勞に報いる唯一の方法。

アリサとなのはが名前が変わってるってツツコミを入れてきたのは当然だと思う。

それに対して「お金を払ってまで売られました」と答えた途端にクラス全体の空気が重くなった。

それからはとても親切にされている。

中には涙ぐんで話しかけてくる人もおり戸惑った。

「はーい！ 皆、そろそろ授業を始めたいから、残りの質問とかは休み時間の間にしてね」

パンパンと担任の先生が手を叩いてそうクラスメイト全員に言った。

さつきまでのざわめきが嘘みたいになくなり授業を始める体勢となっている。

先生はクラスの支配者なのだろうか？ そう思ってしまうほどの統率力を発揮していた。

「じゃあ、始めるわよ。教科書の十五ページを開いて……」

初めて受ける学校の授業開始である。



「……ふう、意外と疲れた」

家庭教師に教えてもらっていた時よりも座っている時間が長かったから少し疲れた。

休み時間も質問が沢山来たから休みの無い休み時間だったし。学校の裏庭には生徒があんまり来ないのでゆっくりと寛げる。

お昼の誘いを断ったのは悪いと思うけど……ゆっくりしたかったのだ。

「……あんなに沢山の人と一緒に行動したのは初めてだ」

幼稚園は行ってないし……夜の一族の子が痲癩を起すと其れ以外の人が危ないからという理由で夜の一族の子は幼稚園に通うことは無い。

何処の家もお姉ちゃんみたいに世話をしてくれる人がいるから。

「……ははっ……ちゃんとクラスの輪にとけ込めるかな？」

ハブられはしないだろうか？ そればかりが不安だ。

身体能力もすずかと同じぐらいに落とさないといけないかな？

あんまりにも高いと変に勘ぐられそうだし。

体育の授業の時に調整しないと。

それに……サッカーとかのチームでやるスポーツは一人だけ飛び抜けてると逆につまらないだろうしね。

その時はサポートに徹しようかな？ それだったらサポートが上手いだけになるだろうから。

でも、すずかは体育の授業の時はどうしているのだろうか？ 力はセーブしているのか……それとも……。うーん……本人に訊けば済む話だし特に考えることじゃないね。

学校内にジュエルシードが落ちていないか確かめないと。もし、蟻とか蜂がジュエルシードの力で巨大化して暴れたら大惨事になる。

しっかりと搜索して安全を確保しないと。

忍さんはその事も視野に入れてるだろうし。俺は俺に出来ることをしなきゃ。

目には目を歯には歯をの精神で報いないと。何であれ異端である俺を受け入れてくれたのだから。

すずかが怪我を負ってまで引き止めてくれた、だからこそ俺も体を使って本気で探すのだ。

あんまり好きじゃないこの力を使おうと思えるくらいには……。

「~~~~~!!」

人には聞こえない雄叫びを上げる。すると、小鳥たちが次々と現れる。これがあまり使いたくない異能力の一つ。動物を支配する力だ。

今回は小鳥のように数が多く大抵の場所には何処にでもいる存在と言うことで小鳥を支配下に置いた。

小鳥たちが集まりきると俺は命令を下す。

「この学校内にジュエルシードがあるか探せ。見つけても取らなくていい。場所のみを伝えろ」

手を横に振り、小鳥たちを飛ばす。

後は小鳥たちが情報を持つてくるのを待つだけだ。

あんまり使いたくないが今回は使わせてもらう。休み時間もあまり無い上に遅くまで学校内に残っている理由が無い。それに、ジュエルシードの搜索もあるから余計に一ヶ所に止まっていることは出来ない。

見つけたらユーノに渡すと宣言してるから尚更ね。

ジュエルシードの危険性を理解しながらもたった一人で止めようと来てくれたんだから……。同じことをしろと言われて何人出来るだろうか？

少なくとも何百人に一人の割合だろう。

ユーノは俺よりも確実に勇気がある！ 逃げ出さずに責任をとろうとしているのだから。恐くなって逃げ出した俺とは大違いだ。

だからだろうか今は影からユーノをサポートしたいと思うのだ。

今度あつたらユーノの色々話をしてみたいな。この世界以外にどんな世界があるのか、吸血鬼はいるのかとか……。

突然拉致したりしたから嫌われてるかもしれないけど……ちゃんと言話をしてみたいな。

思ってみれば異世界の住人とのコミュニケーションなんだから！俺のように突然拉致するのはいけないよね。今さらになって後悔してる。

普通に脅しもしちやつてるから……謝った方がいいよね。

お姉ちゃんもきつと謝った方がいいって言うだろうし……許してもらえるだろうか？

そこが不安だけど……不安から逃げたら何も変わらないよね。

俺が逃げたからずかか火傷を負ったんだから。だからこそ、逃げてはならない。同じことを繰り返したくないから。

まずはジュエルシードを見つけないと……そうしないとおちおち会いに行けないからね。



放課後。

学校の授業に関してはまったく問題無かった。ちゃんと復習して理解度を上げていればテストもなんとかなるだろう。

すでにずかかのは、アリスと一緒に帰路についている。なので、学校で万が一にもジュエルシードが発動しても巻き込まれることはない。

ただ、封印出来るのがなのはしかないなのでそこがネックだ。

ユーノも本調子じゃないだろうし……本調子ならきつと自分で封印作業をやっているだろうしね。

「……どうだった？」

俺は命令を下していた小鳥たちに結果を訊く。

「……そうか。無いならいい。次は街中を探してきてくれ。早くなくてもいい。正確であればそれでいいから」

俺は再び小鳥たちに命令を下す。

バサバサと翼をはためかせて小鳥たちがジュエルシードの搜索に向かう。

一つでも見つければ御の字なんだけど……。あんまり期待は出来ないかな。

発動してないだけで人が持ち歩いているだけの可能性もあるし、川や海の中落ちてるなら手も足もでない。

正確な場所が特定出来ていれば話は別なんだけど……。そう上手

くはいかないかな……。

「俺も帰ろうかな……ジュエルシードについて忍さんはどう対応するのか決まってるだろうし」

一番は関わらないことなんだろうけどね。我、関せずとばかりさ……。でも、それが意味の無い事態を引き起こすからそうも言ってもらえないんだよね。



「ただいま戻りました」

家に帰ってくるかと背負っている鞆を手に持つ。

「お帰りなさい、蓮君」

難しい顔した忍さんがお姉ちゃんと一緒に玄関の方にやって来た。

「お帰りなさい」

「ただいま……お姉ちゃん」

改めてただいまとお姉ちゃん言う。

こんな何気ないやり取りが出来ることを嬉しく感じる。

一生出来ないと思っていたから。

「それじゃ、蓮君。私とノエルはちよつとなのはちゃんの家族と話し合いに行ってくるから、ファリンとすずかと一緒にお留守番しててね」

「はい。……話し合いってジュエルシードのことですか？」

「ええ、そうよ。さすがにこの前の様なことになるは大変だから。それに、なのはちゃん深く関わってることだからね」

「やっぱり……か。予想はしてたけど……直接家に行って話をするとは思わなかった。」

「気をつけてくださいね……いつ何処で発動するか分からないんですから」

「ええ、気をつけるわ」

「夕食は食べていてくださいね。ファリンが作っているはずですから」

「お姉ちゃんも忍さんも気をつけて……」

道中何もなければいいんだけど……。

「そう……不安そうにしないで、ね？ ノエル」

「ええ。ちゃんと帰ってきますから」

そう言ってお姉ちゃんと忍さんが玄関から出ていく。

「いつてらっしゃい」

俺は二人が無事に帰ってこれることを願いながらその言葉を口した。

二人の姿が見えなくなるまで見送ると玄関を閉じる。

それから、靴を置きに部屋に戻る。靴を置いたら洗面所に向かい手洗いとうがいを済ませる。その後、テレビのあるリビングに向かった。

「あ、蓮君。お帰り」

リビングには先客としてずずかがいた。手にはブラシを持っている。

「ただいま。ずずかは猫のブラッシング？」

「そうだよ」

膝の上にいる猫にブラシをかけるずずか。慣れた手つきだ。

「リリンは？」

「リリンならファリンさんの後をつけてたよ。蓮君以外だとファリンさんになつてゐるから」

「大丈夫かな？」

心配だファリンさんのドジで怪我とかしてないか……。

「大丈夫だよ……多分」

「そこは断言してよ！ 不安になるじゃない！」

「だって……ファリンさんだよ」

非常に説得力のある言葉にグウの音すら出ない。

時たまやるドジに定評のあるファリンさんだからしょうがないと言えましょうがないのだが……。

余計に心配になってきた。

「……ねえ、蓮君はお姉ちゃんが何をしに行ったか知ってるよね？」

「うん。知ってるよ……話し合いでしょ」

「ううん、そうじゃなくて……なのはちゃんのことでしょ」

忍さんから話を聞いたのかな？ 学園にいたときは普通だったし……家に帰ってきてから聞いたんだろう。

「それがどうかしたの？」

「うん。……どうしてなのはちゃんのかな？」

「……たまたまじゃないかな。たまたまなのはにその才能があった。そして、その才能が必要になった……だからじゃない」

狙って出来るようなことじゃないし……偶然に偶然が重なった結果だと思う。

「……そうだね。たまたまだね……でもね、私はなのはちゃんに危ない目にあつて欲しくないんだ」

「……友達だから？」

「うん。それもあるけど……」

それもあるけど？

「……なのはちゃんが何処か遠くに行つちやうような気がして」

「そっか……俺はどうこう言えるようなことじゃないけどさ、今はなのはにしか出来ないことなんだから仕方がないよ」

「うん……なのはちゃんにしか出来ないことだもんね」

そう言うすずかは何だか寂しそうだ。どうにかして元気になって欲しいが俺にはその手段が分からない……。

「……私に出来る事って何なのかな？」

「なのはが日常に戻つてこれるようにする事じゃないのかな」「え……？」

「いつもと同じようにお話したり、遊んだりして普段の生活が送れるようにする事。きつと疲れてるだろうから」

危険なことをやるんだきつと相当なストレスに晒されるだろう。そのストレスを癒して上げるのも大切なことだと俺は思う。

そうすれば頑張ろうって思えるから。

「それだけでいいの？」

「うん……俺だったらそれで十分。まあ、俺だったらだから参考程度

にしておいてね」

俺は笑いながらそう付け足す。

誰かが待っていてくれる。自分が帰ってくるのを……それは本当に大切な事だから。

「うん。ありがとう、蓮君」

「どういたしまして」

少しはずすかの役に立ったかな？ それだったら嬉しいな。

大事な人たちの役に立てるほど嬉しいことはない。同族すら喰らう俺を受け入れてくれた……その人たちのためならば俺はなんでする。



今日の夕食はいつものように美味しかったが……お姉ちゃんと忍さんがいないから寂しく感じた。

ファリンさんは夕食の後片付け。そして俺は猫の姿に変身してすずかの脇で伏せている。

「……やっぱり、毛並みがいいね」

「んん、くすぐりたい……」

すずかに首元を撫でられてくすぐりたい。ゴロゴロと唸り声が出るほどに……。

「お姉ちゃんたち……いつ頃帰ってくるかな？」

「分かんないけど……恭也さんが送ってきてくれるんじゃないのかな？ 忍さんの彼氏だし」

「そうかも……」

恭也さんに連れてこられる忍さんの姿を想像したのかクスリとすずかが笑った。

「でしよ」

すずかに少しでも元気が戻ってよかった。

「……すずかはなのはの役に立ちたいの？」

「うん……友達だからね」

友達だからか……。

「前も言ったけどさすがが望むなら俺は……」

「駄目だよ、そんなこと言っちゃ」

「むう……」

「私のためってのは嬉しいけど……それは違うと思うの」

違う？ 何が違うのだ……？

キョトンと首を傾げる俺にさすがが言う。

「私がしたい事なのに他の人にやらせるのって違うでしょ」

「……確かに」

さすがの言う通りだ。

「でも……ありがとうね」

「ううん。お礼を言うほどのことじゃないよ。お礼を言うのは俺の方だから。改めて言うね。ありがとう、さすが。俺の手を掴んでくれて

……臆病な俺を捕まえてくれて」

さすがのお陰で俺は救われた。だから、俺は逃げないですんだ。

「どういたしまして……」

……本当にありがとう。これほど感謝することはもう二度と無いかもしれない。

第14話

その日の夜。

今日は遅くなりそうだから忍さんとお姉ちゃんのはの家に泊まると連絡があつた。

「話が長引いたのかな？」

「どうだろう？ でも、明日になったら会えるからその時に教えてもらえばいいんだよ。きつと聞かせてくれるだろうし」

俺とすずかにも少なからず関わりのあることだから。主に被害者として……。

「なのはちゃん……明日来るかな？」

「来るんじゃないのかな？ さすがに学校は休まないと思うよ」

「そうかな？」

「うん。だってさ、病気じゃないし、怪我もしてるわけじゃないんだから」

それに、性格的にずる休みはしれないと思う。しようとしてもユーノが止めるだろうし。

ジュエルシードの事があるのに現地の住人の事をちゃんと考えてくれている。そんなユーノだからこそジュエルシードの回収に無謀ではあるが一人で来たのだろう。

猫の姿から人の姿に戻った俺は膝にリリンを乗せながらすずかと一緒にテレビを見ている。

「……ところですずか」

「何？」

「……何でホラー映画なの？」

「ん、気分かな」

そうなんだ……。

「……もしかしてホラー映画は苦手？」

「エイリアンって映画を見てからちよつと……」

あれはトラウマになる……。思い出すだけで手が震える。

「あく……そうなんだ。何だったら変えようか？」

さすがありがたい提案をしてくれるが俺はそれを断る。

「ううん。さすがが見たいやつでいいよ……」

俺にはリリンがいるか……ら……ってリリン!? リリンがどっかに行ってる! カムバック! リリン、カムバアアック!!

内心慌てていると映画が始まってしまった。

俺がホラー系の映画が苦手な理由は雰囲気と効果音の二つが原因である。

その二つが巧妙に合わさって俺の恐怖心を掻き立てるのだ。



「……………本当に苦手だったんだね」

「……………」

俺は苦笑いするすずかに頷く。

「まあ、誰しも苦手なことはありますから、気にしなくていいと思いますよ」

フアリンさんの優しさが心に染みる。自分でもホラー系が苦手なのはエイリアンを見てから知ったのでどれくらいなら大丈夫なのか検討もつかない。

ただ分かっていることは現実で起きるなら怖くないということのみだ。

だって……映画みたいに効果音とか演出がないから……。

それがないだけで全然違う。

「蓮君がホラー系が苦手なことは意外だったけどね」

「ですよ。本当に意外です」

「そうですか……意外ですか」

「……そんなに意外ですか?」

「うん。平気なイメージがあったから……でも、それはもう崩れちゃったけどね」

「そう言いながらクスリと笑うすずか」

「そうですよ。だって蓮君ってあんまりテレビを見ないじゃないです

か……自分から苦手な番組を見る人なんてそうそういませんよ」

「ファリンさんの言うことも分かるけどね。これはただ単に俺の運と言うかタイミングが悪いだけなんじゃないかなとも思うわけだし……。」

「そこら辺はどうなんだろうか？」

「……運はすべて使いきっているのか？ 俺を受け入れてくれる人たちに会ったことで……。」

「あり得る。まったくもって否定出来ない。」

「だって……お金を払ってまで売られたし……。売られたことに関してはシヨックは無いけどお金を払ってまで売られたことにシヨックを受けた。お金を払ってまでという時点で相当運が無かったんだなと思う。」

「今ならおみくじを引いて大凶を出す自信がある……。自分で思った、嫌な自信だなと。」



翌日。

学校に行く前にお姉ちゃんと思さんは帰ってこなかった。なので、少し寂しい朝食となった。

バス停に着くとすでにアリサがいた。

「おはよう。すずか、蓮」

「おはよう、アリサちゃん」

「おはよう、アリサ」

挨拶を交わした俺たちはバス停の前でバスが来るのを待つ。

「それにしてもなのは今日、遅いわね。寝坊でもしたのかしら？」

「うくん……どうだろう？ なのはちゃんの事だから単純に足が遅いだけってことも」

「そういう日もあるんじゃない？ 信号待ちとかさ」

「遅いといってもバスが来るまで後、十分くらいあるからそこまで気にする必要はないと思うんだけどな。」

「そうよね……気にし過ぎかしら？」

「あんまり神経質考えるとストレスが溜まるから楽観的に考えた方がいいんじゃない？ 仮に遅れたらなら遅れた理由を後で訊けばいいだけだし」

「そうだよ、アリサちゃん。蓮君の言う通りポジティブに考えよう」

俺とすずかの言葉を聞いてアリサは「そうね」と頷いた。

「まあ、遅れたら遅れた理由を聞いたですわよ……その時は手伝ってね、すずか、蓮」

「……何で俺まで」

切実にそう思う。俺は別に聞きたいわけじゃないんだけど……。

「付き合えよ……付・き・合・い！ いいわね？」

どうやら俺に拒否権は無いようだ。アリサが不敵に微笑んでる。何処から来るのだろうか？ その自信は……。

「もう……アリサちゃんったら」

すずかはすずかでしょうがないなあと笑ってるし、俺もこのノリに慣れるべきなのだろうか？

「分かったよ……でも、何か出来るとは思わないですよ」

「当たり前よ！ 訊くのは私がやるんだから。蓮はなのはの説明で思った事があつたらそれについて追及してくれればいいのよ。私だと訊けないようなこともあるかもしれないし」

なるほど……。

「……つまり俺は空気を読まない発言を望まれていると」

「あからさまに曲解したわよね！」

「ううん。アリサちゃん、あれは蓮君の素だから勘違いしたら駄目だよ」

「あれって素なの……？ 何か初対面の時よりも色々と緩くなってる気がするのには気のせいかしら？」

「多分、気のせいじゃないよ。蓮君の叔父さんの事が解決したから気を張る必要が無くなっちゃったんだよ」

「そうだとっても……変わり過ぎよ」

何か色々と言われている。そんなに変だろうか？

でも、前と比べると心に余裕が出来ているからそのせいかもしれない。

「ちよつと引き締めた方がいい？」

「うーん……私としては蓮君の楽な方でいいと思うよ」

「それは同感ね。ただ……あんまり緩みすぎないでね。気になるから」

「分かった」

少し気を引き締めよう。

最近嬉しいことがあったから色々と緩んでるかもしれない、それに……緩みすぎて致命的な事を見逃したんじや後悔することになる。

「それからもう一つ」

まだ、何かあるのか？

「……髪が少しボサついているから漫画出るような吸血鬼の髪型にそっくりよ」

「……そんなに似てる？」

確かに髪がボサついているが漫画のキャラに似てるほどなのか？
すずかに訪ねる。

「アリサちゃんの言いたいことは分かったけど……長さが足りなくな
い？」

「いいのよ、すずか。そっくりなだけなんだから」

細かいことは抜きにしてそっくりなのね……。

「俺は漫画とか見てないからどんな感じなのかいまいち分からない
だけど」

「そうなの？」

アリサが意外そうな表情をする。そんな表情をされてもね……事
実なんだし。

氷村の家では漫画を読む機会なんて無かったし、こつちに来てから
は小説ぐらいしか読んで無かったから漫画は読んだことが無い。

ま、読んで無かったことで苦労したことはないから気にしたことは
無かったのだが読んでおいた方がいいのだろうか？

「読んでいた方がいいの？」

「絶対ってわけじゃないけど話題にはなるから話の種にはなるわね」
話の種にか……クラスメイトと会話するときは何を話したらいいか分からないからそう言う面では読んでおいた方がいいだろう。
「でも、読む漫画も選ばないと話の種にならないから気をつけてね」
さすがが補足するように教えてくれた。危なかった危なく適当に読もうとしていたから。確かに皆が知っている作品にしないと話の種にならない。

だったらどんな漫画を読んでいるのかクラスメイトたちに確認しなくては……。確認しないことにはどんな漫画を読めばいいのか判断がつかないからな。

「分かった。ちゃんとどんなのを読んでいるか訊いておく」

「そう、それでいいのよ。クラスの皆だって蓮とは話してみたいと思ってるだろうしね」

そのアリサの言葉に疑問を覚えた。何で俺と話したいのだろうか？

「何で？」

「何でって……あんたねえ」

アリサが呆れたような表情をしながら額を右手で覆う。

「さすがは何で俺が訊き返したのか、その理由について分かっているのか複雑そうな顔をしている。」

「アリサちゃん……蓮君にも色々あるんだよ」

その言葉だけで察したのかアリサは一度だけ大きく息を吐く。

「は、なるほどね。理由は分からないけど……何かあるのね？」

「うん……詳しいことは私の口からは言えないけど……ね」

「……無理に訊こうとは思ってないから安心して」

「やれやれと言った様子で肩をすくめるアリサ。その動作が意外と様になっている。将来は人の上に立つような仕事をするのだろうか？」

性格的にもアリサは人の上に立つような立場でもやっていけそうだから案外天職なのかもしれない。

少なくとも俺やすずかには出来ないと思う。あくまでも現段階の

俺とすずかではという意味であるが。

将来の可能性なので現段階で否定する必要も無いだろうしね。

実際にどうなっているかなんて未来の俺たちにしか分からないのだから。



「それで……何で遅れたのかしら？」

結局、なのは俺たちが乗ったバスが発車してからバス停に着いた。そのため俺たちはバス停に一人残るなのは姿を見てしまった。

学園には遅刻しなかったが結構ギリギリに到着した。そして、現在は四限が終わりお昼の時間になったので屋上に来ているのだ。

……ユーノも一緒にである。

朝、アリサが宣言した通りなのはに遅れた理由を問いただしている。

それに対してなのははと言おうか迷っているのか視線があちこちさま迷っている。その視線が時折ユーノやすずかに向かっているが誰も救いの手を差し伸べない。

「……アリサ、ここは俺に任せて」

「出来るの？ 蓮」

俺はコクリとアリサに頷く。

それからユーノを捕まえる。とりあえず、痛くないように丁寧にであるが。

「さあ、なのは……素直に話すといい。さもなければ……」

「……さもなければ？」

「……ユーノが保健所に送られる」

「つて！ 何言ってるのよ、あんた！」

Spanien とアリサに頭を叩かれる。

「アリサ。動物は基本的に学校内に入れるのは禁止されてる」

「だけどねえ！ 保健所はないでしょ！」

「……冗談だから気にしないで」

「あ、あんたねえく……」

プルプルと怒りを堪えるように震えているアリサを一別してなのはに言う。

「頑張れ、魔法少女。後、ユーノを借りてくね」

「ふえ……!?!」

魔法少女と言う単語に固まるなのはに背を向けて俺は屋上と校舎を繋ぐ扉に手をかける。

「あ、すずか。後は頑張つてね」

「……蓮君。私に丸投げしないでよ……」

「……後でお詫びに何かするからそれで勘弁して」

そう言うтусずかははあくど溜め息を吐くと仕方がないとばかりに苦笑いを浮かべた。

「……約束だよ」

「勿論」

それから俺は屋上を後にした。



「蓮……キミは話を聞かなくてもよかったの?」

裏庭に来ると同時にユーノが俺の手のなかでそう言ってきた。

「いいんだよ……俺は友達じゃないし」

「それは……どういうこと?」

「恩人と叔父の被害者とその友人……がすずか、アリサ、なのはだから」

すずかは恩人。アリサは叔父の被害者。なのははすずかとアリサの友達。それが彼女らに対する俺の認識。

「それを聞いたらなのはたちは怒るよ」

「そうかもね……でも、きっと怒っても俺の認識は変わらないよ」

「……どうしてだい?」

「危ないからだよ」

そう……危ないからだ。俺は過去の事で恨まれてるから……。

ここで俺に対する何の行動も起きていないのは月村家の影響下にある土地だからだ。

「危ないって……」

「本当の事だよ、ユーノ。俺が忌み嫌われるだけで済んでいた理由はもう無くなっちゃったんだから」

「忌み嫌われるって……キミは……」

「それは……秘密だよ。聞いていても愉快的話じゃないから」

それに……知らない方がいい話で、夜の一族の事を話さないといけない話であるから。そしたらユーノの記憶を奪うか誓いを立ててもらわないといけなくなる。

「……分かった。訊かないでおくよ」

「ありがとね、ユーノ」

本当は訊きたいのだろうけど訊かないでくれるのはありがたい。

「それと、この前は悪かったね。無理矢理脅しながら拉致して……言い訳でしかないけど余裕が無かったんだ」

「ううん。それは仕方がないよ。ボクはこの世界の人たちからしたらわけの分からない存在だったんだから……それに、厄介事を持ち込んでしまった責任もあるし」

シユンと落ち込むユーノ。そんなユーノに俺は言う。

「例えそうかもしれないけどユーノが来てくれたお陰で被害が少なくなっているのは事実だから」

「ありがと。なのはのお父さんにも似たようなことを言われたよ。君が来ていなかったら沢山の被害が出ていただろう。無謀な事だがその無謀な事をしてくれたお陰で助かった人がいるんだってね」

その後、お説教されちゃったけど付け足すユーノ。

「無謀だと言うことは否定出来ないからしようがないと思う」

「うん……だよね」

「でも、来てくれて助かったのは事実。そこは自信を持っていい」

これは本心から思うことだ。

第15話

「ところでユーノ」

「何かな？」

「ジュエルシードは幾つ見つかった？」

まったく見つかっていないのであれば結構大変な事だ。俺が知っているだけで現在は三つだし。せめてもう二、三個見つかったら嬉しい。

「三つだけだよ。それ以外はまだ……」

「そっか……」

残り十八個か……結構残ってるな。小鳥たちはジュエルシードを見つけているだろうか？

「……ユーノ」

「何？」

「ジュエルシードの搜索報告を聞く？」

「え……？ どういうこと？」

キョトンとした様子で首を傾げるユーノ。

「ハズレ情報もあると思うけどね」

集めてくるのは小鳥たちだからね……。下手な鉄砲数打ちや当たる的な感じだから。まあ、それでも一つくらいは当たりが出ると期待しておく。

バサバサと羽音を立てながら小鳥たちが集まってくる。

その光景にユーノが何事!? と驚く。確かに何も知らなかったら驚くと思う。だから驚くのも無理はない。

早速、集まって来た小鳥たちに報告をしてもらう。

報告と言っても言葉が分かるわけじゃなく支配下に置いた小鳥たちが見たのを漠然としたイメージで受け取るものなのでこれが言葉を喋る知能がある生物だと言葉での説明になる。

街中は普段と変わらないか……でも、山の方を流れている川に巨大な魚が現れたか。

小鳥たちからすれば巨大な魚であるのか人と比べて巨大な魚であ

るかは分からないがこれが現在のところ一番可能性が高いか……。それ以外だとそこから離れた場所に現れた蛇ぐらいか。明らかに大きさが違うし。

「……ジュエルシールドが関係してそうなのがあるけどどうする？ さつきも言ったけどハズレの可能性もあるからね」

「勿論決まってる。行くよ……ハズレだったらそれでいいけどもし当たりだったら大変な事になるから」

はつきりと決意の籠った口調でそう言うユーノ。

「封印出来るのはがないとどうにも出来ないけどね」

「そうなんだよね……」

それにそろそろ話は終わってるかな？

まだ屋上にいるであろう、すずか、アリサ、なのはの事を考える。

変に話が拗れてないといいけど……三人は友達らしいから大丈夫かな？ 文句か何かは言われてるだろうけど。

「とりあえず……屋上に戻ろうか？」

「そうだね……なのはたちの話し合いも終わってるかもしれないし」

そうだといいんだけどね。

そんなことを思いながら俺はユーノを抱えながら屋上に戻っていった。



そして、屋上に戻ってきた俺とユーノが見た光景は……。

「へー、本当に魔法少女だったのね」

「それよりも私はなのはちゃんの持つてるデバイスが気になるかな」

なのはが改造制服を着て右手に杖を持っている姿だった。アリサはその姿のなのを見て感心しており、すずかの目はなのはが持っている杖に釘付けであった。

「何でなのはは変身してるの？」

「……どうやらアリサに信じてもらうためにバリアジャケットを展開してみたみたい」

なのはが着ている改造制服ってバリアジャケットって言うんだ。
でも、見た目からして防御力が無さそうに見えるのは気のせいかな？

「……なのはちゃん……そのなのはちゃんが持つてる杖……確かレイジングハートだっけ」

「う、うん。そうなの」

何やらさすがが珍しく興奮している。

「ちよつとだけバラしてもいいかな？」

「……………え？」

「さすが……それはかなり不味いんじゃない？」

抱えてるユーノがフェレットの姿をしているのに冷や汗をかいてるし。

「ちよつ!?! さすが落ち着きなさい!」

「そ、そうなの! 落ち着いてさすがちゃん!」

「大丈夫、私はちゃんと落ち着いてるから……バラしてもちゃんと元に戻すから……ね」

どれだけなのはが持つ杖をバラしたいんだろうか？ でも、確かになのはが持つ杖って機械みたいだから機械に興味のあるさすがが惹かれるのも無理はないか。

俺はそう納得しているとユーノが焦ったような声で言った。

「ちよつと、蓮! そんなに落ち着いてないですずかを止めて! レイジングハートってまだまだブラックボックスの塊だから万が一の事があつたら困るよ!」

「らしいから止めておいて」

ユーノの声が聞こえてるだろうし俺が止めまでもないでしょ。

「……………本当に喋った」

アリサがユーノが喋った事に驚愕した。でも、今……本当に喋ったって言ってたからなのはがそう言ったのだろう。

「……………残念」

「さすがはレイジングハートが弄れなくて残念がっていた。」

「少なくともジュエルシードの件が解決するまで待とうか」

「蓮！ 余計なことは言わないで！」

ユーノがそう喚くが時すでに遅し。もう言ってしまったのだから。そうだね。終わったら弄ればいいんだよ」

「すずかはそれで納得してくれた。ただ、なのはが微妙な表情を浮かべていたが……。」

「それで蓮はユーノと何を話してたのよ？」

「話なさいとアリサが視線で訴えてくる。その視線に臆したのかユーノが話し出す。」

「えつと……ジュエルシードの暴走体らしき存在を蓮が見つ付けてくれてそれを教えてくれたんだよ」

ユーノがそう言うと言つ先になのはが反応した。

「え！ 本当に！ で、場所は何処なの？」

「山の方にある川だけど……。」

「……どっちの川なの？」

「分かんない。見つけたのは俺じゃないし」

「だって小鳥だし……それに、海鳴市は山と海に囲まれてるから余計に分かんない。」

「見つけたのに分かんないってなんなの!? それに蓮君はどうやってその情報を手に入れたの？」

「小鳥が教えてくれた」

「余計にわけが分からないの……。」

なのはが両手で頭を抱えて唸る。

夜の一族の事を知らないのに俺の事を教えるつもりはないので諦めて欲しい。

「すずかやアリサは俺だからしょうがないかと言うような達観した様子である。」

「ごめん、なのは……実はボクもどういいうわけかいまいち分かってないんだ」

ユーノが唸るなのはにそう伝える。いつの間にかなのはの傍におり、手から脱出されていた。

まあ、別に脱出されても構わないので特に気にすることではない。

ただ、すずかから後で話を聞かせてねと視線だけで訴えられたのですずかには教えないといけなくなつた。

夜の一族の事を知らないなのはに教えるつもりが無いだけなので夜の一族の事を知っているのであれば教えることは構わないのだ。

てか、なのははいつまでバリアジャケットを展開したままでいる気なのだろうか？ もうそろそろ昼が終わるのだが……。その格好で授業に出る気なのか？

「うう……。お父さんかお兄ちゃんに連れてってもらわなきゃならないの」

「あらかじめ言っておくけどハズレの可能性もあるからね」

後で話が違うの！ って文句を言われても困るから言っておかないと。

「……モチベーションが下がるの」

「蓮もなのはのモチベーションが下がることを言わない！」

「そう言われても……。アリサだってあらかじめガセの可能性もあることを知らされているのと知らされていないのだったらガセの可能性があるだけ知っていた方がマシでしょ？」

「た、確かに……。あらかじめ知っていた方が心情的に楽ね。後になつて騙されたって怒るよりもストレスは少ないわね」

納得してくれたようで何よりだ。

「でしょ」

「でも、どうやって情報を集めたのかは気になるわね……」

ジト目でアリサが睨んでくるが俺はそれに対して苦笑しながら答える。

「それは……。秘密と言うことで勘弁してくれない？」

「……………はあ、しょうがないわね。本当に話したくなさそうだし訊かないで置いてあげるわ」

小さく溜め息を吐くとアリサはそう言つて手をヒラヒラと振つた。

この場にはなのはがいるから云えないのだ……。それ以外の場所であれば答えたのだが。

それに自分から言うことはないしね。

訊かれたら答える。そう言うスタンスで俺は行こうと思っている。



「それで……蓮君はどうやってジュエルシードの情報を集めたのかな？」

学校が終わって帰宅している途中でさすがにそう問われた。

アリサやなのはたちとはすでに別れているので二人きりだ。

「小鳥たちを支配下に置いて探すように命じただけだよ」

「……そんなことも出来るんだ」

「そうだよ。あんまり使いたくないんだけどね」

「どうして？」

俺は自嘲しながら答える。

「だってさ……支配下に置かれるとその支配者の命令を第一に考えるようになって、命の危機であっても俺の命令を第一に行動するからだよ」

だから……あんまり使いたくないのだ。その時ばかりならよいが。長時間は使いたくない。支配下に置いた生物たちにも生活はあるのだから。

「そうなんだ……その生き物を支配下に置いた後はその支配から解放とかは出来るの？」

「出来るよ。情報を集めるために支配下に置いた小鳥たちはすでに自由にしてあるしね」

そうしないと生態系が崩れるしね。

「そっか……」

ホッとしたように息を吐くすずか。

「安心した？」

「うん。……野生に帰してあげないと可哀想だから」

「だよね」

「うん」

鳥は自由に空を飛んでいる方が似合うからね。

「今頃……ユーノとなのははジユエルシードの捜索かな」

「そうだね……怪我しないといいんだけど」

「危なくなったら逃げるだろうし大丈夫なんじゃない？」

「だといいいんだけど……なのはちゃんも運動が苦手だから」

運動音痴か……確かにそれは心配になるな。でも、俺が知っている限り自由自在に動くピンク色の球体があるから大丈夫だと思うんだが……。

「ユーノもいるし……いざとなったらユーノに頑張ってもらうしかないよね」

「うん……でも、デバイスを使えるのがなのはちゃんだけだから……他に誰かいればいいんだけど」

「そう都合よくデバイスだっけ？ それを持つてる人なんていないでしょ。元々魔法何て無かったんだから」

夜の一族のように異能を持っている人は世界中にそれなりにいるが……。

「だよね。なのはちゃんだけしかいないから無理しちゃってそうで」

「確かに一人しかいないからね。必然的に無理をしないといけないよね」

封印出来るの現状なのは一人しかいないのが解決出来ればまた違うんだけど……。

「話し合いの詳しい結果を忍さんに訊かないといけないね」

「うん……そうだね。なのはちゃんから聞いた話だとなのはちゃんがジユエルシードを集めるのは渋々ではあるけど家族の皆が認めてくれたらしいよ」

意外だ……反対するものだと思っていたんだけど。

「本当はなのはちゃんのお父さんや恭也さんがやろうとしたらしいんだけど適性が無くて唯一適性のあるなのはちゃんがやることを渋々納得したんだって」

誰かがやらないといけないからしようがないか……。ユーノも本心では自分がやるべきだと思っているようだし。なのはは無茶はさせないだろう。

「誰だつて家族に危ない真似をして欲しくないもんね。渋々納得したのだから、それ以外は出来ないからでしょ」

「そうみたい。ただ、自分だけしか出来ないってことに対してなのは、ちやんが嬉しそうだったんだ……」

「ふーん……何かしらの願望があつたんじゃないのかな？ 例えば特別な存在になりたいとか、念願の魔法使いになれたとかさ」

「そこまで深刻に考えるほどではないと思う。それに、特別な存在がすべて受け入れられるわけじゃない。」

「俺のように受け入れてくれる存在に出会えることだけでも奇跡だと思う。あまりにも異端だと排除対象になるから。」

「そうだったらいいんだけど……なのはちやんは自分に何が出来るかってことで悩んでたから」

「ああ、なるほど……自分だけしか出来ないことが見つかって舞い上がってるんだ」

「調子に乗って痛い目に合わなきゃいいんだけど……。だつてさすがが悲しむから。」

「恩人に悲しんで欲しくないから俺はなのはの手伝いをすべきなのだろうか？」

「そうかな……舞い上がってるだけかな？」

「さすがは心配そうにそう呟く。その不安を取り除いてあげたいが……俺がなのはの事を手伝おうとしても、さすがは俺のことまで心配しそうだ。」

「ねえ、さすが……俺はさすがが望むならなのはの事を手伝ってもいいんだよ……」

「……ううん。いいよ、やらなくて」

「それをさすががやんわりと拒絶した。」

「どうして……」

「そう訊くと、さすがは静かに言った。……そのために他の誰かを危険な目に合わせるの嫌だから。それなら、私は自分で手伝うよ」

その言葉にはしつかりとした意志が感じられた。

同時に思った……そんな、さすがだからこそ俺は今、ここにいらることが出来ているのだと……。

「そっか……だけど、覚えておいて俺はさすがの頼みなら断らないから」

「うん。本当に助けて欲しくなったら遠慮無く頼むからね」

笑顔でそう言うすずかに俺も笑いながら返事を返す。

「勿論……いつでも言っていよいよ」

そう……いつでも……それで少しは恩返しが出来るから。それではか恩の返し方が分からないから。

最も器用だったらよかったんだけど……不器用でごめんね。

こんな恩の返し方しか出来なくて……。

第16話

「お帰りなさい」

家に着くと玄関の前に忍さんが一人で立っていた。

「ただいま、お姉ちゃん」

「ただいま、忍さん」

俺とすずかは忍さんそう返事を返す。

玄関の前に立っついていてどうしたんだろうかと思っっていると忍さんが口を開いた。

「昨日……話してきたことの説明をしようと思っつてね。二人とも部屋に荷物を置いたら私の部屋に来てくれない?」

「うん。分かったよ、お姉ちゃん」

「はい」

すずかと俺はそれぞれ忍さんに返事をする。その返事に満足そうに頷くと忍さんは玄関の戸を開けて家に入っつていった。その後をすずかと一緒にっついていく。

玄関で靴を脱ぎ、それから洗面所へ向かい手洗いとうがいを済ませっつてから部屋に鞆を置きにいく。

その後、忍さんの部屋に向かう。

その途中ですずかと合流する。そこから二人忍さんの部屋に移動っつた。

「お姉ちゃん、入るよ」

「失礼します」

そう言いながらすずかと俺は忍さんの部屋に入る。

中では忍さんとお姉ちゃんがおり、三人分の紅茶が用意されてっつた。

「ノエル……夕食の用意をお願いね」

「かしこまりました」

忍さんの言葉に頷くとお姉ちゃんは静かに部屋から出てっつた。

「さ、二人とも座っつて」

忍さんに促されて俺たちは椅子に腰を下ろす。俺たちが座るのを

確認すると忍さんが話を始める。

「話し合いの結果……なのはちゃん時空管理局って組織が来るまでジュエルシードを集めることになったわ。時空管理局ってのは魔法文化のある世界が所属していて、日本で言う三権分立してない警察組織みたいなものね」

結構大きい組織だな……三権分立してないとか……ものすごい権力を持つてるし。

「はあ……それで、俺たちは？」

「そこなのよね……私たちは関わるも関わらないも自由よ。恭也と士郎さんは関わる気満々らしいけど」

はあ……と短く溜め息を吐く忍さん。

恋人とその家族が危険な目に会うのを承知でジュエルシードの捜索をするのだから心配なのだろう。

「私は……足手まといになっちゃうし……だから、なのはちゃんが日常生活を送れるようにサポートしたいな。きつと大変だから」

すずかはそうはつきりと力強く言い切った。

「俺は……自分からジュエルシードに直接関わる気は無いですけど……ジュエルシードを探してその場所を知らせるぐらいならしても大丈夫だと思ってます。なのはたちだけだと探すのだけでも大変そうだから」

万が一も俺がジュエルシードを発動させるわけにはいかないから。歪んだ状態で願いを叶えられたら……きつとなのはたちじゃ対処出来ない。

「そう……分かったわ。ところで蓮君はどうやってジュエルシードを探すのかしら？」

「数日おきに小鳥たちを支配下に置いて探します。大半がハズレ情報でもその中に一つでも当たりがあればいいな程度のものですので」

毎日やるよりも数日おきにやっていった方が小鳥たちの負担にならない。

「本当に蓮君って多彩な能力を持つてるわね……伝承にある吸血鬼の力は全部使えるんじゃないの？」

冗談混じりにそう言う忍さん。……意外とその冗談は的を得ている。

「若干形は違いますけど使えますよ。一部の能力は今後とも減多なことじゃない限り使いたくないですし」

特に洗脳系の上位は使いたくない……。もし、使うとすれば本気で相手に遠慮する必要が無いときだけだ。

「本当に多彩ね」

「そうだね、お姉ちゃん」

苦笑する忍さんに同意するすずか。

望んで得た力じゃないから色々複雑なんだけどね。便利だから異能の力は使っているけど……。

「それで……夜の一族としては基本的にジュエルシードに干渉するかないかは個人の裁量で決めろって事でいいんですね？」

「ええ、そうよ。下手に介入して事態を悪化させたらたまったものじゃないし……」

「そうだね……」

確かにそうだ……。本来なら専門家に任せるべきなのだが、その専門家がいないからこそその現状なのである。

「とりあえずは……被害が広がらないようにすることを第一に行動する事を心がけてね」

「はい」

「うん」

それから、覚めた紅茶を飲んで忍さんの部屋から退出した。

すずかはこれから塾に行くようだ。なので今日の夕食の時間は若干遅くなる。

「それじゃ、いってくるね」

「うん。いってらっしゃい」

玄関で塾へと向かうすずかを見送る。道中はファリンさんが付き添っていくそうだ。

なので……安心出来ない。身の安全と言う意味ではなく、とんでもないドジをするんじゃないかと言う心配ばかり募る。

一般人の人に迷惑をかけなければいいのだが……聞くとところによると今まで一般人の人に被害は出てないとのことらしいが、それはすなわち一般人出なければドジの被害を受けると言う意味になるのは……。

なのでファリンさんに対して俺は一つの疑惑を抱いている。ドジはわざとなのではないかと……。

だって一般人に対してドジを踏まない時点で疑う対象になる。

なので、なるべくファリンさんが物を持っているときには近づかないようにしようと思う。

ファリンさんには悪いけど……俺だって常に気を張っていたいわけじゃないのだ。



すずかを見送った後、俺は部屋に戻り本を読んでいた。

そこへ、リリンが窓から部屋の中に入ってきた。窓を開けているので部屋から出るときはそこから出ていくだろう。

「……どうしたの？」

擦り寄ってきたリリンを撫でながら問うが特に返事もせずただ撫でられている。

癒されるのでそれでも構わないのだが……本が読めない。かまつてあげないとリリンは気を引こうとイタズラをするのだ。そこが困りどころだが……それすらも可愛い。子猫なので余計に愛くるしいのだ。

読んでいた本を閉じてベッドに寝転がり両手でリリンを撫でる。

気持ちよさそうにゴロゴロと唸るリリン。

「……なのはたちはジュエルシードの暴走体かもしれないのに会えたかな？」

そんな俺の呟きにリリンは「にゃ〜」と鳴きながら首を傾げる。

「ふふ……リリンには関係の無いことだよ」

俺は小さく笑うとリリンの頭を軽く一撫でする。

ジュエルシードがパツパと見つかつて封印されればいいんだけど……それは望み薄かな。

俺はリリンを撫でながらそんなことを考えていた。

小さい上に宝石のようであるからその正体を知らないのであればついつい拾ってしまうだろう。

俺も何も知らなければ拾っていた可能性もある。

今はジュエルシードが危険なものであると知っているので触れようとは思わないが……。

まあ、リリンがジュエルシードを拾ってくることなんてほぼ無いか……小鳥たちを支配下に置いて探しても暴走体候補しか見つからなかったんだしね。

明日は巨大な魚はジュエルシードの暴走体であつたか訊かないとな。



翌日。

お昼の時間になり屋上で話を聞くことにした。

「それでどうだったの？」

そう訊くとなのはが微妙な表情を浮かべながら言った。

「……当たりではあつたけど……地面でビタンビタンと跳ねてたの」

あく、うん……それは微妙な表情になるのも仕方がないと思う。

シニール過ぎる光景だ。

「……しかも、昨日の晩御飯のおかずになつたの」

乾いた笑顔でそう言うのは。その傍ではユーノが遠くを見つめていた。

そんななのはとユーノに俺もアリサもすずかも何も言えなかつた。下手なことを言うのと地雷を踏み抜きそうで怖かつたからだ。

「ま、まあ……簡単に終わったんだからよかつたじゃない」

アリサが表情を取り繕いながらなのはにそう言った。

それに続くようにすずかも言う。

「そ、そうだよ、なのはちゃん。安全に終わったんだからむしろこの事を喜ばない」と

続いて俺も畳み掛けるように言う。

「そう……安全が一番大事。誰も怪我してないし被害も出てない」

「そ、そうだよね！ 皆の言う通りなの！」

「そうだね……なのは」

何とかなのはとユーノが持ち直してくれた。その事に安堵の息を漏らす俺とアリサとすずか。

モチベーションが下がったまままでジュエルシードを確保出来るならモチベーションが下がったままでもよかったがこちらはその筋の専門家ではないのでモチベーションを下げて失敗されたら困るのだ。

そんな思惑でモチベーションを下げないように言った俺と違ってアリサとすずかは純粹に友達として言ったはずだ。俺のそんな思惑には気がついていないだろうけど……気がつかれていたらきつと軽蔑されるなど内心苦笑する。

俺にとって大事なのはあくまでも月村家の皆であり、それ以外の人たちはすずかや忍さんにお姉ちゃん、ファリンさんと仲のよい人以外はどうでもよいとまでは言わないが積極的に助けようとは思わないし思えない。

お父さんが聞いていたら何て言っただろうか？ 怒っただろうか……それとも……悲しんだらどうか。分からないがいい顔はされなかったと思う。

それでも……俺はそうとしか思えないのだ。



今週末に家でお茶会をする事になった。

俺としては全く問題ない。すずかがそれを望み、忍さんたちが許可を出したならそれでいい。

「ところで蓮君は仲のいい友達出来た？」

ふむ……まず、俺と友達になると危ないので友達は作らないように

心がけているので友達はいない。

氷村とは無関係になってしまったため俺は俺を忌み嫌っている彼らに狙われる可能性があるからだ。

「う〜ん……どうだろう？ 分かんない」

これが無難な答えだろう。いないと断言するよりも分らないと答えた方が勘ぐられないだろうし……。

「そっか……蓮君……嘘ついてない？」

……勘が鋭い。

「……嘘は吐いてないよ」

向こうがどう思っているかは分からないから……。俺は別としてね。

「……なら、いいけど……」

とりあえず誤魔化せはしたようだ。でも、あんまり納得している様子ではないのでボロを出さないよう気をつけなくては……。

「……ところでお茶会をするって事になったけどユーノは大丈夫なの？ 猫たちからしたら餌になっちゃうんじゃない？」

ボロを出さないように話題をさりげなく今週末にやるお茶会の事に変える。

「……大丈夫なんじゃないかな？ 魔法も使えるみたいだし、いざとなったらそれを使って逃げるんじゃないかな？」

「でも、俺は魔法を使わずに逃げ回ってる姿しか連想出来ないんだけど……」

「確かにそうかも……」

すずかも猫から逃げ回ってるユーノの姿を想像したのかクスクスと笑っている。

「でしょ。……だから、ユーノは大丈夫なのかなって思ってたさ」

「食べられはしないだろうけど……遊ばれそうだよね」

「それは……ありえるね。ユーノの事だから逃げる以外の抵抗はしなさそうだし」

本当にユーノの安全を確保しないといけないんじゃないかと思いはじめてきた。

「そうだね……本当にそうなら助けてあげないと」
「だね」

下手に疲れさせてジュエルシードを発見したときには疲労困憊になっ
ていたりとかマジで洒落にならない。

疲れをとつてもらうための催しで疲れさせてしまったら本末転倒だ。
そこら辺には注意しないといけない。月村家の皆の安全を確か
なものにするためには……。



そして、数日が経ち……お茶会の日を迎える。

この数日の間にジュエルシードの暴走又は暴走体は発見されずに
平和であった。

ただ、昨日からリリンの姿を見ていないので何処に行ったのか不安
である。

怪我をしてないといいのだが……。

「さ、蓮君。そこにある卵を割ってボウルのなかに落としておいてく
ださい」

そんな事を考えていた俺は現在、ファリンさんがクッキーを作るそ
うなのでそのお手伝いをしている。

俺に指示を出しながらもファリンさんはさききに作つてあるクッ
キー生地を型抜きをしている。意外とドジがなければ腕のいいメイ
ドなのだと感じた。

ただ、油断していると卵が飛んできたり、牛乳パックが飛んできたり、
しまいには伸ばし棒すら飛んでくるので油断は出来ないのが難点だ。

お姉ちゃんはお茶会をする場所の掃除とセッティングをしている
ためここにいない。

そして、すずかはお姉ちゃんたちの代わりに猫たちに餌をあげに
いつている。

全部で数ヶ所あるそうなので中々に大変だと思う。でも、油断出来
ないと言う意味ではファリンさんの近くが一番だと俺は思っている。

今現在も油断出来ずに気を張っているからだ。

重労働をしているわけじゃないのに異様に疲れる。

「ファリンさん……終わりましたよ」

「はい、それじゃ次は小麦粉と牛乳を入れて混ぜてください」

小麦粉と牛乳に関してはあらかじめファリンさんが分量を計っているの、別々のボウルのなかにあるのを混ぜるだけなのだ。

ちなみにさっきの卵はクッキーを焼くときに表面に塗るためのものらしい。

詳しい作り方とかは知らないの、俺がやるのはファリンさんに指示された作業のみである。ただ、油断出来ないと言う言葉が付くが……。

第17話

絶対に油断出来ないクッキー作りのお手伝いを終えて、一息吐いた俺は昨日から姿が見えていないリリンを探すことにした。

とりあえず、アリサとなのはとユーノが来るまで探しても見つからなければ、一回彼女たちに挨拶してから再び探すつもりだ。

もしかして……虐められているのか？ とも思っているが猫を虐めるヤツはここら辺にいるのかと疑問に思う。

うーん……そのうちに戻ってくるよね？ しばらく探しても見つからなかったら街の方を探しに行くことも視野に入れないと……もしかしたら迷子になってるのかもしれないし。

「リリン……リリン、いたら出て来て……」

リリンの名前を呼びながら探しているが一向に見つからない。このままだとアリサたちが到着してしまう。

これは本当に街の方を探しに行かないと駄目かもしれない。

とりあえず、今は家から出ることは出来ないので庭の中を探す他ない。何処かで寝ているだけならよいのだが……。

リリンの名を呼びながら庭をあちらこちらと歩き回るがリリンは見当たらない。

本当に何処に行ってしまったのだろうか？ すずかもリリンの姿を見ていないそうなので家の周辺にはいないのだろうか？

ああ、心配だ。

それに庭全体を探す前に時間が来てしまった。

「……はあ」

俺は溜め息を吐きながらお茶会をする場所まで戻っていった。



「おはよう、蓮」

「おはよう、アリサ」

お茶会をする場所に来るとすでにアリサがおり、すずかと一緒に猫

を撫でていた。

なのはの姿が見えないのでまだ来ていないのだろう。

「すずか、リリンを見なかった？」

もしかしたらすれ違いになっている可能性もあるのですずかに訪ねる。

「ううん……見てないよ」

すずかが首を左右に振って否定した。

「……そう」

小さく溜め息を吐く俺にアリサが話しかけてきた。

「ねえ……その、リリンって猫よね？」

アリサはリリンの事をしらないんだった。

「そうだよ。手足の部分だけ何故か白い黒い子猫なんだけど……昨日から姿が見えなくて」

「それは心配ね。ちゃんとご飯を食べているのかしら？」

「そうなんだよ……まだ、子猫だから自分で餌を取るのは難しいだろうから余計に心配で」

リリンが大人の猫になっているのならここまで心配することはなかった。

大人の猫になっっているなら自分で餌を取れるだろうからだ。

「お姉ちゃんと一緒になのはちゃんたちの出迎えにいつてるノエルさんが戻ってきたらリリンを見てないか訊いてみたら？　もしかしたら見てるかもしれないし」

「……そうだね。お姉ちゃんがリリンの姿を見てるかもしれないしね」

もしそうなら安心なのだが……。そうじゃなかった場合は探しに行かないと。

改めてそう思い直していると複数の足音が聞こえてきた。

その足音が聞こえてくる方に向こうとする。

「おはよう、なのはちゃん。それから、おはようございます、恭也さん」

「おはようなの、すずかちゃん」

「おはよう、お邪魔してるよ」

なのはたちが来たと言うことはお姉ちゃんたちも戻って来るとうことだ。ちょうどお姉ちゃんが戻って来たところだし早速訊いてみよう。

「お姉ちゃん……リリンを見てない？ 昨日から姿が見えなくて」

「いいえ。見てませんよ」

「……そっか」

これは街に探しに行かないといけないな。でも、その前に庭を隅々まで調べないと。もしかしたら戻って来ているかもしれないし。

俺はリリンを探しに行く前なのはたちに挨拶をする。

「いらつしやい、なのは、恭也さん。どうぞ、ゆっくりしていつてくださー」

俺の言葉に恭也さんは「ああ」と返事をする。忍さんに腕を捕まれて家の中へと引つ張られていった。

どうやら二人つきりで過ごすようだ。仲が良いようで何よりだ。

「ねえ、蓮君。さつき、ノエルさんに訊いていたリリンって？」

そういえば出迎えになのはもリリンの事は知らなかったね。

「手足だけが白い黒猫の子猫だよ」

案外目立つ色合いなのだからもしかしたら見ているかもしれない。

と、ほんの小さな希望が鎌首をもたげてくる。

だが、そんなことはなかった。

「ううん。見てないの。そんな特徴的な子猫だったら見たら忘れられないと思うの」

「……そっか」

ほんの小さな希望があったから余計にショックが大きくなる。

「じゃあ、俺はリリンを探してくるから……ゆっくりしていつてね、アリサ、なのは、ユーノ」

俺はそう言うとりリンを探しに再び庭を散策しに向かう。

「……見つかるといいわね」

そんな折、アリサがそう言うてきた。それに対して俺は「うん」と短く答えると雑木林の中へと入っていった。

「……いないか」

雑木林の中に入ってから数十分が経過したがリリンは見つからない。
い。

臭いで探そうともあちらこちらからリリンの臭いがするためいたとしても場所が特定出来ない。家の周辺は特にそうであり、嗅ぎ覚えのない臭いの方が目立つぐらいだ。

「……街の方に行くべきか」

ポツリとその言葉が口から出る。もしやと思い庭を探していたが見つからないので街に探しに行くしかない。

そうと決まれば街に探しに出かける事を伝えに戻らないとな。無断で出かけて変に心配をかけるといけないし。

俺はすずかたちがお茶会をしている場所に戻る。

「すずか、リリンを探しに出かけてくるね」

「分かった。帰りは？」

「夕方には帰ってくるよ」

それから、また探しに出かけるつもりだけどね。それも……見つからなかつたらの場合だし。

「それじゃ、行ってくるね」

「気をつけなさいね。余所見して人にぶつからないように」

「そこはちゃんと注意するよ」

俺はそうアリサに返事をする。余所見して他人にぶつかったらその分だけリリンを探す時間が短くなってしまふからそんなことをするわけにはいかない。

「リリンちゃん？　くん？　どっちだか分からないけど見つかるいいね」

「うん」

俺はなのはの言葉に頷く。同時に視界の端に猫たちに追い回されているユーノの姿が見えた。

猫たちに捕まらないように必死に逃げている。だが、誰も助けよう

とはしていなかった。ユーノはなのはやアリサ、すずかに助けを求め
るような視線を向けているが誰も気がついた様子はない。

ユーノ……頑張って逃げてくれ。俺はリリンを探しに行くから助
けに行くことは出来ない。



街に探しに探しに来たのはいいが……何処から探すべきなのだろ
うか？

リリンが絶対に向かわないであろう場所を除くと範囲は狭まるが、
その範囲内にいない場合は何処から探すべきなのだろうかと迷って
しまう。

俺も海鳴市全域を網羅しているわけではないのであまり慣れない
場所にいくと迷ってしまう可能性がある。

探しに出て自らが迷ってしまうのは情けない話になるのでそれは
遠慮したい。

なので、近場の公園から探そうと移動していると不思議な臭いがし
た。

動物の臭いだ。それは間違いないのだが……なんと言うか……言
葉に言い表すのが難しい。

動物の臭いなのだが……動物らしくない臭いなのだ。

その臭いがする方向に視線を向けると……黒いマントに胸らへん
を覆う服に太ももが大きく露出した格好をしているオレンジ色の髪
の毛の女性がいた。

しかも、その女性も俺の事を見てる。メツチャ、ガン見されている。
俺は何かやってしまったのだろうか？

内心首を傾げているとあることに気がついた。

それは……その女性から犬？ の耳と尻尾が生えている事だ。

「あの……尻尾と耳が出てますよ？」

「ん？ それがどうしたんだい？」

自分の尻尾に視線をやった後に耳を触る女性。

思わず話しかけてしまったがしようがないと思う。だって……すごく目立つ格好をしてるんだし。

しかも、耳と尻尾が出ていることについて何の疑問も抱いていない。

「目立ちますよ」

「……ああ、そうだね。だから、耳と尻尾に異様に視線が集中してたのか」

一人納得したように頷く女性。

えらくズレている人だと思った。

ついでだから、リリンの事を見てないか訊いてみよう。

「あの……手足の部分だけが白い黒猫の子猫を見てませんか？」

「いや、見てないね。飼い猫かい？」

「居候先の飼い猫です。昨日から姿が見えなくて」

「それは心配だね……大事な子猫なんだろう？ あたしも探し物の最中だからそれがなかったら手伝ってもよかったんだけどねえ」

何か格好とは裏腹にとってもいい人のようだ。

「はい、大事な子猫です。心遣いありがとうございます。探し物、見つかるといいですね」

「ああ、そっちもね。それから、驚かないんだね……目の前で尻尾と耳を隠したのに」

不思議そうに見てくる女性に俺は笑顔で答える。

「ええ、今さらなんで」

「今さらねえ……」

スツと女性の目が細くなる。と、同時にピリピリとした気配が伝わってくる。

それでも俺は笑顔を崩さない。

「はい、今さらです」

氷村の家で浴びせられていた視線と比べればこの程度と言う事はない。

っ!? 突然走った悪寒に従い俺はバックステップをする。きしくも目の前にいる女性も俺と同じタイミングでバックステップして先

程までいた場所から離れた。

そして、次の瞬間……その場所のアスファルトをぶち抜いて額に寶石の付いた八つの頭を持つ巨大な蛇が現れた。

「ジュエルシード!!」

お互いの声に反応して視線を向け合う。

その瞬間、この女性は地球の住人でないことが確定した。

ユーノと同じく魔導師と呼ばれる存在なのだろう。でも、なのはの持っているレイジングハートのようなデバイスと呼ばれる物を持っていないのでデバイスが無くても魔法が使えるのだろうか。

「お姉さんの探し物はジュエルシードですか……」

「そうだよ……邪魔をするならガブツと「いえ、邪魔はしないのでどうぞ」……って、いいのかい?」

敵意を見せたと思っただけなら急に困惑したような声を出す女性。

「封印とか出来ないし、触りたくないのよ」

ユーノたちは家でお茶会をやっているからすぐには来れないんだし、魔導師らしい女性に渡した方がまだ安全だろう。素人が持つよりは……。

「そ、そうかい……」

「はい……そうです」

こうやって話してある間も蛇がどんどん鎌首もたげて俺と女性を食べようと襲いかかってくる。

一体……どれぐらいの長さなのだろうか? ものすごく伸びては縮んでを繰り返している。しかも、お互いの体がまらないように器用に動かしているからそれなりに頭も良いのだろうか。

「それじゃ……いくよー!」

女性の周囲に三つほどの黄色い球体が発生する。それらからはパリパリと帯電している。

そこから槍のように先の尖ったものが発射される。なのはのとは違い球体自体は発射するためだけの存在のようだ。

それらは一定の間隔で途切れることなく巨大な蛇に向かって発射されて、蛇の頭や体に命中していく。

「シャアアアアア！」

だが、蛇にはあんまり聞いている様子は無い。むしろ起こっているように見える。

「チッ」

そんな、蛇に対して舌打ちをする女性。

巨大化しているから効き目が薄いのかな？ 何となくだがそう感じた。

これは俺も手伝った方がいいかな？ このまま任せっぱなしにするのも気分が悪いし。

ジュエルシードの数が減るなら俺は構わないしね。ユーノには悪いけど……。

なのはだけじゃなくて他にも封印とか出来そうな人がいるんだしさ……その人に任せた方がいいでしょ。

交渉は当人たちでやってくれれば問題ないしね。

俺はいざというときのためにちよろまかしていた鞭を服の中から取り出す。

この鞭はお姉ちゃんによって処分されそうになっていた忍さんが所有していた鞭だ。長さは一メートル弱で俺でも上手く使えそうなのでお姉ちゃんにバレないようにちよろまかしたのだ。

バレてないか内心ドキドキである。

二、三回ほど素振りをして使い勝手を確認する。こんな余裕があるのは目の前にいる巨大な蛇の頭をすべて犬？ 耳と尻尾を再び生やした女性のお陰なのだ。

「……しっくり来る」

思った以上にしっくり来た。思った通りに動かせる。

「……ハアアアア！」

「シャアアアアア！」

殴り飛ばされながらも蛇たちは次々に空いた隙間を埋めるようにしながら女性に襲いかかる。

女性の方はラチがあかないことに対して苛立っているのだろう、犬歯を剥き出しにしている。それでも動きは精細を欠いていないので

焦っているのではなく苛立っているのだと判断した。

「……それじゃ、さっさとやりますか」

俺は鞭を右手に持ち、右手首から血を流す。

流した血は鞭を伝い、地面に向かう。

だが、その血は地面には落ちずに鞭全体をコーティングする。

鞭の表面を血が高速で流動し超振動しながら覆う。

その鞭を横風ぎに振るうと、スパン！ と何の抵抗もなくアスファルトの破片が裂けた。

「こんなものかな……」

鞭がアスファルトの上に触れたそばからアスファルトが削られていく。

どうやら俺が思っていたよりもずっと強力なようだ。

これなら、あんまり時間をかけずにリリンを探しに行けそうだ。

俺は巨大な蛇に向かって姿勢を低くしながら駆け出した。

第18話

「…………ごめんね」

俺はそう小さな声で言いながら鞭を横風ぎに振るう。

ヒュン！ と風を切りながら横一線に鞭が八つある蛇の頭の一つを切り落とす。

「あんた…………ツ」

蛇の頭に追われていた女性が一瞬驚いたような表情を浮かべていたが、すぐに自分に迫ってくる蛇の頭に気がつくのと、その頭を蹴りあげた。

「手伝いますよ……………」

俺は近くにある塀を足場にして先ほど蹴りあげられてのけ反っている蛇の頭を鞭を横風ぎに振るい切り飛ばす。

その勢いのまま一回転したのち、縦横斜めと鞭を振るい俺に向かってくる蛇の頭を迎撃する。

「うわあ…………えげつないねえ」

と言う声が聞こえてくるがさっさとジュエルシールドをどうにかして欲しいのだが…………。

「…………ジュエルシールドをどうにかして欲しいんですが」

地面に着地した瞬間を狙って俺の足元からさらに蛇の頭が飛び出してくる。それだけではなく切り落とした蛇の頭があった場所からはさらに蛇の頭が生えてきている。

最初は八つだったのに今じゃ二十に増えているから堪ったものじゃない。

「手伝いますとか言いながら早速あたしの手を煩わせるんじゃないよ！」

そんなことを言いながら空中に飛ばされた俺を空中で抱き抱える女性。

「…………無視してよかったですか」

「ハア!?」

すつとんきような声を上げる女性。その顔には何言っただこい

つは……と言うような自殺志願者か馬鹿を見る表情を浮かべていた。

「あの程度なら全く問題ないので」

実質、霧化すれば物理的な攻撃はほぼ効かないのだ。

「それにしても……増えましたね」

「増やした本人が言うんじゃないよっ!」

「いや、そう言われましてもそんなの知ってるわけないじゃないですか。初見じゃさすがに無理です」

初見で知るはずもない能力を知っているわけないのに言われても困る。

「あゝ!! めんどつちいね! 何かこう派手にブチのめしたくなるよ……」

苛立ったようにそう呟く女性。

派手にブチのめすねえ……出来なくはないけど、疲れるから嫌だ。やりたくない。

出来るだけ疲れずに終わらせたいのだ。リリンを探さないといけないから。

「やっぱり本体を狙うしかないですかね」

「……出来るのかい?」

いぶかしむような声で訊かれる。

「……出来ますよ。あんまりやりたくないですけど」

グロいことになるし……。

「……そうかい」

「ええ、ですが……やらないと終わらないようなのでやります」

俺は体を霧に変化させると宝石の付いている蛇の頭の上に行くと体を霧から人型に戻す。

そして、左手の爪を鋭く伸ばして蛇の頭に突き刺す。

分子運動をコントロールする力を使っているため何の抵抗もなく蛇の頭に爪が埋没していく。

その数瞬後、蛇の頭がボコボコと膨張して弾けとんだ。

ビチャビチャと降り注ぐ蛇の血肉。

その光景を作り出した俺の事をあんぐりと口を開けて放心しながら

ら見ている女性。

ジュエルシードが地面に落ちる。

「落ちましたよ」

地面に落ちたジュエルシードに視線を向けてから女性にそう話しかけたが返事はない。

信じられないもの見た様子で固まっているままだ。

このまま女性が復活するまで待っているのも時間の無駄なので、俺はリリンを探しに行くことにした。

「それでは……失礼します」

女性に向けて一礼すると俺は背を向けてリリン探しの再開をしたのだった。



「…………ふう…………よかった」

俺は女性からある程度離れた位置まで来ると溜め息を漏らす。

あのまま、あの場所にいたら危うく吸血衝動に襲われてしまっていたからだ。

未だに吸血衝動は治まっていないが濃い血の臭いを嗅がない限り大丈夫なレベルで落ち着いている。

蛇の血肉が降り注いだ時は本当にヤバかった。今すぐにも降り注ぐ蛇の血肉に食らいつきそうになっていたから。

吸血衝動は暴走させると俺の理性を吹き飛ばして思考がすべて吸血したいと言う衝動に支配されるからだ。

対象は人だけでなく野生の動物も含まれる。

未だにこの身には洗脳の残しが残っている。一度外されたタガが戻らないから……。

これでも大分改善はされているんだけどね。

一年前までは三食必ず血を飲まないといけなかったし……。

その事に対して内心苦笑する。

本来であれば毎日血を飲む必要は無いはずなのに、俺は飲まないと

理性を失って吸血衝動に支配される。そして、満足がいくまで血を飲まないと理性が帰って来ない。

我ながら本当に困った体質だと思う。異能の力を使えば使った分だけ血を飲みたくなるし、時間が経っても血が飲みたくなる。……はた迷惑な体質である。

中毒と同じだ。禁断症状として吸血衝動が現れるのだから。

それでも、洗脳の残しが無くなればマシンにはなるだろうけど……きつとそれでも夜の一族の平均以上に血を飲むんだろうなと予想している。

俺はジュエルシードのことをいつ爆発するかも分からない爆弾だと思っっているが俺自身も似たようなものだと言うことを否定出来ない。

ジュエルシードのように広範に影響を及ぼす事はないが局地的な被害であればそれと同等のものを出せると思う。

「……吸血衝動に負けないようにしないとな」

恩人である……すずかや忍さん、お姉ちゃんにファリンさんに手をあげたくはない……。例え何があろうとも、それだけは絶対に避けなければならぬ！

「……ただいま」

夕方近くなり俺は家に帰って来た。本当だったらもう少しリリンを探していたかったのだが……吸血衝動が少しずつ強くなってきたので戻って来たのだ。

まだ、我慢しながらも普段通りに動けるレベルではあるが一気に衝動が強くなるかもしれないので念のために早めに帰ることにした。

「おかえり……早かったね」

すずかが微笑みながら玄関に小走りやって来た。何か良いことでもあったのだろうか？ 機嫌が良さそうだ。

「うん……ちよつと疲れることがあってね。それよりも機嫌が良さそ

うだけどうしたの？」

「実はね……リリンちゃんが見つかったんだよ」

「……本当!？」

よかった……でも、何処にいたんだろうか？ リリンが見つかったことに安堵しながら俺はリリンが何処にいたのか気になった。

「ユーノ君から聞いたんだけどねジュエルシードを使って大きくなっていったんだって。それを他のジュエルシードを求め魔導師がリリンちゃんに魔法をぶつけてジュエルシードから分離させてジュエルシードを封印したみたいだよ。その際になのはちゃんと戦ったみたいなんだけど……」

言い淀むすずか。大方、なのはが負けたか何かしたのだろう。

「怪我とかは無かったの?」

「ううん。ただ、気絶させられちゃっただけだよ」

それならよかった。その事に内心で安堵の溜め息を吐く。

怪我でもされてジュエルシードの回収が出来なくなってしまったらと思うとゾツとしない。

でも、まあ……ジュエルシードの回収出来るのが三人に増えたのだからよしとする。

それよりも……リリンを助けてくれた魔導師にはお礼をしなくてはならない。

例えジュエルシードの回収が目的でリリンを助けたのが偶然だったとしてもだ。リリンがいなければさすが俺を見つかることも無かったのだから、俺にとってはリリンは幸運の招き猫である。そんな、リリンを助けてくれたのだからお礼は当然するべきなのだ。

「そう……外見とかは聞いた?」

「うん、一応ね。金髪で黒いレオタードに短いスカートとマントを羽織った私たちと同じくらいの女の子だって」

これまた……一度見たら忘れられないようなインパクトのある格好をしてるな。

リリンを探してたときに会ったあの女性と同じで服装だけで探せそう。今日会った時と同じ格好をしていればの話だけど……。

臭いだけでも探し出せると思うのでお礼に行くのには特に困らないだろう。

「……それにしてもコスプレみたいな格好だと思うけど」

「うん……だよ。私もそう思ってたんだ……」

「やっぱりか……なのは格好自体がすでにコスプレの領域だもんね。」

「……ずっとあのままの格好なのかな？」

「一応……変わるんじゃないかな？ お婆ちゃんになってもその格好だとちよつとね……キツイものがあると思うの」

「だよ。……少なくとも……三十を越えたらちよつとね」

「だね」

三十を越えて小皺が増えてきた大人が小学生が着ている制服のコスプレをしている姿を想像した。

「……なんとも言えない虚脱感と共にうわあ……と言う可哀想な人を見たときの気分になる。」

「でも、私だったら平気だね」

「だよ。……夜の一族だから本当に歳をとるまで若い姿だもんね」

夜の一族だから当然と言えば当然なのだ。聞いた話だと血の薄かった俺のお母さんは俺を産んだ時の年齢はすでに百を越えていたそうだから……その時の写真を見たときのお母さんの外見的年齢は二十代前後だった。

「うん、みんなに羨ましがられること間違いなし」

「皆……若いままでもいいからね。羨ましがられるだけじゃなくて嫉妬されるんじゃない？」

「……そうかも。アリサちゃんなんか特に「詐欺ね……私も夜の一族に産まれたかったわ」とか言いそう」

「ハハハ……案外、二十代の若さを維持してるかもよ」

アリサならそれぐらいはやつてのけそう。実年齢は四十代でも外見年齢は二十代とか……。

「アリサちゃんならあり得そう」

「でしょ。なのはもそれに似た感じになるんじゃない？ なのはのお

父さんも見た目がすごく若いしよ」

「あく、確かにそうかも……恭也さんのお兄さんって言われてもあんまり違和感が無いくらいに見た目が若いからね」

「すずかもそう思うか。」

「特になのはたちの血縁には本当は薄くはあるが人外の血が流れているんじゃないだろうか？　そう邪推してしまうほどだ。」

「だよね……整形でもしてるんじゃないかって思うもん。それで、すずかは魔法少女にでもなりたいの？　さっき外見的年齢の問題なら心配ないようなことを言ってたし」

「魔法には興味はあるけど魔法少女にはならなくてもいいかな。使えるんだったら使ってみただけだし」

「ふーん……そうなんだ」

「蓮くんは魔法とか使ってみたいとは思わない？」

魔法か……。

「使ってる異能自体が魔法みたいなものだし特別使ってみたって気持ちはないかな」

「そうなんだ……」

「そうだよ」

普段の生活でとてつもなく役立つなら是非とも使いたいけど……そこまで役立つようには思えないので特にいいやと思ってるのが現状だ。とは言え全く興味が無いわけではないのでどんなものか見てみたいと言う気持ちはある。

だが……魔法を使うのにデバイスと言う明らかに地球ではオーバーテクノロジーなものが必要みたいなので作り出すのにどれくらいの期間が必要なのか分からない。下手したら俺やすずかが寿命で死ぬまでにデバイスが作れるのか分かったものではない。

でも、海鳴市だけでも人口は数千を下らないのに現在デバイスを使っているのがなのはだけ。そうなるのとともじやないが需要が少なすぎて誰も作ろうとは思わないだろう。

と言うか魔法の適性があるかないかを調べるのはどうやってやるのだろうか？　まずはそこからだと思う。

それはさておき……リリンの様子を見に行かなくちゃ。

「……うん、怪我がなくてよかった」

部屋に戻ると俺が使っているベッドの上にゴロリと寝ころがっているリリンの姿があった。

ただ、若干ではあるが毛かボサついているがブラシでとかせば整えられる程度なので気にすることではない。

ふと、鏡を見ると瞳が爛々と紅くなっているのが見えた。血が足りなくなってきたようだ。

吸血衝動も後五、六時間であれば耐えられそうなので安心だ。それまでの間に血を摂取できる機会が訪れるので……。

それを前提にすることだから完全には安心出来ないが不確定過ぎるよりもまだいいだろう。

「……明日でいいかな」

リリンをジュエルシードから解放してくれたお礼に行くのは……。

だって、今日はもう少しで夕食の時間になるし、何より持っていくお土産を買うお店である翠屋が閉まってしまふ。

彼処のお店は意外にも閉店時間が早いのだ。確か……七時には閉まってているんだったかな。

そんなに早く閉めてしまつて収入は大丈夫なのかと思つてしまふが……何とかなるから閉めているのだろう。

全くお客さんがいない時間は無いようなので問題なく運営出来るからすごい。少なくとも並大抵のお店では出来ないことだ。

明日は何をお礼のお土産にするべきだろうか？ シュークリームにすべきかケーキ類にすべきか……そこが悩み所だ。

少なくとも何が嫌いなのか分からないので無難なの一番だろう。大きくもなく小さくもないサイズで幾つか個数があれば問題ないはずだ。それなら嫌いなものがあつてもそれを手に取らないだろうし。

まあ、全てはお礼に行く明日になつてからだな。

第19話

翌日。

学校が終わり、家に帰ってきた俺は部屋にバッグを置いて私服に着替える。

そして、翠屋でお礼用のお土産を買ったのが一時間前。

現在はどうかと……。

「何であんたがここにいるんだい？」

黒いワンピースを着た金髪の少女の背後には昨日共闘？ した女性がいた。

「見て分かりませんか？」

俺はずいつと片手に持っていたお礼用のお土産を彼女らの目の前に出す。

「……ん？ 甘い匂いがするねえ」

「そうなの？」

「そうだよ。どうやらお菓子か何かだと思うよ」

「……いや、正真正銘お菓子なただけど……」

お菓子じゃなかったら何なのだろうか？ あれか……ご飯か。

それは……栄養が偏りそうだ。……あ、偏りそうではなく偏るだった。

「それで……何の用？」

ジツと俺の挙動を一つも見逃さないように見てくる金髪少女。

……さて、どう説明したらいいのだろうか。

結局、俺が彼女らと自己紹介をするのにはそれから一時間ほどの時間が必要であった。



「ほら！ フェイトも食べなよ！ これ、すごく美味しいよ！」

「あ、うん……あむ……っ！ 本当だ」

「美味しくなかったら俺が困るんだけどね」

お土産に買ったやつが美味しくないって言われたらショックだし……。

一触即発になりかけたが交渉を続けて何とか彼女たち——金髪の少女フェイトと本人曰く狼の耳と尻尾を生やした女性アルフさん——と打ち解ける事が出来た。

今は彼女たちの家に上がり俺が買ってきたお土産を食べているところだ。

「それにしても……」

俺はフェイトたちの部屋を見渡す。

そこには最低限の家具しか置いてなかった。寂しいと言うか閑散としていると言うか。

氷村で俺が過ごしていた部屋にそっくりだ。

いい思いではないのであまり思いだしくはない。なので、その事を思考から外して改めて部屋を見渡す。

一時的に拠点にするならこんなものかと納得してしまうぐらい家具が使われていなかった。

「やけに殺風景な部屋だね。もつとこう……明るくしようとは思わないの?」

「……あなたには関係ない。私の帰るべき場所は母さんのいるところだから」

さいですか。帰る場所があるならいいけどね。

「でもさ、フェイト。あいつのいる場所の方がここよりも殺風景じゃないか」

ここよりも殺風景な場所って……どれだけ寂しい場所なのだろうか? 氷村にあった俺の部屋と同程度ぐらいか、それともそれ以上なのか……。

どちらにしろ寂しい場所であることは否定出来ないな……。

「……そうだね。だけどね、アルフ。私が戻らなかつたら母さんは一人ぼっちになっちゃうから」

寂しそうに笑うフェイト。そんなフェイトに複雑そうな表情を浮かべるアルフ。

この二人の間では何かに対する認識が違うようだ。その何かは分からないが……。

それよりも俺が気になるのはフェイトから薄くはあるが血の臭いがする事である。

目に見える箇所には怪我があるようには見えないから服に隠れているのだろう。誰かを傷つけてその返り血を浴びた訳じゃなさそうなのでそう思った。

「……お母さんのこと好きなんだ」

「……うん」

「……フェイト」

やっぱりフェイトの母親に関してはフェイトとアルフさんの間でかなりの温度差がある。

と言うことはアルフさんはフェイトの母親に対して何か思う事があるのだろう。知ろうとも思わないし、知りたいとも思わないが……。

所詮、俺は他人でしかないし、彼女らもジュエルシードの件が終わりに次第地球からいなくなるのだし。下手に詮索して行動を鈍らせるより現状維持してもらった方が都合がいい。

「……さすがに安全ならそれでいい。」

「ただ……いつまで月村家（ご）にいられるか分からないけどね。」

少しばかりの幸せを得ると同時に俺は狙われるようになってしまったから。

氷村の庇護が無くなったから氷村家の中で俺を殺したいほど憎んでいる人に対する枷が無くなったのだから。

「ん？ どうしたんだい……急に溜め息なんか吐いてさ」

「……いや、ちよつとね……余計な事を考えちゃっただけだよ」

無意識のうちに溜め息を吐いていたらしい。気をつけないといけない。すずかやお姉ちゃんは何かあったんじゃないかと勘繰りそうだから。

忍さんは……どうだろうか？ 案外何も言わずに何故そうなっているのかの原因を察していそうだ。

そんな光景がありありと想像出来る。

「ふくん……そうかい」

「……もう用は済んだでしょ」

フェイトが口端にクリームを付けたままキリツとした表情でそう言ってきた。

せっかくのキリツとした表情が口端に付いたクリームのせいで台無しである。

「ジュエルシードの捜索に行きたいのは分かったけど……口に付いたクリームはちゃんと拭ってかないと駄目だよ」

「ふえ？……あう」

フェイトは一瞬だけ呆けると慌てて紙ナプキンで口元を拭う。そして、顔を恥ずかしさで赤く染めて俯いた。

「……ぷっ……くく……」

アルフさんなんか口元に手を当てて必死に笑いを堪えて体をプルプルと震わせている。

クリームを付けたままキリツとした表情をしてたんだから本人からしたら相当恥ずかしいし、アルフさんからしたら普段はしないようなドジに思わず笑いが込み上げてきたんだろう。

でも……こんな可愛らしいドジでよかつたと思う。ファリンさん並みのドジだったらと思うと……背筋が震える。

落下してくる花瓶、飛んでくる刃物、転がってくる石鹼や洗剤の類い……どれもきわどいタイミングで起こるので油断出来ない。

「……それじゃあ、俺は行くからリリンの事はありがとね。それとジュエルシードを集めるのは頑張ってね」

俺はそう言うのと玄関に向かい靴を履いてフェイトが滞在しているマンションから出て行った。



「……さて、どうしようか」

リリンを助けてくれたお礼は終わったのでこれからどう過ごそうか考える。

家に戻って読書するか、適当に散歩して時間を潰すのか……それともジュエルシードを探すのか……。

ジュエルシードを探すのは無しとしてもどうやって今日は過ごすか……とりあえず、公園のベンチに座って落ち着こう。

ベンチに座ってボーと空を見上げていると空き缶が宙に上がってきたのが見えた。

「……缶蹴り？」

そう思った俺だが次の瞬間には違うことを知った。

宙に上がってきた缶を追うようにピンク色の球体が現れたのだ。

「ああ……なのはか」

よし……帰ろう。

俺は何も見なかったことにして公園から立ち去った。

だってねえ……魔法の練習をしているなのは邪魔をするわけにもいかないし、何よりも魔法の練習に付き合いたくないしね。

あ、でも……どんな魔法が使えるのかだけは知りたいかも。

まあ、それも後で訊けばいいことだし今訊く必要はないか。

それよりも俺としてはフェイトたちと争うよりもジュエルシードを封印して欲しいんだけどね。

どっちが封印しても封印したことには変わらないんだしさ。

何でわざわざ同じ目的なのにぶつかり合うのか疑問なのだが……。

譲れぬ事情があるのなら仕方がないなんて俺は思わない。さっさと封印してくれないと被害に遭うのはこっちなのだから。

まったく……どしがたい。

……争うならプライベートでやって欲しいものだ。

もし……なのはとフェイトのジュエルシード争奪戦になり、さすがに被害が出るのならば……その時は……。

……隷属させるのも辞さない。

例え、誰に文句を言われ居場所を失ったとしてもだ。

恨まれても構わない……。それで済むかたちの安全が確保される

なら。



「へへ、トラも肉球は柔らかいんだね」

「どうだろう？ あくまでも外見を似せただけだから完全に柔らかいとは言えないよ」

家に戻ると俺はすずかに頼まれてトラの姿に変身した。モデルはホワイトタイガーである。

大きさは一メートル弱。現在の俺の体の大きさだとこれ以上のサイズに変身すると負担が大きいのだ。

「すずかお嬢様。蓮君を見……ま……せんで……」

ファリンさんが俺の姿を見て固まった。

「蓮君ならここにいろよ」

「はい？もしかしてそのトラが蓮君ですか？」

「そうですね何か？」

俺はトラの姿から元の人型に戻る。

「はあく、ビックリしましたよ。家の中にトラがいるんですから」

ホッと安心したように息を吐き出すファリンさん。

何かビックリさせたみたいで申し訳ない気持ちになる。

「それで何の用です？」

そう問いかけるとファリンさんはそうでしたと言って一回ゴホンと咳払いしてから話し出した。

「はい、実は今度の休日に皆で温泉に行こうって事になったんですよ」

「温泉!? 本当なのファリンさん！」

温泉か……しかも今、皆って言ってたから月村家全員で行くってことだよな？ 猫たちの餌はどうするんだろう？

それに関して心配なので訊くことにした。

「それじゃ、猫たちの餌はどうするんですか？」

「それについては心配いりません。お姉ちゃんがその日だけ人を手配しておくそうなので」

「そうですか」

それなら安心だ。リリンが餓死なんてしてたら俺はきつと泣いちやうから。

「それじゃあちゃんと伝えましたからね。その日は予定をいれないでくださいね」

ファリンさんの言葉にはいと俺とすずかは返事をする。

その返事を聞いたファリンさんは満足そうに頷くと夕食の支度に戻りますねと言ってキッチンの方に向かって行った。

「温泉かあ……蓮君は温泉に行ったことある？」

「ううん、ないよ」

「そっかあ、だったら温泉に行くのは初めてなんだね」

「そうだよ」

初めての温泉……普段入るお風呂とは何処が違うのだろうか？
楽しみだ。

「すずかはもう何回か温泉には行ったことあるんでしょ」

「うん、あるよ」

「どんな感じ？」

「うくん……そうだね……料理も普段食べているのとは違うし、温泉にも種類があるから結構楽しめると思うよ」

「楽しめるか……」

楽しめる……何を楽しむのだろうか？ 料理かもしくは種類がある温泉か……。

まあ、自分で直接体感した方が分かるか。

それにしても……家族旅行みたいでワクワクする。

家族旅行なんて絶対に行けないと思ってたから……。

「蓮君……ニヤケてるよ」

「え？ あ……本当だ」

顔を触ると口元が緩んでいた。

すずかはそんな俺を微笑みながら見てる。何だか恥ずかしいが悪い気はしない。

むしろ嬉しく感じる。ここにいていいんだと証明されているよう

で……。

ああ……幸せってこう言う事なのかな？ 嬉しく感じられる出来事に出会える場所や一緒にいてくれる人がいる今。

「楽しみだね」

「うん」

ありがとう……すずか。すずかが臆病な俺の手を掴んでくれたから今がある。だから、本当にありがとう。

口には出さないで心の中で言う。口に出して言うのは何だか恥ずかしいから。

「ところで……温泉ってことはどっかのホテルに泊まるの？ それとも旅館？」

「多分ね、ホテルだと思うよ。去年もそうだったし」

「そうなんだ」

去年もってことはすずかたちは毎年温泉に行ってるってことか……。

毎年行ってるってことはそれなりに良いところなんだな。

ますます、楽しみになってくる。

「蓮君、何だか楽しそうだね」

「うん。初めてだから余計に楽しみなんだと思う」

さつきからワクワクしたままだし。

「そっか……」

時折、すずかから温かい視線が向けられる事があるが……それは何なのだろうか？

現に今、温かい視線で見つめられている。

氷村で向けられていた視線とは正反対だからちよつと落ち着かない気分になる。でも、このままでいいかなって思う。

何でか分からないけど、そう思ってしまうのだ。

○ ○ ○

同時刻——某所。

薄暗い森の中に一人の女性が立っている。その女性の服装は青い

ワンピースであり、山の中にいるにしてはえらく軽装である。靴はハイヒールを履いておりどう見ても山の中を歩くものではない。

「……ああ、やつと……」

その女性はそう呟くと空を見上げる。

目元にある濃い隈を際立たせる病的に白い肌にボサボサに伸びた黒い髪……それはまるで幽鬼を彷彿させるようであった。

そして、ニンマリと狂気の見え隠れした表情を浮かべると一言呟いた。

「……待っててね直ぐに行くから」

クフ……クフフフ……と声が無処からともなく聞こえ出してくる。

その声が聞こえなくなると同時に女性の姿は消えていた。

その女性が立っていた場所には一枚の写真が落ちていたのだった。

一人の少年の写った写真が……。

やがて、その写真は風に飛ばされ山の奥深くへと飛び、消えていった。

第20話

待ちに待った休日。そう……温泉に行く日がやって来た！

自分でもビツクリするくらい楽しみにしていたようで昨日は中々寝つけなかった。

そんなに楽しみにしていた自分が信じられないが、実際にそうであったので認めるしかない。自分は本当に温泉に行くのを楽しみにしていた事を。

多分、誰よりも楽しみにしていたと自負出来る。

「ちゃんと眠れた？ 何だか眠そうだけど……」

クスクスと笑いうすずか。

「……あんまり眠れてない」

苦笑しながら返事をする。事実、楽しみであるが今現在は眠い。

「はあく、だから早めに寝なさいって言ったんですよ」

とお姉ちゃんが仕方のない子ねと小さく笑う。

「まあまあ、蓮君はまだ子ども何ですからそれくらいでいいんですよ」

今度はフアリンさんが俺の頭を撫でながらそう言う。

背後から撫でられているのでフアリンさんの表情は見えないが手

つきは優しいので笑っているんじゃないかなって思う。

何だか気が抜けてきて欠伸が出てきた。

「あらあら、本当に眠そうね」

忍さんが携帯電話を手にしながら現れた。

恭也さん辺りに電話をしていたのだろうか。

ただ、いつも以上に機嫌が良さそうだ。何かしら良いことかあったんだろう。

シヨボシヨボする目を擦りながら必死に眠気と戦う。

「眠いなら車の中で寝てたら？」

「……………そうする」

すずかの言葉に少しの間だけ悩んだが結局、寝ることにした。

眠くて上手く頭が働かないのだ。気を抜くと今にでも眠りの世界に落ちそう。

「じゃあ、車の中で寝てるから
「うん」

俺は体を霧に変化させると車の中に侵入して、そこで人型に戻ると
座席に横になった。

「……ああ……眠い……おやすみ」

瞼を閉じるとすぐに眠気が襲ってくる。その眠気に身を任せて眠
りについた。



「ちよ……っ……と……ちよっ!! いい加減に起きろおお!!」

「うくん……何?」

耳元で大声を出されたので渋々と目を開ける。

目の前に広がるのは金色。

「何? じゃないわよ! 何?じゃ! 何回話しかけたと思ってるの
よ!」

その声の主は……アリサだった。ああ、金色の正体はアリサの髪
だったのか。

一人その事に納得しながら寝ぼけた頭が徐々に覚めていく。

だが……まだ眠い。

「………誘拐?」

「何だよ!」

「違うの?」

「違うわよ!」

違うのか……。

「なら、おやすみ」

「だから……起きろって言ってるでしょうが!!」

もう……なんなのさ……。

両耳を両手で押さえて抗議の視線を送る。

「何よ……それよりも詰めてくれない。座れないでしょ」

座れない? アリサも車に乗るのか……それなら仕方がない。

「これでいい?」

「ええ」

これでようやく寝られる。ただ、途中で起こされたくないで猫の姿に変身する。これなら大丈夫だろう。

隣に座ったアリサが瞳を大きく開けて口をパクパクと動かして驚いている。

あ……でも、いや。寝よう。

だが、そうは問屋がおろさなかつた。

「……何?」

「えくと……」

何故かアリサが尻尾を掴んでいるのだ。

当のアリサはと言うと言い訳を探しているのか視線をさ迷わせている。

「……好きにして良いけど起こさないでね」

「わ、分かつたわ」

口調はちよつと緊張しているが顔は少しばかりにやけていた。それを不思議に思いながらも俺は再び目を閉じた。

「……ん?」

再度、体を揺さぶられる感覚に目が覚める。

閉じていた目を開けると……。

「あ……起きたのね」

何故かアリサの膝の上にいた。

首を動かして視線を左右に向けると右側になのは。その肩の上にはユーノが乗っている。反対側である左側にはすずかの姿があった。

「おはようなの、蓮君」

何でなのはがいるのか分からないが挨拶をされたので返事をする。

「おはよう……にゃのは」

「ぶっ……」

「にや!? にやのはじゃなくて、なのは!」

「ごめん、噛んだ」

起きたばかりだから上手く口が動かなかった。

「あれ? 何でなのはが知ってるわけ?」

俺はなのはに変身出来ることを教えた覚えはないのだが……。その事を不思議に思っているとさすがが申し訳なさそうに言った。

「ごめんね、私が話しちゃった」

さすがかか……。なら、しょうがない。

「うん、分かった。さすがが話したのなら、別にいいよ」

「……何か明らかにすずかじゃなかったら駄目みたいな言い方よね」

「別にそうじゃないけど? お姉ちゃんとか忍さんとかならいいし」

「あれ? ファリンさんは……」

それは勿論……。

「駄目」

「駄目なんだ……。何で?」

不思議そうに訊いてくるアリサに俺はハッキリと言う。

「口が軽そうだから」

何でですかあああ!!! と車の外から声が聞こえ、同時に笑い声も聞

こえてきた。

「そんなこと言ったらファリンさんが泣いちゃうよ」

「その時はその時で考えるよ」

「蓮君って結構行き当たりばったりなの」

苦笑するなのはに追従するようにユーノが頷く。

ユーノも何か喋ったらどうだろうか?

「皆そうだよ。いくら考えたって先のことなんて完全には分からないんだから」

「……それはそうだけどね」

ようやく喋ったかユーノ。

「そうそう。誘拐されたり、ジュエルシードが落ちてきたりさ」
本当に一寸先は闇である。

それが人生と言うものなのだろう。

先が分かってしまう事ほどつまらないものはない。これは断言出来る。初めから分かっているなら遣り甲斐やそれに向けて行うことすべてが無意味だ。

先が分からないからこそ楽しいのであり、不安であるのだ。だからこそ努力して必死に良い方に行こうとする。

「あく、そうよね……」

短い間に結構事件は起こり、今なお続いている。

「まあまあ……今はその事を一旦忘れて……ね」

「そ、そうなの！ これから温泉に行くんだからそれを楽しまないと駄目なの！」

すずかに便乗するようになのはが声を上げる。

「……出来ればジュエルシードの事は忘れないで欲しいな」

「蓮……そこは空気を読もうよ」

ユーノに呆れたように溜め息を吐く。

「そうだよ」

「そうね、その通りよ」

「そうなの」

次々と批難の声が上がる。

何故、批難の声が上がるのか分からない。

その事に首を傾げる。

だって忘れちゃいけないことじゃないの？ 忘れていいような案件だと思わないんだけど……。

俺がおかしいのか？ 何だかよく分からない。

「そう……なら、皆は忘れてていいよ。俺は覚えておくから」

皆が忘れてたいなら俺が覚えてればいいだけの話だしね。

うんうん……それで万事OKだ。

一人納得して頷く俺に周りからは、こいつは……と言うようなジト目が向けられた。

何故だ？

その事に疑問を抱きながらも俺はアリサの膝の上から座席後ろの

小さな空間に移動してそこで丸くなる。

「完全に……猫みたいね」

「うん、そうなの」

ハア〜、日当たりが良いのでポカポカとして気持ちいい。

このまま日向ぼっこしてるのもいいかもしれない。安らかな気持ちで目を閉じる。

「蓮君……もう、十分寝たでしょ。だから、皆でお話しよう？」

浮遊感に目を開けるとすずかの顔がアップで視界に入った。

どうやら俺は抱えられているらしい。

「……………分かった」

そう返事を返すとすずかは満足そうに頷いた。

ところで早く下ろして欲しいんだけど……。

「……………何で膝の上なの？」

下ろしてもらえたのはいいが何故か今度はすずかの膝の上なのだ。

「駄目？」

「駄目じゃないけど……」

駄目ではない。これがお姉ちゃんやすずか以外だったら確実に断っているところだが……。

「疲れたらすぐに教えてね。すぐに退くから」

「大丈夫だよ。軽いから」

「そう……なら、いいよ」

すずかの膝の上で丸くなる。爪を引っ込めて服を傷つけないようにするのはあまりまえである。

それから……雑談が始まった。



それは本当に雑談であり、話の内容もコロコロと変わっていった。

「……………今さらだけどき」

「どうしたの？」

「本当に今さらなんだけどさ」

「何よ」

本当に今さらで申し訳ないのだが……。

「何でアリサたちも一緒なの？」

「……………はい？」

「……………え？」

ポカンとするアリサとなのは。

「……………そう言えば蓮君は知らなかったんだっけ。アリサちゃんとなのはちゃんたちも一緒に行くって事を」

このあとちよつとした騒動に発展したがそれはさておき、雑談を再開する。

ちなみに車の運転手は忍さん。

急カーブでのドリフトだけは止めて欲しかった。お陰でユーノと一緒にアクロバティックな動きをするはめになったのだから。



「着いたわよ」

車が停止すると運転席からバックミラー越しに忍さんがそう言ってくる。

「……………ここが」

霧化して社内から外に出て人型に戻って目の前にある建物に目を向ける。

一体……何百人の人が泊まれるのだろうか？ もしくは数千人か……。

外観からだけでは分からない。

「……あー！荷物を持ちなさい！」

宿泊先となるホテルを見てるとちよつど車から降りているアリサに怒られた。

自分の荷物を他人に持たせるなど言うことだろう。

「うん、分かった」

車のトランクの中からバッグを取り出して背負う。

それから、別の車に乗ってきたのはの家族やアリサの執事の鮫島さんにお姉ちゃん、ファリンさんと合流して、宿泊先のホテルのロビーに移動した。

ロビーには大きな水槽が置いてあり、中にいる魚はペットショップでも見たことのない魚であった。

「……綺麗ね」

「……うん」

アリサとなのはは水槽の中にいる色とりどりの魚に目を奪われている。

「行かないの？」

「そしたら蓮君……一人になっちゃうでしょ？」

ロビーにある椅子に座ってボーとしていている俺の正面にすずかが座っている。気を使わせてしまったようだ。

忍さんたちはと言うと受付で何やら話し合いをしている。大方、部屋割りについてだろう。

忍さんは恭也さんと一緒に部屋になるだろうし、他は分からないけど子どもだけで部屋に泊めるとは思わないので誰が俺たちと一緒に部屋に泊まるのかを話し合っているのだろうと推測される。

「……そうだけど、皆いるよ。周りに誰かしらいるから独りになっても一人じゃないよ」

そう言うはずか少し悲しそうな顔をした。

「そんな寂しいことは言っちゃ駄目だよ」

「………分かった。言わない」

独りでは生きていけないが一人では生きていけない。

信じられるのは極一部の人たちだけでそれ以外は信じられない……いや、信じようと思えないのだ。

だから、俺は一定以上の距離に近づかれないように心に壁を張る。「うん。それから……蓮君は独りじゃないよ。私もお姉ちゃんもノエルさんもファリンさんもいるからね」

「……うん。ありがとね」

その言葉だけで心が軽くなる。独りじゃなくてもいいと言うたっ

た一つの事でもだ。

「皆！ ちょっと来てちょうだい！」

受付のところにいる忍さんが片手を大きく振りながら俺たちを呼んでいる。

「どうしたのかな？」

「多分……部屋割りについてじゃないかな。俺たちはまだ子どもだし、子どもだけで部屋に泊めるわけにもいけないから誰が一緒に部屋に泊まるかを教えてくれるんじゃないかな」

「あ、そうか……それもそうだね。私はこの後の予定について話し合ってるのかと思ってたよ」

「それもあるんじゃない？ でも、それだったら誰かの部屋に集まって話せばいいだけだし、先に部屋割りを決めておけば荷物をそこに置いてくれるしね」

そんなことを話ながら忍さんたちが待っている場所に歩いていく。

「皆、揃ったわね。皆と同じ部屋に泊まるのは鮫島さんよ。鮫島さん皆の事をよろしく願います」

「ええ、任せてください。それ以前に皆さまがいい子ですので私がいなくても大丈夫でしょうが……」

「当たり前よ。自分の事は自分で出来るわ」

当然とばかりに自信満々にアリサが言う。

最低限自分の事は自分で出来ないよね……そうじゃないと恥ずかしいじゃん。

それから各部屋に荷物を置きに向かった。部屋の鍵は鮫島さんが持っている。

鍵は二つあるので、もう一つはアリサが持っている。なので部屋に戻る時はアリサか鮫島さんに言わなくてはならない。

部屋の鍵は自動で閉まるようになってるのでその点は便利だが……万が一にも部屋に鍵を忘れてしまった場合はロビーの受付まで行って事情を説明しなければならぬ。

そんなアホな事になるのでちゃんと部屋から出るときは鍵を持っているかを確かめておく必要がある。

考えられるちよつとしたハプニングはそれぐらいかな？

後にその考えが甘かった事を知ることになるのだが……この時はまだ知らなかったのだ。

……運命の時はすぐそこまで迫っていた。

第21話

部屋に荷物を置いて身軽になった。

季節的にはまだ春なので暑くもなく寒くもないので皆が皆、軽装である。

温泉には一人で入った。

何故なら……他の人とは一緒に入りたくなかったからだ。

特に家族や恩人ではない他人とは……。

まあ、それは置いておいて……温泉は気持ち良かった。普段入るお風呂とはまた一味違った感覚だ。

「はふう〜」

そして、今はマッサージチェアに座っている。

マッサージチェアの振動が心地よく、大きく息を吐き出す。

これだけで温泉に来て良かったと思えるから不思議だ……。

「……………何であんたがここにいるんだい？」

「ん？」

声が出た方に視線を向けるとホテルが貸し出している浴衣を着たアルフさんがいた。

尻尾と耳は隠してあり、普通の人にはしか見えない。

「旅行だよ。そっちはって……聞く必要もないか……」

どうせ、ジュエルシード関連に決まっているだろうし……。

「そうだよ……くれぐれも邪魔をすんじゃないよ」

アルフさんはそう言うときさっさとこの場から去ってしまった。

「ふう〜」

再びマッサージチェアに深く寄りかかる。

しばらくそのまましていると複数の足音が聞こえてきた。

片目だけ開けて足音が聞こえてきた方に視線を向ける。その足音の主はアリサ、なのは、すずかだった。

しかも、アリサは何やらご機嫌ななめな様子であり、それを宥めるなのはとすずか。

「あ〜！ 何なのよ、アイツは！」

「まあまあ、落ち着いて」

「そうだよ、アリサちゃん」

完全に腹に据えかねている言った様子でダンダンと力強く床を踏みながら歩くアリサ。

そんなアリサの様子を見て俺は関わりたくないと思ったのでそのまま無視してマツサージエアに座っている事にした。

自ら危地に飛び込む必要はない。……時と場合によるが。

なので……しばらく俺は気配を消して、アリサの機嫌が良くなるのを待つ。



アリサの機嫌が直った頃を見計らい合流してその後、初めて卓球をした。

シングルだと一位すずか、二位に俺、三位にアリサ、四位になるのはだった。ダブルスだと組み合わせ次第で試合の結果は変わったが……なのはと組んだペアがビリになったのであった。

それでも、楽しかった。特にすずかとの対戦は白熱した。ラケットは四、五本破損して、球は十個以上破裂して使い物にならなくなってしまうたのだから……。

まあ、対戦が終わってからどうしようってなったが……。

これも後にはいい思い出になるんだろうかと思うと感慨深くなる。

「何遠い目をしてるのよ……」

「いやいや、卓球をした時の事を思い出してね」

そう言うときアリサが納得したように頷いた。

「ああ、そりゃあ遠い目もしたくなるわね」

アリサもその時の事を思い出したのだろう。何やら遠くを見つめだした。

さすがに残像を残すような動きはまだ出来ないがいずれは出来るようになるだろうと思う。そうなれば一人ダブルスも夢じゃない。

「アハハ……」

なのはが乾いた笑い声を上げる。それもしようがないだろう。

なのはの目からしたら完全にアニメや映画の世界でしか見れないような光景だったのだから。

「……ちよつと、やり過ぎちゃったね」

「確かにそうかもね。もう少し手加減してやるべきだったね」

すずかの言う通りやり過ぎた。本気とまでは言わないけどある程度全力で動ける場所や時つてのは案外なものだからつい自制を忘れてしまう。

今度から気をつけなくては。



夕食。

場所はホテルの大広間を貸し切つての宴会である。

隣にすずかとお姉ちゃん。正面にアリサとなのはが座っている。

忍さんは恭也さんの隣であり、お姉ちゃんを挟んだ向こう側だ。

座敷なので全員が畳の上に座り、テーブルの上には海鮮料理の他に茶碗蒸しや鍋等がある。

それと同時にお酒の匂いが漂っている。しかもこれは……俺が飲むために用意した血の入ったコップからだ。

お姉ちゃんはまずこんなことをしないでだろうし、気がついたらお酒の入っていないのにしているだろう。

そうなる……。

忍さんの方に視線を向けると忍さんはパチンとウインクを一回だけした。

どうやら忍さんが犯人で間違いないようだ。

すずかはお酒が入っているとは知らないようで気がついた様子もない。

これは飲むべきなのだろうかと悩んでいると忍さんが言った。

「それじゃ……皆、飲み物がいったようなのでカンパニー！」

カンパニー！ と皆が声を上げてコップを軽くぶつけ合う。

ガチャガチャとコップ同士がぶつかる音がする。

その甲高い音が耳に響いて辛い表情に出さないように耐える。いい感じの雰囲気壊したくはないからだ。

「……ゴクッ」

コップに口を付けて中身を一気に飲み干す。

「お！ いい飲みっぷりじゃないの……ほら、まだあるから」

飲んだ端からお酒の入っているであろう血が追加される。

注がれたのを断ると不信に思われるので必死に表情に出ないように堪え忍ぶ。

頑張れ俺……負けるな俺！ 何に対して頑張るのか分からないが頑張る。

徐々に気分が晴れ渡った青空のようになっていく。

「どうしたの蓮君？」

隣で茶碗蒸しを食べているさすが不思議そうな様子で訪ねてくる。

「ん〜？ どうもしてないよ〜」

よく分からないけど楽しい気分なので笑いながら答える。

「そう？」

何やら納得していない様子だがそれ以上は訪ねてこず、すずかは茶碗蒸しをスプーンで掬って口に運ぼうとする。

それを見て俺は何故か欲しくなった。うくん……もらっちゃえ♪

「いっただっきま〜す！」

「へ？」

俺は何の葛藤もなくすずかが口に運ぼうとしたスプーンを口に加えた。

「な!？」

ん〜、美味しい。

「……………」

「？」

何故かすずかが固まっている。

何で固まっているのか分からず首を傾げているとお姉ちゃんが話

しかけてきた。

「何をやってるんです」

「美味しそうだったから」

「だったら自分のを食べればいいのに」

「そう？　人が食べている方が美味しそうに見えない？」

「そう言いながら上目遣いでお姉ちゃんを見つめる。」

「……確かにそうかもしれないが」

「サツとお姉ちゃんが顔をそらしながらそう言った。」

「ほら、お姉ちゃんもそう思ってる。」

「テーブルに置いていたコップを手に取り口をつける。」

「ンクツ……ンクツ……プハア……」

「コップの中身を飲み干すと俺はクラリとお姉ちゃんにもたれかかる。」

「およ？　おおく、クラクラするく。」

「自分の思い通りに体が動かず、常に浮いたような浮遊感がある。」

「それでも不快に思わず……いや、むしろ楽しいと思ってしまう。」

「…………」

「なくにく？」

「無言で見つめてくるお姉ちゃんを上目遣いで見上げつつ首を傾げる。」

「……なるほど……そう言うことですか……ちよつと離してくれませんか？　私はこれからやる事が出来ましたので」

「やー」

「ギョツとお姉ちゃんの腰に腕を回して抱きつく。」

「……少しだけですから」

「……やーなの」

「ちよつと忍様にお話があるだけだから」

「だったらこうすればいいの」

「俺は忍さんに目を向ける。」

「ちよつ!？」

「ビキリ！　と蛇に睨まれた蛙の如く忍さんが動きを止める。」

「これでいいでしょ、お姉ちゃん？」

「……今回はいいでしょう」

「えへへ」

褒められたあゝ♪

「それじゃあ……お説……いえ、お話をしてくるのでいい子で待つて
るですよ？」

「ハ―イ！」

固まって動けない忍さんに向かっていくお姉ちゃんを見送る。

忍さんは視線で動けるようにしてと訴えてくるがそれを分からね
い振りをして無視を決め込む。

何か喉が渴いたので飲み物をとろうと思ひ立ち上……フラフラと
して上手く歩けない。

「ちよっ!!? 蓮! 危なっ!」

足元にいるユーノが俺に踏まれないように必死に避けている。

あれ? 何でユーノが二人いるんだろうか?

「……ユーノって増えた?」

「増えてないから!!? 何言ってるの急に!」

いや、だってねえ……ユーノが二人に見えるんだからしょうがな
い。

「蓮! あんたは座ってなさい!」

「おおっと!?!」

ユーノを踏まないようにフラフラと足を動かしていたらアリサに
手を捕まれてその場に座らされた。

「ちよ!?! 酒臭いわよ!?! 何でお酒なんて飲んでるのよ!」

アリサが着ている浴衣の袖口で鼻を覆い隠す。

「それは勿論……飲んでた飲み物に入ってたからじゃないのかな?」

それよりも喉が乾いた。

「じゃないかなって……あんたねえ、ちゃんとお酒の入ってないやつ
に変えないと駄目じゃない!」

「そうだよ、蓮君」

さすがが話に入ってきた。

ただ、少しばかり顔が赤くなっているが……暑いのだろうか？

「ん〜……」

何だか体が暑くなってきた。

なので着ている浴衣をはだけさせる。

ふう〜、これで少しはマシになった。

それから、テーブルの上にあった飲み物を適当に手に取り飲む。

「ちよつと……それ……私のなんだけど……」

さすが俺が中身を飲むにつれて声をすぼめる。

これってすずかのだったんだ……。

こういう時ってどうすればいいんだっけ……？ 手に持ったコッ

プを見てると一つの妙案が浮かんだ。

こうすればいいんだ！

早速、残っていたコップの中身を口の中に入れてと四つん這いになつてすずかの前に行く。

「蓮君？」

ジツと俺を見てくるすずかの両頬に両手を沿える。そして、笑みを浮かべながら一気にすずかの唇に自分の唇を重ねた。

「んぐっ!？」

「な!?! な、な、な……!!!」

アリスの驚愕の悲鳴にならない声を聞きながらすずかの口の中に先ほど口に入れた飲み物を流す。

「んっ……ぐ……」

「ん……ちゅ……」

上手く移せなかった分が隙間からこぼれていくのを感じる。

「ンクッ……あ……」

「んっ……ぷはあ……」

全部を流し込んだのですずかの唇から自分の唇を離す。

ツーと細い糸のように唾液がすずかの唇と俺の唇を繋いでいたがすぐに切れる。

「……………」

唾然とした様子ですずかは自分の唇に指を這わす。その数瞬後

……一気に顔を赤く染め上げた。

「ころころ……蓮君、そんなことをやっっちゃ駄目じゃないか」

苦笑しながらなのはのお父さんが近づいてきた。

「？」

何をやっっちゃ駄目だったのか分からないので首を傾げる。

「……あちゃあ……これは分かってないようだね」

困ったような声を出しながらなのはのお父さんはなのはのお母さんの方に視線を向けた。

「あらあら……まだ子どもなんですからちやんと説明しないとですよ、士郎さん」

話が長くなりそうだからなのはのお父さんの意識が俺から外れていくうちにこの場から去る。

音もなく影の中に落ちていく。

その時に驚いたような声が聞こえた気がしたが……それは気のせいだと思いい気にしなかった。



適当な場所で影の中から出る。

着ている浴衣はほとんど気崩れていて歩きにくい上に能力の一部が暴走しているのか髪の毛が異様に長く伸びて床についてしまう。

我ながらどっかの妖怪みたいだ。

「……………わああ」

廊下を移動している最中ふと窓を見ると俺の姿が鏡のように映っていた。

伸びきった髪の毛の隙間から覗く、紅く輝く瞳と色白の肌がなんとも言えないホラー映画に出てくる幽霊のように見える。

「……………これならお化け屋敷とかにいるお化けみたいだ」

その事に笑っているとおっかなびっくりにホテルの従業員の人が話しかけてきた。

「ど、どうしたのかな？」

「ちよつと迷つてるだけです」

魔眼で従業員に怪しまれないように暗示をかけておく。

「そうか……気を付けてね」

「はい」

去つていく従業員の姿が見えなくなると俺は歩き出す。目的地は
なくただ、フラフラと歩くだけ。フラフラと歩くだけに足がふらつ
てるけどね。

しばらく歩いてみると……。

「見つけました!」

「……ファリンさん?」

目の前の曲がり角からファリンさんが現れた。

「そうですよ。さ、蓮君戻りますよ」

「はい」

ファリンさんに手を引かれて夕食を食べていた大広間まで戻るの
だった。



大広間に戻つてくるとまず最初に「ギャアアア!!」と言う悲鳴で
出迎えられた。

念仏を唱えられたり、魔除けの札を投げつけられたりされてちよつ
と傷ついた。そしたら、能力の暴走で伸びていた髪の毛が勝手に動き
出して余計にパニックになってしまったのだ。

そして、現在は髪の毛は肩にかかるくらいにまで切られて短くなっ
ている。

なのはのお父さんと恭也さんがハサミで手早く切ったからだ。

すずかは俺の顔を見るなり部屋から走つていなくなっているの
今はここにいない。

すずかの方にはお姉ちゃんが向かったのでそのうち戻ってくるだ
ろうと思う。

忍さんは……何か知らないけど真っ白に燃え尽きていた。

何があつたんだろうか？ 恭也さんもあえて無視しているようなのであのままでいいのだと思うが……。

「ふああ……」

眠くなってきた。

近くにあつた座布団を重ねてちようどいい高さになるとその上に頭を乗せて目を閉じた。そうするとすぐに意識が薄れていく。

「おやすみ」

その言葉が口に出たかも分からぬまま眠りに落ちていった。

第22話

「うう……」

ムクリと上体を起こす。

「……頭、痛い」

頭の内側から発する痛みに顔をしかめる。

こめかみを押さえて、目を閉じて痛みが弱くなるのを待つ。痛みが弱くなるとゆっくりと周囲を見渡す。

カーテンの隙間から入ってくる光に照らされたテーブルが真っ先に視界に入ってきた。

「……ッ!!」

しかも、テーブルに置いてある銀色の灰皿が光を反射しているから、その反射した光で目がチカチカして弱まった頭痛が強くなった。

目を閉じて痛みを堪える。何で頭が痛いんだ？

ガンガンと痛みを発する頭を片手で押さえつつ立ち上がる。

胃の辺りもムカムカするし……一体どうしたんだろうか？

昨日のことを思い出そうにも思い出せない。記憶が大広間に夕食を食べるために移動したところで途切れている。

それよりも頭が痛い……。完全に調子が悪い。

フラフラとした足取りで洗面所に向かう。

「……っく!!」

鏡で自分の顔を見ると……思わず悲鳴を上げそうになった。

死人のように青白くなった肌に、ボサボサの髪の毛。……完全にゾンビみたいだ

「痛っ……!」

心臓の鼓動に合わせるように頭痛が酷くなった。

うう……今日は厄日か何かか？ そう思わずにはいられない。

そういえば、部屋にいたのは俺だけだったような……。起きてから部屋の中を見渡したときに誰も見ていないので俺だけ一人部屋であつてるのか？

洗面所から出て、確認すると……やっぱり誰もいなかった。

そして、どうしようか……と悩むことは出来なかった。何故なら……頭痛が酷いので考えるのも億劫になつてきたからだ。ガンツ！ ガンツ！ と激しく叩きつけるような痛みにもその場から動くことが出来ない。

「はぁ……はぁ……」

呼吸も荒くなり、ついには立つていても出来なくなった。目を閉じて痛みが過ぎ去るのをジツと待つ。

それから、お姉ちゃんが様子を見に来るまで俺はその場に踞つたままだった。



「……………」

サツと顔を背けるすずか。

部屋にやって来たお姉ちゃんに頭痛薬を飲ませてもらい、何とか頭痛から解放されて朝食を食べることが出来たが……すずかは俺の顔を見るなりサツと顔を背けるのだ。

アリサやなのはは理由を知っているのか、やれやれと肩をすくめたり、苦笑いを浮かべている。

やっぱり、昨日……俺は何かをやってしまったのか？ でも、何をやってしまったのか分からない。

「ねえ、蓮君。……昨日のことは何処まで覚えてる？」

唐突にそんなことを忍さんに訊かれる。

「えつと……乾杯するまでですかね？」

それ以降になると思い出せない……。本当に俺は何をやってしまったのだ？

「本当に？」

「はい」

本当に分からないのだ。

ふと、視線をすずかに向けると目があった。だが、すぐに反らされてしまった。

……避けられてる。その事にかなりのショックを受けた。でも、顔には出さないようにする。

どうやら俺はすずかに避けられるほどのことをしてしまったようだ……。本当にどうしよう……。どうすれば……。

「……君？ 蓮君？」

「あ、はい、何ですか？」

「どうやら、どうすればいいのか考えるのに集中していて周りのことが見えていなかったようだ。」

「調子が悪いようならもう少し部屋で寝てる？」

その調子が悪くなった原因を作ったのはあなたなんですけどね……。まあ、飲んだ俺が悪いと言われたらそうなのだが。

「いえ、風通しのいい場所ですっきりしてます」

そこで、どうすればいいのか考えよう。とりあえず今はすずかと距離をおいた方がいいはずだ。

もしかしたら時間が解決してくれるかもしれないし。そんな淡い希望を持ったりしてるが……。やっぱり何が原因なのかを思い出さないと根本的な解決にはならないだろうから頑張って思い出さないと。



ホテルの近くにある雑木林の中で一番大きな木の枝に腰をかける。

「……何が原因なんだ？」

おおよその検討はついている。昨日の記憶が途切れた後に何があつたのだ。

思い出せ……。何があつたのかを……。

酒入りの血を飲んだのは確かなのだ。問題はそれから何をやってしまったのかだ。

……。

……。

……。

……思い出せない。

その事に俺は両手で頭を抱える。

何故だ、何故思い出せない。あれか、酒のせいなのか？

くっ……どうすれば普段と同じように話せるようになる……。

プレゼントか？ でも、今の状態のままだと近寄っても避けられる可能性が高いからそれは却下だ。

だとすれば……他の誰かに頼むか、でも、それもさすが拒否したら、何も出来ない。

ああ、どうすればいいんだ。

頭を描きながらあーでもないこーでもないと必死にどうすればいいかを考える。

この言い表しにくい思いの丈を吐き出したいが、そうすると周囲に確実に被害が出るのでそのまま溜め込んでおく。

何の解決策も浮かばないまま時間だけが過ぎていく。

「……はあ、そろそろ戻らないと駄目か」

朝食を食べたのが遅いこともあって昼までの時間がかなり短い。

木の枝から地面に飛び降りる。

その際に音を立てないように注意を払っておく。あまりにも大きな音を立てると気にした人がこっちにやって来るからだ。

「さて、戻りますか」

ホテルに向かって歩き出したその時……。

「ねえ、ちょっといいかしら」

背後から声をかけられた。

○ ○ ○

時間は蓮が外に行った時に遡る。

「ねえ、さすがか」

「何？ アリサちゃん」

返事を返しながらもさすがの視線は先ほど蓮が出ていったホテルの入り口に向けられていた。

「そんなに気にしてるなら話してきたらどうなの？」

「……でも、昨日のことを思い出すと」

スツとすずかが右手の指を唇に触れさせる。

と、同時に頬が自然と赤くなっていく。

「あゝ、そうね……」

「うん、だよね……」

苦笑いを浮かべるアリサとなのは。

その二人も昨日、蓮がすずかに口移しで飲み物を飲ませた時の光景を思い出す。

あれは完全に予想外だった。誰もが目を見張ったのだから。

まさか、蓮があんな行動をするなんてと……。

「でも、このままずるずるとそうしていると蓮の方がまた何かやりそうじゃない?」

「さすがにそれは……」

アリサの言葉になのはが微妙な顔をするが無いとは言えないのでそのまま黙ってしまう。

すずかは内心そうかもと思っていた。

普段から自分に対しては異様になついていた。もちろん、蓮がお姉ちゃんと呼ぶノエルを除いてではあるが……。

「……何て話せばいいんだろう」

「昨日のことは覚えてないみたいだから……普段と同じように話せばいいんじゃないのかしら」

すがるように見つめてくるすずかに腕を胸の前で組ながら答えるアリサ。

「そ、そうかな」

「そうなの。蓮君が覚えてないならアリサちゃんの言う通り普段と同じように話せばいいと思うの」

それでも不安がるすずかにアリサの意見を後押しするようになるのはがそう言う。

それから少しして意を決したようにうんとすずかは頷く。

「……蓮君のところに行くてくるね」

すずかはアリサとなのはにそう言うのとホテルの外に駆けていった。

「とりあえず、これでギクシヤクした空気にはならないわね」

アリサがさすがの姿が見えなくなるとそう言った。それに対してはなのはも同意見だった。

「そうなの。せっかくの旅行なんだから楽しまなきや」

そう笑顔で言い切るなのはにアリサも笑顔を浮かべるのだった。

○ ○ ○ ○ ○

「あはははははははははははははは!!」

ようやく叶った出来事に一人の女性が甲高い声で高笑いを上げる。

その女性の相貌には狂喜の色が濃く出ていた。

ニヤアと口を吊り上げて、その女性は車の中にいる一人の少年に視線を向ける。

その視線は雄弁に語る……どう壊してしまおうかと。

少年はその視線を向けられても動じることなく人形のように微動だにしなかった。

その瞳から何も感じられない。ただ、虚空を眺めるのみである。

ひとしきり笑い終えると女性は車の運転席に乗り込む。

ドルルンツ!!

キーを回し、エンジンをかけると女性はバックミラー越しに、虚空を眺める少年を一度だけ見ると車を発進させたのだった。

そして、この日より……蓮・K・エアリヒカイトは姿を消した。

● ● ●

「……………」

鉄格子の隙間から入る光が部屋の中を照らす。

鉛色に錆び付いた金属製の重厚な扉が鉄格子の隙間から入る光によってその存在感を増している。

そして、手、足、首を動かす毎にジャラつと鎖が音を立てて、部屋の中で音が反響する。

「……………」

この場所には一人以外誰も来ない。来るのはいつも同じ女性。その女性の暴力を受けるのが俺。

何故、そうなっているのか分からない。

記憶が無いから。同時に感情も……。

だから、鞭で皮膚を裂かれようが痛みしか感じない。それによる恐怖でもある。

いや……喜怒哀楽そのすべてを感じない。

表情は言われた通りのを作るだけで、生きた人形と言われても不思議ではない。でも、時折頭のなかを走るノイズだけは別だ。

あの時だけはモヤモヤとしたものを感じる事が出来た。

首を動かして鉄格子越しに外を伺う。

そこから見えるのは……空と森だけ。他の景色は見えない。

「……ちゃんと起きてるかな？」

ギイイイ、と鈍い音を出しながら扉が開いた。

そこには銀色に輝くナイフを持った、女性が立っていた。

時間か……。

この女が来ると言うことは、鞭で叩かれてから数時間経ったと言うことだ。

俺の目の前に来るとその女は奇声を発しながら俺めがけてナイフを降り下ろしたのだった。

○ ○ ○

蓮が姿を消してからすでに1ヶ月以上が経過している。

その1ヶ月の間にジュエルシードに関する事件は終息した。

当時はジュエルシードが原因だと疑われていたが……二十一個、すべてのジュエルシードが封印されても蓮が見つかることはなかった。

それ故に蓮の失踪とジュエルシードは無関係とされた。

何者かに誘拐された可能性があるため警察に捜索してもらっているが状況は芳しくなく、何一つ情報がなかった。夜の一族のネット

ワークでもだ。

ただ、蓮の失踪を影で喜んでいる輩が幾人が存在していた。主に氷村家の者たちであるが。

「すずか……そろそろ、時間よ」

「……うん」

学園では蓮の話題については誰も触れない。

生きてるかも死んでるかも分からないからだ。学園側からも話題にしないようにと徹底されているからと言うのもあるが……。

「いつてらっしやいませ、すずかお嬢様」

「いつてきます」

ノエルとフアリンに見送られてすずかが家を出る。

その表情は晴れない。学園ではそれなりに取り繕っているが、家族の前や自分一人にいるときは取り繕っていない。

取り繕う必要がないから。

特にすずかは……蓮が失踪する当日に蓮を避けていたから、いまだにその時のことを気にしているのだ。

あの時、私が蓮君を避けなければこんなことにはならなかったのだと……。

その事がすずかの心の中に暗い影を作り出している。

「おはよう、すずか」

「おはよう、アリサちゃん」

背後から声をかけてきた親友とも呼べる友達であるアリサにすずかは振り向き、挨拶する。

こうして、一人欠けた日常がまた始まるのだった。



「ゴホッ……ゴホッ……」

咳き込む毎に吐き出される血が床を汚していく。

刺された箇所はすでに完治しており、傷痕すら残っていない。

俺のことを滅多刺した女は満足したのか部屋から出ていつている。

「……………」

咳も止まり、血を吐き出さなくてよくなったので改めて自分の格好を見る。

着ている服はズタボロで俺の血で真っ赤に染まっている。所々に穴が開いており、そこにナイフを刺したのだとすぐに分かった。

記憶と感情を失う前だったら何を思っていたのだろうか？

そんなことを考えてしまうがすぐに考えるのを止める。どうせ、考えたとところで意味はないのだから。

それに……この生活も長くは続かないと予想している。

俺が死ぬか……あの女が死ぬかのどちらかしかないのだから。

それよりも……あの娘は誰なのだろう？ 紫色の髪にヘアバンドを付けたあの娘は……。

彼女は記憶を失う前の俺にとっては何なんだっただろう。何故か気になった。

忘却篇

第23話

ザアアアアア……！

鉄格子越しに雨の音と跳ねた雨が部屋の中に入ってきた。

梅雨……だっけかな？ 夏の前にたくさん雨が降る時期は……。

ぼー、と鉄格子越しに外を見ているとノイズが走る。

とても不快なノイズが……。不快だと感じるその時は少し感情が戻ってきているがノイズが消えるとその不快だと感じなくなる。

部屋の中はほぼ赤黒く染め上げられている。それも、俺の血で……。

でも、死ぬことはない。失った分がすぐに再生されるから。

ここから出るのは簡単だが出ようとは思えない。

出る理由がないし、出たとしても何も目的が無いから。

だから、目を閉じて時が経つのを待つ。

いつまで続くから分からない雨の音を聞きながら。ただ、時が過ぎていく。

あれから何日経ったのだろう。

俺の手、足、首に繋がっていた鎖は千切れている。そして、目の前にいる女は白い粉のような薬を一気に飲んだかと思うと喀血して、動かなくなった。

大方、鎖は自分でなんとかしたんだと思う。時折、意識が飛んでいるのでその時だろう。

でも、この女については分からない。急に白い粉のような薬を一気に飲んで喀血して倒れたのだから。

かれこれ数時間ジツとその女を見つめているが動く様子はない。

自殺したのだろうか？ それとも、病気だったのか今はもう知るこ

とも出来ない。これから、何をしようかと考えるが何を考えても何も感じないのだから決まることなく虚空を眺める。

それからしばらくして手、足、首に付いている鎖を外して床に落とすと俺は死んでいるであろう女を燃やす。

肉の焦げる臭いがするが部屋の中の臭いと比べると全然臭くないので気にならなかった。

多分、気にならなかったのではなく何も感じなかったただけなのだろうが……。

部屋から出て薄暗く湿っぽい通路を進む。

左右には俺がいた部屋と同じように錆びた鉛色の扉が幾つも存在した。

そのまま真っ直ぐに歩いていくと大きな扉があった。

「……………開けるか」

その扉を押し開けると眩しい光が射し込んできた。

目を細目ながら扉を開ける。やがて、目がなれるとそこに部屋はなく森だけがあった。背後を振り替えると屋根があったので今はまだ俺がいた場所は何かの施設だったのだろう。

俺はそのまま森の中へと足を踏み入れていった。

「……………落ちないか」

森の中をさ迷っていると川を見つけたので体と服を洗う目的で着の身着のまま川に入ったのだ。

川の流れは緩やかで、綺麗だったのでちようどよかった。

でも、服に染み付いた血の跡はほとんど落ちなかったが……。

水気を飛ばして一瞬で服を乾かす。所々に空いた穴から入る風が気になるが些事なので方っておく。

いくあても何も無いので川の下流を目指して進む。

空腹になったら適当な動物を捕まえて、それを食べながらひたすらに下流へと進んで行った。

やがて、アスファルトで舗装された道路が見えてきた。どうやら、人が通る道に出たらしい。

でも、全く人影が見当たらないが……。

山道を歩くよりも道路を歩いた方が早く移動出来るので道路を歩いていく。

太陽が沈み始める時間になっても誰とも遭遇しない。車すらも通ることがなかった。

夕陽が徐々に沈んでいき、月が出てくる。

「……ほう」

完全に日が沈み。月明かりと夜空に輝く星が大地を照らす。

道路の真ん中で立ち止まり、満点の星空を見上げる。と、少しだけ何かを感じた気がした。

そして、この時に目的が決まった。

記憶と感情を思い出すと言う目的が……。人形ではなくなるために。そして……時折、走るノイズの正体を知るために。

あのノイズが走ってる時だけ明確な感情が甦るのだから。きっと、記憶を思い出せば感情も戻ってくるはずだ。

何が切っ掛けで思い出すのか分からないので何の宛もないがそれ以外にすることがない。

さて、行こうか。

俺は月と星に照らされた道路を歩いていくのだった。



多分、深夜であろう時間帯に山小屋を見つけた。

今日はそこで朝まで休もうと思いい、山小屋の扉の前に立つ。

扉には南京錠が掛けられていたがそれを壊して山小屋の中に入る。

小屋の中には小さな机と椅子が一組置いてあり、後はここを使っている人物であろう着替えが置いてあった。

「……………ちようどいいいか」

ボロボロになっている服を脱いで、明らかに大きい山小屋に置いて

あつた服を着る。

長い分は切り落として短くしたが……どうにもブカブカである。こればかりはしょうがないとして、ズボンのジーンパンはビニール紐をベルト代わりにしてずり落ちないようにしておく。

それらが一段落すると山小屋の中を改めて見直す。

すると、一冊の本が置いてあつた。これ一冊だけなのでおそらく忘れていったのだろう。

その本を手に取り、内容を確かめる。

「……………ッ！」

その時、頭にノイズが走つた。

——うーん……■君はどんな話が好き？ それによつて私がオススメ出来るのが変わるんだけど……。

——ミステリーものかな。トリックとかが面白くて。

また、あの娘だ。紫色の髪をして、ヘアバンドを付けた俺とそんなに歳が違わなさそうな。

彼女を探せば思い出せるのか？ 失われた記憶と感情を……。

その事も踏まえた上で動くか……。手に取つた本を机の上に戻して俺は畳んであつた毛布にくるまり目を閉じた。



日の出と共に山小屋を後にする。

まだ完全に日が上りきっていないので辺りの空気が涼しい。人によつては寒いと言うぐらいの気温だ。

そして、若干ではあるが霧が出ているため視界が悪い。百メートル先が見えないので注意しなくてはいけないだろう。

なので一応、道路の端つこの方を歩いている。

道路の真ん中を歩いていたら方があるかもしれないからだ。

「……………」

しばらく道路を歩いていると家を見つけたが明らかに人が住んでいるのか疑つてしまうレベルでボロボロになっていた。

ちょうどその家の前を通った時にガタンツ！ と音がした。

その音の原因は家の屋根が落ちたからだ。

廃屋と言っても過言ではない家の中から小さな呻き声のようなものが聞こえてきた。

「……………」

少し考えたのち俺は家の中に向かうことにした。

今が何月何日か訊くのとここが何処なのかを訊くためである。

家の中はボロボロで廃屋にしか見えない外観とはうって違い新品とは言わないが綺麗に掃除してあった。

床の端には埃が落ちてなく掃除してからまだそんなに時間が経っていないことを連想させた。そうなると先ほど聞こえた呻き声はなんだっただろうか？

その疑問はすぐに解消された。

そこにはラジオが置いてあったからだ。大方、このラジオの音が呻き声に聞こえたのだろう。

だったらこの主は誰なのだろうかと思っただがすぐに一つの可能性に思い当たった。

昨日、白い粉のような薬を一気に飲んで咯血した女が掃除していたのではと。

少しばかり何かないかと部屋の中を漁ると一冊の日記が見つかった。

その日記を開いて内容を確認する。

『やつと……あの子の仇を見つけることが出来た。これでようやくあの子の仇を取ることが出来る』

あの子の仇か……。

『あの化物は私の力によって記憶と感情を封印した。命を削るほどの暗示を掛けたのだまらず解けることはないと踐んでいる』

化物とは俺のことだろう。記憶と感情を封印したと明記されているし。

続きを読むためにページを捲る。

『ただ、誤算だったのはあの化物のしぶとさだった。直接心臓にナイ

フを突き刺してもすぐに再生してしまい一向に死ぬ気配がない。腹部を切り開き、内臓を直接手で潰しても叫び声すら上げない。気持ち悪い……手には今でも握り潰した内臓の感触が残っている』

そのページには血が滴ったようにこびり付いておりそれ以上は何が書いてあるのか分からなかった。

更に、ページを捲る。

『あの化物は時折、ノイズが走ると言っていた。何故だ、能力が解けかかっているのか？ だから、それ毎に封印を重ねていった。薬を使って能力を強化しながら暗示を掛けていたがそろそろ限界だろう。私の体が持たなくなってきた。薬の副作用が更に拍車をかけるのだからしょうがない』

ペラツと次のページを開くそこには一枚の写真が貼っており、一組の男女が幸せそうな笑みを浮かべて写っていた。

男の方が名前を南雲 悠斗。女の方が南雲 千陽ちはると言うらしい。

写真の貼ってあるページの下の方にそう書いてあった。

化物とだけ呼ばれ俺の名前は分からずじまいであったが……記憶を失う前の俺はこの南雲 千陽に恨まれるようなことをしてしまったのだらう。

記憶と感情を封印して、殺しに来るほどなのだそれはとてつもない恨みだったはずだ。

俺は日記を閉じて、あった場所に戻すと家の中から出ていく。

そして、一度だけ振り替えるとすぐにその場を後にしたのだった。

○ ○ ○

その日の夜。

肝試しに訪れた数人の若者たちによって一名の焼死体が発見される。

それだけでは大きく騒がれることをは無かったのだが……その死体が発見された場所に問題があった。

その死体が発見された部屋にはおびただしい量の血の跡があり、更

に鎖の破片が落ちていた。それだけなら凶悪な事件なのだが……死体の方は焼け死んだのではなく薬を飲んだことによる中毒であり、部屋を汚していた血はその死体のもものではなかったのだ。

そして、ある噂が流れた。

死体を燃やしたのは血の跡を残した人物だと……。



「いつになったら人と会えるのだろうか」

こんがりと焼いた熊の肉をかじりながらそう呟く。

現在地不明。鳥になって空を飛んで移動してもいいのだがそうなるかと俺のことは知っているであろう彼女を探るのが難しくなる。

上からだと言顔を見て探すことが出来ないからだ。

どっち道、大変なのは変わらないが……。

熊の肉を食べ終わると骨を森の中に投げ捨てる。ビニールとかじゃないから問題ないだろう。

「ごちそうさまっ」と

手に付いた汚れを分子レベルで分解して、手を綺麗にする。

それから、再び道路を歩き始めた。

歩くこと数時間。

目の前に門が見えた。

道理で人がいないわけだ。この門が閉じているから人が来ないのだ。

これで今まで誰にも遭遇しなかった理由が分かった。

俺はその門をジャンプして飛び越える。

着地は音も立てずに静かにだ。体が覚えているのか勝手にそうなるのだ。

となると……記憶を失う前は結構飛び降りたりしていたことが何える。

それだけ分かってても肝心の記憶が戻らないので意味などないのだが……。

名前すら思い出せないから……俺を知ってる人を探さなければ名前すら分らない。

それまで、何て名乗ればいいのか……。

まあ、今すぐ必要なことじゃないから考えなくていいか。あくまでも優先するのは記憶を取り戻す事なのだから。

そう言えば靴も新しいのにしないといけないな。ボロボロな上に汚れてるし……。

それに、そろそろ血が飲みたくなってきたし。やっぱり動物の血だと誤魔化しぐらいにしかないか……。

道路の端を歩いていると一台の車を見つけた。

しかも、1人らしく運転席から出て煙草を吸っていた。ちようどいいかあの人から血を吸おう。

「すいません」

「ん？ なん………」

煙草を吸っていた男性が振り返った瞬間に暗示を掛ける。

記憶を失つても忘れることのなかった力だ。失敗することはない。今から十分間ほどの記憶を忘れてもらう。

それから、軽く男性の腕を切ってそこから血をいただく。

「……不味い」

でも、飲んでおかないと次はいつ吸血出来るか分からないので飲み続ける。

今度から吸血するのは健康そうな人からにしようと決めた。

誰が好んで不味い血を吸うのだろうか。記憶を失う前はもつと美味しい血を吸っていたような気がする。

ある程度血を吸うと男性の腕の止血をしてからその場を離れる。

血を飲んだことで足取りが軽くなったから、これでしばらくは休むことなく移動できる。さて、何処に行こうか……。

田舎の方に行くか都会に行くか……。まあ、何よりも時折、ノイズが走るときに見える彼女を探し出さなくては。

そっちの方が大切だ。しらみつぶしに探すしかないのが現状であるが……。

とりあえず……動くしかないか。邪魔は全て踏み越えて、真っ直ぐに記憶を取り戻すために。

「……………」

全ては記憶を失う前の俺に戻るためにね……。

第24話

俺があちらこちらの街を転々としながら記憶探しの旅を始めてすでに一ヶ月が経過した。

その間にあつたことはと言えば……。

俺のことを知っている人物に遭遇した途端に命を狙われたりしたことだろう。

記憶を失う前の俺は相当な恨みを買っていたらしい。本当に何をしたのだろうか？

なんとか俺の名前を聞こうと訪ねるも”化物”としか言われずにいるためいまだに名前が分からない。

とりあえず、俺の命を狙ってきたは全員返り討ちにした。一応、死者はいないはずだ。限界ギリギリまで血をもらいはしたが……。

そんなこともあって俺の記憶探しの旅は難航している。何を切っ掛けにノイズが走るか分からないので手当たり次第色々な場所に行っているが、大抵邪魔が入るので上手く進まない。

ただ、一つだけよかったと言えるようなことと言えばノイズが走る毎に少しずつ何かを取り戻している感覚があることだ。

最近はその表情を作れるようになった。でも、作っているだけなのですぐにバレてしまうほどお粗末なものでしかないが。

「いたぞー！」

追っ手に見つかつたようだ。

こつちに向かつて駆けてくる追っ手の手から逃れるため闘争を選択する。

向かつて来る追っ手に向かつて俺も駆け出す。

自分から近づいてくるのに驚いたのか追っ手はトンカチを投げた。

それを霧化して避けるとそのまま追っ手を霧の中に閉じ込める。

そして、そこに火を入れると……。

大きな爆発を起こした。

これぐらいじゃ死なないと分かっているので俺はそのまま場所を

移動する。

大きな音が出たので誰かしら野次馬が現れて少しの間ではあるが時間を稼げるだろう。

今のうちに距離を稼いでおかなければ。

足早に移動していたら船着き場に到着した。時間帯も夜になっていたので何処かで休もうと思つた矢先、ちようど荷物の積み入れ作業をやっている船があつたのでその船のコンテナの中に侵入して休むことにした。

しかも、侵入したコンテナの中の積み荷は食品等ではなく家財道具だったので尚更ちようどよかつた。それに……コンテナの中まで追つ手も来ないだろうし、久々にゆつくりと休める。



「……………何処だここは？」

目が覚めて人の気配が遠ざかつてからコンテナの外に出ると真つ昼間であり、尚且つ日本ではなかつた。

何故、日本ではないと分かつたのかと言うと……話している人の言葉が分からなかつたからだ。

一応、現地の人の顔を見る限り東洋の人なので、アジア圏内だと言うことだけは確実。問題はどうかやって日本に戻るかだ。記憶を失う前は日本で生活をしていたらしいから日本に戻りたいのだが……。

でも、追つ手がないことを考えると海外の方が安全なのか？

まあ、日本に戻るには日本に向かう船や飛行機を探さなければない。

……気長に行くか。時間が立てば色々と思ひ出すかもしれないし。



「……………日本に戻れない」

船や飛行機を使い国々を転々として一ヶ月が経過したが全く日本

に戻れなかった。

そして、現在はイギリスにいる。

詳しい場所は分からないが……山の近くの自然が豊かな山荘に潜伏中だ。

幸い？ なことに山荘の持ち主が不在なのと街が近くにあるので血を飲みに行くのにちょうどいい場所なのだ。他にも本が置いてある。

魔法についての……。

魔法と言う単語を目にしたときノイズが走ったので魔法に関わりがあったのだと思う。

しかも、日本語で書かれているのでスラスラと読めた。

一応、英語の辞書もあったので何か分からないやつは英語の辞書を使って翻訳しながら山荘の中を散策した。”デユランダ”と呼ばれるデバイスの設計図とか八神はやての調査資料等が見つかった。特に八神はやての調査資料とかストーリーカードでもしてるんじゃないかと思う限りだ。

後、この山荘の主の名前はギル・グレアムと言う名前らしい。デバイスの設計図のところに書いてあった。

それよりも……デバイスが何なのか分からないから”デユランダ”の価値がどれくらいなのか全く分からない。

量産型なのか、オーダーメイドなのか。

まあ、どちらにしても俺が使うことはないだろうからどうでもいい。

……ギル・グレアムとやらに暗示を掛けて日本に行くための手配をしてもらうつもりでギル・グレアムが山荘に来るのを待ち構えているわけなのだが……。一向に来る気配がない。そのうち来るだろうしその間に山荘にあるものを読んで待つとするか。

八神はやての調査資料。

八神はやて……小学三年生。闇の書の侵食により足が不自由なため現在、休校中。

家族構成：父母共に故人の独り暮らし。

………小学三年生で独り暮らしか。よく生きていられる。それよりも闇の書の侵食か………闇の書と言う名称からしてろくなものではないな。

八月現在の状況：六月に起動した闇の書の守護騎士プログラムの守護騎士と家族のように生活をしている。烈火の将シグナム、鉄槌の騎士ヴィータ、湖の騎士シヤマル、盾の守護獣ザフィーラとの仲は良好であり、収集活動はされていない。なお、それぞれが何かしらの役目をにない始めた。

烈火の将は剣道場の講師のバイト、鉄槌の騎士は近所の老人たちとゲートボール、湖の騎士ははやての補助、盾の守護獣も泉の騎士と同じ役割を担っている。

なお、八神はやてに友人が出来た模様。名を月村すずかと言う。月村家次女である。

………月村すずか。

何故だろう？ とても懐かしく感じるのは……。俺は月村すずかを知っているのか？

それにしても、ゲートボールは役目なのか？ 単なる近所付き合いでしかないように思えるのだが……。

やっぱり、この山荘の主であるギル・グレアムは叔父と同じように酷い人間か……。

ん？ 叔父？ 叔父って誰だ？ 何故、ギル・グレアムと叔父が同じように酷い人間か……ッ！

頭の中にノイズが走る。

一人の男が戦闘用の自動人形の背後で金を請求している。それを断る女性。

だけど、そこでノイズが止まってしまった。

叔父は……強盗だったのか？ だとしたら今叔父は刑務所の中……。

だから、追っ手が……いや、でも……それだったら俺を狙ってくるとは考えづらい。となるとやっぱり、俺個人に対する恨みとなる。

部分部分で中途半端に思い出すから正解が分からない。何があつ

ていて何が間違っているのか。

○ ○ ○

「……お姉ちゃん、どう?」

「……駄目ね。全く足取りが掴めないわ」

はあく、と肩を落とす忍。

蓮らしき人が最後に目撃されてから一ヶ月近くが経過したからだ。

「……蓮君、大丈夫かな?」

「そうね」

全く足取りが掴めないため何とも言えない。

「……私たちは蓮君の居場所にはならなかったのかな」

ポツリと小さく消え入りそうな声ですずかがそう呟いた。

「そうだったら、とつくの昔に出てったと思うわよ。多分……記憶喪

失か戻れない理由があるんじゃないかしら」

「戻れない理由……」

すずかは蓮が戻って来ない理由について考える。

家の誰かが嫌いになったわけじゃない。誰かが出ていけと言ったわけでもない。なら、記憶喪失かと思ったがどれも推測の域を出ないので、これが正しいとは言えない。

何故、蓮が家に戻って来ないのかその理由を考える、すずかの足元に手足の白い黒猫である、リリンがやって来た。

「どうしたの?」

そう言いながらすずかはリリンを抱き上げて顔を覗き込む。

「にゃ〜」

と、リリンは一鳴きする。

「……そう、ありがとね」

気にするなど言わんばかりににゃんと一鳴きするとリリンはすずかの手から身動き一つで床に降りると部屋から出ていった。

「すずか……リリンの言ってること分かるの?」

ちよつと驚いた様子でそう訊ねてくる忍にすずかは少しだけ笑み

を浮かべながら答える。

「分かるってよりも……何となく何を伝えたいのか分かる感じかな」

「そ、そうなの」

意外なすずかの能力に忍は冷や汗を流す。何故なら……この家にはたぐさんの猫がいる。すなわち、すずかは知ろうと思えば色々忍の隠している物の在りかを知ることが出来ると言うことだ。

「どうしたの？」

「な、何でもないわ」

純粹に心配してくれているであろうすずかの心遣いが忍の心には痛かったのである。

そんなことを知るよしもないすずかは一人首を傾げるのであった。



ギル・グレアム
ストーカーの山荘に滞在してからすでに数日が経った。

その間にいかばかの記憶が戻ってきたが名前はまだ思い出せない。でも、好物は思い出せた。ブルーベリーだ。

ブルーベリーが好きになった理由はお父さんがブルーベリー好きだったのが一番の理由だった気がする。

後、デュランダルと言うデバイスの設計図を間違えて燃やしてしまったが……大丈夫だろう。

大抵、写しの設計図があるはずだし、問題ないはずだ……きつと。ストーカーの証拠である、八神はやての調査資料は燃えないように離れた場所に保管してあるので間違つて燃やすことはないだろう。

一応、写真で八神はやてを確認したが動物で言うところの狸みたいだった。

それに、凶太そうでもあった。将来は立派な狸になれると思う。見た感じ薄幸ではなさそうだし、意外と胆が据わつてそんな雰囲気だった。

小学三年生で独り暮らしをしているところなるのだろうか？

前例はまずないと言えるから八神はやてが特別なのだろうか。

その八神はやてを調査しているギル・グレアムは誘拐でも企んでいるのか？

家族構成とか調べてあるし、これでもし、異性として見ているのであれば……完全にアウトだと言える。

ギル・グレアムの年齢が分からないから何とも言えないが少なくとも大人であることは確か。犯罪者予備軍と呼ばれる存在なのだろうか？

だとしたら……俺も対象になるのでは……。いや、八神はやてをピンポイントで調査しているから俺の方に穂先が向いてくることはないだろう。……多分。

まあ、それは置いといていいだろう。

もし、本当にアブノーマルな趣味だったらどうしようかとも思うが人気がないので支配下に置けばいいかと納得する。

独り暮らしの小学三年生である、八神はやてを調査しているストーリーカーなのだから遠慮する必要はないだろう。

誰かが言っていた気がする”変態死すべし”と。

名前からして八神はやてとは何の関係もなさそうなのだから変態であることは確定と見ていいはずだ。

「……本も燃やすべきか？」

魔法関係の本も燃やすべきか迷う。

でも、これがもし数少ない希少な本であった場合のことを考えると燃やすべきではないと思う。どうするべきだろうか。

……
……
……うん。とっておくか。

熟考とは言えないがもしかしたらの可能性のことを考えて残すことにした。

すでに、デユランダル設計図が燃やしてしまったそれはしようがない。諦めてもらうとしよう。

過ぎてしまったことだからしようがない。

さて、血を飲みに行くと行くか。

● ● ●
血を飲んで街から山荘に戻ってくる頃には夜になっていた。

「……明かり？　もしかや……」

明かりが点いている。それはすなわち誰かが山荘にいると言うことだ。

俺はゆっくりと足音を立てないように山荘に近づいて、窓からそつと中を覗く。

するとそこには……。

「何処にいった……」

ガサガサとテーブルなどを散らかしながら必死に何かを探している体格のよい男性がいた。

彼が……ギル・グレアムなのだろうか？

まだ、本人と分かったわけではないが、山荘の中の物の位置を把握している辺り彼がギル・グレアムであることは間違いないだろう。

「何故だ!?　何故見つからない?」

何を焦って探しているのだ?

「くっ……ようやく開発に必要な物が揃ったと言うのに」

開発に必要な物……。

……まだ、そうと決まったわけではない。

「何処にいったんだ……デュランダル設計図は」

ビンゴ……俺が燃やした設計図だった。

さて、どうやって説明したものか……。

どうやってデュランダルの設計図を燃やしてしまったことを伝えるか悩んでいると鋭く尖った声が聞こえてきた。

「誰だ!?　出てこい!」

険しい表情をしたギル・グレアムの手にはいつの間にか機械的な杖が握られていた。

その杖の先端には青白い光が集まっている。

「出てこなければ撃つ……」

脅しではなく本気だろう。声からしてそう感じた。

撃たれても全く問題はないが。日本に行けるように手はずを整えてもらうためには直接会う必要があるか……。

なので俺はギル・グレアムの前にゆつくりと出る。

「子ども……だと!?!」

何故か驚かれた。

何故だ？

もしかして、子どもではなく大人もしくは泥棒の類いだと思っただのだろうか？

泥棒だと言われたらそれはそれで否定出来ない。

25話

あの後、ちよつとした話し合いをした結果。

ギル・グレアムはストーカーではなく八神はやての後見人であると言ふことを教えてもらった。

独り暮らしの小学三年生の生活を調査している変態呼ばわりされたことが存外、心にきたらしい。

それでも俺の中では変態なんじゃないかという疑念は払拭出来ないが。

後見人と言つてもお金を渡してるだけこれでもし、付き合うようにしたことだったら完全な犯罪者だったのに。

「キミのことは何と呼べばいいかな？」

ゆつたりと紅茶を飲みながらギルが訊いてくる。

デュランダル設計図のことは今は保留だ。俺の方が気になるらしい。

「記憶を失う前の俺のことを知っているらしい人たちはみんな化物つて呼ぶ。極たまにドラクルかな」

「ふむ、ドラクルか……」

竜公と悪魔公の二つの意味を持つ言葉。どう考えたって俺に向けられた意味は悪魔公の方だろう。

自然との方がしっくりとする。記憶を失う以前はよくそう言われていたのだと思う。でなければ意外としっくりとするはずがない。

「まあ、それは置いといてだ。日本に戻りたいから移動するための手はずを整えて欲しいんだ」

「そんなことと思うのかね」

「いや、全く」

即答すると、肩の力が抜けたのかガクツとするギル。

「普通そこで受け入れたら単なる馬鹿もしくはアホでしょ」

「……確かにそうなのだが」

「俺は記憶を取り戻すために日本に戻りたい。ただ、それだけ」

「そう言われてもね」

困ったように思案顔で何やら考え事をしているギル。
何を考えていることやら。

「……………だったら、私のやることを手伝ってくれるならキミを日本に送ろう」

「……………何が目的？」

「いや、何もそんなに怪しいことではない。まず、日本にキミを送る時期は私の方に任せてもらいたい。それは構わないかね？」

「うん」

日本に行けるのであれば何の問題もない。

「すでに、気がついてはいるはずだが私は魔法が使える、魔導師と呼ばれる存在だ。そこでだキミに魔法を覚えてもらおう」

「何故？」

「私の目的のためだ。ただでさえ予想外のアクセシブントがあつたのだから、それに対する備えをしておきたい」

予想外のアクセシブントは多分、俺がデュランダル設計図を燃やしてしまったことだろう。

「魔法って魔力が必要なんじゃないの？」

「ああ、そうだ。キミにはリンカーコアと呼ばれる魔法を使うために必要な機関がある。少なくとも魔力量はAランクはあるだろう」

「ふーん」

特に魔法に興味はないので聞き流す。

「おや？ 反応が薄いようだがAランク以上の魔力を保有している魔導師は私が所属している時空管理局全体でも5%ぐらいしかいないのだが…………」

「そう言われても特に興味がないので」

「そうか。…………まあ、それでも魔法を覚えてもらうつもりだ」

「そうですか」

こうして、俺が魔法を覚えることが決まった。

○ ○ ○

「……思わぬ拾い物をした」

グレアムはそう小さく漏らした。

デュランダル設計図が無くなるというアクシデントを帳消しにするとはいかないがと心の中で付け加える。

その視線の先には杖型のストレージデバイスを持った記憶喪失の少年がいる。名前は無い。

正確には自分の名前すら忘れている。

「……………」

グレアムは魔法の練習をする少年を見つめる。

一通りの魔法を使わせて適正を確かめたところ、身体強化系及び直射型、収束系の適正が異様に高くすべての魔法にバリアブレイクが付加されていた。さらに、バリアジャケットすらも無効化してダメージを与えられると言う予想だにできなかった力を持っていた。

この事はグレアムを驚かせたが、同時に嬉しい誤算でもあった。それは、守護騎士と相對しても技術さえあればそう後れをとらないからだ。

弱い魔法ですら脅威の一撃となる力を持つ少年は確実に初見殺しである。バリアジャケットで完全に防げるため避ける必要のない魔法でさえダメージを受けるのだから

。よっぽど勘が良いか、知らなければ確実にダメージを期待出来る。

自らの目的のために全く関係無い子を使うことに良心の呵責を感じるがそれを振り払いグレアムは今からやるべきことを行う。

デュランダルの設計図をもう一度作成するのと娘たちの手駒として日本に送り込む予定の子に訓練をつけることだ。

「……………クライド。……………キミは今の私を見ていたら何と言うんだろうな……………」

ふと、一瞬だけ寂しそうに小さく笑うとグレアムは娘たちに連絡をとるのだった。



ボンツ!

「……………」

ギルに渡され俺が使っているストレージデバイスと呼ばれる情報処理速度が速いデバイスからプスプスと黒い煙が上がっている。

……………壊れたか。

意外と脆いな。

プスプスと黒い煙を上げるデバイスを見て最初に思ったことがそれだ。

「何事だね……………」

ギルが黒い煙が上がっているデバイスを見つめて固まった。

「壊れた」

そう簡潔に言うのとギルは頭を押さえる動作をした。

「何で壊れるんだ? このデバイスはそれなりに頑丈なはずなんだから……………」

多少乱暴に扱っても壊れないように特注したデバイスなのだがとギルは呟いた。

試しにデバイスに対して、分子運動をコントロールする力を使ったら壊れたのだ。反省はしてない、実験に犠牲はつきものだ。このデバイスは尊い犠牲となったのだから……………」

「……………仕方がない。次は壊さないでくれよ」

溜め息を吐きながらギルが新しいデバイスを渡してくる。

それを受け取り、起動させる。そうすると先程の杖よりも多少鋭角なフォオルムの杖になった。

「……………こっちの方が頑丈そう」

「その分……………かかっているがね」

金か……………」

「……………壊さないでくれよ?」

「……………分かった。善処はする」

迂闊なことは出来ないか……………」

デバイスを使うよりも普通に能力を使っていた方が遥かに楽なの

だが……ギルに俺の持つ能力を教える必要は感じないので教えておらず、ギルに渡されたデバイスを使っているのだ。

多少は面倒ではあるが手札は出来るだけ隠しておくことに越したことは無いし、何よりも詳しく説明するのが面倒だ。長い付き合いになるのなら話は別だが……。

山荘の中へと戻っていくギルの背をギルが山荘の中へと入っていったのを確認してから俺は杖に魔力を流し込む。

そして、俺を中心に半円形に数メートルほどの結界を張る。

こうやって、サーチャーと呼ばれる監視機器から姿を隠さないと血を飲めに行けなくなってしまうのが残念だがしようがない。

面倒ではあるが持っている手札を隠しておくためにはしようがない事だと諦める。

仕方がない。これも血を飲むためなのだ。

いくら面倒だと思ってもこればかりはしようがない。

ギルが何らかの方法で監視をしているかもしれないが……実際に監視されているのかは不明なのでどうしようもないのが現実だ。

まあ、血を飲んでいるところを見られたところで姿をくらませればいい。ギルと俺はお互いに利用している関係なのだから。これと言ってお互いの目的が反目しあうことがない限り敵対することはほぼ無いだろうし。

なるようになるだろう。

ギルは見てみぬふりをして俺を使おうとするだろうし、その過程で日本に行けるのだから俺としてはどうぞ使ってくださいな状態だ。

「……早く、日本に送ってくれないかな」

俺はそう呟きながら街へ向かった。



「……………相変わらず何を話しているのか分からない」

街へ来て住民たちの声を聞くが何を言っているのか全く分からない。

仕草などで分かるのもあるがそれは、ごく少数でありそれ以外はからつきしだ。

それなりに時間が経っているのに何を言っているのか分からないのは何故だろうか？

やつぱり……特に覚える必要性を感じていないからなのか……それぐらいしか理由が分からない。

まあ、いいや。街に来た目的は血を飲むためだし、さつさと誰から血を吸うか見繕おう。

思考を切り替えて誰から血を吸うか考える。

基本は不意をついて相手を気絶させてから吸血を行うので相手が一人であることが条件だ。

これは外せない。

後は健康そうであるところかな。

痩せすぎても駄目だし太り過ぎても駄目。血の味が悪いから積極的に飲みたくはない。

「……誰にしようかな」

公園のベンチに座り、過ぎ行く人々を眺める。

単独で行動している人がほとんどおらず、大半が三人組で移動している。友人同士であったり家族同士であったり……。

「……………」

記憶が完全に戻ったら……あんな風に一緒に過ごしていた時があるのか分かるんだろうな。

でも、そんな記憶が無いようならだね。……見ていて懐かしさとか感じなかったし。

ああ……本当だったらこのことに対して悲しみを覚えるんだろうけど、全く悲しくない。むしろ、何も感じない。

いいや、さつさと血を飲んで街から出よう。何が記憶を取り戻す鍵になるか分からないけど、この場で思い出して、その時の頭痛で動きが鈍るのは嫌だし。

それに……ちようどよく、血の美味しそうな健康そうな人がいたしね。

俺はその人物の後をつけるためにベンチから降りてその人物の後をつけたのだった。



「……………ケプツ。……………思ったよりは美味しかった」

恍惚とした様子で地面に座り込みぼんやりと宙に視線をさまよわせる男性を見ながら血のついた口元を拭う。

途中で喘ぎ声を出し始めたときは嫌悪感が生まれたが……………しようがないと諦めてそのまま血を飲んだ。

吸血されている側は一種の性的快楽を味わうからだ。そうやって吸血時に生じる痛みなどを感じないようにしているのである。

記憶が戻ってくる毎に少しずつ分かることが増えているが……………大事な部分は思い出せずにおり、思い出している部分もまちまちなので、思い出した知識も完全には信用できない。

ザツ、ザツ……………と近づいてくる足音が聞こえてきたので急いでその場を離れる。

記憶に関してはいつものように処置をしているので問題はないが……………発見者次第では吸血行為が難しくなる可能性もある。だが、難しくなるだけなので何の問題もない。

とりあえず、ギルのところに戻るか。

吸血しているところをサーチャーで見られていた可能性もあるし、その事で何かしら訊かれるかもしれない。

聞かれない限り答えることはないが……………。

「…………………………」

んゝ、つけられてるかな？

詳しい位置は分からないけど視線を感じる。

何処からだ？ 視線を上下左右に向けて何者かを探すが一匹の猫しか見つからない。

……………猫？

……………あり得ないと思うが俺自身が他の生物に変身できる

ので同じように変身能力を持っている存在がいる可能性は大いにある。

少し試してみるか。

俺はちようどあった曲がり角を曲がって猫の視界から外れるとすぐに鳩に変身した。

そして、少し高い位置にある窓枠に移動して猫が来るかを確認する。

さて、猫は来るか……来たならばあの猫は何者かが変身した姿であると仮定する。その後、本当に猫ではないかを確認するために一度襲撃を仕掛けるつもりだ。

……来た！ 猫が曲がり角を曲がって来ると同時にキョロキョロと何かを探すように視界をあちこちに動かしている。

ビンゴ……。

これは猫に変身した何者かで確定だ。襲撃を仕掛ける必要すらない。

でも、何者かの正体を暴いておこうと思った。

鳩の姿のまま猫の背後まで飛び、そこで人型に姿を戻す。

そして、猫の襟首を掴み上げる。

「にやつ!？」

驚いたように声を上げると猫は自由を求めて足をバタつかせる。

「フカアーツー！」

暴れても自由にならないとなると猫は毛を逆立てて睨んできた。

俺は作り笑いを浮かべるとデバイスを起動させて猫にデバイスの先端を押しつける。

そうすると猫はビクツとしたのちに動きを止めた。

「……………ブレイクインパル——」

猫に対して魔法を使うとした瞬間にガツとデバイスが蹴り飛ばされた。

デバイスを蹴り飛ばされるまで気がつかなかったことに少し驚いた。いつの間はこの距離まで接近されたのだろうか？

仮面を着けているから分からないが多分この襟首を掴んでいる猫

と同族もしくは仲間なのだろうでなければ助けようとしないうしろ。

「……つと」

仮面を着けた人物の手のひらがこっちに向けられ白い剣のようなモノが飛ばされてきたのでそれを背をのけぞらせることで回避する。そのついでに右足で蹴り上げるが避けられてしまう。

まあ、当たるとは思っていないので避けられたことに対して思うことはない。仮面を着けた人物が釣れたのでよしとする。

さて、どうやって口を割らせるか……。

第26話

仮面を着けた人物の性別は男だと思うが……見た目だけだったらいくらでも誤魔化す方法はあるので完全に男だと決めつけることは出来ない。

うーん……猫を掴んだままで口を割らせることは出来るだろうか？

相手が弱ければ出来るだろうけど……さつき不意を突かれてるから弱いはずないしなあ。

そう考えていると仮面を着けた人物が駆け出してくる。

「……仕方がないか」

俺は駆け出してきた仮面を着けた人物に向かって捕らえていた猫を投げつけた。

「っ!？」

驚き動きが鈍くなる仮面を着けた人物。

「にあ?!… にゃ——!!」

猫は猫で悲鳴を上げている。

仮面を着けた人物に猫がぶつかりそうになるが仮面を着けた人物は……普通に避けた。

それはもう綺麗な動作でサッと自分に向かって飛んできた猫を避けた。猫に関してはショックを受けたように一鳴きするとそのままゴミ箱の中に吸い込まれるようにして入っていった。投げた自分が思うのも何だが哀れだ。

そして、仮面を着けた人物は気にしたような様子もなく自然体である。

ものすごい余裕である。それも当然だと思う。

相手は確実に格闘訓練等をしている熟練者だろうし、俺は訓練とか全くしてない能力頼みだし。

純粹な格闘のみだったら確実に勝つことは出来ないだろう。

能力をフルに使ったごり押しが基本だったからしようがないといえはしようがないのだが……。

「……………」

相手は沈黙を保ったまま動かない。

でも、視線は俺の方に向けられている。

このままではうちがあかないので両手の爪を鋭く伸ばす。

「……………?!」

仮面を着けた人物が驚いたような気配を見せた。

早速、距離を詰めて爪を横風ぎに振るうが避けられてしまう。その際に左右にあるコンクリートの壁に細い傷痕が残る。

切れ味は十分。さらに、左右の腕を振るっていくが仮面を着けた人物は余裕を持って避けている。まるで当たる気がしないのは気のせいではない。

完全に回避できる距離を保たれている。

うーん……やりづらい。

この状況に嫌気が差してきた頃に仮面を着けた人物が初めて反撃をしてきた。

「……………あ」

手を掴まれるとそのまま上の方に投げられたのだ。

「シッ…」

しかも、いつの間にか投げられた俺よりも上の位置におり、踵落としを繰り返してきた。

これは……避けられないか。そう判断すると同時にズボンのベルトを引っ張り、鞭のように振るう。

パン！ と仮面を着けた人物の右太もも部分にベルトが当たり、その部分の布が弾ける。

同時に俺の左肩に踵落としが命中してゴキリと音が鳴った。

俺はそのまま地面の方に落ちていったが、地面に激突する前に体勢を立て直して、足から地面に着地する。

その後、ズキズキと痛む左肩を動かそうとしたが動かなかった。だらんとされており、肩の関節が外れているようだ。

下手に腕で受け止めていたら骨が折れていたかもしれない。

霧化して避ける方法もあったがなるべくなら隠しておきたい。手

札はあまり切りたくない。能力頼みなので対策を練られると完封される確率が高まるからだ。

うん。後のことを考えると何かしらの訓練はやっておいた方がいいか。

それも……仮面を着けた人物の口を割らせるか、逃げられるかだけど……。

外れた左肩の関節をはめ直す。

それから、調子を確かめるように手を閉じたり開いたりを繰り返す。手を動かすことに関しては問題もないと……。

となると、肩は……駄目か。動かすと痛みが走るし、動きも悪い。これは、使えないと考えた方がよさそうだ。

「！ つと」

何となくではあるが直感に任せて屈むと、ちょうど俺の頭があった位置を何者かの蹴りが通過していた。

これは、危なかった。あのままポケットと立っていたままだったら確実に後頭部に命中していただろう。

蹴りを繰り出してきた人物は今もなお上の方にいる仮面を着けた人物であった。

……左肩の負傷のため戦闘能力が落ちた俺と無傷の仮面を着けた人物が一人と太ももにみみず腫をしただけの仮面を着けた人物が一人。

このまま能力を制限していたら確実にやられるか……。

仕方がない。能力無しの単純な戦闘能力で完全に劣っているのだから口を割らせようなんて考えるのは止めよう。

「はあ……」

前門の虎、後門の狼ならぬ前門の仮面に後門の仮面。

先に動いたのは地上にいる方の仮面を着けた人物だった。

ボオオン!! と火柱が立ち上がる。

「ガアアア!!」

仮面を着けた人物が一步踏み出した瞬間に^{パイロキネシス}発火能力を使って火柱を発生させたのだ。

悲鳴を上げる仮面を着けた人物。

もう一人の上にいる方が俺に向かってくるが^{パイロキネシス}発火能力の応用によって発生させた小規模な爆発で近寄れないように牽制する。

その間により強いイメージで炎を形作る。

広範囲に拡散するのではなく一直線に進むように。

「……こんなものかな」

火柱の中で焼かれ続けている仮面を着けた人物に少しでも視線を向けたあと空で爆発から回避を続けている仮面を着けた人物に視線を移す。

右手を空にいる仮面を着けた人物に向ける。

「さようなら」

俺の右手から空にいる仮面を着けた人物に向かって一直線に炎が走る。

「くっ」

仮面を着けた人物が避けようとするが気がついた頃にはすでに回避できる時間はなかった。

仮面を着けた人物はプロテクションと呼ばれる防御魔法を使って防ごうとしたようだが、一瞬の拮抗すらなくプロテクションは砕け散った。そして、仮面を着けた人物は炎の中へと飲み込まれる。

それを見届けた後に火柱が立っている場所に視線を向ける。

そして、ここにいる仮面を着けた人物の姿を拝むために火柱を消す。

「………いない」

火柱があつた場所には誰もいなかった。

逃げられたのか？ それとも逃がされたのか……だとすると……。

ちよつとした予感に従い空に視線を移す。

ここには誰もいない。もちろん、地面にも落ちていない。

だとすると、やっぱり……。

「他にも誰かいたか」

そうなる……見逃されたのかな？

「……と」

さつき飲んだ血がもう足りなくなつた。それにサイレンの音がするから早くこの場から離れないと。

俺はふらつきながらもこの場から急いで離れるのだった。



「ゴクツ……ゴクツ……はあく」

ようやく……治つたか。

負傷した左肩の調子を確かめるように動かす。

うん。全くもって問題なしと。

輸血パックを五袋も飲んでようやくだから仮面を着けた人物たちとの争いはかなり消耗したのが分かる。

特に発火能力パイロキネシスで消耗したのが大きかった。

「さて、戻るか」

ギルがいる山荘へと。

輸血パックも幾つか持つたし、これでよっぽどのことがない限り街に来る必要はないだろう。

輸血パックが大量に無くなったことに関してはニュースになるだろうが……。

一応、全血液型を満遍なく持つたので極端に輸血パックが足りなくなっている訳ではないので大丈夫だと思いたい。

それでも、古いやつを選んだのだから。

問題はこの輸血パックを何処に保管するかだけど………山荘の冷蔵庫の中でいいか。

ギルが使っているところは見たことないし構わないだろう。

捨てられないように俺が気をつけておけばいい話だし。

そもそも、何で冷蔵庫の中に輸血パックがあるのか聞かれたら……飲むためのものって答えるから問題ない。

山荘に戻ろうと歩を一步進めた瞬間に思い出した。

………仮面を着けた人物に蹴り飛ばされて、そのまま忘れていたデバイスの存在を……。

● ● ●

山荘の前に来るといつになく険しい顔をしたギルが立っていた。
何か苛立つようなことがあったのだろうか？

「……待っていたよ」
待っていた？

いつまで経っても中々戻ってこないから苛立っていたのかと思っ
たがどうにも違うらしい。

「……11月には君を日本に送ろうと思う」

11月か……。個人的にはもう少し早くして欲しいところではあ
るが、まあ……。日本に行けるので文句はない。

「なので……。魔法の訓練が少し詰め込みになるがね」

詰め込みね……。俺としては魔法にこれと言ってこだわりがあるわ
けではないのでどうでもいいのだが……。そんなことを言えるよう
な雰囲気ではない。

「分かった。それで……。詰め込みって」

「何、簡単な話だよ。実戦形式でひたすら私と魔法を使って模擬戦を
やるだけだからね」

……。意外とハードだった。

「それじゃ……。始めようか」

● ● ●

あの日からみるみるうちに時が経ち11月となった。

ギルとの模擬戦は基本的に全敗である。

終始、俺が魔力切れを起こして終わった。

バインドなどは効かないのでギルはバインドなどは使ってこな
かった。その分、魔力地雷などの捌め手を使ってきたが……。

徒手格闘については言わずもがな。近寄れない時点で当てられな
い。

魔法だけと言う縛りがなければまだ勝ち目はあったのだが……。
魔法だけだと確実に無理だ。

「では、これを持っていってくれ」

ギルから一枚の手紙と地図を渡される。

「この手紙ははやてちゃんに渡してくれ。それから、地図ははやてちゃんの家がある場所の周辺地図だ」

「……………」

それを黙って受け取り、鞆にしまう。

「それじゃあ、頼んだよ」

「分かった」

俺は頷くと山荘から出て街へと向かった。

街へと向かって移動している最中、日本についての行動について考える。

日本に行くと言う漠然とした目的しかないのどうやって記憶を取り戻すか、それが悩みどころだ。

ギルから渡された手紙を八神はやてに渡すのは確定としても……その後について考えるといい案が浮かばない。

ただ、候補があるとすれば……ギルの持っていた八神はやてに関する調査資料に乗っていた”月村すずか”を探すのも一つの手段として考えておく。

この名前を見たときに記憶の一部分が戻ったので本人に会うことが出来ればもしかしたら記憶が戻るかもしれないからだ。

八神はやての友達と記してあったから会える可能性がある。

それで記憶が戻ればよし、戻らなければ戻らなかったで記憶を取り戻すための方法を別に考える必要がある。それでも、何かしらのヒントは得られると思う。

それに……ギルとの約束でヴォルケンリッターでよかったかな？
彼女らが闇の書の完成に動き出したらそれを手伝って欲しいって言うってたから、それを手伝わないといけない。

別に破ってもいいような気がするが……一応、日本に行けるのでそれだけは手伝っておこうと思う。

でも……どうやって闇の書を完成させるか分からないので手伝えることは内容な気がするのは気のせいだろうか？　せめてどう手伝うのかを教えてほしかった。

それは今さらなのでどうしようもない。

まあ、なるようにしかならないだろう。最もヴォルケンリッターが勝手に闇の書を完成させようと動くんだろうから特にすることもないはずだ。

今のところは闇の書を完成させようと動いてないみたいだし。

しばらくは日本で記憶を取り戻すためだけに動けそうさ。



数時間に及ぶ空の旅を終えて日本に降り立つ。

「んんんん」

数時間ずっと座りっぱなしだったので伸びをして体のコリをほぐす。

空港から出てタクシーに乗り近場の駅まで向かう。

そこから電車に乗り換えて、さらに幾つか電車を乗りついで目的地である海鳴市に到着した。

タクシーや電車での移動も含めて四時間弱で現在は午後6時になるうかと言う時間であり、すでに辺りは暗くなり街灯が辺りを照らしている。

「さて、後はギルから渡された手紙を八神はやてに渡しに行かないと」
鞆から地図を取り出して街灯の下に移動する。

街灯の明かりで地図を照らし出して今いる場所を確認しておく。

ええと……ここはからだ……30分もかからずに八神はやての住んでいる家まで行けそうさ。

もちろん、何もなければだ。

迷子とかにならなければの話だ。まあ、迷子ぐらいなら近くを通った人を適当に捕まえて道を訊ねればいいのであまり問題ではない。

そんなことを考えながら歩いていると何の問題もなく『八神』と玄

関先に木製のネームプレートが掛けられている家が見えた。

「……………ここか」

俺は今一度、ちゃんと八神家であることを確認するとインターホンを押した。

ピンポーン！ と音が鳴り、その数秒後――。

『はい、どちら様ですか？』

「今晚は……………ギル・グレアムからの手紙を届けに来ました」

『……………グレアム叔父さんの？』

「はい、そうです」

じゃあ、開けますんで待っていてください。との言葉の後、ガチャッと音がして通信が切れた。

第27話

ガチャリと扉が開くとエプロンを着けた金髪の一見、穏やかそうな女性が大型犬を連れて現れた。

しかも、大型犬は蒼くてこんな犬っていたっけ？　と思つてしまふ。

「これが手紙です」

そんなことはさておきと手紙を渡す。

「はい、どうも」

手紙を受け取ると金髪の女性——湖の騎士シャマル——でよかつたかな？　ギルの持つていた調査資料に載っていた外見的情報が正しいければ。

それに……大型犬は盾の守護獣でいいはず。獣の姿だし……。

「……ザフィーラがどうかしました？」

「いえ、何の種類なのかと思つて。蒼い犬つて初めて見たんで」

犬つて言葉にザフィーラがピクリと反応し、シャマルは苦笑している。

「そうですよね。ザフィーラはとても珍しい種類ですから」

珍しいで済ませるか……確かに変な犬種を言うよりも突然変異や珍しいつて言つた方がどうとでも誤魔化せるから都合がいいのだから。

「そうなんですか……それでは用も済んだので行きますね」

一緒に生活しろとは言われていないので去ろうとする。

「あ、ちよつと待つて」

すると、シャマルに何故か呼び止められた。

「何ですか？」

そう訊き返す。

「せっかくだからクッキーでもどうかと思つて。昼間に作ったんだけど余つてて」

その瞬間明らかにビクツとザフィーラが震えた。しかも、心なしか冷や汗を流しているようにも見える。

「はあ……まあ、貰えるならいただきますが」

そう言った途端、シヤマルは嬉しそうに笑い、ザフィーラは犬なのに信じられないような表情をしている。なんと言うか……そう、命知らずの馬鹿を見るような感じだ。

「それじゃ、ちよつと待っててね」

意気揚々と家の奥に消えていくシヤマルの後ろ姿を見送る。

そうになるとザフィーラと二人きりになるのだが……。

どうしよう。

なんとも言えない沈黙の中、シヤマルが玄関に戻ってくるのを待つ。

一秒一秒が長く感じる。

「お待たせしました」

小袋に入れたクツキーを片手に持ちながらシヤマルが戻ってきた。

色は黒い。焦げたような感じの色ではないのでチョコクツキーだ
と思う。

「あと、これもどうぞ」

そう言つて渡されたのはクツキーと同じ色をしたマドレーヌ。

匂いはおかしくはないが何故だか食べたらいけないような気がするの
は何故だ？

見えた目、匂いからは危険性を感じないが本能が食べるなど警鐘をガ
ンガンと鳴らしている。

「……いただきます」

俺はそのマドレーヌを一口食べた。

ん？ 本能が鳴らす警鐘とは裏腹に意外と食べられる。多少苦い
が思いつきり苦いわけではないのであまり砂糖を入れていないので
あろう。中からは何故かトロツとしたクリームのようなモノが出て
くる。

今、食べた分を呑み込む。

「どっつっ」

期待したような視線でシヤマルが俺を見ている。

「ちよつと苦いで……ゴフツ……え？」

突如噎せたとおもったら吐血していた。

何で……と思考が停止している間も咳は止まらない。

「ゴホツゴホツ」

咳をする毎に血が吐き出される。

やがて力が入らなくなり……視界が暗転した。

……まさか……毒を盛られるなんて。

それを最後に俺は意識を失った。



「……ん？　んこは……」

気がつくとベッドの上に寝ていた。どうやら誰かに運ばれたらしい。

向くりと起き上がり、周囲を見渡す。

部屋の中には俺以外は誰もおらず、俺の荷物すらなかった。

服は着せ変えられており、誰かに着替えさせてもらったようだ。

それにしても……まさか、いきなり毒殺しにかかってくるとは思わなかった。

鼻も味覚も騙すあの手腕。並の使い手ではない。湖の騎士は毒使いなのだろうか？　でも、騎士だから毒を使うとは思えないが……。

コンコン。

「あの、起きてますか？」

申し訳なさそうに言いながらゆっくりと扉を開けて車椅子に乗った少女が赤毛を二つみつ編みにした少女を連れて部屋に入ってきた。

「どうも」

軽く頭を下げてそう言ってから改めて少女たちを見る。

一人は完全に申し訳なさそうでもう一人は警戒と申し訳なさそう半々であった。

「ごめんなさい！　シャマルが迷惑をかけたみたいで」

「……狙ってやった訳じゃないならいいよ」

わざとじゃないみたいだし。

「すまねえな。まさか、シヤマルがあんな危険なモノを作るなんて思ってたなかったんだ」

その本人の姿が見えないが……どうしたんだ？

「ああ、シヤマルならシグナムつてもう一人いるわたしの家族がお仕置きしてる最中や」

だからいないのか。それなら納得だ。

「再犯がないことを祈るよ」

切実にそう思った。記憶を取り戻す前に命を落とすそうだし。

「ほな、行こうか。グレアム叔父さんのところから来たんならわたしのことは知ってると思うけど一応自己紹介はしておくわ。自己紹介は大切やしな。わたしは八神はやてや。よろしくな」

ほな、次やとはやては隣にいる赤毛の少女に目配せする。

「……ヴィータだ」

確か……鉄槌の騎士だったね。ゲートボールをやっている。そうになると……鉄槌のゲートボーラーと呼んだ方がいいのだろうか？ そんなことを言ったら本人は怒りそうだな。

「俺は……適当にお前でも少年でも悪魔公^{ドラックル}でも、好きなように呼んでくれ。現在、記憶喪失で本名が思い出せないから」

そう言うとなんを勘違いしたのかはやてとヴィータが冷や汗を流し始める。

「あ、アカン……やってもうた」

「ど、どうするんだ……はやて。シヤマルの奴やっちまってるぞ」

「主はやて、どうしました？ それにヴィータまで慌てて」

二人が焦っているところにピンク色の髪をポニーテールに纏めた雰囲気的に凛々しい女性が現れた。

「シ、シグナム！ 大変や！ 大変なんや！ シヤマルがやってもうた……」

「主、落ち着いてください。ヴィータ、状況の説明を頼む」

「あ、ああ。実はなそいつ……記憶喪失になってるんだ」

「記憶喪失……!?」

この場の状況と記憶喪失そして、シヤマルと言う言葉からピン！

と来たのだろうシグナムが急に頭を下げた。

「済まない！ 昨日は私が出るべきだった」

「あく、何か誤解されているようですけど……記憶喪失は梅雨ぐらいからですよ」

「「は？」」

……うん。まずは、俺の現状から話さないといけないようだ。



リビングまで降りてくるとそこで改めて現在の俺の状況を伝えた。

ソファアームに座るのははやて、ヴィータ、シグナムの三人。床に伏せるザフィーラ。そして、床の上で正座をしているシャマル。

「……とまあこんな感じですよ。うん、まいったね」
作り笑いを浮かべる。

「なあ、何で作り笑いなんてするんだ？」

「だって……そうしないとこうなるからね」

俺は浮かべていた作り笑いを止める。

「人形見たいでしょ。感情を映さない瞳に変わることのない表情。そして、欠落した感情」

鏡を見る毎に思う。自分は人形なんじゃないかと。

ちよつとだけ戻った感情はほんの少しの寂しさ。

「……大変なんやな」

「そうかもね。色々欠落してるから苦には感じないんだけどね」

「それでこれからどうするんだ？」

「記憶を取り戻すために色々回るつもりだよ。記憶が戻れば感情も戻るだろうし」

そのために日本に戻って来たんだから。

「そか……グレアム叔父さんの手紙にはきみのことを頼むってあったんよ」

「……ギルがね」

大方、はやての近くにいた方が闇の書を完成させようと守護騎士た

ちが動こうとしたときにサポートしやすいからだろうな。

「まあいいや、それよりも俺が持ってたバックは何処？」

「ああ、それならそこにあるぜ」

ヴィータが指差した方はリビングの端に置いてある観葉植物の隣だった。

そのバックを取りに立ち上がり、観葉植物のところまで移動する。その最中に思い出した。

鍵がない。

まあ、問題はない。どうせ安物の鍵だし。

バックの二つあるファスナーを動かないように止めている南京錠の鍵はデバイスの中なのだ。

デバイスは手元がない。なら、南京錠を壊すしかないだろう。

はやてたちの前まで戻ると再びソファアームの上に座る。

それからバックを膝の上に置いて南京錠を掴む。

バキッ！ と南京錠を壊してファスナーを開ける。

「ええと……」

ガサガサとバックの中身を漁って輸血パックを探す。

外から血を飲んでいるとバレないように輸血パックは市販されているゼリー飲料のパックを使っている。

「あった」

ゼリー飲料のパックを取り出すとそのキャップを開けて一気に飲み干す。

新鮮さは皆無だが、血は摂取できるので我慢だ。

飲み終わったのを見計らってはやてが話しかけてきた。

「なあ……壊す必要あったんか？ てか、何で壊せんの？」

「鍵がなかったから。あと、壊せるんだから仕方がない」

ゼリー飲料のパックの蓋を閉じるとバックからビニール袋を取り出して中に入れる。そのビニール袋はぐるぐる巻きにしたあと再びバックの中に入れる。

「そか……」

疲れたようにそう呟くとはやては一回溜め息を吐いた。

「なあ、お前は魔導師なんだろう？」

今度はヴィータがそう言ってきた。

「なった覚えはないんだけど」

魔導師になった覚えはない。魔法を使えるように仕込まれはしたが……

「はあ!? 嘘吐いてんじゃねえぞ!」

「だって、ギルに仕込まれただけだし」

「グレアム叔父さんが?」

「そうだよ」

「何で?」

「知らない」

ギル本人はその方が都合がよかったからでしょ。何が目的なのかは分からないけど。

それでも闇の書が関係してるのは確かだ。

「では、我々のことは何処まで知ってる?」

「ギルの調査によると……全員が現在状況を趣味にしてるとか何の役割をしているか位じゃないの? それも夏時点だったから今はどうか分からないけど」

完全に表情を凍らせる八神家一同。

特にヴォルケンリッターたち。はやては……ヴォルケンリッターたちほどではない。

「まあ、ギルの変態的調査の結果みたいだから気にしなくてもいいと思うよ。完全に黙認してるし」

「……そうなんか?」

「でなければとつくの昔に何らかしらのアクションがあったでしょ」

「……そやね」

安心したのかホッと一息吐くはやて。

「あゝ」

「何でそんなに元気なの? 昨日あんなに血を吐いていたのに」

シャマルがおずおずとそのようなことを言ってきた。正座が辛いのかその表情はかなりひきつっていた。

「あく、あれね。防衛本能が毒に汚染されたのを血ごと吐き出しただけだから」

「昨日のはそんなレベルではなかった。明らかに致死量だったぞ」

「……ザフィーラが喋った」

てつきり喋らないとばかりに思っていたので意外だ。

「あの倍は厳しいが、あれぐらいなら問題ない」

監禁されていた時に比べればだが。

「……いや、もうそれは人間じゃねえぞ」



話はまだ続きそうではあったのだが、シグナムが剣道の講師としてのバイトに行く時間となってしまうたのでお開きとなった。

話はシグナムが帰ってきたら再開と言う運びである。

「なあ」

「ん？」

「デバイスを返せとは言わないのか？」

デバイス………あ、忘れてた。

「おい……もしかして忘れてたのか？」

「忘れてた」

「おいおい」

「だって………基本的に必要のないものだし」

日常的に使うなら話は別なんだけど………そんなことはないしね。

「まあ、確かにそうだろうな」

「そうそう」

縁側に腰かけて空を見上げる。

天気は晴れで風もそれなりにあるから洗濯物はよく乾くだろう。

はやととシヤマル、ザフィーラは買い物へ俺は出かけるのではなく

縁側にヴィータはりビングから俺を監視中？

「……ゲートボールはやりに行かないの？」

「ん？ 今日はないんだよ。あるのは明日だ。興味あるのか？」

「ん、分かんない。記憶が戻るならやるだろうけど……」

「えらく記憶を取り戻すことに執着してるな」

「……これしかないからね」

今の俺にある執着心と呼べる感情のほとんどが記憶を取り戻すことに向いているから仕方のないことだ。

「そうか」

それつきり沈黙が流れる。

ザザザと風に揺れる木葉の音がこの場に流れる唯一の音。

「……いつまでいるつもりなんだ？」

「とりあえずは記憶が戻るまでか……俺のことを知ってる人がいてその人が引き取ってくれるまでかな」

俺のことを知ってる人がいても多分、襲ってくる人だろうな。

「出ていくとは言わないんだな」

「出てつてもいいんだけど……ギルが手紙ではやてに俺のめんどうを見るようになって書いてるからね」

「書いてなかったらどうしたんだ？」

「野宿」

これ一択しかない。

「……泊めるしかねえのかよ」

「嫌なら追い出してくれても構わないよ」

「それだとはやてに怒られるじゃねえか」

「ごめんね」

「……そんなこと欠片にも思っただけないクセに」

拗ねたように小さく呟くヴィータの声が聞こえた。

だったら……言わなかった方がよかったかな？

第28話

「ただいま」

ガチャリと鍵が開く音がしてはやての声が聞こえた来た。するとすぐにヴィータが反応した。

「おかえり、はやて」

「良い子にしてみましたか？ ヴィータちゃん」

「子ども扱いすんじゃないよ、シヤマル」

守護騎士たちの仲は良好なようだ。

「あれ？ あの子は……」

「ん？ ああ、あいつなら……って何処行つた？ さつきまで縁側にいたんだが」

「何か用？」

俺を探しているようなのでキッチンから声を掛ける。

「うわっ！ い、いつの間に移動してたんだよ！」

「さつきだけど」

足音を立てないように移動したから気がつかれなかったのだ。意外と気がつくかなと思っていたのだがそうでもないらしい。

「それで何？」

「そやった……キミの今着ている服はわたしがサイズを間違えて買ったちゃったやつなんよ」

「そうだったんだ」

明らかにシヤマルやシグナムの着ている服だとサイズが大きすぎるし、ヴィータのだとちっちゃいしね。

「グレーム叔父さんに頼まれたのもあるからキミの服を買わなあかん」

「要するに服を買いに行くよ」

「正解や。シヤマル、あとはお願ひしてもええか？」

「ええ、大丈夫よ。はやてちゃん」

シヤマルははやての言葉に軽く頷きながら返事をするそそくさと野菜や肉の入ったスーパリーのレジ袋を持ってキッチンに入って

いった。

「あたしも行くぜ！」

「おお、了解や。ザフィーラはどうする？」

「……いえ、家で待っています」

「ほな、行くで」

トントン拍子で話が進んで行き話に入る隙すらなかった。

まあ、話に加わっても結果が変わらないのなら話に加わる意味すらないか……。

ずっと家の中にいるよりも記憶が戻る可能性が高くなるし反対する理由はない。

「お金は大丈夫なの？ さつき買い物に行ってきたんでしょ」

「それなら問題ないで買い物が終わったあとに引き出してきたしな」

「そう……ならいいよ」

いざ買うときとなってお金がないんじゃないし話にならないし……。

「ほら、さつきと行くこうぜ」

一足先に玄関に出たヴィータが急かすように言ってくる。

「せやな」

はやては軽く笑ってそう言うのと車椅子を動かして玄関へと向かって行った。

俺はその後ろに付いていく。

土地勘がないので先頭に立つことが出来ないからだ。

と言いつつ、土地勘があっても先頭に立つ気はこれっぽちもない。必要とあらば話は別だが……。



「うくん……どれがいい？」

「別に何でもいいよ」

「……一応、キミの着る服なんやから」

困ったように笑うはやて。それを見たヴィータが言う。

「だったらこれでいいじゃねえの」

そう言って差し出されたのは紺色のタートルネックの長袖とグレーの厚地のパーカー、それにジーンズだ。

「それでいいよ」

「いや……でもなあ」

「ほら、本人がいいって言ってんだからコレにしようぜ」

呉服屋に着いてからすでに一時間近く経っているので買うものがないヴィータは飽きてきたのだろう。

ヴィータと一緒に来た理由はきつと俺がはやてのことを傷つけないか監視するためだろうし。

昨日やそこらで会った人間を信用出来るはずがないのだから当然と言えば当然だろう。特に俺のような得たいのしれない存在なら……。

「そうそう。特にこだわりなんてないし、着れば問題ないよ」

「せやけどなあ〜」

「はいはい、さっさと会計を済ませようか」

あんまり服を選ぶことに時間を掛ける必要はない。

着れば十分。それだけだ。

必要最低限あれば基本的に問題ない上にある程度の汚れであれば洗わずとも能力の応用でなんとかなる。

仮に洗濯しても乾かそうと思えばすぐに出来るのだ。水の分子を動かして蒸発させればいいだけなのだから。

俺ははやてをレジに並ばせるとレジの出口に移動する。

すでにヴィータは移動していた。しかも、アイスを食べている。色からしてバナラとチョコのミックスだ。

「ん？ はやては？」

俺が近いて来たのに気がついたヴィータがそんなことを訊いてくる。

「今、レジで並んでるけど」

「そうか……」

そう言うとヴィータは再びアイスを食べた。

冬なのによく食べようと思ったな。

寒いのに冷たくなるようなモノを食べるだなんて……。

ふと、見てみると意外と周りの人たちもアイスを食べていた。

厚着をしてまで冬にアイスを食べたいのか？ そんなことを思っ
てしまう。

「終わったで〜」

キコキコと車椅子を動かしてはやてが膝の上に服の入った袋を置
いてやって来た。

「じゃ、帰ろうぜ」

「せやな……あ、コレはキミのやから自分で持ってきてくれるとありがた
いんやけど」

「分かった」

はやての膝の上に置いてある服の入った袋を手を持つ。

「ほな、行こか」

車椅子を動かしてヴィータのあとに付いていくはやてのあとに続
く。

とりあえずは、道を覚えよう。

一人で動くときに迷子になりにくいようにするために。

まあ、そんな機会が訪れるとは限らないんだけどね。

ヴォルケンリッターの面々はあんまり俺を一人にしないようにし
そうだから。

守護騎士である彼女らにとって俺は得たいのしれない怪しい人物
でしかないのだから。信用なんて全くない。あつたら奇跡だ。

実際に前を歩くヴィータはいつでも俺が何か変な事したら即座
に迎撃出来るように注意を向けているしね。

はやては気がついてないけど……。気がついてたら注意してるだ
ろし、愛されているなあとつくづくそう思う。

記憶を失う前の俺って……愛されていたのかねえ……。ふと、そう
考えてしまった。

自分は愛されていたのかと。

………考えようとも答えは出ず。でも、その事に何の不満も感じ
ない。だから、その事が少しだけ寂しく感じた。

● ● ●

はやての家に戻ると与えられた部屋に服を置くと部屋の窓から外に出て屋根の上に登った。

「……何でヴィータがいるの?」

「何だよ? あたしがいたら悪いのかよ……」

不機嫌そうにそう返してくるヴィータに俺は首を横に振る。

「別に悪くないよ。ただ、はやての傍にいないのかなって」

「今はザフィーラとシャルマルがいるからな。最低でも誰か一人ははやての傍にいるように心がけてるしな」

「……そう」

「やっぱり……愛されてるね、はやては……」

「それで、おまえは何で屋根の上にいるんだよ」

「ちよつとやろうと思ってたことがあったんだよ」

「……変なことだったらアイゼンの頑固な汚れにするからな」

そんな釘を刺すようなことじゃないんだけど……。まあ、何をするか分からないから当然と言えば当然の反応か。

「……好きなようにすれば」

霧化すれば物理的な原因で頑固な汚れになる可能性はない。なので適当に返事をする。

「おいー」

怒鳴ってくるヴィータを無視してピーツ! と口笛を吹く。

するとほどなくして次々とカラスや雀、鳩などの鳥類が集まってくる。

「うわっ!? な、何だよ……これ……」

屋根の周りを埋め尽くすように集まってきた鳥たちにヴィータが驚く。

そして、鳥たちが一斉に鳴き始める。

「……………」

鳥たちの鳴き声に秘められた曖昧なイメージを頭の中で少しずつ

形作る。

「……そう、ご苦勞様。じゃあ、またいつか頼むよ」

そう言うのと鳥たちが一斉に飛び立っていく。

それを見送り、少しの間ボーとしてると声をかけられた。

「……何してたんだ」

「話を聞いてただけだよ」

「はあ!？」

「彼らが見てきたこの街について」

俺に関する情報は全くなかった。同時に街に関してもあまり変わりが無いようだ。

精々、古い廃ビルを壊して更地にしたり、建て直したりしたただけらしい。

そのせいで巣を失ったと嘆いていた鳥が複数存在した。

「……彼らも彼らで苦勞しているんだね」

「いや、あたしに言われても困るんだけど……」

「それもそうだね」

グイータに言ってもしようがない。

「この事は皆に伝える?」

「当たり前だろ」

「そ……」

それならそれで別に構わない。

「……いや、もっとこう……言わないでくれ的なのはないのかよ」

「それだったらわざわざここでやることないじゃん」

「それもそうだよな」

そんなもんだよ。一人でやるのは他の誰かに見られたくないことだから。誰だってそうじゃないの?」

「で、何か分かったのか?」

「廃ビルが壊されたから新しく巣を作り直さないといけないとか、新しくビルが建ったぐらいかな」

「……そんなもんなのか?」

「そんなもんだよ。彼らは人間と同等の知能を有している訳じゃない

んだから」

人間と同等の知能を持っていたらそれはそれで世界が変わっていただろうけど……。



屋根の上から家の中に戻ると……シヤマルが料理を運んでいた。

「……………」

「おい、待て……作ったのはシヤマルではない主だ」

その光景を見た俺は黙って踵を返したが、ザフィーラの言葉に足を止める。

「……本当に？」

「ああ、でなければ今頃は……」

そう言っつてザフィーラは遠くを見つめた。その姿から哀愁が漂っている。

「……お疲れ様」

「ああ」

ザフィーラは高確率で被害にあっているようだ。

キッチンの近くでシヤマルが「ヒドイ！」と言っているが事実だ。

シグナムはと言うと……経済新聞を読んでいた。

「ん？ どうかしたのか？」

「……意外な光景だから」

「そうか？ 将たる者は様々な情報は知っておかなければならない。馬鹿に将は務まらないからな」

確かにシグナムの言う通りだ。

上が馬鹿だと苦労するのは下だし、上が優秀なら優秀なほど下はそれだけ安心出来る。

「皆……ご飯出来たでえ〜」

はやてが車椅子を動かしてキッチンから出てきてリビングのテーブルに向かう。

続々とヴィータ、シグナム、ザフィーラ、シヤマルもテーブルに向

かつて移動を始める。

俺も移動を始めて空いている席に座る。

良い匂いが鼻腔を擽る。ギルのところではまず感じなかったことだ。

「どや？ グレアム叔父さんと比べると比べるとどっちが美味しそうや？」

「……考えるまでもない」

自信あり気に訊いてくるはやてに俺は答える。

「ほう……で、どっちや？」

「もちろん……はやて」

「おっしやー！」

嬉しそうにガッツポーズを決めるはやてにヴォルケンリッター一同が称賛の声をあげる。

それを嬉しそうではあるが若干恥ずかしそうにするはやて。

いや、本当に愛されてるね。

この様子だとギルに頼まれたことはする必要はないんじゃないかと思う。

でも、あの時のギルは確実に起こることだと確信しているようだった。

でも、現在のヴォルケンリッターの面々の様子がギルが言ったことを疑わせる。

考えてもしようがないか。いずれ分かることだ。

その時になったらその時で臨機応変に対応すればいいだけだ。たとえば……記憶が戻っていたとしても一応、約束だからやれるだけやらなくては。

ただし……それに伴って起きる出来事が記憶を取り戻していた俺にとつて許容出来ないものだった場合は……妨害もしくはギル本人を叩きに行こうと思う。

まあ、記憶が戻ることなんてそうそうないだろうけど……。

先の事なんて分からないしな……。

● ● ●

夕食は普通に美味かった。ヴィータが「ギガウマ！」と言う単語を何度も言っていたのが一番印象深かった。

そして、今は……はやてと一緒にシヤマルが風呂に入っている。シグナムとヴィータ、ザフィーラは俺の目の前にいる。

「……単刀直入に訊こう。お前は……主はやてに危害を加えるか？」

「それを本人に訊く？」

「普通は訊かないだろうが……こう訊けば大抵は分かる。目は口ほどにものを言うからな」

「そう……危害を加えるつもりはないよ。する理由もないし」

そう答えるとシグナムがジツと俺の目を見る。

それから何秒経っただろうか、しばらくするとシグナムが視線を外す。

「とりあえず、嘘は吐いてないようだな」

「本当かよ？」

ヴィータが信じられないと言った様子でシグナムに言う。

「ああ。少なくとも今現在は間違いない」

「……分かった」

迷いなく言い切ったことでヴィータは一応ではあるが納得したようだ。

「将が決めたならそれに従おう」

「シヤマルには私から伝えておこう」

とりあえず、俺ははやてに対して危害を加えないと判断してもらえたらしい。

それでも、しばらくは一人で行動出来なさそうだ。

外に行くとしたら誰かしらに付いてきてもらうか誰かに付いていくかなさそうだ。でも、それも監視の必要すらないと判断されるまでだろう。

確か……明日はヴィータが近所のお年寄りたちとゲートボールをしにいからしいからそれに付いていくか。

そうすれば外に行く大義名分を得られる。

これなら誰も咎めることはしないだろう。

ゲートボールをやるなら公園か何処かの広い場所だろうし、もしかしたら記憶を失う前の俺が行ったことのある場所で、記憶を取り戻す切っ掛けになるかもしれない。

第29話

翌日。

早速俺はヴィータに付いていくことにした。

その際に明らかにヴィータは嫌そうな顔をしたがはやてが「そんな顔したらアカンで」と注意した途端に嫌そうな顔から仏頂面に変えた。はやての言うことならすぐに従うらしい。

多分ではあるがヴォルケンリッターの中で一番はやてに近いのは背丈からしてヴィータだろう。

はやてがもう少し大きければシグナムかシャルマであったと思う。性格のことも考えると……はやてからしたらヴィータは妹のような存在だろう。シグナムは出来る方の姉で、シャルマはドジな方の姉、ザフィーラは……番犬？ ポジションか。

ん？ 出来る方の姉とドジな方の姉……。そのことに既視感を覚えた。

俺は……似たようなのを知っている？

「……………」

思い出せそうで思い出せない。

なので、一旦保留にした。ふとしたタイミングで思い出すかもしれないからだ。

「おい、行くぞ！ 来ないなら置いていくからなー！」

ヴィータはそう言うのと早歩きで行ってしまった。

その小さな後ろ姿を見失わないように歩き出す。

「……楽しそうだね」

ヴィータのあとに追いつきがてらそう声をかける。

「当たり前だろ！ ジーちゃんやばーちゃんとやるのは楽しいからな」

「……そっか」

声が弾んでいることから本当に楽しみにしているのが分かる。

「大会でも目指してるの？」

「いや、趣味だけ。大会に出るよりも気楽に皆でワイワイやりたい人

で集まってるからな」

「へえ〜」

そんなことを話しているうちに中々に広い公園に到着した。

俺はすぐさまベンチに座り、ヴィータはそのまま公園にいるお爺ちゃんお婆ちゃんたちのところに向かっていく。

「にゃ〜」

「ん?」

突然猫の鳴き声が足元から聞こえてきたので見てみると……手足の部分のみが白い黒猫が俺のことを見上げていた。

何故かその猫を見ていると……何かを思い出しそうになる。

猫はもう一度一鳴きするとピョン! と俺の膝の上に飛び乗り伏せた。

そして、マーキングするかのようにその体を擦り付けてくる。

「……どうしたんだ? リリン……え?」

リリン? この猫の名前……?

っ!? ……ノイズが走る。

廃ビルの中に誰かに抱き抱えられた状態で現れる瞬間やどつかの屋敷の中でこの猫と同じように手足の部分だけが白い黒猫の子猫が俺の膝の上に乗っている場面が頭の中に流れる。

……ああ、思い出した。この子はリリンだ……俺になつてくれた最初の猫だ。

他にも色々と思い出してきた。

「……ありがとう。見つけてくれて……やっと思い出すことが出来た」

名前と感情を……あとは人だけだ。

リリンの背中を撫でる。今までいなくなっていて撫でれなかった分と記憶が戻ってきたお礼の気持ちを込めて優しく撫でる。

俺は……少しの間だけだったけど確かに愛されてはいた。そして……憎まれてもいた。

今なら分かる……何で追われたのか、何で化け物と呼ばれたのか。でも、もう少しですべてを思い出せる。記憶の中に霞みがかつてい

る部分……そう、俺の名を呼ぶ人の顔と名前……そして、家について。「にゃ〜」

気持ち良さそうに鳴くりリンの声を聞きながら目を閉じる。久々に穏やかな気持ちになった。

今まで色褪せていた世界に感情と言う色が付いたからだと思う。

今日は……いい日だ。



「……………どうしたんだ？　笑ってるぞ……もしかして、記憶が戻ったのか？」

リリンを撫でるのに夢中になっていたらいつの間にかヴィータが近くにいてちよつと驚いたような様子で気を使うように小さな声でそう言ってきた。

声が小さいのは近くにいるお爺ちゃんお婆ちゃんに余計な気を使わせないようにするためだろう。

「うん。全部じゃないけどね。粗方は戻ったと言ってもいいぐらいにはね……………」

「なら、全員がいるときに話せよな」

「分かってるよ。元々、言うつもりだったからね」

「なら、いいけど……ちゃんと話せよな」

まるで話さないような言いぶりだ。やはり信用されてはないようだ。

そのことに苦笑が漏れる。

「何笑ってんだよ……気味悪いな」

「気味悪いはさすがに酷いと思うんだけど」

本当に苦笑しか出来ない。

「ふん！　それで名前は何て言うんだ？」

「蓮って呼んで」

「……蓮だな」

「うん」

確認するように訊き返されたので頷く。

「じゃあ、休憩が終わりみたいだから行くぜ」

「頑張ってるね」

「おうー」

グツと握りこぶしを握ってニヤリと得意気に笑ってヴィータが答える。

自信満々のようだ。

確かに……数ヶ月も続けてるはずだからそれなりに自信がついているのだろう。

ゴロゴロと唸るリリンを喉元を指先で撥るように撫でる。

最後に触った時と変わらず毛並みはいい。ちゃんとお手入れはされているようで安心した。

「……ふふ」

自然と笑い声が漏れてくる。

今感じているポカポカとした陽光を浴びている時のような気持ちにしてくれる、リリンの存在が愛しくてたまらない。

やがて満足したのか「なあ〜」と鳴くとリリンは俺の膝の上から飛び降りて別の場所に向かって歩き出した。

「またね、リリン」

俺は去っていくリリンにそう声をかける。

次会うときには玩具か何かを用意しておかなきゃな。

次会えるときを楽しみにしながら俺は去っていくリリンから視線を外すのだった。



「と言うわけで改めてよろしく」

ヴィータがゲートボールを終えて、一緒に家まで戻ってくると他のヴォルケンリッターの面々とはやてが戻ってくるのを待ち、戻ってきたところである程度記憶が戻ったのと自分の名前を告げた。

まあ、特筆すべきことはなかった。

あるとすれば……。

「なあなあ！ 本当にニンニクは平気なん？」

吸血鬼だと知られたことぐらいか。

原因はザフィーラ。あまりにも血の臭いが濃いので危険ではないかと疑われていたのだ。

そして、記憶が戻ったのを境に訊かれたわけだ「何故、血の臭いが濃いのだ？」と。

でも、吸血鬼であると言うことを教えると同時に違和感がない程度に暗示をかけておいたのではやてたちが俺が吸血鬼であると言うことを俺が吸血鬼であると知っている人たちしかない場所ではか話せないようになってる。

お互いの目を見ながら話したので簡単に暗示をかけることが出来た。

「平気だよ。そもそも伝承にある吸血鬼の弱点のほとんどはその吸血鬼特有の弱点だと考えた方がいいよ」

「そうなんか？」

「うん。ニンニクの臭いで逃げ出すのは鼻がいいからだし、杭を心臓に打ち込まれて死ぬのは杭が心臓に打ち込まれたままで再生が出来ないからだし」

「せやと……弱点なんてあんまないんやな」

個人レベルの弱点なら色々あるんだけどね。

「まあ、腕を千切られても千切られた腕をその部分にくっ付ければ個人差はあるけど治るしね」

「……ゴキ以上の生命力やね」

「一緒にしないで欲しいんだけど」

ゴキはないだろゴキは……。

頭を取られても2週間は生きていけるなんて生命力はさすがに持ってないし。

「そもそも、再生能力が高いだけだからね」

吸血鬼の血が濃ければ濃いほど吸血鬼としての能力は強くなっていくから……。

「ふーん……他にはどんなことが出来るん？」

「伝承通りのことと他にも色々出来るよ」

……人によつて得意不得意はあるけど、最低でも魔眼は全員が使える。
「へへ、そうなんか」

感心したように頷くはやて。

そのはやての袖をヴィータが軽く引つ張った。

「なあ、はやて……蓮が吸血鬼つてことは昨日飲んでたあれつて……」

「そうやないんか？ で、どうなん」

「普通に血だけど……ちなみに好みの血液型はO型」

「そこまでは訊いてないで」

「いやいや、ついね。久々に会話が楽しくて」

何も感じない会話は楽しくも辛くもないただの言葉の羅列にしか過ぎなかったから。
それから好物の話とかで雑談をしつつ過ごした。



「あ……もうこないな時間か」

時計を見てはやてがそう言った。このあと何か予定があるのだからか？

「何かあるの？」

「今日、定期検査の日やねん」

「そうなんだ」

「せやよ。だからそろそろ行かないと」

定期検査か……。

ちやうどはやてにはあまり聞かせたくない話があるからちやうどいいかな。
「何時ぐらいに帰ってくる？」

「そやなあ……いつもと同じくらいやと……夕食に使う食材の買い物もするから、六時くらいやな」

それくらいなら、はやてが帰ってくる前に話が終わるから何の問題もない。

「そっか……気を付けてね」

「うん。ほな、行こかシヤマル」

「ええ、シグナムあとはお願いね」

「ああ」

「じゃあ、行ってくるで」

そう言うとはやてはシヤマルと一緒に定期検査に出かけていった。ガチャリと鍵の閉まる音がしてから俺は口を開く。

「さてと……ちよつといいかな?」

「ああ」

俺の雰囲気が変わったのを理解したのかシグナム、ヴィータ、ザフィーラの雰囲気ががらりと変わった。

「真面目な話をするけど……闇の書の収集はやってる?」

「何故それを?」

「それは、あとから答えるから先に教えて欲しいんだ」

「それならはやてに止められてるからやってねーぜ」

そうか、やってないか。

「それがどうしたのだ?」

「注意しておいて欲しいことがあってね」

「注意だと?」

「どういうことだ?」

俺は一白おいてから話す。

「ギルは……君たちが闇の書の完成に向けて動くと確信している」

「なんだと!?!」

「はあ!?! どういうことだ? 何でそんなことが分かんだよ!」

「落ち着けヴィータ。蓮の話はまだ終わっていない」

「だってき……ギルって時空管理局の人間なんだよ」

ギルの山荘にあった資料の中にちゃんと時空管理局提督 ギル・グレアムって記載されたのがあったから。

「何?!?!」

「はあ!?!」

「……………」

驚くシグナムとヴィータを他所にザフィーラは沈黙を保っている。「夏にはもうヴォルケンリッターがはやと一緒で暮らしているのを知ってたんだよ。それなのに監視するだけで何のアクションも起こさなかった」

ギルは何を企んでいるのか……復讐かはたまた別の何かなのか。検討もつかない。

「……何故、そのことを我々に教える?」

ザフィーラが低い声で訊ねてきた。

「何故かってそれは……ちよつとした意趣返しだよ。感情が戻ってきたらギルとの生活の記憶で苛ついてさ」

「そんな理由かよ!?!」

「当たり前じゃん! だってさ、ぐっすり眠つてるところに突然砲撃魔法やってくるしさ」

うん……思い出すだけ苛立つてきた。

眠つてあるところを砲撃魔法で外にぶつ飛ばされて地面を転がったり、魔力が回復した途端に訓練と言う名の虐めのようなことを始めてきたり……。

「……あく、苛ついてるのは分かったから落ち着け」

「…………ごめん」

そうだった……今は苛ついてる時ではない。

「話を脱線させちゃったけど……ギルが闇の書の完成を望んでるのは確かだから気をつけて欲しい」

「分かった。注意しておこう」

「はやてには指一本触れさせねえ」

「主の周りは常に見張つていよう」

これでいいかな。俺の意趣返しは……。もし、ギルがここに来たときは苦労するといい。

「とりあえず、話はこれぐらいかな」

ヴォルケンリッターの面々が俺の言ったことを信じようが信じま

いがギルが警戒されるのはこれで確定だ。

あ、デバイスのことを忘れてた。

「あ、そうそう。デバイスのことなんだけど、今持ってる？」

「ああ、持っているが」

「ちよつといい」

「……………まあ、いいだろう」

ちよつと考える仕草をしたのちシグナムが俺がギルから渡されたデバイスを取り出してテーブルの上に置いた。

「ありがと……………えいつ！」

テーブルに置かれたデバイスを手に取ると力を入れてバキツとデバイスを壊す。

とてもいい気分だ。ギルの資産を減らしたと思うと清々しくなる。

「……………こいつ、デバイスを壊しやがったぞ」

「あ、ああ……………」

「……………それだけ苛立っていたのだろう」

スツキリした。ギルが壊さないでくれと言ったのを壊したので苛立ちが沈静化してきた。

「……………ふう」

「……………やりきった顔をしてやがる」

「そう言ってやるな……………ストレスが溜まっていたのだろう」

何も言わないザフィーラ。やっぱり、ザフィーラは寡黙だ。変に喋るよりも安心感がある。

それはさておき。

ギルは闇の書のことを何処まで知っているのだろうか？ 何も起こらないといいんだけど……………。

ふと沸き上がる漠然とした不安が目の前で形になるまでそう時間が掛からないのをまだ知らなかった。

十一月も終盤を迎えた頃にそれは起こった。

突如、はやてが胸を押さえて倒れたのである。

俺はその場にいなかったたのでそれを知ったのはその日の夕方であつた。

シャマルが原因を調べたところ闇の書が原因だと判明した。何でもはやてを侵食しているらしくそれを止めるためには闇の書を完成させる必要があるようだ。

多分、ギルはこうなることが分かっていたのだろう。でなければ、この時期に間に合うように俺を送ったりしなかつたはずだ。……闇の書の完成を完成させてどうするつもりなのだろうか？

「……行くんだね」

「ああ」

騎士甲冑——バリアジャケット——を纏つたヴォルケンリツターの面々がはやての入院している病院の屋上にいる。

これから他の世界に魔力を集めに出かけるのだ。

「だつたら……お土産をお願いね」

「旅行に行くわけじゃねえんだぞ!!」

「それぐらい分かつてる。はやてにだよ」

「……そういうことね」

シャマルは俺が何を意図して言ったのか分かつたらしい。

「どういうことだ?」

ヴィータがシャマルに説明を求める。シグナムとザフィーラはすでに理解しているのか黙つたままだ。

「私たちがはやてちゃんに止められた収集活動をしてないって誤魔化すためと……元気づけるためよ」

「そうならちゃんと最初からそう言えよな!」

「えー、お土産をお願いねって言った時点で気がついてよ」

俺にじやなくてはやてにだつてことをさ……。

「蓮が紛らわしい言い方をするからだろ！」

まるで自分は悪くないと……言ったら言つたで言い争いに近くなるので言わないが。

「それじゃ、皆……気をつけてね」

「ああ」

「うむ」

「それじゃ、家のことはお願いね」

「ちゃんとはやての様子を見に行けよ？」

「分かつてるよ。ちゃんと昼と夕方と二回行くから」

そう返事を返すと、シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、シヤマルの足元に魔方陣が展開されてカッ！ と一瞬、閃光が走るとその姿を消した。

「……行つたか」

本当ははやてのところに誰か残して起きたかつたんだろうな。

俺よりも同じヴォルケンリッターの仲間なら確実なのに……。それでも行つたのは俺がある程度は信用されたからかな？

だとしたら……その信用には答えないと。

俺は体を大鷲の姿に変化させると病院の屋上から飛び立ち、家に向かつて飛んでいった。



翌日。

「……………そう言えば誰もいないんだつた」

ヴォルケンリッターの面々は闇の書の完成のために収集活動を初めて、はやては現在入院中。

昼にははやてが入院している病院に様子を見に行くから……その前に掃除とかやっておかなくちやな。

幸いなことに掃除のやり方は覚えてるし、洗濯物も俺の分を洗うだけでもいいからそんなに時間はかからない。

これなら少し早めに家を出て公園に寄り道してリリンに会えるかもしれない。リリンが公園にいる確率はあまりないが0ではないので会えたらラツキーと思っておこう。

「……朝食はパンでいいか。俺以外は誰もいないんだから」

冷蔵庫の中から牛乳を取り出してコップに注ぎ、袋に入った食パンを二枚取り出す。

そして、いざ……朝食を食べようとしたタイミングで電話が鳴った。

「はあ〜」

俺は渋々電話の受話器を取る。

「はい、八神です。どちら様でしょうか？」

『あ、もしもし、蓮君か？ わたし、はやてや』

「どうしたの？」

『いやな、皆は朝食を食べたかなって』

「いや、これからだよ。ちなみに俺以外の皆は出かけてるよ」

『そうなん？ 蓮君はシグナムたちが何処行ったか知つとる？』

「ううん。詳しい場所は知らないけど……お土産はお願いしておいたから期待してていいと思うよ」

『そか、ならお土産は期待してるで』

「うん。あと俺はお昼にそっちに行くから」

『了解や。待つとるで』

「それじゃ、またお昼に」

『せやな』

ガチャリと電話が切れる。

ささて、食べますか。

俺は食べる前に中断された食事を再開した。



朝食を食べ終わったあとは洗濯物を干し、食器を洗い、部屋に掃除機をかける。

それらが一通り終わるとメモ帳とボールペンを持って出かける。

「……いつてきます」

誰もいないのについて言ってしまう。

これは最早、癖と言うべきものだろう。でも、返事が返ってこないのに言うのは寂しいものだと思つた。

家から出てすぐに公園に向かう。お昼まで時間はまだあるのでリリンに会えるかもしれない公園に行くのだ。

公園に着くと俺はベンチに座り、空を見上げる。

今日は曇っているので晴れている日よりもやや寒い。

その場で少し待っていると……リリンとは関係ない猫たちが寄ってきた。

「……今日は珍しいな」

小さくそう呟く。

いつもならリリンしか近寄ってこないのにリリン以外の猫が近寄ってくるのは実は初めてなのだ。

ただ、単に俺がまだ思い出せていないだけの可能性もなきにしもあらずだが……。

「……ん？」

よくく見てみるとこの猫たちすべてに見覚えがあった。

正確な場所は思い出せないが、確かに見覚えがある。

でも、何処で見たのか思い出せない。もどかしいが記憶が全部戻ってないので仕方がないと受け入れる。それよりもニャー、ニャー鳴く猫たちは何処から来たのだろうか？

いつの間にかベンチの上に上がり、俺の両隣で伏せていたり、膝の上に乗って寛いだり、肩や頭の上に乗ったりと思ひ思ひの行動をされている。

……別に嫌ではないのだが……何でこんなになつてしまっているのだろうか？ メツチャ擦り寄られてるし、まるで臭いを付けてるみたいだ。

てか、実際その通りだ。

ある程度臭いをつけ終わると次の猫が変わりに臭いを擦りつけて

くるのだから。

しかも、臭いをつけ終わった猫はニャーと一鳴きすると公園から去っていく。

どうやら、今日は臭いをつけに来ただけのようだ。

昼にははやてが入院している病院に行くので、まあいいのだが……。

そして、最後に残った猫が俺に臭いをつけ終わると去っていったのでベンチから立ち上がり病院に向かって移動を開始した。



「やつほー、はやて。宣言通り来たよ」

病院の受付ではやてのお見舞いに来たことを告げてからはやての入院している病室にやって来た。

「いらっしやい。待ってたで」

笑顔で手を振りながら出迎えるはやてに俺も笑顔で返す。

「調子はどう？」

「んー、ちよつとダルいけど……それだけやね」

顔色も悪くはないから本当にそれだけだろう。

「それならよかった」

「ヴィータたちはおらんの？」

「それはね……」

俺は他に人がいないのを確認してから小さな声で言う。

「……はやてを元気づけるために他の世界に行ってお見舞い用のやつを探してるんだよ」

「そうなんか？ でも、わたしは……皆が傍にいてくれた方が嬉しかったんやけど……」

「それは、皆に直接言った方がいいよ」

その方がヴォルケンリッターの皆は喜ぶだろうから。彼女らは皆、はやてが好きだからね。

「言いたいのは山々なんやけど……来てくれないと言えないんやけどな」

「ははは、それもそうだね」

困ったように笑うはやてに俺も笑い返す。

確かに、はやての言う通り言おうとしたら実際に目の前にいないと直接言えないことだ。

念話を使えば話は別なんだけどね。

………思ったら俺も念話を使ってなかった。戦闘用の魔法だけ覚えて念話を忘れてたとか……マジでないわ。

すっかり念話の存在を忘れてた。いや、これは本当に笑うしかない。

「どないしたん？ 急に笑いを堪えているような顔して……」

「ん？ ちょっとね……忘れてたことがあつてね。それを思い出した結果だよ。あまりにも馬鹿らしくて」

「そ、そうなんか……」

コメントしらずらそうに言葉を濁しすはやて。

とりあえず、話題を変えよう。

「ゴホン……それでさ、入院してる間は暇そうだから何か持ってこようか？」

「持ってきてくれるん？ だったら何か本を持ってきてくれると嬉しいんやけど……」

「いいよ。どんなのがいい？」

申し訳なさそうに言ってくるはやてに俺は二つ返事で答えた。そうするとはやては少し考えるような仕草をしてから言った。

「せやったら……ファンタジー系の短編集を頼むで」

「了解。短編集ね」

「せや、ありがとな」

「いいよ。お世話になってるんだし。夕方にまた来るから」

「うん。待ってるで、気いつけてな」

「それじゃ、また」

俺は軽く手を振りながら病室をあとにするのだった。

● ● ●

病院をあとにすると俺は入院しているはやてに持っていく本を借りるために図書館に向かった。

「あ……図書カードはどうしよう……」

困ったことになった。俺は図書カードを持っていなかった。家にある本だとはやてはすでに読んでいるだろうから持っていくのは避けたい。

でも、俺は図書カードを作れるのだろうか？ 作るのに身分証明書とかが必要だったら……仕方がないから暗示を使うしかないか。

こんなことに使いたくはないがしようがない。内心溜め息を吐きたい気分になるがはやてのためだと自分を納得させる。

意外と身分証明書がないのは不便だ。シグナムはどうやってその問題を解決したのだろうか？ 物理的なのか？ いや……でも、シグナムはそんなことやらなさそうだから……スカウトされたのかな？ それが一番可能性がありそうだ。

シグナム以外は特にバイトとかしてるわけじゃないから身分証明書は必要ないな。

そんなことを考えているうちに図書館に着いた。

「……………やっぱり」

特に道を確認したわけではないのに図書館に着くことが出来た。そのことから導かれるのは……俺はこの図書館を利用したことがあつたんだろう。

考えごとをしてるのに一度も迷わなかった。

記憶がなくても体は覚えてるか……。

俺は軽く息を吐いてから、頭を左右に振って思考を切り替える。

今はそんなことを考えるよりもはやてに持っていく本を借りるのが先決だ。

自動ドアをくぐり、図書館の中に入ると図書館内のマップを見る。そこから、目的の本が置いてある場所を探す。

ええーと……あつた！ 奥の方か……。以外と離れていて移動が面倒だな。

そんなことを思いつつも俺は図書館の奥へと移動する。そして……。

どんつ！ と右側の柱の影から出てきた人にぶつかってしまう。

「つと……大丈夫ですか？」

床に尻餅をついてしまったヘアバンドを付けた紫色の髪をした少女に手を差し出す。

「い、いえ、すいませ……ん……」

その少女が俺の手を取り、俺の顔を見た途端に固まった。まるで、信じられないものを見たように……。

瞳は大きく見開かれ、口は小刻みに震えている。そして、小さく掠れるような声で確かに彼女は呟いた「……蓮君」と。

○ ○ ○ ○ ○

ちょうど、その頃……とある管理外世界では。

ドオオオンツ!!

大きな地響きを立てながら十メートルを越える巨体が地面に崩れ落ちる。

その周囲にはへし折られた木々が散らばり、その範囲は数百メートルにおよぶ。

「……どれぐらい埋まった？」

「ぎつと……四頁と言ったところだ」

その頁数を聞いてヴィータが舌打ちをする。

「……シグナムとシャマルの方は？」

「そちらの方は……数頁分だそうだ」

それを聞きながらヴィータは闇の書に視線を向ける。

今現在埋まっている頁数は五十にも満たない。このペースで収集を続けて間に合うのかと言う焦りがヴィータを苛立たせる。

「……ヴィータ」

「分かつてる……」

ヴィータがデバイス——鉄の伯爵 グラーフアイゼン——を構えると同時に怪鳥と言うべき巨大な鳥が飛んでくる。

「ギイアアアアアア!!!」

怪鳥が奇声を上げて、より一層飛行速度を上昇させる。

「うつせえ！ ザフィーラ、さっさと収集するぞ」

「……ああ」

突っ込んでくる怪鳥にヴィータが声を張り上げ、アイゼンを振りかぶりながら突撃し、その少し後ろからザフィーラが追従する。

ちょうど、その頃。

シグナムとシャマルの二人もこの世界の原生生物と戦っていた。

「……ふむ……硬いな」

シグナムは相手の硬さに感心していた。自身の攻撃を容易く弾くその防御力にである。

「うーん……ヴィータちゃんがいればよかったんだけど」

「そう言うな。私たちしかいないのだから私たちがやるしかあるまい」

「そうなんだけどね」

シグナムとシャマルはそんな会話をしながらも目の前にいる巨大なヤドカリをどうやって倒すか思案していた。

「……これが終わったらヴィータたちと合流しよう。この世界は魔力を持つ生物が少ない」

「そうね。いたとしても魔力と生物の強さが釣り合わないから他の世界で収集した方がよさそうよね」

「では……さっさと終わらせよう」

シグナムがそう静かに言うと同時に巨大なヤドカリは威嚇行動を止めて攻めに転じた。

第31話

「……………」

「……………」

さつきぶつかった少女は俺の手を離さず、ずっと握ったまま黙っている。

どうすればいいのだろうか？ と悩んだ末、とりあえず、声をかけることにした。

「あの……………」

見事にタイミングが被ってしまった。

「……………」

「……………」

どうしよう……………さつきタイミングが被ってしまったせいか余計に気恥ずかしい。

目の前にいる彼女もそうなのだろう。ちよつと恥ずかしそうに視線がさ迷っている。

次こそはタイミングが被らないと思って……………。

「その……………っ!!」

……………また、被ってしまった。

お互いに目をそらす……………手だけは離れない。むしろ、握る力が強くなっている。

「えっ……………と……………その……………」

とりあえず、何か言おうと思うが中々言葉に出来ない。どうしてしまったのだろうか？ こんなことは初めてだ。

落ち着け……………まず何をするかを明確にすれば答えは出るはずだ。

まずは状況の確認だ。

ここは図書館の中の一角だ。そして、目の前にいる彼女とぶつかってしまい、床に尻餅を着いてしまった彼女を起こそうと手を伸ばしたんだ。そこまではいい。

じゃあ、これから俺がすることは彼女を起こすことだ。

全く……………早くそうすればよかったのに。

「……………立てる？」

「……………うん」

グイッと彼女の手を引いて立つのを手伝う。

「……………ちよつと、そこまで行かない？」

彼女がちゃんと立ち上がってから視線で人がいないベンチを指す。

「……………いいよ。私も……………そこに行こうと思ってたから」

「分かった」

立ち上がったのだから手を離そうと思ったが……………何故か離すことが出来なかった。

その理由は分からないけど……………ただ、一つだけ確かなことがある。今この時が記憶がある程度戻ってきたなかで一番心が安らいでいると……………。

それだけは確かだ。この手から伝わってくる彼女の温もりが俺の心を暖めてくれている。

そのせいか……………今、少しばかり気分が良くて足取りが軽やかだ。



さて……………いざベンチに座ったのはいいが……………何を話せばいいのだろうか？

「…………………………」

「…………………………」

最初の時と同じようお互いに沈黙を保っている。

このまま黙っていても何も始まらないのは分かっているのだが……………どうにも話せない。

こんな時はどうすればいいのか誰か教えてください！

そう叫びたくもなる。

実際にはそんなことしないが……………助けを求めたくなる。どうすればいいのか分からないのだから。

チラチラとお互いに視線だけ向けあって目が合うとそらすを繰り返して、はや数分……………よしっ！ と意気込んでから話しかける。

「……えつと……キミは誰？」

そう訊くと目の前の少女はすごく悲しそうな顔をした。

え……!?! 何……俺は何か選択を間違えた……？

目の前の少女の反応に内心で焦りながらも返事を待つ。

「……冗談じゃないよね？ 冗談だったら本気で怒るからね……」

「う、うん……」

目の前の少女の剣幕に押されすぐにうなずいてしまった。

「……本当なの」

「……うん」

「……そっか」

「……」

本当にどう話せばいいのか分からない。

「……だったら……」

「だったら？」

だったら何だと言うとだろうか？

「……私の名前は月村すずか。……もう、忘れないでね」

「……分かった。もう、忘れない」

月村すずか。この名前をしつかりと心に刻んでおく。

「……約束だからね」

俺はその言葉に深くうなずいた。

「約束するよ」

そう言うとき彼女は花が咲くような笑顔になった。

「すずか。キミが知ってる俺のことを教えてくれない？」

「うん、もちろんだよ」

「ありがとう」

「どういたしまして」

それから俺は、すずかの家で暮らしていた時の話を聞いた。

正直、記憶の中にある場面と重なる部分が多くあり、そこが補足されていくのと同時に、より鮮明な記憶に変わっていった。

そうなると話すのがどんどん楽しくなっていくってあつという間に

時間が経っていつてしまう。

「あ、もうこんな時間……」

気がつくとき日が沈み始めていた。

はやてに持っていく本を探しに来ていたのにすっかりその事を忘れていた。このままではいけない。

「そうだね。すっかり夕方だよ」

座っていたベンチから立ち上がると、すすかの方を向く。

「それじゃ……俺は行くね」

「……うん。また、会えるよね」

「会えるよ。じゃあ、また今度」

俺はそう言うその後ろ髪を引かれる思いを断ち切り、はやてに持っていく本の物色を急ピッチで始めた。



「ごめん、はやて。遅れた」

謝りながらはやてが入院している病室に入る。

「むう、遅刻やで」

むっとした様子で頬を膨らませるはやて。

「ごめんね。ちよつと人と話してからさ」

「ふーん……誰と？」

「はやての知ってる人だよ」

「わたしの知つとる人？」

ギルの調査資料にその名前が記載されている……月村すすか。俺が記憶をなくす前に一緒に住んでいた人。

「すすかだよ。月村すすか」

「ああ！　すすかちゃんか！　つてことは図書館に行ったんか」

「そうだよ。はい、これ」

俺は持ってきた鞆から3冊の本を取り出してそれをはやてに渡す。

「お……ありがとな」

はやては本を受けとるとそれをの傍にある荷物を置くかこの中に

置いた。

「ん、気にしないで。持つてくるって約束したんだからさ」

「そか。……なあ、シグナムたちはまだ戻ってきいひんのか？」

「まだだと思うよ。戻ってきてたら真っ先にはやてのところに顔を見せに来るだろうし」

「……そやな」

はやては息を吐きながらがっかりしたようにうつむく。

落ち込むのもしようがない。はやてにとつての家族であるヴォルケンリッターが誰も自分のお見舞いに来てくれないのだから。

それこそ誰か一人でも来ていたら落ち込むことはないのだろうが……。

誰かいればその誰かから他のメンバーに念話ではやてが会いたがつてるとかですぐに呼び出すことが出来るんだし。

そうすればはやての感じている寂しさも多少は紛れるだろうと思う。

俺は所詮居候の身だし、はやての家族ではない。ギルに頼まれたから癒えに置いてあるだけの他人。

そうでしかない。

「気長に待つしかないんじゃない。その不満は本人たちが来たらぶつければいいし」

「……せやけど、皆はわたしのためにやってるんやろ」

「そうだよ」

「だとしたら、ここでうちのわがままで皆を困らせたらアカンやろ」

そうは言いつつも表情からは自分のお見舞いに来てほしいなオーラがバリバリに感じられる。

「案外……はやてのためだったら気にしないような気がするけど」

「でもなあ……」

「まあ、どうするかは……はやてとシグナムたち次第だから俺にはなんとも言えないよ」

これははやてたち家族の問題で部外者である俺が介入するような問題ではないのだから。

それにどう転んだところで俺がやることは何一つ変わりはない。闇の書の完成を手伝う。

収集するのがシグナムたちの役割なら俺の役割はシグナムたちが収集に集中できるようにはやての身の回りの警護と不満解消の相手、シグナムたちが収集活動をしていることがはやてにバレないようにすることだろう。それ以外には出来そうなことはないし。

それに収集活動をする上で最も大きい障害になり得るのははやてだろう。

はやてはヴォルケンリッターの皆が収集活動をしていることを知ったら確実に止めに入る。

何せはやてがやらないように止めていたのだから。

「それじゃ……今日は帰るね」

「うん。次はいつ来てくれるん？」

「また明日来るよ」

「ほな、待ってるで」

じゃあね、と手を振ってははやてが入院している病室から出る。

さて、どうやって……誤魔化そうかな。

そのうちにお見舞いの品を探してるは使えなくなるだろうから。

次は何を言い訳に使おうか……。

その事について考えながら病院を出て、帰路につく。

日はすっかり落ちて、すでに空は夜の闇に覆われている。

人通りもめつきり少なくなり、一人とぼとぼと歩く。

そんな中、ある看板を見つけた。

『クリスマスキャンペーン実施中!! 詳しくは店頭まで!』

クリスマスか……。

これなら時間をかけても文句は言われなはずだ。

中々帰ってこない理由にピッタリである。

気に入ったものが見つからないとかにすれば問題ない。

その代わりにちゃんとクリスマス用のやつも探さないといけないのがネックだが……変に疑われるよりは心労は少ないと予想している。

はやてもそこまで疑うことはしないだろう。

違う世界から日本のクリスマスマスに合う飾りを探してくるといいう名目なら。

……事実を知るまではやてはヴオルケンリッターのことを信じ続けるだろうしね。

さて、シグナムたちはどうなってるかな？　ちゃんと順調に進んでいるだろうか……。

俺から知るすべはないから連絡を待つしかない。

なんとも暇だ……。

これといってやることはない。

家事炊事は当たり前だとして考えても暇になる。

ずっと図書館に入り浸るのもなんだし……。

「うくん」

考えても中々良案が浮かばない。

結局……家に着くまでに良案が思い浮かぶことはなかった。



「本当に……どうしよっか」

夕食を食べ終わり、後片づけも終わったのでやることなくソファの上でごろりと寝転がっている。

一人しかいないのに風呂を沸かすのは光熱費の無駄になるのでシャワーで済ませる予定だ。

血の補給に行こうと思っても、まだストックは十分にあるので補給する必要はない。

何かの参考にはなるだろうと思って、リビングに置いてある雑誌を物色する。

「……………」

しばらくの間、無言で物色し続けると、

「……………」
「………とりあえずこれにしようか」

そう思えるものが見つかったのでそれに必要なものを用意する。

……クロスワードの本を。
それから眠くなるまで数時間の間やり続けるも……飽きた。
長時間やつても飽きがこないものもいいのだが、当てはまるものがない。

「……………」

軽く息を吐きながらクロスワードの本を閉じる。
目を閉じて眉間を片手でほぐしながら考えるも、当然の如く良案は思いつかばない。

ふと時計を見るとすでに時間は深夜を回っており、これ以上起きていると朝起きる時間がずれるので寝ることにした。

決してふて寝ではない。……ふて寝じゃないといいなあ……。

自分のことでありながら自信が持てなくなってきた。

客観的に見ると……明らかにふて寝みたいだし。

うん。やっぱり図書館に入り浸ろう。

それがいい。変になにかやるよりもそっちの方が安心出来る。

それに……図書館ならまた会えるかもしれないから。

その事を念頭に入れるとやっぱり図書館が安定だ。

これで安心して眠れる。

明日からの行動予定も決まったことだしね。

さあ、寝ようかな。

「ふあゝあ」

本格的に眠くなってきたし。

部屋に戻ってベッドの上に横になって目を閉じるとすぐに意識が遠のいていく。

その時に部屋の窓の外から部屋を覗いている誰かの視線を感じたような気がしたが、それもすぐに無くなったのでそのまま眠ることにしたのだった。

第32話

「……ううくん」

眩しい光によって目が覚める。

起き上がってその原因を探すとすぐに見つかった。

単にカーテンが開いていたので日光が直で入ってきていたのだ。

「ふああ……」

欠伸をしながら腕を上にあげて伸びをする。

首を左右に傾けるとゴキ、ゴキキ、と鈍い音が鳴り、首の位置を戻しつつ時計の針を確認すると――

「……八時過ぎ……やっぱ……」

今日はゴミ回収車が来る予定なので、その回収車が巡回する場所までゴミを運ばなくてはいけないのだ。

しかも、回収車が来るのは九時頃なので余計に時間がない。

俺は慌てて着替えると、布団を畳むのを後回しにして急ぎゴミ箱の中の袋を回収するとすぐに家から飛び出した。

ゴミ袋を持ったまま走って回収車の来る場所に向かう。それも、全速力でだ。

幸いなことに人通りがなかったので回収車が来る前になんとか到着することが出来た。

「……あ、危なかった」

指定された場所にゴミ袋を置くと服の袖口で額を拭う。

冬なのに汗をかいてしまった。

ぐうううと、お腹はならないがまだ朝食を食べていないのでお腹が減る。

幸いなことに買い置きしてある菓子パンがあるのでとりあえずそれを食べようと思う。

といっても家に戻らないことには食事に取りつけないので帰路を急ぐ。

「……うう、寒……っ」

ビュウと吹く風が汗をかいているぶん余計に寒く感じて体が震え

る。

「……ああ、もつと厚着すればよかった」

俺はそんなことを呟くが、今さらなので我慢することしかできない。

はあ、と溜め息が漏れる。

いくら急いでいたとしてももう少し心に余裕を持つべきだったと反省する。

それから、気分を変えるために両手で頬をバシン！ と叩いて活をいれたのだった。



「ただいまっ」と

軽く跳ねるようにしながら靴を脱いで家の中に上がるとリビングに向かつて移動する。

本来だったら洗面所で手を洗ってからいくのだが今回キッチンで手を洗い、すぐに朝食を食べられるようにリビングに行くことにしたのだ。

「ふう……さてと、何があったかな？」

手を洗い終ると俺は何の菓子パンがあったかを探った。

そして……あったのはメロンパンとピーナツバターパン、カレーパンの三つだけだった。これはもう選択するのは一つしかない俺はカレーパンを手取る。

菓子パンの中に紛れていたが間違いなくカレーパンは朝食になるだろう。

特にメロンパンとピーナツバターパンが紛れもない朝食になるのならそれを朝食にしているやつを見てみたいほどだ。

「さて、少し遅いけど食べますか」

時間は九時を過ぎていたので少しばかり遅い朝食になったがごみ捨てに行っていたのだからしょうがないと受け入れる他なかった。

やっぱり多少面倒でも自分で作った方がいいかもと思ったのは内

緒だ。

自分で作れば量をうまく調整できるのだから余計にそう思ってしまう。

「……お昼は何にしよっか」

遅めの朝食を食べながら昼について考える。

外で食べるか家で食べるかの選択しかないのだが……どこで食べようか？

「………そういえば今、どれぐらい持ってたっけ」

財布の中身を確認する。

中には十分過ぎるほどのお金が入っていた。

これなら、全く問題ない。

別に高い買い物をするわけではなくお昼を食べるために使うのだったら十分である。

なら、適当にここだと思ったお店でお昼を食べようと決めた。

勘って大事だよね。

ここぞというときは勘に頼るのが一番だし。

まあ、そうやって幾多の失敗をおかしている人もいるにはいるだろうけどね。

そんなことを考えながら玄関に向かおうとすると、

「……あ」

リビングに魔方陣が現れた。

それから数瞬後にカツ！ と光ると四人の人物がいる。

その人物たちの顔を見て俺は声をかけた。

「おかえり」



「それでき……順調に進んでる？」

近場にあるファミレスで報告もかねてお昼を食べている。

ザフィーラは姿を人型に変えて耳を人と変わらない形にし、尻尾も隠しているので何の違和感もない。

「近場では……収集に時間がかかる。数は多いのだが……一回に集まる量が少なくてな」

シグナムはそう言い終わると頼んでいたアイスコーヒーに口をつける。

「でも、近場だけで百頁は埋めたんだぜ」

百か……そうなると大体全頁の六分の一か。……先はまだまだ長いな。

「そっか……とりあえず、しばらくはいるのかな？」

そう訊くとシグナムはいやと首を横に振った。

「主の様子を見てからすぐに収集に向かう。今回戻ってきたのも主の様子を見るためだからな」

「それならちようどよかった。はやてはみんなに会いたがってからね」

本当にタイミングがいいとしか言えない。

はやてもヴォルケンリッターの面々と会えるのだ。それはとても嬉しいことだろう。

「そうか……」

はやてが会いたがっていたと聞いてヴォルケンリッター全員が柔らかない雰囲気を出す。

この光景を見るとはやての影響力がどれだけ高いかよくわかる。

闇の書の守護騎士は家族愛に溢れているようだ。

「だからさ、食べ終わったらすぐにはやてのところに向かって面会時間ギリギリまで一緒にいてあげなよ。本人は結構寂しがってたからさ」

「そうですか」

寂しがってたと聞いて表情を曇らせるも、実際には寂しがってもらえていることに嬉しさを感じているようにも見えた。

余所者の俺はいかない方がいいかな。

家族の団らんを邪魔しちや悪いだろうから。

はやてたちは邪魔じゃないと思うけど……家族ではない俺がいたら気を使わせちやいそうだしね。

それに、家族だけだからこそ話せることもあるだろうしき。

その点俺は図書館で時間を潰すか、家で何となくテレビを見てるだけでもいいんだしね。

夕食の買い物もあったね……そう言えば。

探せばそれなりにやることはあるんだし、それでいいかな。

「……それじゃ、俺は図書館に行ってるから。家族水入らずで過ごすといいよ」

俺はお金をテーブルの上に置くとそそくさと店から出ていく。

肉体的には疲れてなくても精神的には疲れている可能性もあるだろうし、そうなる余所者はいない方が休まるだろうしね。

闇の書の完成にほんの少しでも貢献はしているんだから文句は言わせない。

文句を言うくらいなら自分でやれ。

それが一番だ。

手伝う⇨収集されるだろうけど……あ、俺も収集されんじゃね？

でも、収集された覚えはないぞ……。

もしかして……あれか、非常用の収集対象の可能性も……うん、捨てきれないな。

ま、それならそれで別に構わないんだけどね。

元々吸血鬼としての能力だけで十分だったしき。手札が有りすぎても困りもんなんだよ。特別に頭が良いわけじゃないからあつても使いきれないし……。

本当……そこが悲しいところだよ。

内心でやれやれと溜め息を吐露しつつ、俺はまっすぐに図書館に向かう。

「ああ……たまには新鮮な血が飲みたい」

保存が効いていても新鮮でない血は美味しくない。

どっかの誰かを襲って血を飲んでもいいんだけど……そうなるはずかと会えなくなるだろうし。

「はああ……困った」

家に置いてある血は……分かりやすく言うと空気に触れて不味く

なった牛乳と一緒にだしなあ。味という面で似たような感じなのだ。

ここで、ふと思つた。記憶を失っていた間の俺って……相当つまらない存在だったのではないかと。

ほとんどのことに関心を示すことがなかった上に必要だと思つたことしかしない。

うん。完全につまらないな。

「まあ、それはおいておくとしてだ……マジでどうしよう」

ゆっくりと考えるべきなのだろうがまだ図書館に着くまで時間がかかる。

近くに公園などは見当たらない。

故に進むしか道は残されていなかった。引き返す選択肢もあるにはあつたが……そうしようと思えなかつたのだ。



「……………」

図書館に着くも今日は休みだった。

仕方がないのでどこか別の場所に行こうと思ひ海に向かっている。冬なので寒いだろうがとりあえず、時間は潰せそうだ。

そう思っていたのだが……海に着くとそれはすぐに瓦解した。

「……………」

何故なら、

「……………荒れ狂つてる」

海が滅茶苦茶荒れ狂っているのだから。

寒風吹きすさび、波は大きく、海が濁つて見える。

「……………よし、帰るか」

俺はすぐに決断した。

こんな荒れ狂つた海をただ呆然と眺める趣味はない。

荒れてなかつたら波の音に耳を傾けてぼーっとしててもよかつたのだが。

もうそんな気も失せた。

なのでそそくさと海から撤退して、それなりに大きな公園のベンチに座る。

ベンチに座ってぼーっとしてたら……猫が一匹、二匹、三匹とどんどんやって来た。

「……暖かい」

やって来た猫たちがすぐ傍で丸くなるものだから本当に暖かい。

何匹かは俺に乗っかっているのもあるが、みんなでくつついてぬくぬくと微睡む。

冬なのに外で微睡むことができることにある種の感動を覚える。

「はあく……」

本格的に眠くなってきた。このまま寝たら凍死するんじゃないって不安もあつたが……まあ、猫たちが一緒にくつついているので大丈夫だと思う。

……そう信じたい。

まあ、俺って吸血鬼だから頑丈だし大丈夫でしょ。種族の頑丈さに感謝しながら俺は目を閉じた。

それからどれぐらいの時間が経過したのだろうか。

目を開けると、

「……増えてない？」

周りにいる猫が増えていた。

太股は、猫に占領されて靴の方は紐を外されそれで遊ばれている。頭には子猫が一匹。両肩には猫が一匹ずつ乗っかっていた。

俺の座っているベンチにはとろ狭しと猫が寝転がっている。

下手にても動かせない状況だが……別に嫌ではない。

人でなくても誰かの温もりを感じると安らぐの変わらないから。

「………何です？ その状況は……」

そんなことを言いながらシャマルが現れた。その表情は困惑に満ちている。

それもそうだろうと俺は今の自分の状態を鑑みるにすぐにわかった。

誰だって気になる状況だということ。

「あく……気にしないで。猫にたかられてるだけだから」

「そ、そうですか……」

「それでどうしたの……収集にいかなくていいの？」

そう訊くとシャルマルはそうでした、と困惑に満ちている表情を元のおっとりしたような表情に戻す。

「えっと……まず、はやてちゃんが明日には退院することが決まったので迎えに行つてあげてください。時間はお昼ですから。あと、私たちは三日ほど家を空けますので覚えておいてくださいね」

「了解。明日ははやてを迎えに行けばいいのね」

「はい、そうです。よろしくお願いしますね」

明日、はやてが家に帰ってくるのか。

掃除の粗とかが無いように明日はいつも以上に注意して掃除をしなくちやいけないな。

そんなことを考えていると。

「あ、そうそう……はやてちゃんが「後でお仕置きや！」っていい笑顔で言つてましたよ」

「……何故に？」

本当に何故だ？

「薄情な蓮君にはお仕置きしてやらなかあかんですつて」

「ああ……つまりお見舞いに来なかつたことを怒つていると」

「はい、大当たりです」

ふう……しょうがないな。……これが若さゆえの過ちか。

お仕置きつて何をされるんだ？

「まあ、そのお仕置きは甘んじて受けるしかないけど……他には何かあつた？」

「いいえ、これだけです。それではまた、しばらくの間のはやてちゃんのことをお願いしますね」

「いつてらっしゃい」

ええ、いつてきます、と答えるとシャルマルは転移して公園からいなくなつた。

明日、はやてが家に帰ってくるからそれに合わせて買い物する必要

があるからエコバッグは持っていけないと駄目だな。

レジ袋にもお金がかかるようになってるから、エコバッグを持っていくとその分少しは安くなるしね。……ほんの一回、二円程度だけど
き。

そのほんのちよつと節約も積み重ねれば大きくなる。

まあ、それはおいといてだ。

明日はお昼の対象のだと聞いたが……昼食はどうするのだろうか？

食べてから退院するのかそれとも退院してから食べるのか。

その事をシヤマルにちゃんと聞いておけばよかった。

わからないから明日は少し多めにお金を持っていく必要かありそ
うだ。

もし退院してから食べるのであれば必然的にその分多くお金を使
うことになるんだし。

「……お仕置きのことを忘れてくれたらいいんだけど」

今日のことだから絶対に覚えてるんだろうな……。

その事に思わず溜め息が漏れそうになった。

第33話

「さて、はやてが退院する時間を迎えた。

「……待ってたで。薄情者」

会って最初の言葉がこれだった。

「は、ははは……」

それに対して乾いた笑い声しか出せなかった。

それ以外にどう対応しろというのだ。

昨日、お見舞いに行かなかったのは事実であるので強くは出れない。もつとも、元々強くは出れないのだが……。

いや、だつてさ……居候の身なのに家主に強気にでるつてさ……無理じゃない？

「それについては気を使った故に何だけど……」

「それでもや」

いい笑顔ではやてが言い切った。

なんと言おうと無駄だとこの時に理解した。

俺にははやてのお仕置きから逃れるすべはないと。

「はあ……」

「溜め息なんか吐いても決定やからな」

にひひ、といたずらっ子のように笑いながらはやてがそう言った。

まあ、はやてが楽しそうなのでそれでいいかと思った。やっぱり、一緒に過ごすなら少しでもお互いに過ごしやすいような雰囲気にするのはとても大切なことだと思う。

誰だつてギクシヤクした雰囲気の間を過ごしたくはないだろう。

中にはそんな空気の空間を過ごしていたいという変わり種もいるかもしれないが、それはごく少数のはずだ。

少なくとも俺はそんな少数派ではないのでギクシヤクしない雰囲気を通ささないように素直にはやての言うことに従うのだった。



「……ねえ、はやて」

「なんや？」

お昼を食べたあと早速、はやてによるお仕置きが始まったのだが……。

「冬の時期にこれはなくない？」

「冬じゃなきやいいんかいっ!？」

「あ、うん」

「あかん……読み違えたわ」

悔しそうに握りこぶしを作りながらはやてが呻く。

「まさか……蓮君にとつて女装が恥ずかしくないだなんて」

本当に悔しそうに呻くからコメントに困る。

コミカルなクマの絵柄が描かれたTシャツにフリルのたつぷり付いた赤と黒のチェック模様のスカート姿に着替えさられた俺はどうすればいいのだろうか？

「……う〜ん」

頭に被ったカツラの位置を調節しつつ首を傾げる。

このカツラは俺の背中まで届くくらいの長さの物であり、女装させられた俺は鏡の前に立たされていた。

「何で……自分でそそくさと着替えるんや！ せつかく恥ずかしくつているところを無理矢理に着替えさせて羞恥に悶える姿を見たかったのに……」

「そんなこと思ってたの!？」

はやての意外と危ない本音に俺は一步後退りしてしまう。

まさか……こんな、変なことを考えてるとは……。

「当たり前やろ……せやなか、女装なんてさせんわ!」

「いや……そんな堂々と力強く言われても」

どうコメントすればいいのか分からないんだけど……。

誰か教えてください!

そんなことを内心で叫んでいると、「ふふふ……せや……こうすればいいんやないか」とはやてがやたらと不気味な笑みを浮かべながら笑いだした。

「……っ！」

思わずにビクツと震えてしまった俺は悪くない。

誰だつてビククリするだろう。突然目の前で誰かが不気味な笑みを浮かべながら笑いだしたら。

それでビククリしない人がいるなら見てみたいくらいだ。

ただ単に俺がビビりの可能性も否定できないが……。

そんな悲しい可能性は一先ず脇に置いておいてだ……はやてからよく分からない危機感を感じる。

多分今のはやてが放っているオーラが可視化できたら確実に禍々しい色になっていると断言できる。本人は否定しそうではあるが……。

それでも俺には、はやての背後に変態おじさんのヴィジョンが見える。

両手の指をワキワキと動かしているヴィジョンが鮮明にだ。

身の危険を別の意味で感じる。それほどまでに力強い。

「……抵抗したらシクナムたちにも手伝わってもらうことになるから抵抗しない方が身のためやで」

「それって……つまり、この場を逃れても後でやるってことだよな」

「せや。うちは狙った獲物は逃がさないたちやからな」

逃げ場などなかった。

ゆっくり近づいてくるはやてがまるで死神のように見える。

そして、俺の腕を掴む。

「じゃあ、行くで」

「……………うん」

俺ははやてに引つ張られて行った。

何処に向かうのかは知らずに。



「……………はあ」

今の状況に大きく溜め息が出る。

はやてに連れていかれた場所は服屋であった。
しかも、女装したままだから余計に質が悪い。
店員には完全に女の子だと思われてるからだ。
地味に心にきたよ……。

……。
そんな、新しい発見をした俺の試練はこのあと数時間にも及んだ。

● ● ●
「いや、満足や」

「……そう、それはよかったね」

ひどく精神的に疲れた俺は棒読みでそう返した。

下着を見られそうになったときは本気でどうしようかと焦ったのだから。

幸いなことに男だとバレはしなかったが……。

それでも、どつと疲れたのは言うまでもない。

「ほら、元気だす。まだまだ体力は残つとるやろ？」

「……体力は残つてもね……精神的に疲れたんだよ」

「やれやれ……あれぐらいで疲れるなんて」

首を左右に振りながら肩をすくめるはやてに若干イラツとしたのは言うまでもない。

「……はあ」

その苛立ちを溜め息と共に吐き出す。

「溜め息なんて吐いてたら幸せが逃げるで」

「とつくに幸せなんて逃げてるよ」

この状況を幸せと感じていたら素直にすごいと思う。

そんな趣味もないのに女装させられて外で買い物をするだから。

しかも、服屋とか……。

思い出すだけでまた溜め息を吐きたくなってきた。

「もう帰ってもいい？ いい加減着替えたくなってきたんだけど」

「ん〜？ 駄目や。まだ、今日の夕御飯の材料を買ってないからな」
「そう……」

ならとつと買って帰りた。

精神的に疲れたよ……本当に。

それから、夕食の材料を買いにスーパーに移動した。



「やつと……帰ってこれた」

俺は家に着くなり、荷物をキッチンに置くと、リビングでとつと着替えた。

「なんや……もう着替えたんか」

残念そうにカメラを持ったはやてがリビングに現れた。

おそらく……俺の女装姿をカメラで撮るつもりだったのだろう。

危なかった……。まさに間一髪というやつだ。

油断も隙もない……こういうときに限って。

この油断と隙のなさを何故、別の時に使ってくれないのだろうか？

「……疲れたから部屋に戻ってるよ」

「体力ないな〜」

体力よりも精神的に疲れたんだよ。

でも、そう言うのも億劫なので特になにも言わずに俺は部屋に戻った。

と、見せかけて外へと出た。

鳥の姿に変身して。

「……………遅くならなければいいか」

一、二時間くらいならバレはしないだろう。

仮にバレたとしてもなんとかなると思う。いや、思いたい。

別に悪いことをするわけではないし、精神的に疲れたから休みにいっただけだから問題はないはずだ。

「……………思い返しても全く問題ないよね」

別に家でしたわけじゃないし。



「で、結局……ここしかなかったんだよね」

寒風吹き荒れる冬の海。

「……寒い」

本気で寒いね。防寒具を着けてなかったから余計にそう感じる。

あらかじめ何処に行くか決めとけばよかったと今さらながらに後悔した。

「無計画に家を飛び出した結果がこれだよ」

もはや笑うしかなかった。

端から見たらとてもシユールな光景だろうと自分でも思う。

浜辺で体育座りをしながら笑っているのだからか。

「ハーーーー」

大きく溜め息を吐き出す。

ヤバイ……陰鬱な気分から抜け出せない。

「……ま、適当に飛んでいればこんな気分も晴れるかな」

俺は身体を大鷲の姿に変身させると再び空へと舞い上がった。

しばらくの間、海鳴市上空を飛び回っていれば気分も晴れるだろう。

「……季節が変わると景色も変わるか」

あのときはまだ、春から初夏にかけての時期だったから緑があったが今はほとんどない。

あつたとしても寒さに強い種類のものだけでほとんどが落ち葉となっている。

新鮮な光景ではあるが寂しい光景だ。

雪が降っていれば変わるのだろうか……まだ、十二月にもなっていない。

なので雪が降ることはほとんどないだろう。

北海道並みに寒いのなら話は変わるが……。

「……無い物ねだりをして意味ないか」

どうせ……雪が降ったら降ったで何かしら文句を言いそうだし。我ながらワガママなことだと思う。

でも、それが……人間というものだろう。俺は吸血鬼だが、そこは人と変わらない。

好きなものも嫌いなもの存在する。

例え種族や生まれが違うとしても感情は変わらない。

でなければ俺が人の社会の中で生きていられるはずがないからだ。それでも種族的に人の血が必要なので人からしたら化物なのだろう。

人だろうがなんだろうが感情がある生き物はみな、無い物ねだりをする生き物だと思う。でなければ憧れなんて抱かないのだから。

「……そう考えると果てなき欲望こそ感情を持つ存在に共通するものなのかな」

人以上に欲望に忠実な存在って見たことないし。

いや……むしろ、欲望がないと生きていけないのか？

もし、そうだとすると……今ある便利さも欲の集大成のようなものか。

そんなことを考えながら飛んでいると下に何か見覚えのあるピンク色の光が見えた。

気になったのでそこへ移動するもそこに着いたときにはすでに誰もおらず、完全に一足遅かったようだ。

仕方がないので、しばらくその周辺を探してみるも人の姿を見つけないことは出来なかつたので家へと帰還することにした。



それから、数日が経過してシグナムたちが収集活動から帰ってきた。

収集した頁は三百を越えたらしい。

何でも、大量の魔力を保有している生物を複数倒す機会があったからだそうだ。

十一月も終わり、十二月が始まった。

商店街などではすでにクリスマス用のケーキや食べ物の予約が始まっている。

「……………これなんかどうだ？」

「ううくん……………それは……………」

「いや、ここはこれなんかどうだろうか？」

ヴィータ、シャマル、シグナムの三人が顔をつきあわせて一枚のチラシを見ている。

それは、クリスマスプレゼント用にどうですかと各社がオススメの商品を——つまり、売りたい商品を載せたものである。

ザフィーラは見えていない。

今ははやての付き添いで病院に行っているからだ。

今日は体調の報告だけなのでザフィーラとはやての二人だけなのだ。元々シャマルも行くつもりだったのだが、はやてがザフィーラだけがいいと断ったので、シャマルは家にいる。

まあ、はやての身はザフィーラが守るだろうから、全く心配していない。

地球にいる生物で魔法なしでザフィーラと戦える存在は一部の例外を除いてほぼいないからだ。

「なあ、蓮はどれがいいと思う？」

ヴィータが俺の目の前にチラシを持ってきた。

「どれどれ……………」

「あたしはこれがいいと思うんだけど……………」

ヴィータが人指し指で指したのは小さなウサギの付いたニット帽だった。

「……………なるほど。だったら、それでいいんじゃない。はやては心のもったプレゼントであれば何でも喜んでくれると思うけど」

「だから悩んでんだよ」

そう言われてもねえ。俺も誰かにプレゼントをあげたことがないから返答に困るのだが。

「だったらいっそのことザフィーラにトナカイのコスプレしてもらっ

てはやてにサンタクローズ役をやってもらおう?」

「それだと配る側じゃねえか!」

「じゃあヴィータがサンタクローズ役をやる?」

「いや、まずはサンタクローズ役をやることから離れるよ」

「……残念」

せつかくヴォルケンリッターたちにもコスプレで精神的に疲れてもらおうと思っただのに……チエ。

「だが、特別な衣装に変えるのは賛成だ」

「そうね……いつもの格好よりもその方が盛り上がるだろうし」

「シグナムは戦国甲冑でシヤマルは湖の騎士繋がりで黒甲冑。ヴィータはウサギの着ぐるみ?」

「おい! クリスマス関係ねえじゃねえか!? しかも、あたしだけ疑問系ってどういうことだ!!」

自分でもそう思う。今言った格好だとハロウィンになっちゃおう。

ヴィータが疑問系なのはなんとなく。

「特に他意はないよ。なんとなく思い浮かんだのを言ったただけだし」

「さすがに蓮の言ったことは今は無理だ。バリアジャケットの設定を変えれば可能だがな」

出来るんだ……それが一番驚きだよ!

てか……はやてのためだったら色々やる人たちだからおかしくないか。

そう思うとストンと納得することが出来た。

「そうよね。今は収集のこともあるからそれで以降じゃないと」

「シグナムだけじゃなくてシヤマルもかよ……」

ヴィータが一人うなだれていた。

多分、コスプレすることに前向きだったのが予想外だったのだろう。

ドンマイ……俺のせいみたいだけど。

きっと今年のクリスマスはコスプレはないだろうから……頑張ってくれ。

第34話

夜。

某ビルの屋上。

下には家に帰るために移動している人たちの姿が見える。

「……集まった頁は三百と少し」

「この付近の世界は全て収集したから少し離れた世界に行かないと収集出来ないか」

「そうね……また、はやてちゃんに心配をかけちゃうわね」

「それも致し方あるまい。これしか方法がないのだからな」

ヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラの四人がそんな会話をしている。

「だったら……とつとと行ってくれば？ 早く終わらせて戻ってくればいいじゃん」

四人の背後からそんなことを言う。

「……わかつてるよ……それぐらい」

ぶつきらぼうにヴィータが言う。

言うだけなら簡単だ。実際に魔力を収集してくるのはヴォルケンリッターの面々なので、俺にはどんな苦労があるのかはかり得ない。

「とりあえず……俺の魔力でも収集しておく？ 収集活動では役に立たないんだし。三、四頁ぐらいなら埋まるんじゃないかな」

「いや……それは今は止めておこう」

「え？ どうして？ 収集するなら早い方がいいんじゃないの？」

「ふむ。そうだが……私たちが主の傍にいられない状況で万が一の場合を想定しての判断だ」

なるほど。確かにそうだな。

「だから収集するなら私たちの誰かがしばらくの間はやてちゃんと一緒に行動出来る時じゃないと」

シグナムの意見を補足するみたいにシャマルが言う。

「しゃーねえだろ……いつまた発作が怒るかわからねえんだから」

「……確かに」

皆に心配をかけないようににはやてはなんでもないように振る舞っているが、その事ははやて以外の面子にはばればれなのだ。

「そんなに発作の頻度が多いの？」

「ああ……数日に一回のペースだが、徐々に多くなってきた」
「そうか……」

そうになると、なおさら目を離すわけにはいかないか。もし、ヴォルケンリッターの面々のいないところで発作が起こり、はやてが倒れたりすると大変だ。

「それじゃあ、俺から魔力を収集するの次の機会かな」

「ええ、そうなるわね」

その時はしばらく皆がいるのだろう。

ヴォルケンリッターたちにも休息は必要だ。プログラム体だとしてもその精神は人と変わらないのだから。

肉体的な疲労がなくても精神的な疲労はきつとあるだろう。

「それで……もう、行くんでしょ」

「……ああ、数日で戻る故に主に伝えておいてくれ」

「うん……いつてらっしゃい」

ヴォルケンリッターたちの足元にベルカ式の魔方陣が展開される。

その数秒後……ヴォルケンリッターたちは地球から姿を消した。

闇の書を完成させるための収集活動を行うために。

「さて……また、はやては何か言ってくるだろうな」

絶対に、確実に、それはもう必然と言わんばかりに。まあ、それを誤魔化すのが役目だから文句はないんだけどさ。

はやてに何て言おうか考えながら俺は帰路についた。



翌日。

ヴォルケンリッターの皆が異世界に行った理由を適当にはやてに説明して納得してもらえるまでかなりの時間をようした。

嘘について騙すのも大変である。

今回はトレジャーハントということにした。

次の機会があるならモンスターハントとにするつもりだ。

魔力という宝を収集するという意味では間違いではないと思っ
ている。

魔力を収集するために魔力を持つ生物を狩るのならばモンスター
ハントといっても問題はないだろう。

きつとヴォルケンリッターの皆はそれはそれは素晴らしい冒険譚
を聞かせてくれるはずだ。

彼女らはきつとそう言う話の種ならばたくさんあるはず。

特にシグナムやヴィータならばなおのこと。

ザフィーラは……大自然的な話になるのか？ シャマルは……正
直にいつてわからない。

活躍している場面が想像出来ないのだ。

本人が聞いたらしくくと悲しそうに泣きそうだが事実なのだ。

俺は悪くない。

きつと誰のせいでもないのだ。

「……………これはどういう状況？」

「猫と一緒に日向ぼっこ」

はやてに公園に行つてくると言つて家から出た俺は公園に着くな
り、猫に囲まれたので、日向ぼっこをすることにした。

そして、ぼけーっとしてしていると、公園の前を手提げ袋を持ったず
かが通りかかったのだ。

「そ、そうなんだ」

苦笑いしながらもずかは俺の方に近づいてくる。

すると、ずかかの進行方向にいた猫たちがせつせと場所を移動する
ではないか。

完全にずかかを上位としているのが見てわかる。

さしずめ……女王ずかかと言ったところだろう。

「ん？……どうしたの？」

「何でもないよ」

先ほど考えていたことを表に出さずに頭を左右に振る。

下手なことを言つて機嫌を損ねたくないからだ。

「そう。ならいいんだけど」

そう言いながら傍に寄ってくるすずか。猫たちはモーゼの如く綺麗に整列してすずかの行く道をあける。

やっぱり、俺が思ったことは間違つていなかった。

女王すずか……。

……これつて下手したら俺つて猫たちにボコボコにされるんじゃない。

そんな予感が沸々とわいてくる。

俺は猫たちを傷つけようとは思わない。そして、猫たちは……すずかのためなら俺に襲いかかってくるだろう。

多分、加減してくれると思うけど……これつて詰んでない？

「何で猫たちに囲まれてるの？」

「さあ？ 一つの間にか寄ってくるんだよね？」

いつの間にか一匹、二匹と集まってきた徐々に囲まれていく。

そして、動けなくなる。

「好かれてるのかな？」

「どうだろう……それだったらすずかの方が好かれてると思うけど」
実際にここにいる猫たちはすずかの動きを妨害しないように動いてるし……。

あれ……もしかして俺つて猫たちによって包围されてる？

何故かそんな考えが唐突に脳に浮かんだ。

「そうかな？」

「そうだよ」

いまいち自信なさげだが、すずかが猫に好かれているのは確かだ。すずかが好かれていないのであれば、俺はどうなんだ？ つて話になる。

「猫好きだし……好かれるなら嬉しいかな」

すずかがハニカミながらそう言うと同時に猫が数匹ほどすずかの足元に寄って甘え始めた。

うん。俺の言つたことはやはり間違つていない。

この光景を見て猫に好かれていないと言ったら確実にそいつの目がおかしいのだろう。

「それで、すずかは手提げ袋を持つてるけど何処に行くつもりだったの」

「図書館だよ。今日が返却日だから」

「そうなんだ」

「うん。それで蓮君は？」

「暇だから日向ぼっこ」

家にも特にやることはないし、いたらいたで、はやてにオモチャ感覚で何かされそうだしね。

ここに本人がいたら……いい顔でやってくるんだろうな。

「そうなんだ。……だったら一緒に図書館に行かない？」

ここで俺に拒否権はなかった。

周りを囲む猫たちのプレッシャーとすずかの言うことにどうかお願い？ に逆らおうとする選択肢が出なかったからだ。

本能的にすずかの言うことを聞くことに何の違和感も感じない。

何故だかわからないが……それが自然に感じる。

「いっよ」

だからだろうか……その言葉が自然と口に出ていた。

すでに近くにいた猫たちは離れており、道を開けている。

本当に頭のいい猫たちだ。

とどこどこで動きを先読みしている。

ニュータイプならぬニューキャットという存在か。

はやての家にあったガン〇ムのDVD。

あれははやてが買ったものなのだろうか？ 性格的にはお笑いの

方のDVDを買っていそうなのだが……。

「それじゃ、行こう」

「うん。ここでゆっくりしていると遅くなっちゃうね」

パンパンとズボンを軽く叩くとすずかの二元に近寄る。

そして、この場をすずかの少し後ろを歩きながら後にするのだった。

● ● ●
図書館に着くと俺はさすがが本の返却口へと歩いていくのを見送る。

わざわざ二人で返却口に行く必要はないだろうということだ。

「おまたせ」

「うん。また、新しく本は借りないの？」

「借りるよ。でも、何を借りるかはもう決めているから」

「そうなんだ」

もう決まっているなら多分……シリーズものだろう。

「だから、一緒にお話しよ。もしかしたら蓮君の記憶も全部戻るかもしれないし」

「あ……そうだね。ほとんど思い出してたから、あんまり違和感がなくって自分が記憶喪失だったことを忘れてたよ」

笑うしかない。大半思い出していると記憶の欠落部分がほとんど気にならなくて、それ事態が記憶のすみに置いてかれちゃった。

「いやいや！ そんな大事なことを忘れちゃ駄目だよ!」

そうなんだけどさ……もう……そこまで執着してないんだよね。

忘れたなら新しく覚えていけばいいって感じになっちゃってるから。

「あ、うん……そうだね」

「本当に分かってる？」

疑り深い視線でそう言ってくるさすがの視線から逃れるように目を逸らす。

すると、さすがが俺の顔を両手で掴むとそのまま、さすがの顔の前に動かされる。

意外というか案外すずかは行動的なようだ。

「ちやんと……私の目を見ながら言って!」

「……可能な限り善処します」

「むうう……本当だからね」

「はい。嘘は吐きません」

嘘は吐かない。可能な限り善処するつもりだ。

しばらく、すずかがじつと俺の目を見て、嘘じゃないか確かめていたが数秒ほど見つめると俺の顔を押しえていた両手が離れた。

「今回だけだからね」

その言葉に黙ってうなづく。

どうやら信用してくれたようだ。

ホッと一安心である。

記憶を失う前の俺とすずかの上下関係は完全にすずかが上位であることがこれで判明した。

こんなことで判明するこの事実は中々にひどいものだと思ながら思う。

思い出している記憶の中での俺のことをよくよく思い出していくと、それが本当のことであることがすぐに分かる。

すずかによって救われたのだ。

だから俺は――

「席をとりに行こう。ずっとここにいと他の人に迷惑だから」

「うん」

誰であろうと……すずかに降りかかる火の粉を払わなければならぬ。

例え疎まれようが……俺にはそれしか出来ないから。



「……それでどんな話をする?」

席に座ると俺は正面に座るすずかにそう尋ねた。

壁際にある小さな二人までしか使用できない席がたまたま空いていたのでこの席を使用している。

四人やそれ以上の人数が使う席となると落ち着いて話が出来なさそうだからだ。

「そうだね……」

俺から出せる話題はない！ とは言えないがギルらへんの話になるのでそれは避けたい。

もしかしたら、すずかを巻き込んでしまうかもしれないからだ。

ギルも関係ないすずかを巻き込むようなことはしないと思うが万が一のことを考えると名前を出すのはNG。

あの仮面を着けた人物が二人いるので、二人同時にいないときは安心出来ない。

「なら……昨日やっていた、ドキュメンタリー見た？」

「ドキュメンタリー……ああ！ あれね。見たよ、子熊が大人になるまでを撮影したやつでしょ」

「そうそう。それだよ」

昨日の夜、はやとと一緒に見たやつだ。

「あのヌイグルミ見たいな感じが可愛いよね」

「うんうん。特にあのつぶらない瞳が」

大人になるとあのつぶらな瞳がなくなるので残念極まりない。

「だよね。あの目でコロコロした動き、そしてちよつとしたドジ」

「あれは……見ていて和むよね」

思い出すだけでほっこりとした気分になれる。

子犬とか子猫とかも同様にだ。

子どもの動物は異様に愛らしい。まさしく癒し系。

「でも、大人の熊になっていくとワイルドになるよね」

「だね。素手で川を泳いでいる鮭を捕まえるだもん。そりやあワイルドだよね」

きれいなフォームで一発で捕らえる瞬間なんか……特に何とも言えない。

「失敗しているところはとこで見ていて和むんだよね」

「うん。あの微妙に落ち込んでる感じがまだ小熊であった頃を思い出させてくれてさ」

すずかも分かっているようでよかった。

お互いにそう感じたりするからこそ話が弾むのだ。

ナイスドキュメンタリー番組である。

「ところでさ……話は変わるんだけど」

「なんだろうか？ 何やらさすがが言いにくそうにしている。」

「うん」

「とりあえず、さすがの出方を見よう。そうしないかどうかにも出来ない。」

「もう少しでクリスマスだからさ……その日、家に来れる？」

「……………多分、行けるかな」

「はやてにはあらかじめ言っておけばいいし、それに家族であるヴォルケンリッターたちと一緒にの方が俺に気を使わないでリラックス出来るそうだ。」

特にヴォルケンリッターたちが。

「立ち位置的に俺は味方だが完全に味方とは言えないポジションにいる。」

「そんな人物がいるよりも安心して楽しめるだろう。」

「そっか……よかった」

「ホッとした様子のわずか。」

「どうやら断られることも視野に入れていたようだ。」

「それで、その日はさすがは家に直接行けばいいの？」

「場所は分かる？」

「それなら分かるよ」

「思い出した記憶の中にある猫屋敷と言えるような家は一軒しかないのだから。」

第35話

「何時ぐらいいに行けばいい?」

そう尋ねるとすずかは顎に手を添えて、視線を上の方に向ける。

「どうやらそこら辺はまだ考えていないようだ。

でなければ悩むまい。」

「……うん。夕方ぐらいかな。お昼よりも夜の方がメインだし」

まあ、何処もそんな感じだろう。

豪勢なものにするなら大抵が夜だし。

「了解。夕方に行くよ」

「うん。きつとお姉ちゃんたち驚くだろうな」

「そう?」

「うん!・特にノエルさんは」

すずかの表情からするに悪い方ではないと予想出来る。

嬉しそうに笑っているし。それでも、一抹の不安があるが……行く
と約束しているのでそれを破るつもりは更々ない。

そうなればすずかに怒られる。

「そうか……その人もやつぱり、俺がすずかの家に居候していたとき
に関わっていた人?」

「うん……関わっていたというよりもお姉ちゃん見たいな人かな」

「……お姉ちゃん、か……」

記憶にあるけど実感がわかない。

それでも、きつと特別な人だったんだろう。

すずかの次に優先するべき人って感じる。

「……会ってみたいな」

その言葉がポツリと漏れた。

「ごめん。今、ノエルさんはお姉ちゃんと一緒にドイツに行ってるんだ。一応、クリスマスには戻ってくるらしいんだけどね」

申し訳なさそうにすずかがそう教えてくれた。

「そっか……」

「うん。親戚一同が揃うらしくてお姉ちゃんがお母さんたちの代役で出席することになっちゃって」

「それならしょうがないよ」

多分、ここで顔を見せておくことですからのお姉ちゃんが活動しやすいようにするつもりだろう。

顔を覚えてもらっていれば色々と便宜を図ってもらいやすいしね。

そうなるよ……大人は大変だ。

いかに今が自由なのかよく分かる。

「……お土産なら期待出来るんじゃない?」

「どうかな……お姉ちゃんは時折何をするのか分からないから」

そう言いながら苦笑するすずか。

よつぽど突拍子もないことをすずかのお姉ちゃんはするのだろう。

でも、すずかの様子から困りはしてるが迷惑している様子は感じられない。

ということとはちよつとしたおふぎけレベルのものなのだろう。だから苦笑するだけで済んでいるのではないのだろうか。

「それは……大変だね」

「……うん」

大変なことは認めちゃうんだ。

まあ、苦笑するようなことだから少し大変なだけだろう。

ものすごく大変なことだったら苦笑じゃなくて嫌そうな顔をするだろうし。

それからも、俺とすずかは談笑を続けるのだった。



あつという間に時が経ち、時間が午後四時を迎える。

「……そろそろ帰らないと」

「そっか……途中までは一緒に行こうか」

俺とすずかは図書館をあとにした。

すずかは最後に本を借りていったが。

そして、二人で夕暮れに染まる帰り道を歩いていく。

「あつという間だったね」

「うん。本当にあつという間だった」

「ねえ……今度は私の友だちも一緒にいい？」

不安そうに見つめてくるすずか。

もちろん、俺にはすずかの願いを断るなんて選択肢はないので
いよとなずく。

「すずかの友だちってことは俺のことも知ってる人？」

すずかの友だちなら俺のことを知っている可能性が高い。

まあ、知っていたからって特に問題はないのだが。

一応、どんな人が来るのかを確かめておきたかったのだ。

「うん。そうだよ。アリサちゃんとなのはちゃん」

アリサになのは？ 名前を聞いてもいまいちピンとこないが……

まあ、すずかの友だちと覚えておこう。

そのうちに思い出せるだろうし。

楽観的に考えても大丈夫だろう。

すずかの友だちなのだ悪い人ではないはずだ。

ただ……記憶をなくす前の俺と仲がよかったかといわれると分
らないが。

「覚えておくよ。アリサになのはね」

「うん。二人ともきつと驚くよ」

驚くね……確かにそうだろう。

行方不明なっていた人物が記憶喪失の状態で目の前に現れるの
から。

「驚かなかつたらよっぼどどうでもいい存在だったのか、無関心だ
たかのどれかだしね」

そんな俺の言葉にすずかは苦笑いをするだけだった。

「アハハ……じゃあ、ここまでだね」

「うん。それじゃ」

話している間に十字路についたのでそこですずかと別れる。

歩いていくすずかの後ろ姿が見えなくなるまで見送ってから俺は

はやてのいる家の方へと足を動かした。



「あれ？ 案外早かったね……戻ってくるの」

家に帰ってくるとシグナム、ヴィータ、ザフィーラ、シャマルが勢揃いしていた。

「ああ。……管理局が目を光らせていたので収集活動が出来なかった」

シグナムが静かにそう言った。

「そっか……せっかくだし今のうちに収集しておく？」

「……いいのか？」

ヴィータが不思議そうな顔でそう言ってきた。

「いやだつてさ、魔力必要なんでしょ」

「うーん……どうする？ シグナム」

シャマルがどうするべきかシグナムに尋ねた。

そこまで悩む必要はないと思うのだが。

「……本人が収集させてくれると言っているのだ収集させてもらう。我々にはあまり時間がないのだ」

ザフィーラがそう進言する。

「……本当にいいのか？」

ヴィータが再三の確認をしてくる。

俺はそれにうなずく。

「俺……魔法使わないし」

なので収集されても全く困らないのだ。

それに……血を飲めば大半のことならすぐに回復出来る。

「そうか……では、収集させてもらおうぞ」

「どうぞ」

「シャマル」

「ええ」

シャマルはうなずくと闇の書を開く。

それから俺の胸元に手のひらを向ける。
すると、胸元から赤黒く輝く球体が出てくるではないか。

「あ……」

身体を駆け巡るような痛みと共に球体が小さくなる。

一体どれほど収集されていたのだろうか、収集が終わるとものすごい倦怠感に襲われた。

「……つと……ダル」

「……それだけかよっ!？」

「いや……それ以外に感想なんてないし」

痛みとかにはかなりの耐性があるのだ。

信じられないような表情でヴィータが俺を見ている。

「マジかよ……」

「うん……でも、かなりダルいね」

「……普通はそれだけじゃすまないんだけど」

シャマルは困ったようなあきれたような声を漏らした。

「別に気にする必要はあるまい。これも個人差だ」

ザフィーラは冷静であった。

さすががいつも寡黙なだけはある。

「それでさ……収集はどうするの?」

管理局の職員を見つけて撤退してきたのだからこれからますます収集が難しくなるだろう。

「……しばらくは様子を見るしかあるまい。ただでさえ主の言いつけを破って収集を行っているのだ。なるべく目立ちたくはない」

シグナムはそんなことを言っているが、俺はすぐに目立つようなことになると思っていた。

近場で収集していたのだから調査をされたら何かが起こっているのはすぐに分かるだろう。

調査をしているのがよっほどの無能ではない限り。

「……いざとなったら人からも収集する必要もあるんじゃない? 管理局員は魔導師なんですよ」

「……ああ、そうだな」

シグナムは人から収集するつもりは現在のところあまりないみたいだ。

ただ、ヴィータはそのことが不満そうであるが。

まあ、無茶はしないと思いたい。ヴィータは見た目こそ少女だが、歴戦の猛者であるのだから引き際とかも心得ているはずだ。

「それで、しばらく収集活動は休むの？」

「ああ、そのつもりだ。今しばらくは主の傍で過ごすことになるだろう」

「そうだな。はやてには寂しい思いをさせちまってるからな」

「うむ」

「ええ、私ははやてちゃんの診察もしたいし」

ヴォルケンリッターの全員がいるのだからはやても寂しくはないだろう。

はやての容態が急変しなければの話ではあるが。



「はふう〜」

溜め息が出る。

特に気分が悪いわけではない。ただ……血が不味いだけなのだ。

持ってきた血が時間が経ちかなり劣化してしまつて味が悪くなつた。

「……………どうしよう」

何処かの病院に忍び込んで血だけを拝借するか……それとも近所の人たちが寝静まつている間に血をいただくか……。

「ん？ なに悩んでんや」

「……………はやて。いや、ちよつとね……血をどうやって手に入れようか考えてて」

考えついたのは完全に一般的からしたら犯罪行為に当たるものだけだったのだが……。

はやてにはそこまで教える必要はないだろう。

「……なんならわたしの血をあげようか？」

「……いや、なんか移されそうだからやめとくよ」

「失礼なっ！　せつかく人が善意で言ってるのにその言い方はあんまりやないか!!」

いや……だってねえ。闇の書って明らかに怪しいものの主なんだし、それにシグナムたちが反対しそうだからね。

「……気持ちだけで十分だよ」

「最初の言葉がなければ……苛立ちはせえへんかったで？」

額に青筋を浮かべながら笑顔でそう言うはやての迫力はとても凄かった。

まるで……幾つもの修羅場をくぐり抜けた猛者のようだ。

「ごめん……正直な気持ちを言ったのが悪かったね」

「本音だったんかいっ!?!　むしろわたしはそれに驚きや!?!」

本音は隠さないと駄目だね。

正直すぎるのも考えものだ。

「あ、うん……本当にごめん。今度からはオブラートに包むよ。……すぐに破けそうだけど」

「おい!?!　それは意味ないやないか!」

「だってさ……オブラートってすぐに破けるじゃん」

「確かにそうやけど……でも、そこは破けたらアカンのや」

破けるもしくは溶ける。その二つの運命しかない。

「……オブラートはオブラートでしかないんだよ」

「……確かに、そやけどな」

薄いフィルムに包んだところで意味などない。

「で、結局……どうするんや」

「輸血しているところに忍び込んで血だけを拝借してくるよ」

「……盗みかい!」

「いや、ちゃんとお話を^{暗示をかけて}して拝借させてもらうから大丈夫」

暗示をかければ上手くいくのは確定だ。

誰か人の家に忍び込んで血だけを吸っていくのと同じくらい容易い。

「なんかただのお話やない感じがするけど……一応、物理的なお話やないよな?」

「そんな物騒なことはしないよ。誠心誠意暗示をかけてを込めてお話するだけだから」

につこりと笑いながら言うが、はやては疑いの眼差しを向けてくる。

そこまで俺は信用がないのだろうか?

だけど追及してこないから疑っているだけなのだろう。

多分、信じようと思うが何かしら心に引つかかるものがあつて信じきれない。

そんな感じだとみた。

まあ、元から信じてもらえるとは思っていないので別にいいのだが。

「……まあ、人様に迷惑をかけないならいいよ」

妥協したか。

……まあ、それが妥当だろう。

はやてがなんと言おうと俺は止めるつもりはなかったのだから。

これがすずかだったら……:……………完全に止めていたな。

はやてのポジションをすずかに当てはめたらすぐに止めると返事をしてるのが容易に想像出来た。

「それにしても……シグナムたち……遅いなあ」

ふと、はやてがリビングの方から視線を庭の方へと向ける。

現在、シグナムたちは全員出かけているのだ。

最も……シヤマルは醤油を買い忘れてたらしいのでそれを買いにいくついでにシグナムたちも一緒に連れ帰ってくるようなことを言うってから出かけていった。

「四人揃ったからあれもこれもって買い物かヒートアップしてんじやない?」

「うくん……どやろ、シグナムが一緒だからさすがに終わりそうな気がするんやけどな」

「気がするだけじゃない?」

今、シグナムたちがなにをしてるかなんて想像するしかないんだし。

案外……魔力収集をやっていたりして。

この時、俺はこの事を冗談のように軽い気持ちで考えていたが……実際にそうだったことをすぐに知ることになる。

「そうかなあ……」

「なんなら俺が探しに行つてこようか？」

「それで入れ違いになったらどうすんや？」

「時間を決めておけば大丈夫でしょ」

それならたとえ入れ違いになっても問題ない。

「ん……でもなあ」

むうう、と首をかしげながら唸るはやて。

「特に悩む必要はないでしょ。入れ違いになったら単に運が悪かっただけなんだから」

「いや……蓮君が探しに行くよりもわたしがいった方がいいんちゃうかと思つてな」

「はやてが探しにいった方が逆にシグナムたちを心配させるんじゃない？ 特にヴィータなんかは」

今は夜だし、車椅子は見えにくいはずだ。俺は特に見えにくかったりしないが。

「そうなんよね……じゃあ、頼んでもええか？」

「うん。それじゃとつと行つてくるよ」

「氣いつけてな」

「うん。それじゃ行つてきます」

俺はそう言つて家から出ていく。

血を補給することも考えながら。

家々の屋根の上を跳ねるように跳びながら移動していく。

そして……何かを破るような感覚を感じた。

第36話

目の前を突き抜ける幾つもの閃光。

それは俺の顔面すれすれを突き抜けるとそのままアスファルトに風穴を空ける。

「……あ、危ないなあ」

突然のことに冷や汗が出てくる。

穴の大きさからして……即死を覚悟するレベルだ。なんたつてバスケツトボールぐらいの穴なんだから。

まあ……それが一般人であつたらの場合であるが。

基本的に一般人でなければ問題ないだろう。例え何かあつても内々に処理されるだろうし。

俺がそんなことを考えている間に空の方では激しく閃光が飛び交っている。

まるで……映画の戦闘シーンのようだ。

でも、クライマックスらへんの戦闘シーンではあるが。

あんなに派手にやっているのに……結界外には被害が出ないのだから結界のありがたみを感じる。

ぶつかり合っている二人も結界を張っている人に感謝すべきだ。

さてと、それは置いといて……シヤマルを探さないと。

適当なビルの窓枠を足場にして跳躍しながらビルの屋上へと上がる。

「……何処にいるかな?」

戦場になつている場所は三ヶ所。そのどれもあまり離れていない。

その中でも最も派手に戦っているのがシグナム、その次にザフィーラ、最後にヴィータだ。

ヴィータに関しては相手が搦め手を使ってくるタイプのようで直接的にぶつかり合っているわけではないので決着がつくまで今しばらく時間がかかるだろう。

ザフィーラは格闘戦になつているので天秤が傾けばすぐに決着はつく。シグナムはシグナムが本気で仕留める気になればすぐに決着

がつくのは目に見えている。

技量が圧倒的に違うからだ。

「まあ……それはともかく、シヤマルは何処かな？」

ビルの屋上から周囲を見渡すが見当たらない。

吸血鬼の目をもってしても見当たらないとなると俺が今いる場所からでは見えないところにいるのだろう。

「移動が面倒だけど、そうも言ってられないしな」

家で帰りを待っているはやてのことを思うと、なるべく早く戻るべきだと感じる。

あれで意外と寂しがり屋なのだ。

今もきつと皆が早く帰ってくることを望んでいるだろう。

ならば居候として俺ははやてのためにヴォルケンリッター全員を一秒でも早く家に帰るように促さなければならぬ。

「そのために……まずはシヤマルを見つけないと」

唯一戦闘に参加していないシヤマルはこの結界内の何処かにいるはずだ。

シヤマルを見つけ出せば戦闘中の面々に念話で連絡がつく。

俺はこの結界内で最も高いビルの屋上を目指して移動を開始する。

素早く静かに戦闘区域の死角になる場所を移動しながら。

飛んでくる流れ弾を回避しつつなんとか一番高いビルの屋上にたどり着くことが出来た。

「はあ……」

意外と精神的に疲れた。体力的には全然問題ないのだが誰にも見つかからないようにだとしても精神的に疲れてしまう。

「……つと、それよりも早くシヤマルを見つけないと」

こうしている間にも時間はどんどんと過ぎていくのだから。

ビルの屋上から辺りを見渡す。

「おー、良かった」

今いる場所からそれなりに離れた場所にシヤマルの姿を捉えた。

移動が面倒だが場所が分かっただけで済めばそれほど苦にならない。

終わりが見えているのだから。終わりが見えない方が何よりも怖

い。終わりが無い……それはたどり着く場所がないのと同じだからだ。

俺はビルの屋上から飛び降り、空中で身体を蝙蝠の姿に変化させてシヤマルの元へと向かう。

そして、シヤマルの近くにたどり着く。

「シヤマル」

「わひゃあッ!？」

タイミングが悪かったのかシヤマルはすつとんきような声を上げる。

その時、結界内にいた一人の少女の胸元からズボリと出てきていた。

「……れ、蓮君ですか……驚かさないでください……つて、ああッ！」

驚かさないでくださいって言ったそばからシヤマルが驚きの声を上げた。その表情は明らかに何かの失敗をしたときのような顔だ。

いったい何を失敗したのだろうか？

まあ、俺には関係ない……とは、言い切れないので一応聞いておく。

「何か失敗でもした？」

「……ええ。本当だったらリンカーコアから魔力を収集するためにやったんだけど……失敗して身体から手が突き出るって感じになっちゃった」

「それはそれは……ホラーだね」

誰だつて突然自分の胸から腕が飛び出してきたらビククリしてその後には恐怖を覚えるだろう。

普通であれば絶対に経験しないことなのだから。

これで驚かなかつたり恐怖を覚えなかつたらどれだけ精神が強いのだろうか？ ……いや、強いというよりも鈍いか。

「本当……悪いことしちゃったわ。トラウマにならなければいいのだけど……」

「それは本人次第じゃない」

それもそうよね、とシヤマルは溜め息を吐きつつ言うと、それまでの空気を払うようにキリツとした表情になる。

「それで、蓮君はどうしてここに？」

「はやてが早く帰ってきてってさ」

「そう……なら、蓮君は先に戻ってて私たちもすぐに帰るから」

「了解。それじゃ、先に帰ってるよ」

俺はビルの屋上から飛び降りると、そのまま身体を大鷲の姿に変化させて、家の方へと飛んだ。



「ただいま」

「あ、お帰り……あれ？、他の皆は？」

「ちゃんとあつてきたよ」

シヤマルだけだけど。この事は特に言う必要もないので言わない。

「先に帰ってって言われたから先に俺だけ帰ってきたんだよ」

「そか……ほんまにすぐ帰るって言ったんやな」

「シヤマルはね……他の皆は忙しそうだったから分からないけどね」

そう伝えるとはやては顎に手を当てる。

「うーん……やっぱり何してるのか聞いたださなきやアカンかなあ」

「それは、はやての好きにするべきだよ。あくまでも俺は部外者なんだからさ」

八神家において俺は居候の身。

ギルの計らいで居るだけに過ぎない。所詮は……ギルの手駒でしかないんだしね。

「ええ、蓮君はうちの味方やないのか？」

「うーん……そう言われてもねえ。俺ははやての家族じゃないしね」

記憶と感情が噛み合わない。だから、記憶は記録と変わらない。

この齟齬はいつになったら無くなるのだろうか。

「……なら、家主からの命令や！ 蓮君はわたしの味方やで」

「仰せのままに家主さま」

恭しくお辞儀するとはやては車椅子に乗りながら胸を張る。

「うむ。よろしい」

なんだかんだノリノリである。



シグナムたちが帰ってくるのはそれから程無くだった。

不機嫌なヴィータとどことなく機嫌の良さそうなシグナム。シヤマルとザフィーラはいつもと変わらない様子。

そんな彼らを出迎えるのは胸の前で腕組みして、私……怒ってますとばかりに不機嫌なオーラを撒き散らすはやてだ。

うん……シグナムたちが話を合わせると視線で訴えてくる。

「……今日はみんなで何をしてたか、話してもらおうで」

はやての口から紡がれる有無を言わさぬような気迫のこもった言葉にうつ、とシグナムたちが気圧される。

本当にはやてには弱いな。

「………ちなみに蓮君はわたしの味方や？ この意味はわかるな？」

その瞬間、俺に向けられるのは裏切り者！ という視線だった。

「さてと……俺は別室で待機しようかな」

俺はさっさと踵を返してこの場から逃げた。

逃げ場所は家の屋根の上だ。

別室と言いつつも屋根の上に逃げたのだ。だってねえ……家の中にいると巻き込まれそうだし。

「……うわぁ」

屋根の上に出れば出たで早めのクリスマスプレゼントが届いてる。

明らかにデバイスだよ。

真ん中がピカピカ光ってるし。これ、絶対にギルからだよね……めんどくさい。

「………はぁ」

ため息を吐きつつ、ピカピカと光っているペンダント状のデバイスを拾う。

『次は壊さないように。そして、このデバイスについてはしばらく誰

にも知られるな』

拾うと合成音声のような声がデバイスから流れた。

知られるな、ね。隠し持ってるということか。

……何をやらせるつもりなんだか。まあ、素直に従うのも嫌なんだけど、本当に大切な場所で裏切るのも手なんだよね。

さて、どうしようかな？

「……悩むなあ」

手のひらでデバイスを弄びつつ、考える。

じつと見つめられるような視線を感じる。ギルからの監視だとすぐにわかるから問題ない。

シグナムたちは気がついてないようだが、監視されてること事態は知っている。

視線を感じられていないだけだ。

もしくは泳がされているだけか……。

「捕まえて……魔力を収集させるのもいいかもしれない」

そうしたら、ギルはどんな反応をするだろう。

デバイスを他の誰かにあげるのもいいかも。すずかにプレゼントしたら喜んでくれるかな？

喜んでくれたら嬉しいな。すずかの喜んでる姿を想像すると、どんな頬が弛んでくる。

「……ふふー」

駄目だ。頬の緩みが止まらない。

頬に手を当てると熱を持つてる。多分、赤くなってるんだと思う。心臓がドクドク！ と普段よりもずっと鼓動が早くなってる。

ああ……会いたいな……。

明日は図書館にいるかな？



「ん〜、……今日は会えるかな？」

図書館近くの公園のベンチに座りながら、足をブラブラと動かし、

空を仰ぎながら呟く。

ポケットには手提げの中にはラッピングしたデバイスを入れてある。

昨日はあの後、色々あったのだがまるで気にならない。

今日のことを考えていたら全然平気だったのだ。むしろ、全然耳に入っていかなかったというのが正しいかな。

「まくだかなっ!」

呑気にそんなことを呟きながら道行く人々を眺める。

こう……ウキウキワクワクした気分にいるのは我ながら新鮮な感じがする。

記憶の中にある自分により近い感じがあるのだ。

多分、俺は……わずか専用の下僕願望があるのだろう。記憶の中にある自分自身のことを自己分析するとどうしてもその答えが出てくる。

それが何かと自分の中でしつくりと来るのだ。

すずかに喜んでもらいたい。すずかに笑っていて欲しい。

その姿を見るだけで自分の心が満たされるのがはつきりと理解できる。記憶の中にある自分がまさしくそれなのだ。

カチリと自分の中で歯車が噛み合うような感覚がする。

自分自身のことを知れば知るほど記憶と感情が重なっていくのがわかる。だから、きつとこの思いは正しいのだろう。

ああ……これなのだ。自分に欠けていたものは……。

噛み合った歯車が回りだす。

「……………♪」

今……この時をもって、俺は全てを取り戻した!!

お姉ちゃん……今度会いに行くよ。

きつと、いつばい心配させちゃったから……どう話しかけたらいいか全然わからない。

すずかに聞けばわかるかな? でも、うくん……。

「……………わからない」

心配されたことがほとんどないから全然わからない……。どうす

ればいいんだろうか？

本当にわからない。

「うくん……」

首を傾げつつ、考えるも名案が浮かぶはずもなく、ただただ時間ばかりが過ぎていく。

「うん……相談しよう」

自分でどうすればいいのか考えつかないのなら誰かに意見を聞いてそれを参考に考えればいい。

……今じゃ相談することすら楽しみになってる。

ああ、早く会いたいな。